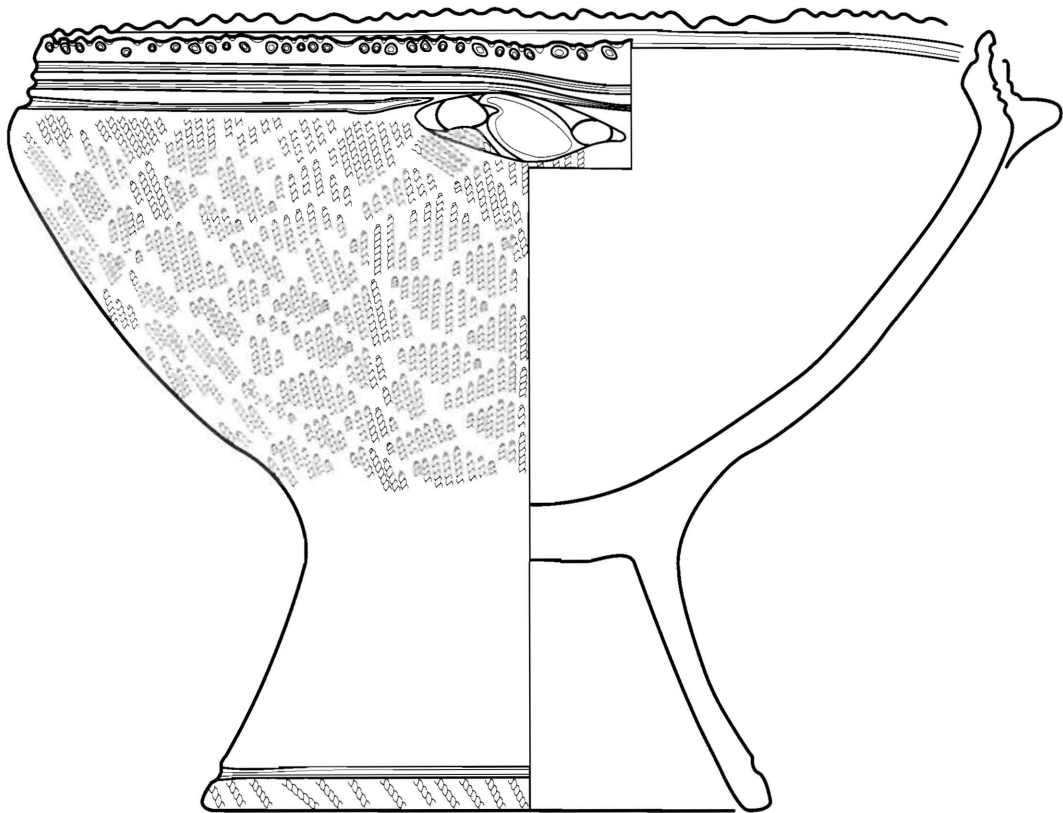


# 青森県東津軽郡平舘村

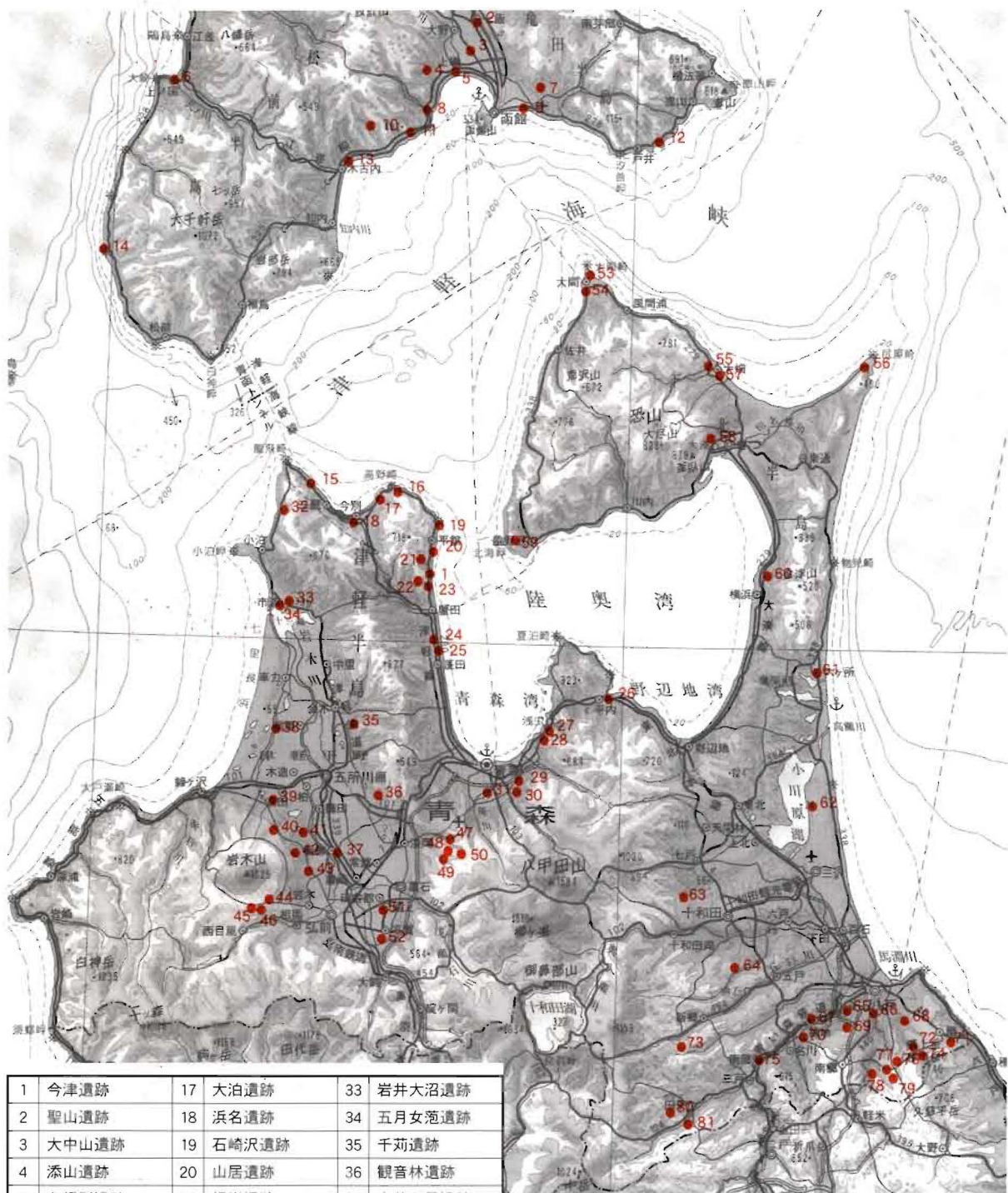
## 今津遺跡発掘調査報告書

— 津軽半島東沿岸部における亀ヶ岡文化の遺跡 —



頑張れ! 亀ヶ岡文化

弘前大学人文学部  
日本考古学研究室研究報告2



1 今津遺跡	17 大泊遺跡	33 岩井大沼遺跡
2 聖山遺跡	18 浜名遺跡	34 五月女苑遺跡
3 大中山遺跡	19 石崎沢遺跡	35 千苅遺跡
4 添山遺跡	20 山居遺跡	36 観音林遺跡
5 久根別遺跡	21 根岸遺跡	37 土井Ⅰ号遺跡
6 上ノ国遺跡	22 間沢遺跡	38 亀ヶ岡遺跡
7 女名沢遺跡	23 尻高遺跡	39 石神遺跡
8 茂辺地遺跡	24 姥ヶ沢遺跡	40 十腰内遺跡
9 日吉町遺跡	25 丑ヶ沢遺跡	41 砂沢遺跡
10 札苅遺跡	26 槻ノ木遺跡	42 大森勝山遺跡
11 当別遺跡	27 大浦貝塚	43 牧野Ⅱ号遺跡
12 日ノ浜遺跡	28 長森遺跡	44 薬師遺跡
13 サンナシ遺跡	29 蛭沢遺跡	45 小森山東部遺跡
14 高野遺跡	30 玉清水遺跡	46 寺沢遺跡
15 宇鉄遺跡	31 細越遺跡	47 羽黒平遺跡
16 赤根沢遺跡	32 縄文沼遺跡	48 源常平遺跡

49 松元遺跡	60 檜木遺跡	71 寺下遺跡
50 細野遺跡	61 上尾較遺跡	72 野場(2)遺跡
51 八幡崎遺跡	62 野口遺跡	73 咽畑遺跡
52 石郷遺跡	63 寺下(2)遺跡	74 滝端遺跡
53 ドウマンチャ貝塚	64 明戸遺跡	75 泉山遺跡
54 ニツ石遺跡	65 八幡貝塚	76 荒谷遺跡
55 二枚橋(2)遺跡	66 是川遺跡	77 三合山遺跡
56 札地貝塚	67 剣吉荒町遺跡	78 右エ門次郎窪遺跡
57 水木沢遺跡	68 松館遺跡	79 畑内遺跡
58 大川目遺跡	69 杉沢遺跡	80 石亀遺跡
59 九艘泊遺跡	70 虚空蔵遺跡	81 野面平遺跡

第1図 青森県周辺における主な縄文時代晩期の遺跡分布図  
(国土地理院 日本-1 1:1,000,000より作成)



## 凡 例

1. 本書は、弘前大学人文学部考古学研究室が、亀ヶ岡文化研究を目的として、平成14年夏に発掘調査した青森県東津軽郡平舘村今津遺跡の報告書である。
2. 今津遺跡の発掘地点は、青森県東津軽郡平舘村今津字才の神95－1番地である。
3. 発掘調査期間は平成14年8月21日から9月1日まで、発掘面積は45㎡である。
4. 発掘調査の実施にあたって、特に平舘村教育委員会（教育長、北田嘉弘氏）と故福井治郎氏（土地所有者）から多大な協力があつた。
5. 発掘調査には、弘前大学人文学部の藤沼邦彦（教授・日本考古学担当）・関根達人（助教授・文化財論担当）と日本考古学ゼミナールの学生・卒業生などが参加した。学生・卒業生の氏名は次の通りである。栗原 徹（平成12年度卒業）、山田祐子・其田香保里・萩坂華恵・佐布環貴・竹下由起子（平成13年度卒業）、蔦川貴祥（人文社会科学研究科学生）、竹原仁志・小向 良・横井猛志・向出博之・関根桂子・新井田えり子・竹内友香・佐藤亜紀・工藤晴代・市川健夫・深見 嶺（以上、学部学生）。
6. 本報告書の作成・編集には、弘前大学人文学部の藤沼邦彦（教授・日本考古学担当）・関根達人（助教授・文化財論担当）と日本考古学ゼミナールの学生などが参加した。学生の名前は次の通りである。蔦川貴祥・小向良・向出博之・深見 嶺（人文社会科学研究科）、横山寛剛・久末恵輔（学部4年生）、秋山真吾・境沢宏美・安保里美・山口朋美・澤田恭平（学部3年生）、磯前和己（学部2年生）、赤坂朋美（学部1年生）、樋口徹典（科目等履修生）。
7. 今津遺跡の出土品の整理・復元・実測図作成などの作業には、平成14年度以降の人文社会科学研究科、日本考古学ゼミナール、考古学実習の受講生など多数の学生が参加した。学生の氏名は次の通りである。蔦川貴祥、竹原仁志・小向 良、横井猛志・向出博之・関根桂子・新井田えり子・竹内友香・佐藤亜紀・工藤晴代・市川健夫・深見 嶺、横山寛剛・矢崎あかね・久末恵輔・木下梨恵、秋山真吾・安保里美・板橋秋穂・境沢宏美・鈴木春菜・松田元生・山口朋美・澤田恭平、山田敏子・倉内一輝・相馬千晶・磯前和己・赤坂朋美、金 慈暎・多田 愛・野呂一慶・福島裕輔・三梨 健・室谷雄大・その他。
8. 遺跡周辺の地形や石器・石製品の石材については、弘前大学理工学部の柴 正敏教授に指導を受けた。
9. 遺物の実測図を作成する時は、（株）スカイサーベイのマイブンスコープのⅠ型とⅡ型を活用した。
10. 掲載した遺物の実測図の縮尺は3分の1が基本である。

11. 土器の文様についてはできるだけ展開図をのせた。文様の構成・単位・描く手順などを考える資料とするためである。展開図の多くは拓本を利用して作成した模式図である。拓本と展開図の縮尺は一定していない。
12. 平館村は、平成16年3月28日、同じ東津軽郡に属する蟹田町と三厩村と合併し、新たに外ヶ浜町となった。しかし、混乱をさけるため、本報告で用いる市町村名はすべて、平成14年8月（発掘調査の年）当時のものを使用した。
13. 今津遺跡の発掘調査および本報告書の作成・編集にあたって、以下の関係機関や個人の方々から御協力・ご指導をいただいた。記して感謝の意を表したい（敬称略、順不同）。
- 鐘江宏之（元、弘前大学人文学部史料論担当）、工藤竹久・宇部則保（八戸市教育委員会）、藤原弘明（五所川原市教育委員会）、相馬信吉（青森県教育庁文化財保護課）、青森県土木整備事務所河川砂防整備課、福田友之・三浦圭介・成田滋彦・工藤 大・平山明寿・茅野嘉雄・永嶋 豊（青森県埋蔵文化財調査センター）、鈴木克彦・三宅徹也・木村 高（青森県立郷土館）、榊原滋高（市浦村教育委員会）、遠藤正夫・児玉大成（青森市教育委員会）、駒田 透（蟹田町教育委員会）、森 淳（階上町教育委員会）、鳥山正義（横浜町教育委員会）、葛西勲（青森短期大学）、須藤隆（東北大学文学部考古学研究室）、佐藤憲之（宮城県教育庁文化財保護課）、岡田康博（文化庁記念物課）、菅原弘樹（宮城県鳴瀬町教育委員会）、北田嘉弘・福井光一（平館村教育委員会）、故福井治郎・福井正実（土地所有者）、右代啓視・鈴木琢也・為岡 進（北海道開拓記念館）、市川金丸、一町田 工、北林八洲晴、成田誠治。
- また、いつも大局的な観点からご指導をいただいている芹沢長介、村越潔、小林達雄、渡辺誠の諸氏にもお礼申しあげたい。
14. 本書の刊行に際し、弘前大学の平成16年度戦略的経費「今津遺跡出土資料の分析に基づく亀ヶ岡文化の研究」の一部をあてた。

# 目 次

## 凡 例

第1章	調査の目的（藤沼）	1
第2章	今津遺跡の位置と環境（藤沼）	
第1節	平館村の位置と地形	2
第2節	平館村の気候	2
第3節	陸奥湾について	3
第4節	青森県で見られる動物	4
第5節	今津遺跡周辺の遺跡	4
第6節	今津遺跡の位置・地形	7
第3章	発掘調査の内容（藤沼）	
第1節	弘前大学人文学部考古学研究室の発掘調査地点	9
第2節	発掘の方法など	9
第3節	弘大調査区の層序	9
第4節	焼土遺構と風倒木痕跡	10
第5節	調査経過	11
第4章	遺 物	
第1節	土器の整理方法、経過（蔦川・小向）	15
第2節	縄文時代晩期の土器	15
(1)	土器の器種と器形の分類（小向・向出・横山）	15
(2)	壺（小向）	16
(3)	皿（向出）	34
(4)	浅 鉢（向出）	54
(5)	鉢（横山）	65
(6)	深 鉢（横山）	87
(7)	製塩土器（蔦川）	104
(8)	注口土器・香炉形土器（久末）	114
(9)	漆入り土器（磯前）	115
(10)	弘大調査区出土土器の集成図について（藤沼・深見）	116
(11)	今津遺跡出土の土器群について、まとめと考察（向出・横山）	127
第3節	縄文時代晩期の土製品（秋山）	131
第4節	縄文時代晩期の石器・石製品の概要（久末）	137
第5節	縄文時代中・後期の土器（樋口・安保・磯前）	138



第5章 平館村教育委員会と青森県埋蔵文化財調査センターの調査の紹介	
第1節 平館村教育委員会による今津遺跡の発掘調査（藤沼・赤坂）	141
第2節 青森県埋蔵文化財調査センターによる今津遺跡の発掘調査（関根）	147
第3節 今津遺跡における遺物集中ブロック（捨て場）の問題（藤沼）	151
論考Ⅰ 青森県の縄文時代の製塩土器について（藤沼・蔦川）	
第1節 平館村今津遺跡の製塩土器	159
第2節 青森県内の縄文時代の製塩土器とその出土遺跡	160
論考Ⅱ 青森県の縄文時代晩期の遺跡数（藤沼・山口・沢田）	169
主な参考文献	172

各節・各章の執筆者は目次に示した。（ ）内は、執筆者の名前です。

赤坂→ 赤坂朋美（学部1年生）	樋口→ 樋口徹典（科目等履修生）
秋山→ 秋山真吾（学部3年生）	久末→ 久末恵輔（学部4年生）
安保→ 安保里美（学部3年生）	深見→ 深見 嶺（大学院1年生）
磯前→ 磯前和己（学部2年生）	藤沼→ 藤沼邦彦（教員）
小向→ 小向 良（大学院2年生）	向出→ 向出博之（大学院2年生）
沢田→ 沢田恭平（学部3年生）	山口→ 山口朋美（学部3年生）
関根→ 関根達人（教員）	横山→ 横山寛剛（学部4年生）
蔦川→ 蔦川貴祥（大学院2年生）	

# 第1章 調査の目的

弘前大学人文学部で初めて考古学ゼミナールが開講したのが平成12年度の前期である。ゼミナールの大きな課題としては亀ヶ岡文化をとりあげた。

亀ヶ岡文化は、縄文時代晩期に北海道渡島半島から東北地方一円に盛行した文化である。その特色は土偶や石刀、土版・岩版などの祭祀的遺物、精巧な土器や漆器などの工芸的な遺物に彩られていることである。その影響を受けた文物（土器が多い）は、亀ヶ岡文化圏をはるかにこえて、北は北海道北部まで、南は近畿地方・四国地方・九州地方まで達している。亀ヶ岡式土器を研究することは、日本列島における縄文文化の終末、東の縄文文化と西の弥生文化の接触の状況などを探る上でも極めて重要である。幸い、弘前大学は、亀ヶ岡文化の中心地の一つである津軽地方に位置し、遺跡や遺物にめぐまれた環境にある。ゼミナールを特色あるものに育てていくためには、この環境を利用しない手はない。これがゼミナールで亀ヶ岡文化を取り上げた大きな理由の一つである。

考古学ゼミナールの大きな課題として亀ヶ岡文化を取り上げたからには、ゼミナールとして是非、発掘調査を実施したいと思った。新しく出来た人文学部考古学研究室には考古学の実物資料がほとんどなく、研究・教育に対応できる状態ではなかった。発掘調査をすれば、学生のためにも発掘調査を体験させ、研究資料としての実物資料を提供できる。そこで、考古学の共同研究者である文化財論担当の関根達人氏と共に発掘の候補地を探したり、青森県内の研究者に相談したりした。

平舘村今津遺跡を発掘調査地に選定した大きな理由は、①研究目的に相応しい縄文晩期中葉の遺跡であること、②今津遺跡が縄文晩期中葉の亀ヶ岡文化圏内における地域差の研究に重要な津軽半島沿岸部に立地していること、などである。幸いにも一町田 工氏の斡旋で平舘村教育委員会の全面的な協力が得られ、土地所収者の福井治郎氏からも発掘調査についての快諾があった。

2002年8月、今津遺跡の発掘調査を実施。弘前大学人文学部考古学ゼミナールの初めての発掘調査である。しかも村営住宅を借り、合宿しての手弁当調査である。平舘村教育委員会には全面的にご協力をいただいた。当時、まだ1回しか卒業生を送りだしていないゼミナールであったが、その卒業生のほとんどが勤務の台間を見て発掘に参加してくれた。県内の研究者もたくさん発掘現場に来て、指導助言してくれた。発掘は幸い晩期中葉の遺物密集ブロックを検出することができ、多数の土器が出土したので、学生の意気は上がった。

出土品は人文学部の考古学実習室で、考古学実習・考古学ゼミナール・卒業研究・修士論文作成などに利用しながら、整理・研究を行った。学生にとって土器の整理・復元は初めてであり、試行錯誤の連続で、作業は遅々として進まなかった。発掘の現場ほどには意気が上がらなかったのである。本報告書の考察については、他の地域の資料研究が不十分のため、あまり書くことが出来なかったが、基礎的な部分では、土器組成比などを明らかにし、土器文様もできるだけ展開図を作り、その種類・構成・描き方などを考える資料となり得たと自負している。

なお石器と石製品については、時間的制約から、概要を紹介するにとどめた。詳しい報告は次回の研究報告にまとめる予定である。次回の研究報告には、そのほかに三沢市野口遺跡や青森県木造町亀ヶ岡遺跡出土の亀ヶ岡式土器の実測図を多数集成し、考察したいと考えている。

## 第2章 今津遺跡の位置と環境

### 第1節 平館村の位置と地形

今津遺跡のある平館村は、津軽半島の東海岸北部に位置し、南北17.15km、東西5.2kmの陸奥湾沿岸に沿った南北に細長い村である。北に津軽海峡を望むが、東は陸奥湾に面し、平館海峡をはさんで下北半島の西海岸南部と向き合う。平館海峡は、北側の津軽海峡から陸奥湾への出入口にあたり、交通上重要な位置を占め、江戸時代の嘉永元年（1848年）には異国船警備のため平館村平館に弘前藩の台場が設置された。平館海峡の最狭部は、平館村と対岸の脇野沢村九艘泊地区との間の海域で、その距離は約11kmであり、地元では通称三里といわれる。

平館村から対岸の下北半島西海岸を望むと、晴れた日は切り立った崖や急な斜面となった海岸の様子がよく見えるが、ヤマセが強いと霞んだり、見えなくなったりすることが多い。なお、下北半島西海岸は切り立った崖が多いため九艘泊以外の集落はほとんどない。今津遺跡の発掘期間中、天気の良い日に、北の方向を望むと、津軽半島と下北半島の間に、遠くその北海道渡島半島の陸影を望むことができたが、地元民の話では、年間を通じて、北海道を遠望できる日はそう多くはないという。ちなみに今津遺跡から北西約40kmはなれた三厩村竜飛崎（津軽半島最北端）まで行けば、対岸の白神岬までの距離は約20kmと短くなるが、この付近の海流の速度は津軽海峡でもっとも速いところでもある。

平館村は95%が山地で、平坦地はごく僅かである。平館村の背後（西側）には、烏岳、袴腰岳、丸屋形岳（平館山地の最高峰、718m）、鳴川岳、清水股岳など標高500～700mの山々からなる平館山地が広がり、海岸にせまり、海岸は岩礁や断崖となっているところが多い。平坦地は扇状地の末端と低位海岸段丘面に限られ、そうしたところの海岸にそって集落が営まれ、その上の段丘面に畑が作られることが多い。平館村内だけでも平館山地を源とする10数本の短い小河川が陸奥湾に注いでいるが、豪雨の時は大量の河原石を海辺まで運ぶことがあったという（故福井治郎氏談）。

### 第2節 平館村の気候

平館村は夏が短く、冬が長く、しかも積雪が多い。降水量は年平均1600～1800mm、5月を除いて毎月100mm以上の降水があり、白神山地や八甲田山以外では、県内で最も降水量が多いところと言われている。平均最高気温は7月・8月の29～33度、平均最低気温は、1月・2月のマイナス10～12度である。周辺地域と比較すると、年平均は青森市とほぼ同じで10度であるが、冬季は青森市よりやや高く、夏期にはヤマセの影響もありやや低くなっている。

11月から3月下旬までの約5カ月間は北西の風が強く、根雪は120日に及ぶという。この期間は二日に一度は降雪があり、最深1m強の積雪がある（山本質素1992）。

冬季の強い北西風や積雪も大変であるが、それ以上に問題なのは夏季のヤマセである。ヤマセはオホーツク海高気圧の冷氣流を含む低温で湿度の高い北東風で、5月から8月ころまで吹く。ヤマセが激しく吹き出すと、気温が下がり、霧や層雲を伴い、日照時間も少なくなる。平館村の年間日照時間は、十和田湖を中心とする県南部の山岳地帯とともに県内では最小である（岡田1986）。ヤマセは塩分も含んでいるために、農作物に日照不足・風害・冷害・塩害を与える原因になる。また、平館村では、護岸工事をする前は、ヤマセが吹くと陸奥湾の波が打ち寄せてきて、道路や家まで水がかかったという（山本質素1992）。

この付近の植生は、ブナやミズナラで代表される落葉広葉樹林帯に含まれるが、平館村の西側にそびえる平館山地は、標高は低いが亜高山帯植生が著しく、季節風やヤマセが吹きつけるため、チシマザサが優先し、ブナやアカミノウツゲなどが矮小化する風衝地特有の植生が見られるという（青森県史2001）。



### 第3節 陸奥湾について

#### 〔陸奥湾〕

平館村の東から南に大きく湾入する陸奥湾の面積は1,580㎩である。海底の深さは、最も深い平館海峡の下北半島寄りの地点で約70m、その他の部分は30～50mであり、湾央部から東湾にかけて泥底が広がるという。

日本海を北上する暖流である対馬海流から分岐して津軽海峡に流れ込む津軽海流は、平館海峡西口（津軽半島寄り）から陸奥湾に流入し、海岸沿いに反時計回りに巡って、平館海峡東口（下北半島寄り）から津軽海峡へと流出する。この平館海峡での潮流の速さは、水深15m地点において、平均秒速0.03～0.08mという。潮の干満によってさらに流れが弱くなることもあり、湾奥部では外海水との交換があまりできないため、低塩分・低水温になる。この傾向は冬季に著しく、そこに棲息する魚は冷水性の魚種のみになるという。このように、陸奥湾は、津軽海峡西部と比べると概して水温が低く、冷水性魚種の割合が高く、津軽海峡西部に見られる温帯性魚種の多くを欠落させている（青森県史2001）。

#### 〔平館村沿岸の漁労〕

今津遺跡は貝塚がないため、魚介類の遺存体は出土していないが、立地からみて、今津遺跡を残した縄文時代晩期の人々の食生活において魚介類が大きな役割を果たしていたことは間違いなからう。その手掛かりとして、現在の平館村の漁獲量や漁獲魚種を調べてみよう。

津軽海峡西部や平館海峡は、暖流である津軽海流（対馬海流の支流）によって運ばれる魚類が豊富な漁場であり、陸奥湾は、季節によって異なり、夏季には温帯性・冷温性の魚類が、冬季には冷温性の魚類（ニシン・シロザケ・サクラマス・マダラ・ハタハタなど）が豊富である。『平館村史』（1974年）によると、平館村沿岸や沖合で穫れる主要な魚類は、イワシ類、イカナゴ、ヤリイカ、スルメイカ、ヒラメ、アイナメ、マダイ、クロダイ、ブリ、タコ類、カナガシラ、サバ、ソイ、ホッケ、カレイ類、ワカサギ、アジ、サメ、サヨリ、トビウオ類、メバル、クサフグなどで、四季を通じて魚種が多い。このほか今では漁獲量が少なくなってしまったものにマダラ、ニシンなどがある。平館村で漁獲する主要魚種と漁法・漁期について表にしたが、かつては主要魚種であったタラやニシンが抜けているので、明治13年の石崎浜の「水産漁獵法調上申」（『平館村史』所収）で補った（タラからアワビまで）。縄文時代晩期の気候は、現在よりもやや寒冷であったと言われる程度なので、以上の魚種は今津縄文人にとっても漁労の対象となったものであろう。

平館村の主な漁獲魚・漁法・漁期（『平館村史』より）																			
魚 種	定置網	延縄	地曳網	かご網	底建網	一本釣	刺網	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
イワシ網	○																		
イカナゴ	○		○																
ヤリイカ	○																		
スルメイカ	○					○													
カレイ類		○				○													
アイナメ		○		○	○														
マダイ	○	○																	
ブリ	○																		
タコ類	○			○															
カナガシラ		○																	
タラ	差網																		
ニシン	差網・引網																		
カスベ	延縄																		
アブラメ	延縄																		
サメ	延縄																		
アワビ	突漁																		

## 第4節 青森県で見られる動物

### 〔海の哺乳類〕

今津縄文人の捕獲の対象となったと推定される海の哺乳類について調べてみよう。青森県は三方を海で囲まれているので、海を生活圏とするクジラ類やアザラシ類など約20種類の海生哺乳類が現在でも回遊している可能性があるという(青森県史2001)。また、古記録や新聞などでクジラ類が漂着した記事を見ることができるし、県内各地の貝塚でもクジラ類(イルカの仲間も多い)やアシカ・トド・オットセイなどのアザラシ類の骨やそれらを加工した道具類が出土している(福田1998)。しかし、陸奥湾に入り込む海生哺乳類は、周辺海域と比べるとその種類・量ともに少ないようである。それでも湾奥部の青森市大浦貝塚(縄文晩期)や三内丸山遺跡(縄文前・中期)からクジラ(種などの同定不可)やイルカ・アシカなどの骨とその加工品が発見されているので、陸奥湾においても、漂着したクジラ類を利用するだけでなく、機会があればイルカやアシカなどを対象とした積極的な海獣猟も行われた可能性が高いであろう。

### 〔陸の哺乳類、鳥類〕

今津縄文人の捕獲の対象となったと推定される陸の哺乳類、鳥類について調べてみよう。青森県の陸地に棲息する代表的な哺乳類を『青森県史自然編生物』から挙げて見ると、大型のものとしてツキノワグマ、ニホンカモシカ、ニホンザル、中型のものとしてノウサギ、ニホンリス、ホンドモモンガ、ムササビ、タヌキ、キツネ、テン、イタチ、イイズナ、オコジョ、アナグマ、小型のものとしてモグラの仲間、ネズミの仲間、コウモリの仲間などがある。シカ・イノシシが欠落しているが、県内各地の縄文時代の遺跡からその骨(食料残滓)が出土しており(村越1975)、縄文人の狩猟の対象となっていたことは確かである。

本州の最北端に位置する青森県は、津軽海峡をはさんで北海道と相対しているため、渡鳥にとって「渡り」の重要な位置にある。また複雑な海岸線、湖沼群、湿原、丘陵、高山など多様な生息環境が県内各地に見られるため、地域や季節に応じて、多様な鳥類が生息するという(青森県史2001)。縄文人の捕獲の対象となるのは、比較的大きな渡鳥(オオハクチョウ、ガン・カモ類など)や留鳥(キジ、ヤマドリ、ウ、ウミネコ、カラスなど)で、県内各地の貝塚あるいは泥炭層の遺跡で出土している。三内丸山遺跡(縄文前・中期)で出土した鳥類は15種類で、ガン・カモ類が過半数を占め、ウ類・キジ類がそれに次いでいる。アホウドリも比較的多く、八戸市長七谷地遺跡(縄文早期)、木造町田小屋野貝塚(縄文前期)・大間町ドウマンチャ貝塚(縄文晩期)などで出土している(青森県史2001)。

## 第5節 今津遺跡周辺の遺跡

今津遺跡のある津軽半島東海岸は、平館山地から延びた丘陵が海岸までせまり、平坦地は扇状地の末端と低位海岸段丘面に限られる。そのため平館村には比較的に広い段丘面に立地する今津遺跡のほかに大きな遺跡は見られない。青森県埋蔵文化財調査センターと弘大日本考古学ゼミの調査によると、平館村の遺跡は次表のようになる。今津遺跡以外の晩期の遺跡としては、尻高(2)遺跡、尻高(3)遺跡、尻高(4)遺跡、石崎沢遺跡があり、尻高(3)遺跡と尻高(4)遺跡では墓と思われる土坑や埋設土器などが発見されている。2004年に行った弘大日本考古学ゼミの分布調査では、石崎沢(2)遺跡では、低地に突き出た低丘陵の斜面から比較的多くの製塩土器を発見した。地形的に見て、近くに製塩遺構が埋没している可能性があるが、検出は難しそうである。『青森県遺跡地図』(1998年)を見ると、平館村の北に位置し、津軽海峡に面する三厩村や今別町にある縄文時代晩期の遺跡は、三厩村が6ヶ所、今別町が13ヶ所あるが、現在、分布調査して、実際に晩期の土器片などを採集できる遺跡は、宇鉄遺跡(三厩村)や大泊遺跡(今別町)などごく僅かである。宇鉄遺跡は、大洞C1式からA'式までの遺物が大量に出土し、また弥生時代にも営まれた遺跡であり、この周辺で最も大きな集落であったと思われる。大泊遺跡では、分布調査で大洞

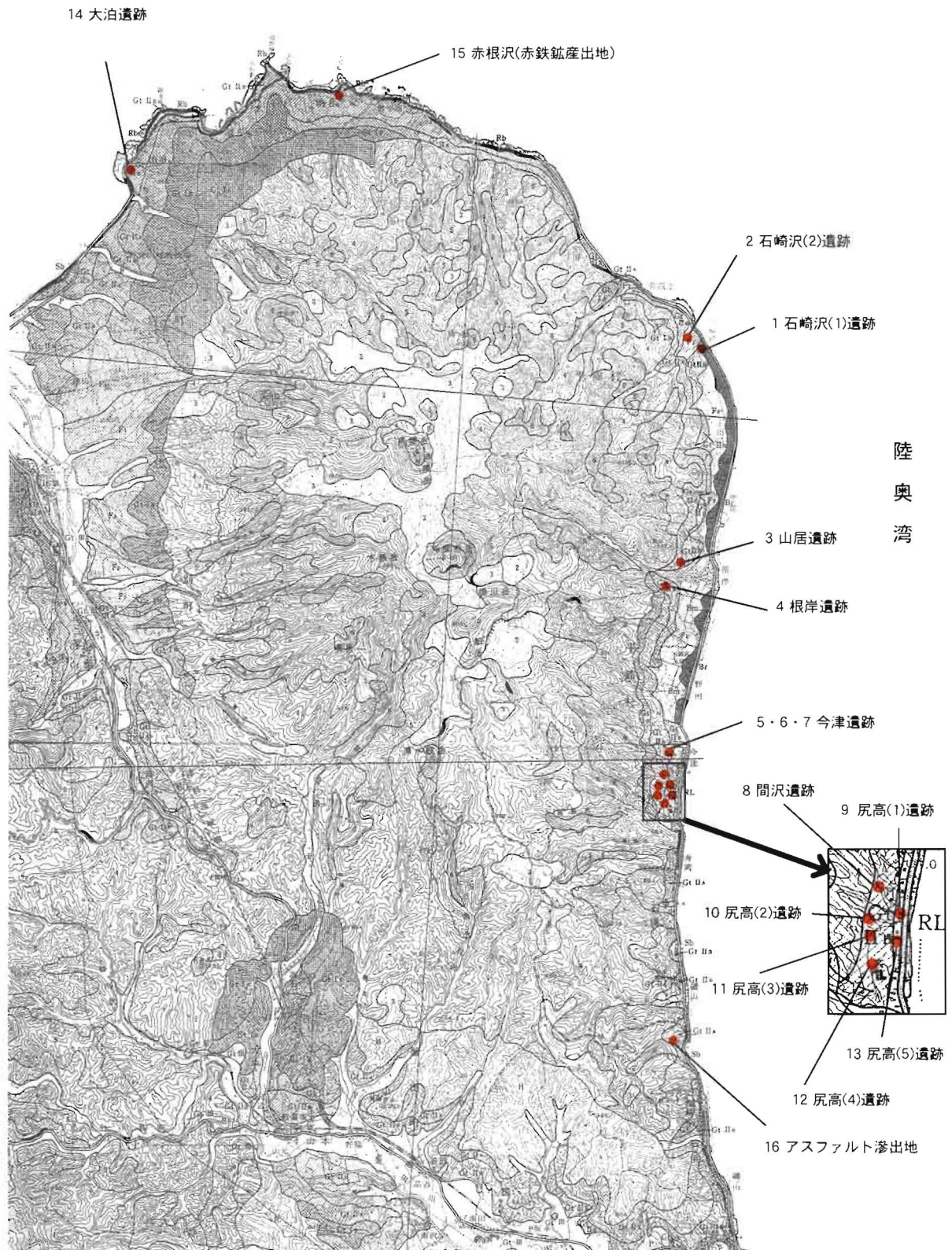
A式とA'式の文様をもつ土器や条痕文土器を採集したが、そのなかに製塩土器と思われる破片が1点含まれていた。

以上をまとめると、発掘調査などで内容が明らかにされた遺跡は少ないが、平館村およびその周辺地域には、晩期の遺跡が海岸に沿うような形で点在し、そうした遺跡群のなかで宇鉄遺跡や大泊遺跡、今津遺跡などが拠点集落としての役割をもっていたのであろう。

平館村の遺跡				
1	石崎沢(1)	石崎沢字元宇田	縄文後期	橘・工藤1974
		2004年秋に弘大考古学ゼミで分布調査したが確認できず。		
2	石崎沢(2)	石崎沢字元宇田	縄文後期	1983年、県埋文確認。
		2004年秋に弘大考古学ゼミで分布調査。低地に突き出た低丘陵の斜面で、縄文晩期の大洞C2式と思われる土器を採集。製塩土器も多数あり。石崎沢(2)遺跡と別地点の可能性あり。		
3	山居	根岸字山居	縄文後期	1983年、県埋文確認。ゼミでも後期土器を採集。
4	根岸	根岸字小川	縄文中・後期	ゼミの分布調査では地点を確認できず。
5	今津(1)	今津字才の神	縄文中～晩期	本報告書。橘・工藤1974。県埋文1986。
6	今津(2)	今津字才の神	縄文晩期	1984年、県埋文確認。大洞C2式。
7	今津(3)	今津字才の神	縄文晩期	1984年、県埋文確認。大洞A'式。
		ゼミの分布調査では、今津(2)・今津(3)ともに山林・藪のため確認できず。		
8	間沢	今津字間沢	縄文前～中期	1984年。県埋文調査。県埋文1986。
9	尻高(1)	今津字尻高	平安時代	製塩遺跡
10	尻高(2)	今津字尻高	縄文前・後・晩期	県埋文1985。大洞C1・C2式土器。
11	尻高(3)	今津字尻高	縄文前・中・晩期	県埋文1985。大洞C1・A・A'式土器。
12	尻高(4)	今津字尻高	縄文前～後・晩期	県埋文1985。大洞B・BC・C1・C2・A'式土器
		尻高(3)では大洞A'式などの土坑、尻高(4)では大洞BC・C1式の土坑や埋設土器を検出。		
13	尻高(5)	今津字尻高	平安時代	製塩遺跡。一町田1985。
14	大泊遺跡（今別町）		清水1959では上山崎遺跡。ゼミの調査で晩期の土器を採集。	
15	赤根沢（今別町）		赤色顔料の原料である赤鉄鉱の産出地。今津遺跡にも運ばれている。	
16	アスファルト滲出地		柴先生の案内による。縄文人が採集するほど産出したかは疑問。	



# 津 軽 海 峡

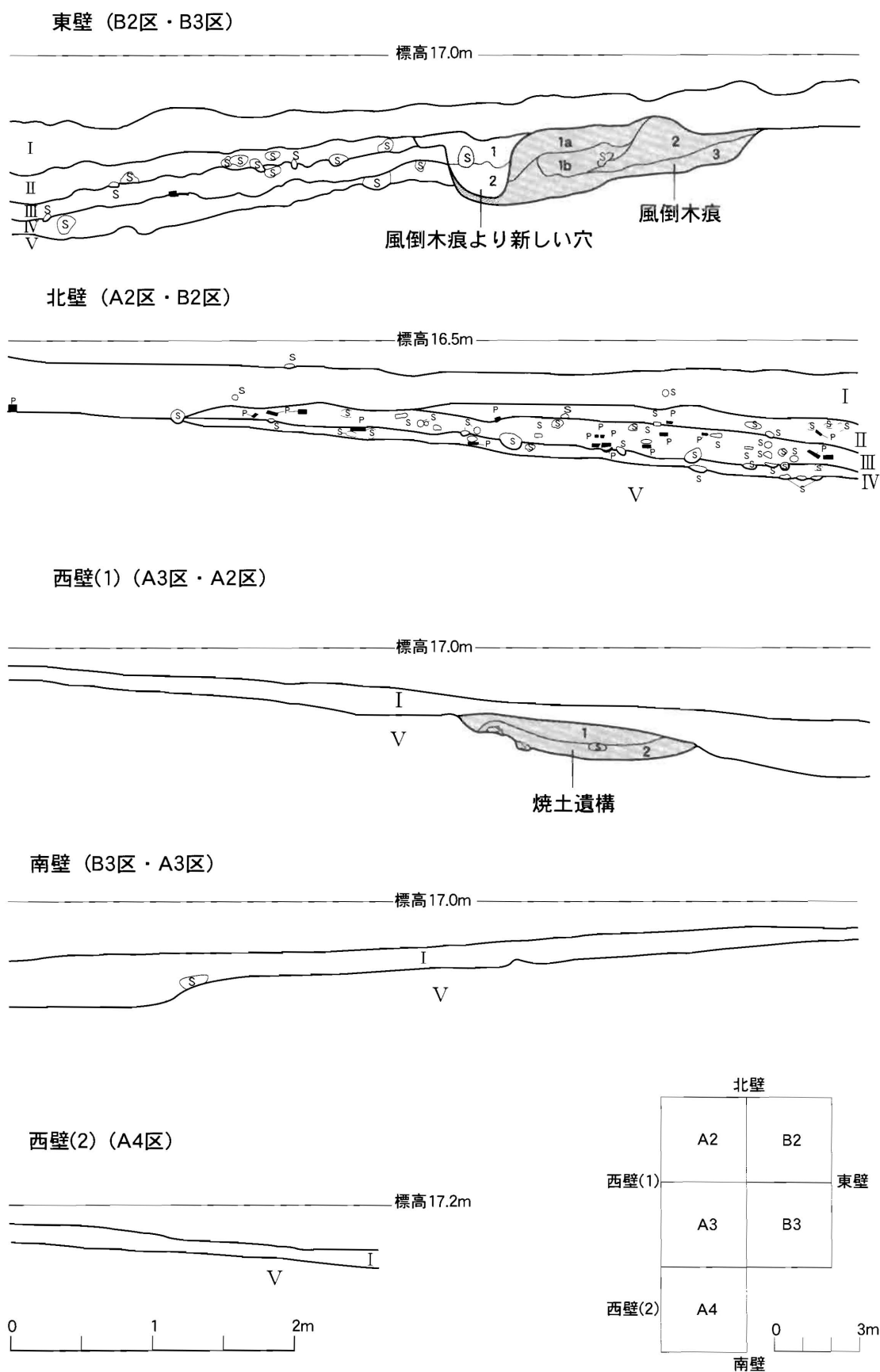


第2図 今津遺跡周辺の遺跡分布図  
(土地分類基本調査 竜飛崎・蟹田 地形分類図 1/50000より作成)

## 第6節 今津遺跡の位置・地形

今津遺跡は青森県東津軽郡平館村今津字オノ神95-1に所在する。平館村役場から南に約3km離れた地点にある。平館山地の東端に発達した低位海岸段丘の緩やかな斜面に立地する。この段丘は、北側を流れるオノ神川と南側を流れる小さな間沢川に挟まれており、この段丘面に今津(1)遺跡、今津(2)遺跡、今津(3)遺跡がある(岡田1986)。しかし、現地を分布調査しても、かつての畑も現在は藪や山林と化している所が多く、今津(1)遺跡以外の遺跡の地点を確認することはできなかった。今津(1)遺跡(かつての今津遺跡)は、今津バイパス道路建設で大きく破壊されているが、遺物の散布状況や青森県埋蔵文化財調査センターの調査成果などから、あえて遺跡の範囲を推定すれば、その面積はおよそ18,000㎡と推定される。このなかに今津(2)遺跡と今津(3)遺跡が含まれている可能性もありそうだ。現在でもバイパス道路の東側、オノ神川寄りの畑地に縄文時代晩期の遺物が濃厚に散布している状況を確認出来る。遺跡の東側には段丘崖があり、その下の低地に南北の道路を挟んで住宅や船小屋が連なり、陸奥湾と接している。弘前大学の発掘地点から現海岸までの直線距離は約180mしかない。この崖下の海岸の一面には今津縄文人が製塩活動を行ったところや船着場があったと推定されるが、住宅や道路の建設、護岸工事などで地形も変わっており、そうした痕跡はまったく確認されていない。

今津(1)遺跡のある段丘面は、標高が10~20mで、海の方に傾斜しており、平館山地中央部付近で発生した土石流が谷口で堆積することによって形成された扇状地であるという(岡田1986)。遺跡のある地点では、表土の黒土層や遺物包含層の下に30cm位の砂質風化火山灰、そのすぐ下にレンズ状に砂層を挟む厚さ2m以上の礫層が見られる。この礫層は扇状地を構成するもので、形が亜角~円の中~巨礫からなっており、その岩種はほとんど安山岩でまれには頁岩も見られる。基盤は小泊層の頁岩であるが、遺跡の近くで基盤まで連続的に観察できるところはないという(岡田1986)。この小泊層は、硬質頁岩~黒色頁岩で特色づけられているが、この頁岩は打製石器の材料として多用されている。



第3図 今津遺跡層位図



## 第3章 発掘調査の内容

### 第1節 弘前大学人文学部考古学研究室の発掘調査地点

今津遺跡はこれまでに3回発掘調査されている。第1回目は1972年に平舘村教育委員会が村史編纂のために発掘調査を行ったもの（調査面積24㎡）、第2回目は1984年に青森県埋蔵文化財調査センターが今津バイパス敷設工事に先立ち発掘調査したもの（調査面積3,280㎡）、第3回目は2002年に弘前大学人文学部日本考古学研究室が亀ヶ岡文化研究を目的として発掘調査したもの（調査面積45㎡）である。以下の文章では、それぞれの調査を村調査、県埋文調査、弘大調査と略することがある。それぞれの調査地区の配置は図（第5図）の通りで、村調査区は広い県埋文調査区の中に含まれてしまうようである。

弘大調査区は、現在の今津バイパス道路の東側の畑に設定した。県埋文調査区で遺物密集ブロックが検出されたすぐ東側である。番地は平舘村大字今津字オノ神95-1である。すぐ北側をオノ神川が流れ、今津バイパス道路の高杯橋が架けてある。発掘地点に立つと天気がよければ対岸の下北半島西海岸や鯛島がくっきりと見えることがある。

### 第2節 発掘の方法など

弘大調査区は今津バイパス道路のすぐ東側の畑で、バイパス道路の東側では標高がもっとも高い位置である。この畑は、現在は休耕地になっているが、最近まで馬鈴薯などが栽培されていた。畑の表面には縄文時代晩期の土器の小片や頁岩の剥片が多数散布していた。調査区は、今津バイパス道路の方向に沿って、東西6m×南北9mの範囲で設定し、内部を一辺3m四方の方眼（区）に区画し、それぞれに区名をつけ、うち5つの区（A2・A3・A4・B2・B3区）を発掘した。実際の調査面積は45㎡となる。

発掘は層位学的に行った。場所によっては第Ⅲ層とⅣ層との区別が困難なところもあったが、あえてどちらかに区別して採集した。第Ⅰ・第Ⅱ層の遺物は一辺3m四方の区画で取り上げたが、遺物密集ブロックである第Ⅲ・Ⅳ層の遺物は、各区をさらに1m方眼に区切って9分割（①～⑨）し、一辺3m四方の区画で取り上げた（第4図）。

発掘はバイパス道路に近いA2・A3・A4区から始めた。表土を剥ぐと、大部分はすぐ地山（第Ⅴ層）であったが、A2・A3区の東寄りの部分に土器が密集していたので、東側に拡張してB2・B3区を発掘することにした。第Ⅱ層は攪乱を受けていたが、第Ⅲ層と第Ⅳ層は良好な包含層で遺物密集ブロックを構成しており、調査区の外側まで広がっていることが分かった。こうした遺物密集ブロックは村調査区でも県埋文調査区でも発見されている。また、鉄棒を差し込んだボーリング調査では弘大調査区のある畑の南東寄りにも別の遺物密集ブロックが推定できる。これらには若干の時期差が認められそうであるが、土器を見る限り、いずれも縄文時代晩期中葉の大洞C2式かあるいはそのちょっと後くらいのものである。こうした遺物密集ブロックの点在は、世帯共同体ごとに形成されたいわゆる「捨て場」と考えているが、住居跡がこれまでの調査でまったく発見されていないので、住居跡と捨て場の関係をとらえることはできない。しかし、住居跡と捨て場の関係はこれからの亀ヶ岡文化研究の大きな課題となるであろう。

### 第3節 弘大調査区の層序（第3図）

弘大調査区の北西隅付近の標高は約16.5mで、調査区を設置した畑の地表面は北東方向にやや傾斜する地形になっている。検出された遺構は縄文時代晩期の遺物密集ブロック（捨て場）1ヶ所、後期の焼土遺構1基のみである。

第Ⅰ層 黒褐色を基本とする耕作土である。層の厚さは約6～20cmである。表面に石器の原材料であ

る頁岩の剥片が多数散布していた。締まりのない土層で、小さな土器片や頁岩の剥片が含まれている。

第Ⅱ層 黒色を基本とする遺物包含層である。層の厚さは約4～12cmである。大きな礫や比較的多くの土器片を含むが、耕作の影響を受け、攪乱されていた。小さな鉄片（釘？）が1個混入していた。第Ⅲ層と比べると締まりがなくボソボソした感じである。B2区を中心に分布していた。

第Ⅲ層 黒色を基本とする安定した遺物包含層である。層の厚さは約4～12cmで、B2区の北東隅で最も厚い。第Ⅱ層と比べると粘性がありやや締まっており、湿気もある。小さな炭化物や焼土粒を多数含んでいた。安山岩の大小の礫も多数含まれていた。土器や石器など遺物が折り重なるような状態で多数含まれており、いわゆる遺物密集ブロックを構成していた。土器片は大小様々であるが、ある程度形を保った状態で潰れたり、ひび割れしていた土器も多かった。しかし、特殊な状態を示すような出土状況はなく、ごく普通の「捨て場」であったと考えている。

第Ⅳ層 黒褐色を基本とする安定した遺物包含層である。層の厚さは約2～12cmである。大きな安山岩の礫、小さな炭化物や焼土粒を多数含んでおり、第Ⅲ層とよく似ているが、第Ⅲ層よりも粘性があり締まりも強い。土器の出土状況も第Ⅲ層とよく似ており、土器やその破片が折り重なるような状態で出土した。部分的にとくに締まりの強いところがあり、そこでは土器の破片が固く食い込んでいた。第Ⅳ層の分布範囲は第Ⅲ層と同じで、土器が折り重なる状態で出土した所では第Ⅳ層の上面をとらえることができなかった。

第Ⅴ層 黄褐色の土層である。土質は固く締まっている。砂質風化火山灰層に相当するものであろう。発掘区全体にわたって、第Ⅴ層上面まで掘り下げたが、上記の焼土遺構（第Ⅴ層）以外の遺構を検出することが出来なかった。

## 第4節 焼土遺構と風倒木痕跡

### 〔焼土遺構〕

落ち込み状の焼土遺構である。A2区とA3区の境付近の西壁際の第Ⅴ層上面で検出された。調査区内では半円形を呈している。焼土の土質は柔らかく脆い。礫も含まれている。炭化物は含まれていない。最も厚いところで約25cmで、色調から二枚に分かれる。上層の第1層は暗赤褐色（10YR3/2）で、下層の第2層の赤褐色（10YR4/3）よりも色が暗い。第1層の東寄りの部分とその付近から縄文時代後期の網目状燃糸文の深鉢が1個体分出土した（図版85-17）。第2層は無遺物層である。遺構の性格は不明であるが、炉跡の上部が失われた可能性もある。

### 〔風倒木による痕跡〕

平面でははっきりした輪郭をとらえることは出来なかったが、B3区の東壁で風倒木によって生じたと思われる穴を検出した。平面形は楕円形と推定されるが、調査区では部分的にしか確認できなかった。その大きさは南北2.5m×東西1.5m、深さ48cmである。東壁にみられる穴の断面を観察すると、第Ⅲ層上面から落ち込んでいた。埋土1層は黒色土と黄褐色土が混じり合った汚い感じの土層で、小さな土器片・頁岩の剥片、礫などを含む。埋土2層は黒色土と黄褐色土が混じり合っているが、埋土1層と比べると黄褐色土の割合が多い。小さな土器片・頁岩の剥片、礫などを含む。埋土3層は黄褐色土層で、第Ⅴ層と同じ土質であるが、締まりがなく、遺物を含んでいない。埋土1層と埋土2層に含まれる黄褐色土は、樹木が倒れるときに、第Ⅴ層の黄褐色土を捲きあげたものであろう。その時期は第Ⅲ層の形成以降である。

弘大調査区の層序（土色帳を利用）			
層 名	基本色調	層 厚	特 徴
第Ⅰ層	黒褐色（10YR2/2）	約6～20cm	耕作土。締まりがない。小さな土器片や頁岩の剥片を含む。
第Ⅱ層	黒 色（7.5YR2/1）	約4～12cm	大洞C2式の遺物を含むが、耕作で攪乱を受けている。
第Ⅲ層	黒 色（7.5YR2/1）	約4～12cm	大洞C2式の遺物包含層。遺物密集ブロック（捨て場）を形成。小さな炭化物・焼土粒を含む。土器が折り重なるように出土。両層の区別は難しい所もあった。
第Ⅳ層	黒褐色（7.5YR3/2）	約2～12cm	
第Ⅴ層	黄褐色（10YR5/6）	不 明	地山。無遺物層。砂質風化火山灰層。

## 第5節 調査経過

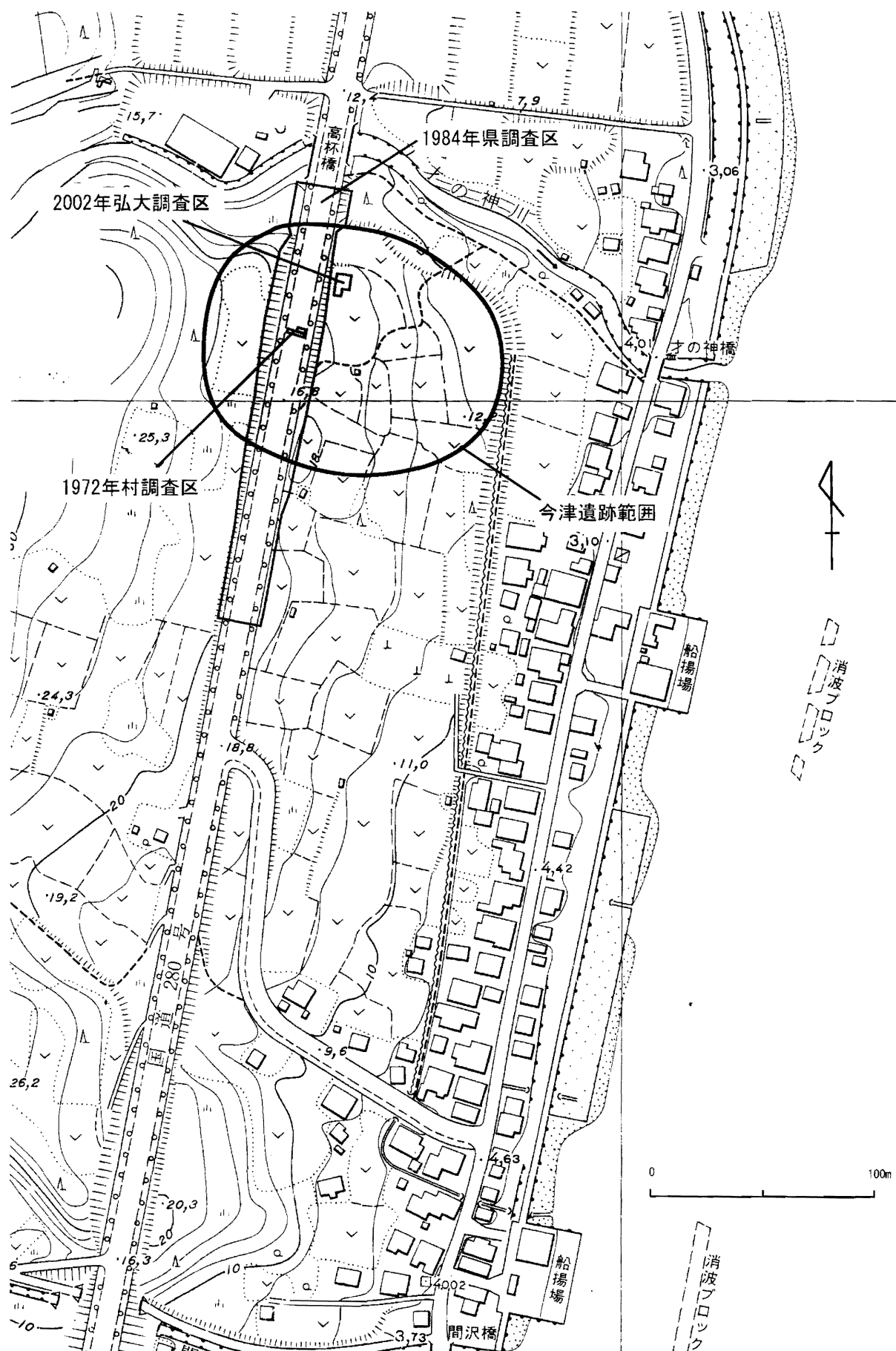
発掘調査は2002年8月22日から始め、9月1日に終了した。前半は雨に悩まされたため、後半がいいそがしい日程となってしまった。休日などを利用して卒業生の大部分が応援に駆けつけ、一緒に合宿し、発掘に参加してくれた。また、弘前大学人文学部日本考古学ゼミの初めての発掘調査ということで、沢山の研究者が、祝い気分で現地に来てくださり、学生に直接、助言・指導して下さった。

調査経過については、遺跡発掘日誌抄とし、表にまとめた。

今津遺跡発掘日誌抄		
8.22 木曜日	参加者	関根達人、薦川貴祥・竹原仁志・深見 嶺
	作業内容	発掘用具の運搬、発掘予定地周辺の草刈り、テントの借用と設営。
8.23 金曜日	参加者	藤沼邦彦・関根、薦川・竹下由紀子・横井猛志
	作業内容	発掘区の設定。A 2 ・ A 4 区発掘。A 3 区北半分発掘。
		A 2 区の表土を剥ぐと、東壁近くのⅢ層上面から土器片が集中して出土。西壁南寄りで焼土検出。
		A 3 区の北半分を表土剥ぎ。A 2 区からの焼土はのびていない。北東隅でⅢ層上面から土器出土。
8.24 土曜日	参加者	藤沼・関根、竹下・萩坂華恵・薦川・横井・小向 良・向出博之・関根桂子
	見学者	郵便局の米田さん
	作業内容	午前中、小雨、A 2 ・ A 3 区（半分）をテントをかけて発掘。午後は発掘中止。
		A 2 区のⅢ層を発掘したが、区の中央部から北壁にかけて柔らかく、しまりのない部分があり、鉄クギが出土したので、攪乱層と認定。この攪乱層をⅢ層と区別してⅡ層とする。
8.25 日曜日	参加者	藤沼・関根、竹下・萩坂・山田祐子・其田香保里、薦川・横井・小向・向出・関根・新井田えり子・竹内友香・深見
	見学者	榊原滋高・藤原弘明夫妻・成田滋彦・平山明寿・遠藤正夫
	作業内容	A 2 区のⅡ層（攪乱層）を掘り上げる。
		A 3 区南半分の表土剥ぎ。東壁に近い部分から遺物が出土。
B 2 区は表土を剥ぎ、Ⅱ層を掘り、Ⅲ層上面を検出。土器が多数出土。		
		B 3 区は表土を剥ぎ、A 3 区・A 2 区に近い部分から礫と遺物が出土（Ⅲ層と推定）。南壁部分は直ぐ地山で遺物が少ない。

8.26 月曜日	参加者	藤沼・関根、竹下・蔦川・横井・小向・向出・関根桂子・新井田・竹内・深見・佐藤重紀
	見学者	一町田 工、平舘村教育長・小川、村民、葛西勲と青森大学生2名、鈴木克彦
	作業内容	B2区は残りのⅡ層を掘り、Ⅲ層上面を検出。Ⅲ層上面から大量の礫と土器が出土。完全な形に近い土器やそれがつぶれたような土器が検出される。
		A2・A3・B2・B3区の境のベルトの層位図を作成し、ベルトを外す。
8.27 火曜日	参加者	藤沼、蔦川・工藤・佐藤・向出・関根桂子・新井田・竹内
	見学者	村民、駒田 透、平舘村教育委員会（小川）
	作業内容	B2区は西ベルトを外す。Ⅲ層を検出。
		B3区は北ベルトと西ベルトをはずし、Ⅲ層を検出
8.28 水曜日	参加者	藤沼・関根、佐布環貴・蔦川・小向・竹原・向出・関根桂子・新井田・竹内・佐藤・工藤晴代・市川健夫。
	見学者	村民、駒田 透、平舘村教育委員会（福井・小川）
	作業内容	A2・A3・B2・B3区のそれぞれを1メートル四方の9区画に細分し、Ⅲ層の遺物を取り上げる。
8.29 木曜日	参加者	藤沼・関根、佐布・蔦川・小向・向出・関根桂子・新井田・竹内・佐藤・工藤
	作業内容	午前中は雨のため作業中止。
		午後、A2・A3・B3区のⅢ層の遺物を取り上げる。
		午後、B2区のⅣ層の遺物を取り上げる。
	遺物収納	A2・A3・B2区のⅡ層
8.30 金曜日	参加者	藤沼・関根、佐布・萩坂・栗原徹・蔦川・小向・向出・関根桂子・新井田・竹内・佐藤・工藤
	見学者	平舘中学校の生徒・村民
	作業内容	測量
		A2・A3・B3区のⅢ層とⅣ層の遺物を取り上げる。
		B2区のⅢ層とⅣ層の遺物を取り上げる。
8.31 土曜日	参加者	藤沼・関根、佐布・萩坂・其田・栗原・蔦川・小向・竹原／向出・関根桂子・新井田・竹内・佐藤・工藤・市川・深見
	見学者	福田友之、成田誠治、市川金丸、村民
	作業内容	測量
		A2・A3・B3区のⅢ層とⅣ層の遺物を取り上げる。
		B2区のⅢ層とⅣ層の遺物を取り上げる。
9.1 日曜日	参加者	藤沼・関根、萩坂・蔦川・小向・向出・関根桂子・新井田・竹内・佐藤・横井・工藤・市川・深見
	作業内容	土器を取り上げたのち遺構の有無を確認するため地山面（Ⅴ層上面）を削るが、遺構はなし。
		最終発掘面を写真に収め、東西南北の壁面の層位図を作成。
		埋め戻し





第5図 今津遺跡各調査区の位置  
 (平館村教育委員会提供の地図 1:2500より作成)

## 第4章 遺物

### 第1節 土器の整理方法、経過

#### 〔遺物の洗浄・注記・接合・復元〕

発掘調査で出土した遺物は、整理用コンテナ（中型）で約60箱分あった。その半分近くが、石器やその剥片なので、土器は約40箱くらいであったろう。すべて弘前大学人文学部考古学実習室に運び、学生が中心になって、ただちに洗浄した。土器の胎土（土質）が脆いものが多いため、洗浄に慎重になりすぎ、断面に土が残るものが生じ、接合作業がうまくいかないという問題もおこった。そのためもう1度、洗い直しをせざるを得ない土器もあった。洗浄した遺物には、遺跡名・地区名・層位を書き入れた。例えばB2区の小区⑥の第Ⅲ層出土の土器片なら、IM-B2⑥-3と注記した。IMは今津遺跡の記号である。

注記した土器は、個体を識別しながら、できるだけ接合し、復元した。どうしても見つからない部分の復元には、石膏やシャモットを埋めた。第Ⅲ層と第Ⅳ層は、発掘中にも分離が難しい部分があったが、土器も互いの層のものが接合するものが多いので、土器の属性などを観察・分析するときは、同一層と見なして、土器の整理を進めた。

#### 〔実測図・拓本・写真〕

原則として、口縁部が全周の4分の1以上ある土器については実測図を作成した。体部の文様帯にある文様などについては、拓本図や拓本図から作成した展開模式図を作成し、できるだけ文様の復元に努め、文様の種類・構成・描き方などについて分析できるようにした。小さな破片でも、口縁部を含むもの・代表的なもの・特色あるものについてはできるだけ拓本を取り、断面図を作成し、必要なものは報告書に掲載した。

なお、土器の実測図は、スカイサーベイの図化器を使用したものと手実測したものがある。トレースもパソコンを用いたデジタルトレースしたものとロットリングを用いて手でトレースしたものがある。

写真は、デジタルカメラで撮影したものをを用いたが、初めての経験であり、いろいろと試行錯誤を繰り返した。

### 第2節 縄文時代晩期の土器

#### (1) 土器の器種と器形の分類

器種という用語は、形・大きさ・容量・装飾などの違いによって用途が異なっていると想定される器の種類である（佐原2002）。縄文時代晩期の東北地方の土器（亀ヶ岡式土器）は、通常、深鉢・台付深鉢、鉢・台付鉢、浅鉢・台付浅鉢、皿・台付皿、壺、注口土器、香炉形土器、片口付鉢、小型土器（ミニチュア土器）などがあるが、器種の組成やその比率は時期によって異なることが明らかになっている。

用途を暗示する器種の分類は困難であるが、まず形を優先して、法量や装飾などを考えるべきであろう。ここでは、よく使用される長谷部言人の「正方形九等分法」を大まかな基準として用い、次に体部最大径と頸部（あるいは口径）最小径の比率で壺と壺以外のものを分け、器高と口径の比率で深鉢（1以上）・鉢（0.5～1）・浅鉢（0.5～0.3）・皿（0.3以下）に分類した。また鉢・浅鉢・皿については台の有無でも分類した。注口土器や香炉形土器は小破片でも特殊な形態や装飾から器種分類することができた。製塩土器は、用途から考えて、器種の一つと見なすことにした。

以上から、今津遺跡の土器の器種を分類すると、深鉢、鉢・台付鉢、浅鉢・台付浅鉢、皿・台付皿、壺、製塩土器、注口土器、香炉形土器などがあり、大別すると8種類、細別すると11種類となる。以下、器種ごとに土器の内容について説明を行う。

## (2) 壺

### (i) 分類に使用した特徴

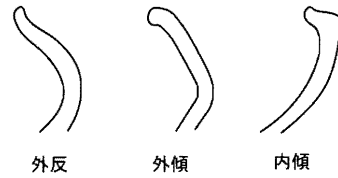
壺形土器の器形を決定する属性として、口頸部傾き、体部最張部の位置、体部に対する頸部のすばまり、頸部の長さ、体部器高に対する体部最大径の比率の5項目を観察した。

#### ・口頸部傾き

体部に対して口頸部が外反するもの。

体部に対して口頸部が外傾するもの。

体部に対して口頸部が内傾するもの。



模式図 1 口頸部傾き

#### ・体部最大径の位置

体部最大径の位置が、体部器高の1/2より上にあるもの。

体部最大径の位置が、体部器高の1/2付近にあるもの。

体部最大径の位置が、体部器高の1/2より下にあるもの。

#### ・体部に対する頸部のすばまり

体部最張部に対する頸部最小径の比率を、体部に対する頸部のすばまりとした。頸部最小径/体部最大径の値0.61以上をすばまりが弱い、以下をすばまりが強いものとした。

#### ・頸部の長さ

口径に対する口頸部器高の比率を頸部の長さの指標とした。口頸部器高/口径の値0.3以上を長頸、以下を短頸としたが、図版2-10（値0.313）の個体は印象や他の属性において短頸のものに近い為、例外的に短頸壺に含めた。

#### ・体部器高に対する体部最大径の比率

体部器高/体部最大径の値を体部の横長・縦長の度合いの指標とした。値0.7以下のものを横長、値0.7～1.0のものを中庸のもの、値1.0以上のものを縦長のものとした。

### (ii) 壺の分類

完形または実測図上で器形が復元でき、(i)に挙げた5項目が観察できた土器を元に壺形土器の器形分類を行なった。それ以外の土器破片は器形分類には用いなかった。まず、観察した5項目のうち口頸部傾き・体部最張部の位置の組み合わせによってA～Fに6大別し、更に体部に対する頸部のすばまり・頸部の長さ・体部器高に対する体部最大径の比率の組み合わせによって細分を行なった。

#### ・A類

頸部が外反し、体部最大径が体部器高の1/2より上にあるもの。更に4細分した。

A1類：すばまりが強い長頸で、体部が横長でも縦長でもなく中庸のもの。

A2類：すばまりが強い短頸で、体部が横長でも縦長でもなく中庸のもの。

A3類：すばまりが弱い短頸で、体部が縦長でも横長でもなく中庸のもの。

A4類：すばまりが弱い短頸で、体部が横長のもの。



- ・ B 類

頸部が外反し、体部最大径が体部の1/2付近にあるものをB類とした。更に3細分した。

B 1 類：すばまりが強い長頸で、体部が横長でも縦長でもなく中庸のもの。

B 2 類：すばまりが弱い短頸で、体部が横長でも縦長でもなく中庸のもの。

B 3 類：すばまりが弱い短頸で、体部が横長のもの。

- ・ C 類

頸部が外反し、体部最大径が体部の1/2より下にあるものをC類とした。更に3細分した。

C 1 類：すばまりが強い長頸で、体部が横長でも縦長でもなく中庸のもの。

C 2 類：すばまりが強い長頸で、体部が縦長のもの。

C 3 類：すばまりが弱い短頸で、体部が横長のもの。

- ・ D 類

頸部が外傾し、体部最大径が体部の1/2付近にあるものをD類とした。更に2細分した。

D 1 類：すばまりが弱い短頸で、体部が横長でも縦長でもなく中庸のもの。

D 2 類：すばまりが弱い短頸で、体部が横長のもの。

- ・ E 類

頸部が内傾し、体部最大径が体部の1/2より下にあるものをE類とした。体部に対する頸部のすばまり方と体部の高さとも最大径の比率に関しては、全個体共通してすばまりが強い長頸で体部が縦長でも横長でもない中庸のものである。

- ・ F 類

A類～E類に該当せず、各個体がそれぞれ1類型を成すものを一括してF類とした。

(iii) その他の特徴

- ・ 口縁部形状

口縁部が残存している個体は全て平縁である。また、幾つかの個体には口縁部に鏢状の張り出し部が見られる。

- ・ 底部形状

底部は以下の5類型が見られた。模式図2に詳細を示す。

平底

上げ平底

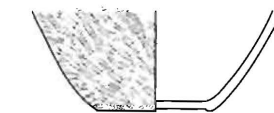
上げ底

丸底

段付き丸底



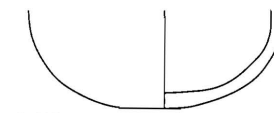
平底



上げ平底



上げ底



丸底



段付き丸底

模式図2 壺形土器底部形状

・口唇部沈線

口唇部の外面・上面・内面に施されている沈線を観察した。沈線が施されるのは口唇部三面の内いづれか一面であり、二面以上に沈線が巡るものは見られなかった。

・口唇部微隆帯

口縁部が残存しているものの中では口唇部の内面・外面に隆帯を持つものがわずかに見られた。隆帯の形状としては、外面・内面ともに隆帯がめぐり上面が比較的広くなっているものが見られた。

・口唇部外面刻み目

壺形土器では図版9-56・66にのみ、口唇部外面に刻みの連続が見られた。

・頸部と体部の境界の装飾

壺形土器の頸部と体部の間、器壁の傾斜変化が最も大きくなる部分を頸部と体部の境界とすると、境界の位置もしくは若干上か下に頸部と体部を区画するような装飾が施されることがある。以下に装飾の種類を列挙する。

装飾無し

僅かな段・地文部と無文部の差・傾斜変換のみによって分けられたもの。

沈線

沈線によって分けられたもの。

平行沈線

平行沈線によって分けられたもの。

隆帯

隆帯によって分けられたもの。

平行隆帯

平行隆帯によって分けられたもの。隆帯上に刻みや刺突が施される。

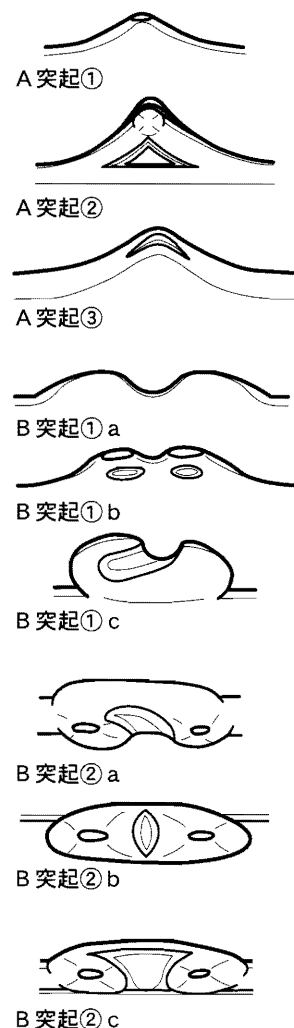
・突起

A突起

平面形で三角形の単峰の突起をA突起とした。壺形土器では、主に口唇部上面に施される傾向が見られる。細部の差異によって3細分した。

A突起①：付け根から頂点にかけて比較的均一な厚さを持つものである。口唇部上面、口唇部外面に施される。

A突起②：付け根から頂点にかけて肥厚し、頂点部分で球状の突出部を持つもので、突起の平面形の輪郭に沿った形の三叉状の透かし彫りが施されるものである。弘大調査区の壺では図版9-49にのみ観察され、左右の口唇部外面にA突起①を伴って施される。



模式図3 突起形状

A突起③：付け根から頂点にかけて肥厚するものである。頂点の肥厚部分に沈刻が施され、前後に小さく二又になる。口唇部上面に施される。口縁部に鏝状貼り出しのあるものでは、鏝外縁の上向き微隆帯上に施される。

## B突起

沈刻によって平面形が三角形の双峰になった突起をB突起とした。断面形の違いによって2細分した。壺形土器では、主に口唇部上面、頸部と体部の境界に施される。

B突起①：B突起のうち、付け根から頂点にかけて比較的厚さが均一なものをB突起①とした。沈刻の違いによって更に3細分した。

B突起①a：単純に左右の峰が分けられたものである。口唇部上面や、頸部と体部の境界に施される。

B突起①b：B突起①の左右の峰に、それぞれ三又状沈刻が施されたものである。図版4-20にのみ観察され、口唇部上面に施される。

B突起①c：曲線によって左右の峰が分けられたものである。壺形では図版8-48にのみ観察され口縁部の鏝状貼り出し外縁の上向き微隆帯上に施される。

B突起②：B突起のうち、断面形で付け根が太く頂点にかけて器厚が減少し、瘤状を呈するものをB突起②とした。沈刻の違いによって更に2細分した。

B突起②a：曲線によって左右の峰が分けられるものである。口唇部外面に施される。

B突起②b：単純に左右の峰が分けられるものである。口唇部上面、口唇部外面、頸部と体部の境界に施される。

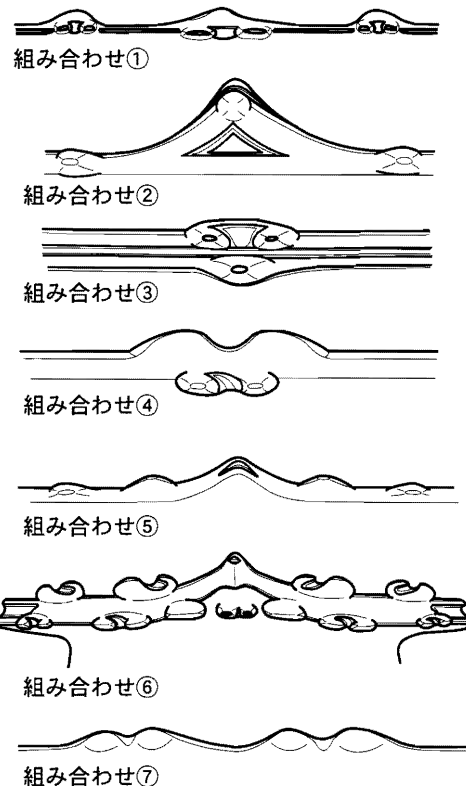
B突起②c：上底の長い台形の沈刻によって左右の峰が分けられる物である。下底側は開口するが上底側は開口せず、細い隆帯によって左右の峰が接続される形状である。口唇部上面～外面にかけて施される。

### ・突起の組み合わせ

口縁部では、何種類かの突起が組み合わせられ、一まとまりに施されるものがある。組み合わせは全部で7種類抽出された。模式図4に組み合わせの構造を示す。

### ・文様

体部文様を持つものが見られるが、個体数が少ない為、個別に述べる。図版6-38は、皿・浅鉢形土器の配置文Ⅰ-1が施される。図版8-48、図版11-107・108には、残存する施文部より、皿・浅鉢形土器の区画文Ⅰ-1が施されていると思われる。図版11-109・110、図版12-114・128・129は小片の為文様の全体像は不明であるが、110・114は今津遺跡出土土器の体部文様にはあまり見られない、沈線が密集した形の文様である。



模式図4 壺形土器口縁部突起組み合わせ

## ・地文

壺形土器では、L R 単節斜位縄文・R L 単節斜位縄文・L R 単節縦位縄文・R L 単節縦位縄文・条痕文の5種類の地文が見られた。

### (iv) 傾向

壺形土器各類型の装飾の傾向について述べる。ただし、壺形土器では完全に近い形で全体が残存しているものが少なく、器形分類に使った個体でも口縁や底部を欠くものが多かった。また器形分類に使用できた数自体も少なく、類型によっては非常に個体数が少ないため、極めて概略的な傾向に止まるということを前以て述べておく。

A類では、口唇部に沈線・隆帯を持つものは見られない。また口縁に突起を持つものは殆ど見られない。上面にB突起①が施されるものがA1類に1点見られるのみである。頸部と体部の境界は装飾無し、沈線、平行沈線+刺突が見られるが、過半数を装飾無しが占めている。頸部と体部の境界に施される突起に関しては確認できる個体の殆どに施されないが、A1類にB突起①、A3類にB突起②が付くものが1点ずつのみ在る。地文はL R 単節斜位縄文、R L 単節斜位縄文、R L 単節縦位縄文、条痕文が施され、類型全体又は特定の細分類型に偏った傾向は見られない。口縁部の鐐状張出しのあるもの、体部文様の施されるものは見られない。

B類では、口唇部に隆帯を持つものは見られないが、口唇部に沈線を持つものがわずかに在り、B1類・B2類に1点ずつ見られる。口縁部突起は、種類に統一性を欠くが、B類の半数弱に施される。B1類では、口唇部上面にB突起②、組み合わせ⑤が施される。B2類では口唇部上面にA突起①が施されるものが、B3類では口唇部上面にB突起②、B突起①が施されるものが在る。頸部と体部の境界は殆どのもものが装飾無しであるが、B1類に平行沈線+刺突、B3類に平行沈線が1点ずつみられる。頸部と体部の境界の突起は、B1類とB3類に見られ、すべてB突起②である。このB突起②は全て装飾無しと共に施される。地文はL R 単節斜位縄文、R L 単節斜位縄文、R L 単節縦位縄文が施される。R L 単節縦位縄文は、B1類にのみ見られ、B1類の半数に施される。口縁部の鐐状張出しのあるもの、体部文様の施されるものは見られない。

C類では、口唇部に隆帯を持つものは見られない。口唇部沈線・口縁部突起をもつものも殆ど見られないが、C2類中の一個体にのみ、口唇部内面沈線及び口唇部上面の組み合わせ突起⑦が施される。頸部と体部の境界はすべて装飾無しである。頸部と体部の境界の装飾はC1類及びC2類に1点ずつ、B突起②が施されるものが見られる。地文はR L 単節斜位縄文・条痕文が施されるが、無文のものが半数を占める。口縁部の鐐状張出しのあるもの、体部文様の施されるものは見られない。

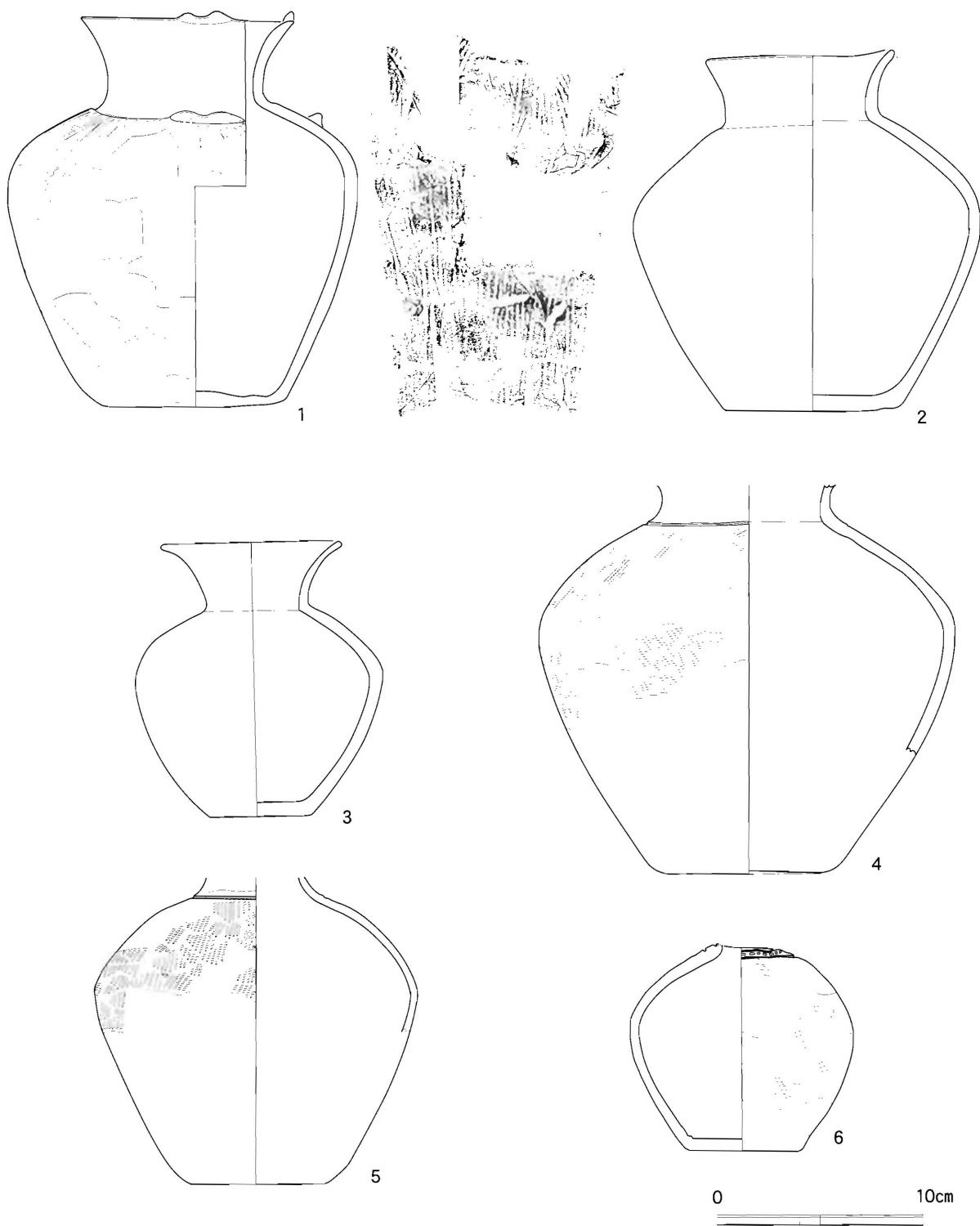
D類は、D1類中の一個体にのみ口唇内面沈線、口唇外面隆帯、口唇上面A突起①が施され、他の個体には施されない。頸部と体部の境界はD1類は全て装飾無しであった。D2類は図版6-38のみであるが、壺形土器の完形個体では数少ない体部文様を持ち、全面が赤彩されるものである。体部文様帯は頸部と体部の境界の平行沈線と体部最大径の平行沈線によって区画されている。地文はL R 単節斜位縄文、R L 単節斜位縄文が施され、類型全体又は特定の細分類型に偏る傾向は見られない。口縁部の鐐状張出しのあるものは見られなかった。

E類は口縁部が残存する個体は少ないが、全てに鐐状の張り出し部が見られる。図版7-43には口唇外面沈線と口唇部上面にA突起①が施される。頸部と体部の境界は隆帯か平行隆帯で区画され、隆帯上にL R 単節縄文原体の圧痕が施される。体部は全個体が無文で、よく研磨される。他の類型に比べ、赤彩の割合が高いのもE類の特徴である。

F類はA～E類に該当せず、それぞれ1個体1類型のものであるが、そのうち特徴的な個体を述べる。図版7-45は主に口縁部～頸部にかけて残存する個体である。弘大調査区出土の土器の中でも、B突起②

cが一単位のみ口唇部上面に施される唯一の例である。また他のB突起②cが施されるものと比較すると、台形の沈刻が上向きになるよう施されている。図版8-48は極めて大きな個体である。施文部位の残存率は低いが、壺形土器では数少ない体部文様が施される個体である。また、齔状張り出しが大きく発達する。

壺形土器全体としては、①体部文様が施される個体が少ないこと、②文様が施される場合は磨消縄文による手法が多いこと、③比較的他の器種よりも赤彩のものが多いこと、④地文が無文の場合、器面が丁寧に磨かれることなどがあげられる。



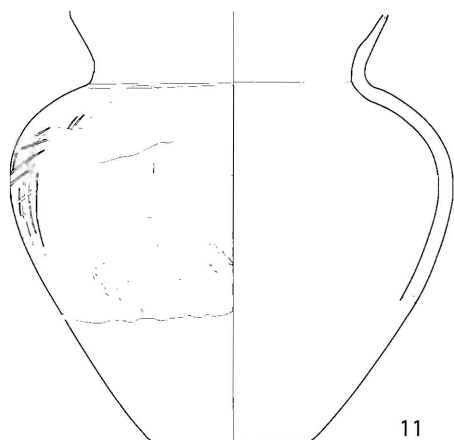
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
1	B2㉗・B2㉘・Ⅲ層	A 1	10.5	19.1	8.7	地文：条痕、口唇部上面：B突起①a、頸・体部境界：B突起①a	15-1
2	B2㉙・Ⅲ層	A 1	9.2	17.5	8.8	器面は良く研磨される	15-2
3	B2㉙・Ⅲ層	A 1	8.9	13.5	4.9	器面は良く研磨される	15-3
4	A3㉚、B3㉚・Ⅲ層	A 1	—	—	8.6	地文：LR単節、頸・体部境界：沈線	15-4
5	B2㉚・Ⅲ層	A 1	—	—	9.5	地文：RL単節縦、頸・体部境界：沈線	15-5
6	A3㉚・Ⅲ層	A 1	—	—	5.3	地文：LR単節、頸・体部境界：平行沈線＋刺突	15-6

図版 1 壺 1～6

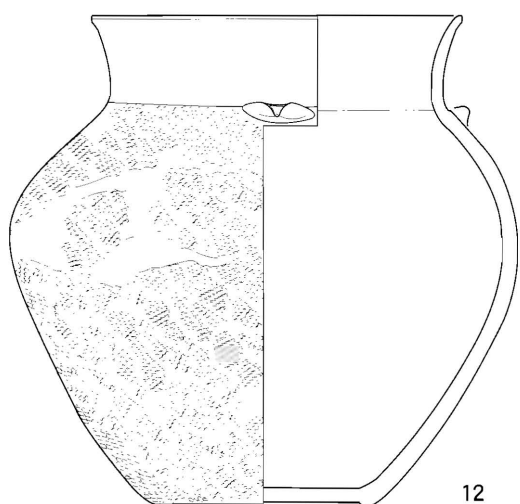


番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
7	B2⑨・Ⅲ層	A 1	—	—	—	地文：条痕	16-1
8	B2④、A2⑥・Ⅲ層	A 1	—	—	9.3	地文：条痕	16-2
9	B3②・Ⅲ層	A 2	8.5	—	—	地文：LR単節	16-3
10	A3③・Ⅲ層	A 3	18.2	22.8	8.7	地文：LR単節	17-1

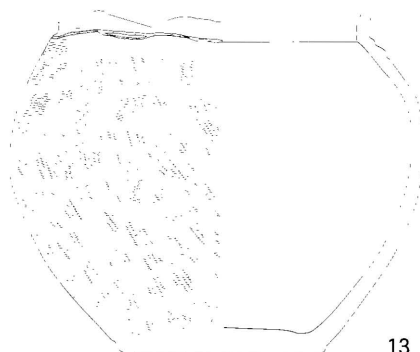
図版2 壺7～10



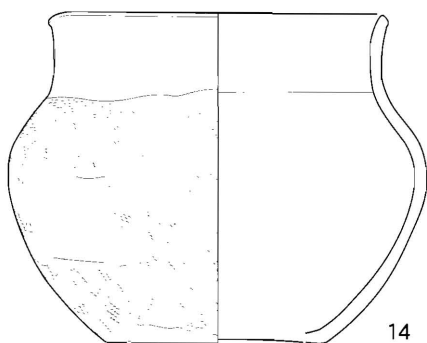
11



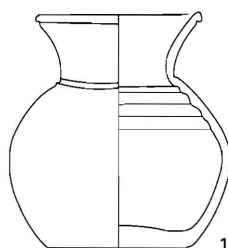
12



13



14



15



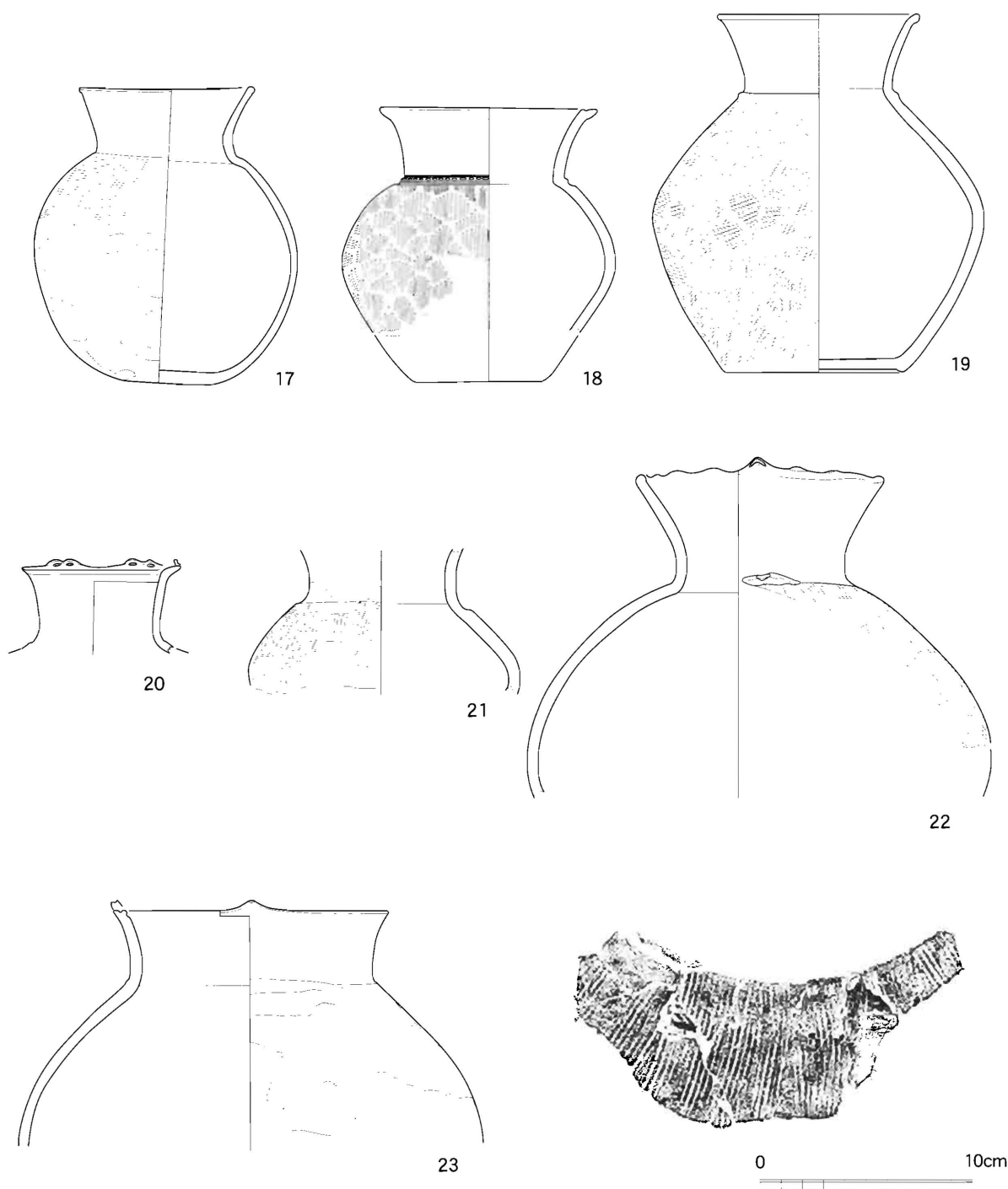
16



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
11	B2⑦・Ⅲ層	A 3	—	—	—	地文：条痕	16-4
12	B3④・Ⅲ層	A 3	14.1	19.8	8.8	地文：LR単節、頸・体部境界B突起②b	17-2
13	B3①・Ⅲ層	A 4	—	—	8.2	地文：RL単節縦、頸・体部境界：沈線	17-3
14	B3⑥、A3⑥・Ⅲ層	A 4	13.6	13.2	8.7	地文：RL単節	17-4
15	B2⑥・Ⅲ層	B 1	6.7	9.4	5.5	器面は良く研磨される、口唇部：外面隆帯	17-5
16	B2⑦・Ⅲ層	B 1	5.9	9.6	5.4	頸・体部境界：B突起②b	17-6

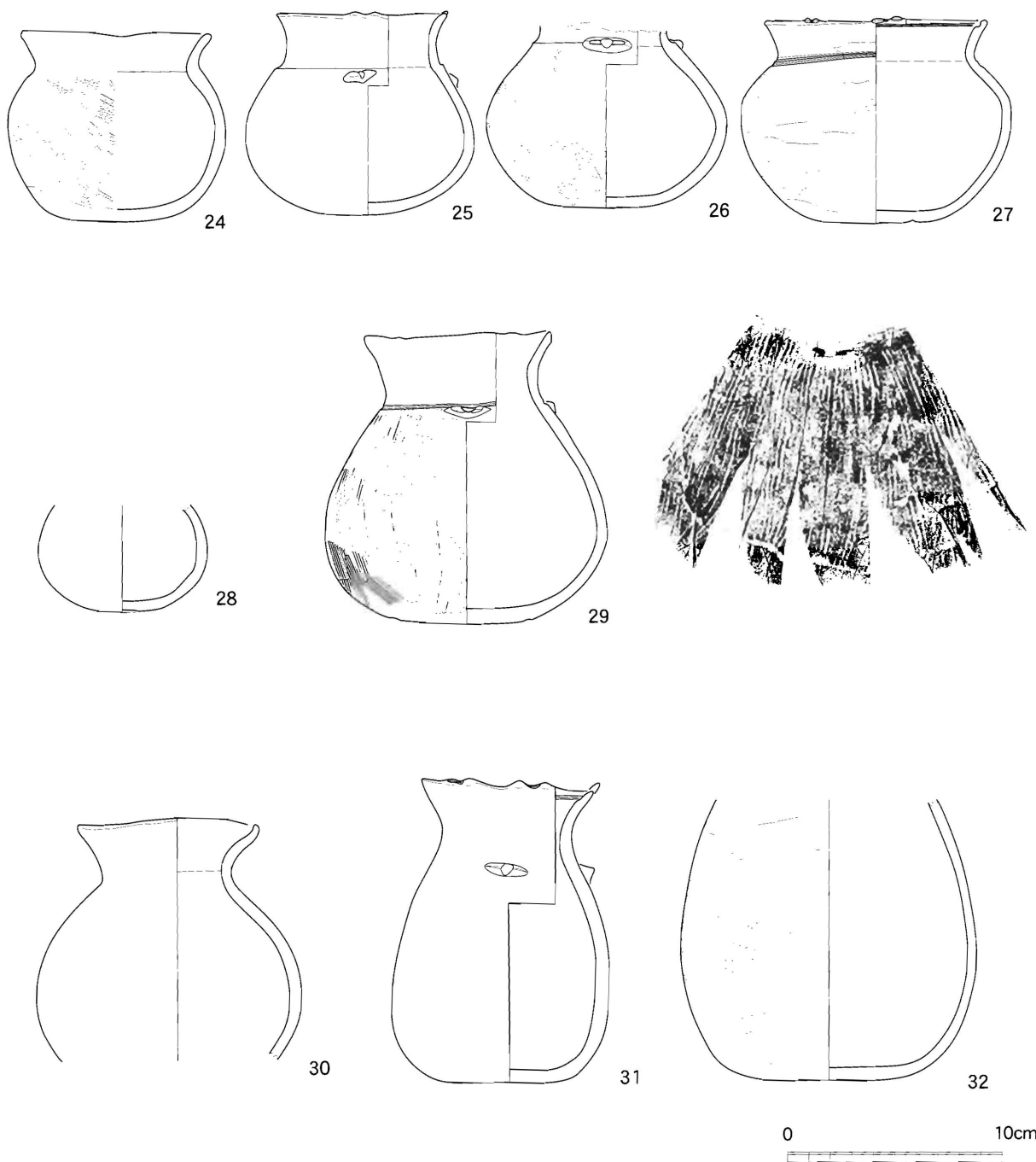
図版 3 壺11～16





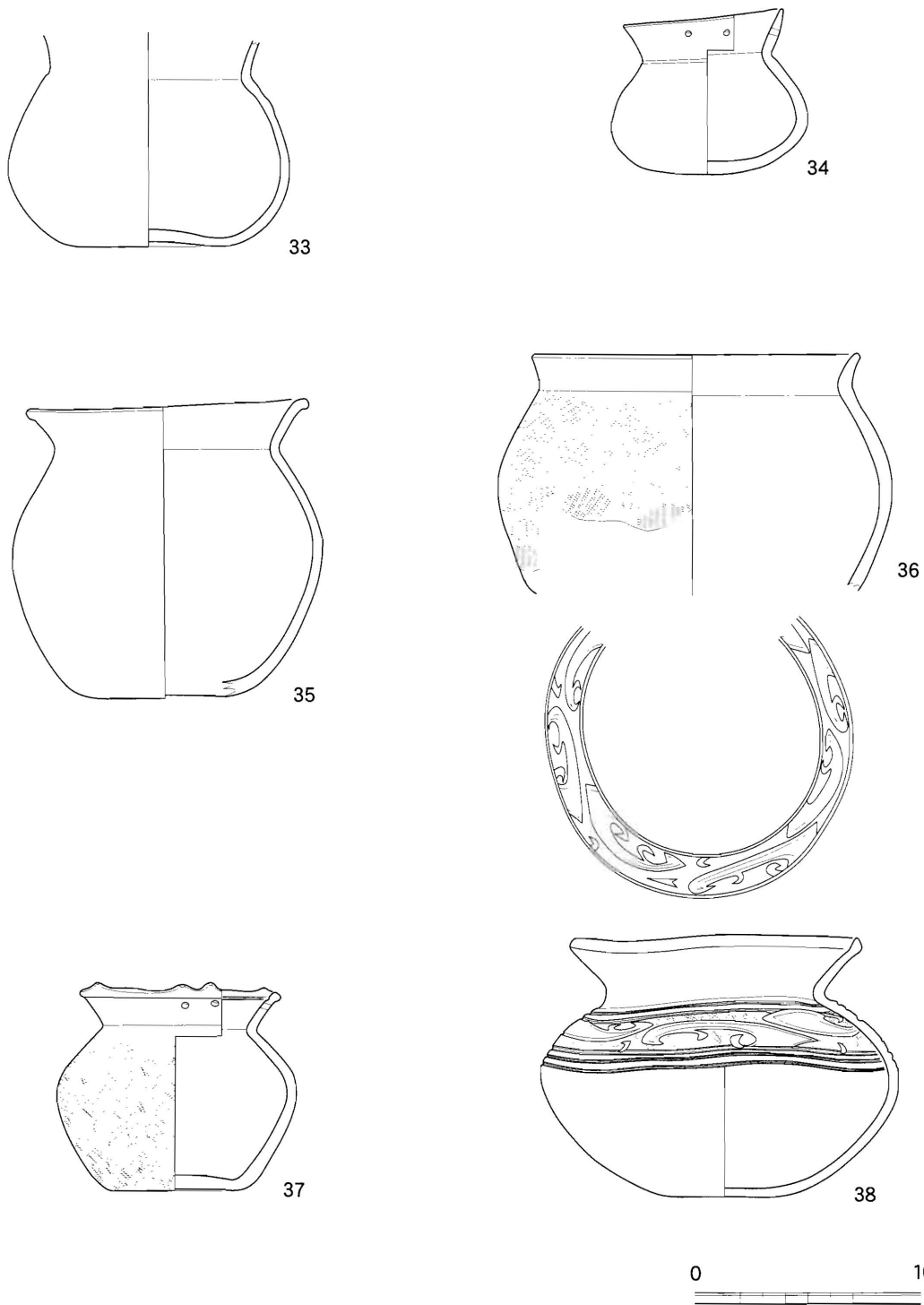
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
17	B2㉗・Ⅲ層	B 1	8.3	13.8	3.8	地文:RL単節縦	18-1
18	B3㉘・Ⅳ層	B 1	10.4	13.0	6.0	地文:RL単節縦、口唇部:上面沈線・頸・体部境界:平行沈線+刺突	18-2
19	B2㉗、B3㉘・Ⅲ層	B 1	9.7	17.0	8.5	地文:LR単節	18-3
20	B3㉘・Ⅲ層	B 1	7.5	—	—	口唇部:上面B突起① b	18-5
21	B2㉗・Ⅲ層	B 1	—	—	—	地文:RL単節縦	18-6
22	B2㉗、B2㉘・Ⅲ層	B 1	11.9	—	—	地文:RL単節縦、口唇部:突起組み合わせ㉓、頸・体部境界:B突起② b	18-4
23	B2㉗・Ⅲ層	B 2	13.1	—	—	地文:条痕、口唇部:上面沈線・上面A突起①	19-1

図版 4 壺17～23



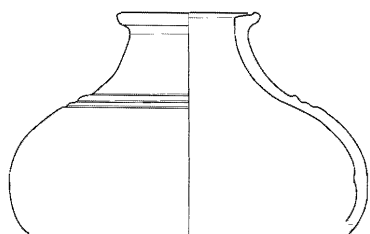
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
24	B2⑤・Ⅳ層	B 2	9.0	8.9	5.0	地文：RL単節	19-2
25	B3①・Ⅲ層	B 3	8.0	9.4	丸底	器面は良く研磨される、口唇部：上面B突起②b、頸・体部境界：B突起②b	19-3
26	A2⑥・Ⅲ層	B 3	—	—	4.5	地文：RL単節縦、頸・体部境界：B突起②b	19-4
27	A2⑥・Ⅲ層	B 3	10.3	9.5	4.5	地文：LR単節、頸・体部境界：平行沈線	19-5
28	A3⑧・Ⅲ層	C 1	—	—	丸底	赤彩、器面は良く研磨される	19-6
29	B2⑦・Ⅲ層	C 1	8.8	13.6	3.5	地文：条痕、頸・体部境界：B突起②b	19-7
30	B2⑤・Ⅳ層	C 1	8.6	—	—	器面は良く研磨される	19-8
31	B2⑦、B2⑧・Ⅲ層	C 2	8.1	13.8	5.0	口唇部突起組み合わせ⑦・内面沈線、頸・体部境界：B突起②b	20-1
32	B2⑧・Ⅲ層	C 2	—	—	6.0	地文：RL単節	20-2

図版 5 壺24～32

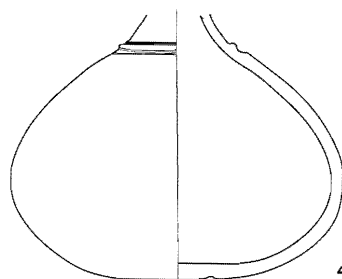


番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
33	B3①・Ⅲ層	C 3	—	—	6.7	器面は良く研磨される。	20-3
34	B2⑥・Ⅲ層	D 1	9.0	9.0	5.6	器面は良く研磨される。口縁部に穿孔。	20-4
35	B2⑦、B2⑧・Ⅲ層	D 1	12.6	13.1	—	器面は良く研磨される。	20-5
36	B2④・Ⅲ層	D 1	14.7	—	—	地文：LR単節	20-6
37	B2⑥・Ⅲ層	D 1	9.0	9.0	5.6	地文：RL単節、口唇部：内面沈線、外面隆帯、上面A突起①	20-7
38	B2④・Ⅲ層	D 2	12.9	11.8	5.0	赤彩、地文：LR単節、頸・体部境界：平行沈線、体部文様有	20-8

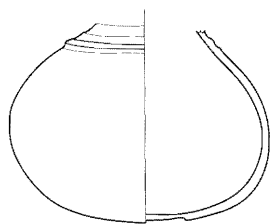
図版 6 壺33～38



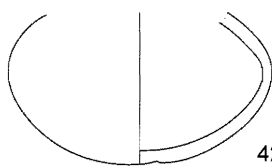
39



40



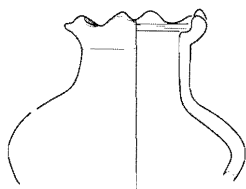
41



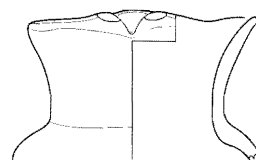
42



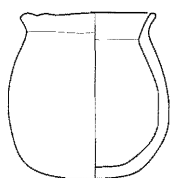
43



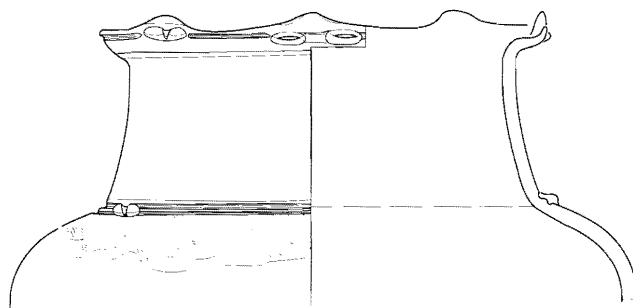
44



45



46



47

0 10cm

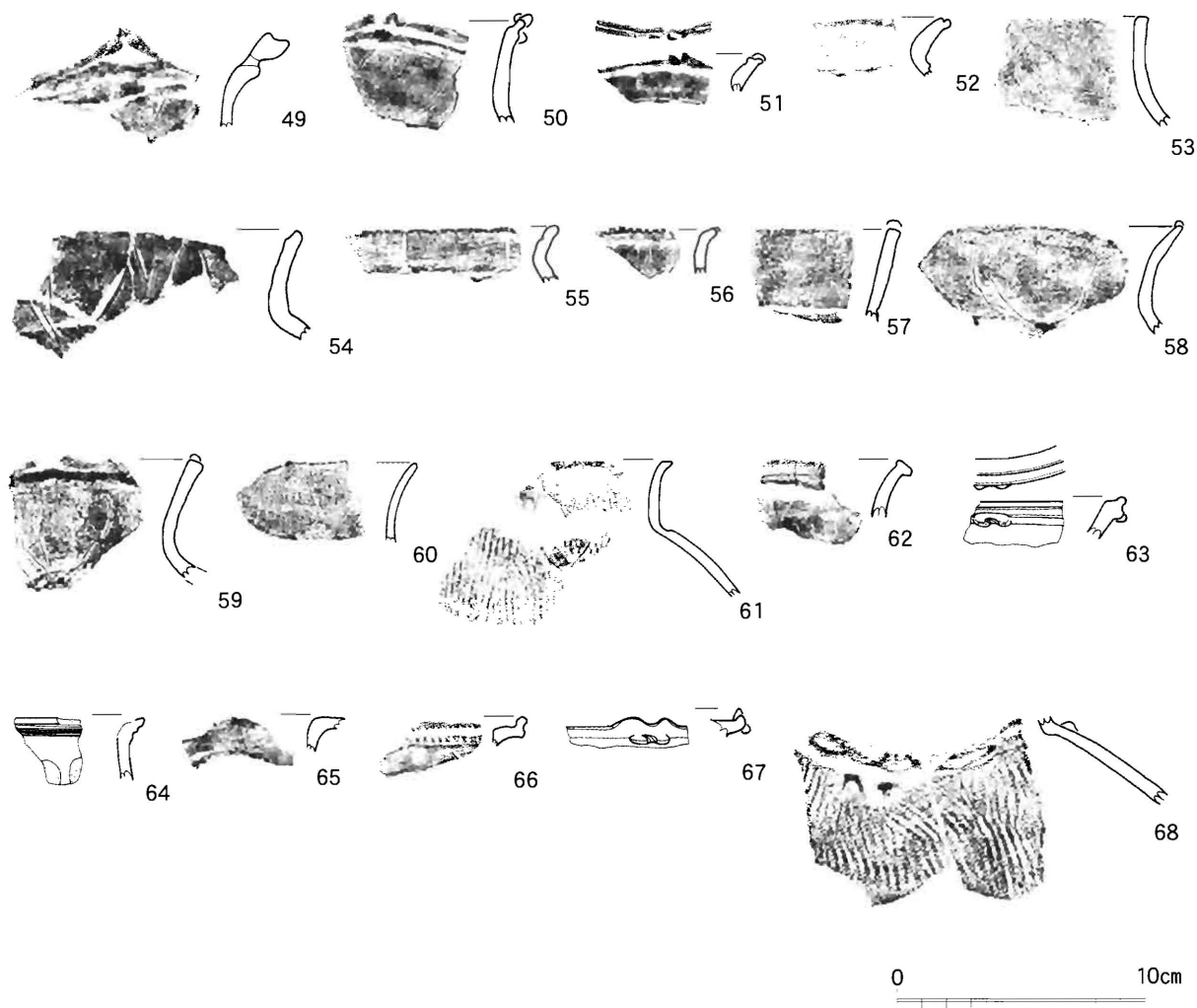
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
39	A3⑤、A2③・Ⅲ層	E	4.4	—	—	赤彩、器面は良く研磨される、頸・体部境界：隆帯	21-1
40	—	E	—	—	3.4	赤彩、器面は良く研磨される、頸・体部境界：隆帯	21-2
41	B3⑥・Ⅲ層	E	—	—	3.2	赤彩、器面は良く研磨される、頸・体部境界：隆帯+LR単節圧痕	21-3
42	B3⑦・Ⅳ層	E	—	—	3.2	器面は良く研磨される	21-4
43	B2③・Ⅲ層	E	4.0	—	—	口唇部：外面沈線、上面A突起①	21-5
44	B3③・Ⅳ層	F	4.4	—	—	器面は良く研磨される、口唇部：上面沈線・B突起①	21-6
45	B2⑥・Ⅲ層	F	9.2	—	—	口唇部：B突起②c	21-7
46	B3②、B3⑦・Ⅲ層	F	5.4	6.7	1.9	赤彩	21-8
47	B2⑤・Ⅲ層	F	15.7	—	—	地文：RL単節、口唇部：突起組み合わせ①・外面沈線、頸・体部境界：平行沈線・B突起a	22-1

図版 7 壺39～47



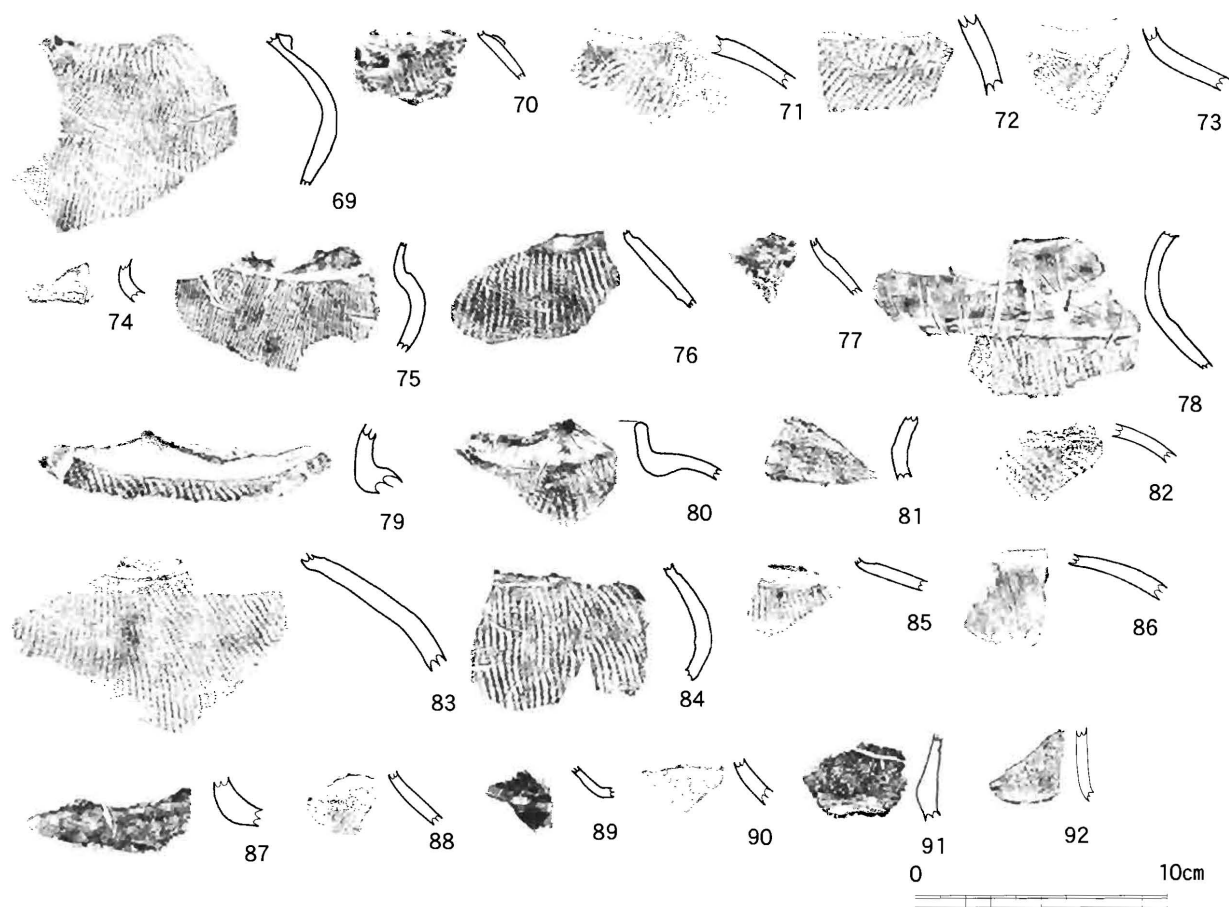
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
48	B2⑦・Ⅲ層	F	13.2	—	—	赤彩、地文：LR単節、口唇部：突起組み合わせ⑥・外面沈線、頸・体部境界：平行隆帯+刻み・B突起①a、体部文様有り	22-2

図版 8 壺48



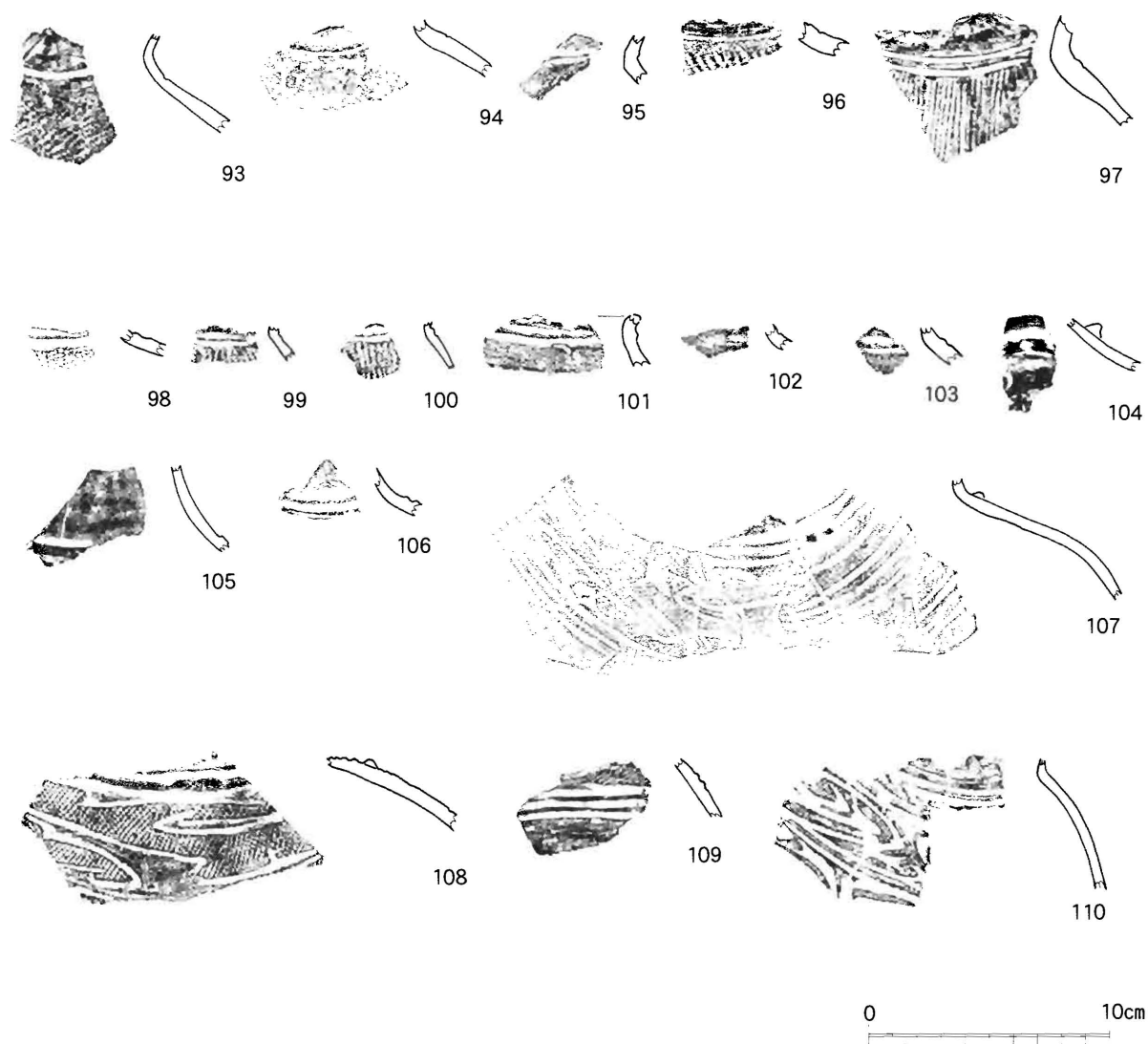
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
49	B2⑨・Ⅲ層	—	—	—	—	口唇部：突起組み合わせ②・上面沈線	23-1
50	B2⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	口唇部：突起組み合わせ③・外面沈線	23-1
51	B3③・Ⅳ層	—	—	—	—	口唇部：上面沈線、外面隆帯・内面隆帯・上面B突起② a	23-1
52	B2⑧・Ⅲ層	—	—	—	—	口唇部：上面沈線、頸・体部境界：平行沈線	23-1
53	B2③・Ⅲ層	—	—	—	—	口唇部：上面沈線	23-1
54	A3・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：RL単節	23-2
55	B3⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	口唇部：内面沈線、頸・体部境界：平行沈線	23-2
56	B2④・Ⅲ層	—	—	—	—	口唇部：外面刻み	23-2
57	A3・Ⅲ層	—	—	—	—	頸・体部境界：沈線	23-2
58	B2・Ⅲ層	—	—	—	—	口唇部：上面B突起② b	23-3
59	B2⑤・Ⅳ層	—	—	—	—	口唇部：上面B突起① a	23-3
60	B3①・Ⅳ層	—	—	—	—	器面は良く研磨される。	23-3
61	B2⑧・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：LR単節	23-3
62	B2③・Ⅲ層	—	—	—	—	口唇部：外面・内面隆帯	23-4
63	B2・Ⅲ層	—	—	—	—	器面は良く研磨される、口唇部：外面沈線・外面B突起② a	23-4
64	B3③・Ⅲ層	—	—	—	—	赤彩、口唇部：外面沈線	23-4
65	B2⑦、B2⑧・Ⅲ層	—	—	—	—	赤彩、器面は良く研磨される	23-4
66	A3・Ⅲ層	—	—	—	—	赤彩、器面は良く研磨される、口唇部：外面沈線・外面刻み	23-4
67	B2⑨・Ⅲ層	—	—	—	—	赤彩、口唇部：突起組み合わせ④	23-4
68	B2⑤・Ⅳ層	—	—	—	—	地文：RL単節、頸・体部境界：B突起② b	23-5

図版 9 壺49～68



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
69	B2⑦・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：LR単節、頸・体部境界：B突起b	23-5
70	A3・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：条痕、頸・体部境界：B突起b	23-5
71	B2⑤・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：LR単節	23-6
72	B3・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：LR単節	23-6
73	B2⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：LR単節	23-6
74	A2・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：LR単節	23-6
75	B2⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：LR単節	24-1
76	B2⑦・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：LR単節	24-1
77	B2・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：LR単節	24-1
78	B2⑦⑧・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：RL単節	24-2
79	B2⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：RL単節	24-2
80	B2⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：LR単節	24-2
81	B3④・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：RL単節	24-2
82	B2⑧・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：RL単節	24-2
83	B3⑨・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：RL単節縦	24-3
84	A2⑧・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：RL単節縦	24-3
85	B2・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：RL単節縦	24-3
86	A3・Ⅲ層	—	—	—	—	器面は良く研磨される	24-4
87	B3①・Ⅲ層	—	—	—	—	頸部内面は良く研磨される	24-4
88	B2⑦⑧・Ⅲ層	—	—	—	—	器面は良く研磨される	24-4
89	B3③・Ⅲ層	—	—	—	—	器面は良く研磨される	24-4
90	A3③・Ⅲ層	—	—	—	—	器面は良く研磨される	24-4
91	B3②・Ⅳ層	—	—	—	—	口唇外面：沈線	24-4
92	B2④・Ⅲ層	—	—	—	—	器面は良く研磨される	24-5

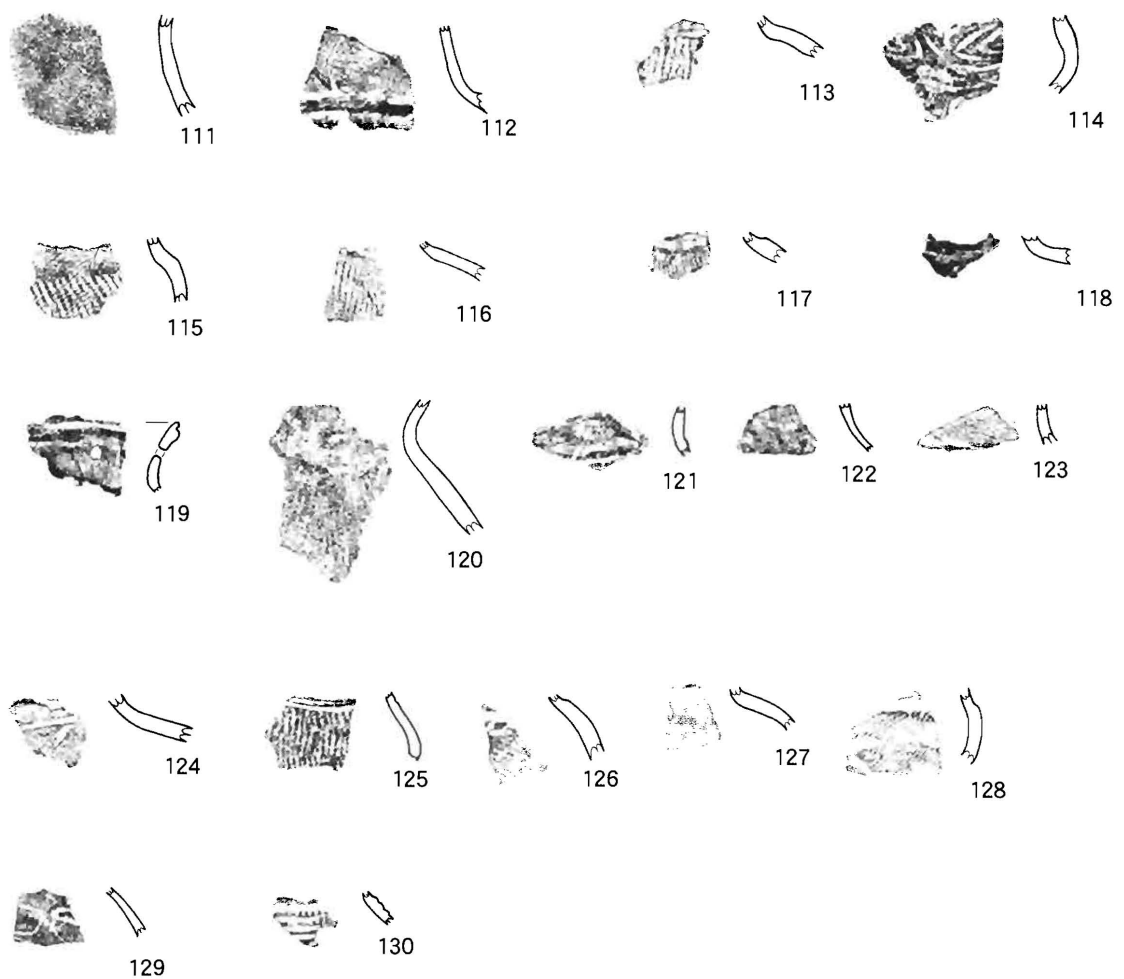
図版10 壺69～92



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
93	B2③・Ⅲ層	—	—	—	—	赤彩、地文：LR単節、頸・体部境界：沈線	24-5
94	A2⑧・Ⅲ層	—	—	—	—	頸・体部境界：沈線	24-5
95	A3・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：LR単節、頸・体部境界：平行隆帯	24-5
96	B2④・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：RL単節、頸・体部境界：平行沈線	24-5
97	B3⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：条痕、頸・体部境界：平行沈線	24-5
98	A2②・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：RL単節縦、頸・体部境界：平行沈線	24-6
99	—・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：RL単節縦、頸・体部境界：平行沈線	24-6
100	B2⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：RL単節縦、頸・体部境界：平行沈線	24-6
101	B2⑦・Ⅲ層	—	—	—	—	頸・体部境界：平行沈線	24-6
102	B2④・Ⅲ層	—	—	—	—	頸・体部境界：平行沈線	24-6
103	B2⑨・Ⅲ層	—	—	—	—	頸・体部境界：平行沈線	25-1
104	A3・Ⅲ層	—	—	—	—	赤彩、器面は良く研磨される、頸・体部境界：隆帯・B突起②a	25-1
105	B3①・Ⅲ層	—	—	—	—	赤彩、器面は良く研磨される、頸・体部境界：隆帯	25-1
106	A2⑦・Ⅲ層	—	—	—	—	赤彩、器面は良く研磨される、頸・体部境界：平行隆帯+LR単節圧痕	25-1
107	B2⑦・Ⅲ層	—	—	—	—	赤彩、地文：LR単節、頸・体部境界：平行沈線・B突起②a、体部文様有	25-2
108	A2⑤・Ⅲ層	—	—	—	—	地文：LR単節、頸・体部境界：平行沈線・B突起②a、体部文様有	25-3
109	B2④・Ⅲ層	—	—	—	—	赤彩、地文：LR単節、体部文様有	25-4
110	B2⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	体部文様有	25-4

図版11 壺93～110





0 10cm

番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
111	B3・Ⅰ層	—	—	—	—	内面は良く研磨される	25-5
112	B3・Ⅰ層	—	—	—	—	地文：LR単節	25-5
113	A2・Ⅰ層	—	—	—	—	地文：LR単節	25-5
114	A2・Ⅰ層	—	—	—	—	赤彩、体部文様有	25-5
115	B2・Ⅱ層	—	—	—	—	地文：RL単節	25-6
116	B2・Ⅱ層	—	—	—	—	地文：LR単節	25-6
117	B2・Ⅱ層	—	—	—	—	地文：RL単節縦	25-6
118	B2・Ⅱ層	—	—	—	—	頸部内面は良く研磨される	25-6
119	B	—	—	—	—	口唇部：外面沈線・口縁部に補修孔	25-7
120	—	—	—	—	—	地文：LR単節	25-7
121	—	—	—	—	—	頸・体部境界：平行沈線	25-7
122	—	—	—	—	—	器面は良く研磨される	25-7
123	—	—	—	—	—	器面は良く研磨される	25-7
124	—	—	—	—	—	地文：LR単節、頸・体部境界：沈線	25-7
125	—	—	—	—	—	地文：RL単節縦、頸・体部境界：平行沈線	25-8
126	—	—	—	—	—	地文：RL単節、頸・体部境界：沈線	25-8
127	—	—	—	—	—	器面は良く研磨される	25-8
128	—	—	—	—	—	赤彩、地文：LR単節、体部文様有	25-8
129	—	—	—	—	—	赤彩、器面は良く研磨される、体部文様有	25-8
130	—	—	—	—	—	赤彩、頸・体部境界：平行隆帯+刺突	25-8

図版12 壺111～130

### (3) 皿

#### [皿形土器の分類]

皿形土器を整理する際には口縁部・体部・底部のそれぞれの属性に注目した。その結果をもとに、器形と口縁部の形状の組み合わせで分類を行なう。

##### (i) 分類

器形を3種類、口縁部の形状を4種類にわけた。

##### ・器形

I 類. 体部から口縁部が直線的に外に開くもの。

II 類. 体部から口縁部が緩やかに内彎しながら外に開くもの。

III 類. 体部から頸部が緩やかに内彎しながら外に開き、頸部から口縁部が外反するもの。

##### ・口縁部の形状

A 類. 平縁で突起を伴うもの。突起はA突起や2個一対の山形突起が4単位施される。

B 類. 平縁のもの。

C 類. 平縁で突起を伴うが数が多く波状を呈するもの。

D 類. 破片のために突起の有無が不明なもの。

以上の2つの属性を組み合わせで分類を行なう。表記の方法は例えばI A類のように表記する。

##### (ii) その他の特徴

##### 口縁部の特徴

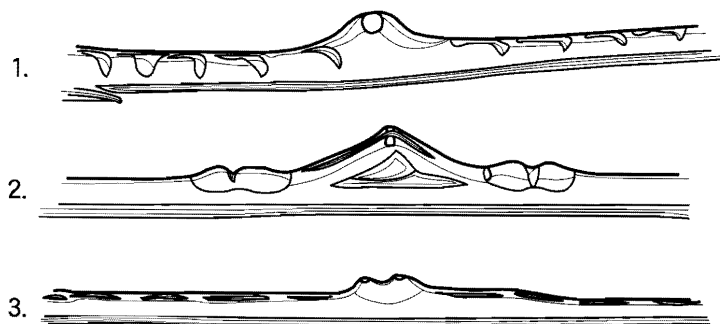
##### ・口唇上端の形状

皿形土器の口唇上端には、口唇文様を伴うことが多い。

I. 口唇が肥厚するもの。

II. 口唇が肥厚しないもの。

模式図1 口縁部の突起



##### ・口縁部の突起（模式図1参照）

##### 1. A突起

皿形土器にはA突起が4単位付く例が多い。

##### 2. 正三角形の突起

台付皿の口縁部に見られる突起である。両脇にはB突起が並んでいる。

##### 3. 2個一対の山形突起

皿形土器の口縁部に稀に見られる突起である。4単位付く例が多い。

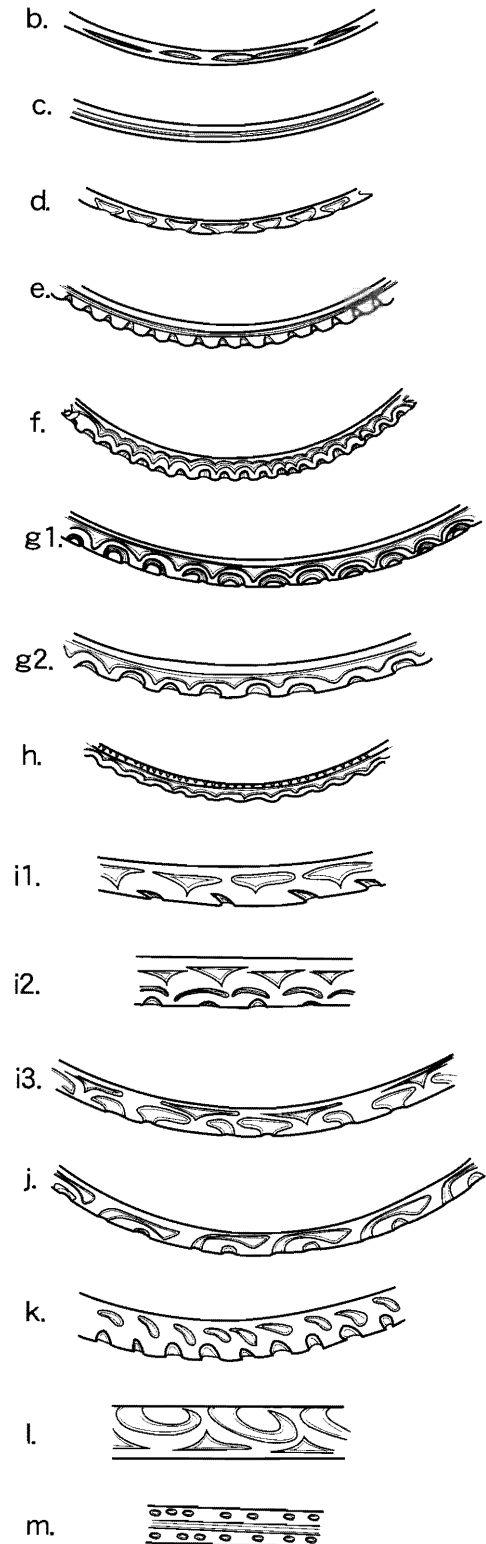
##### ・口唇文様（模式図2参照）

口縁端部の上面に施された文様を口唇文様と呼ぶ。口唇文様は上面や外面に沈線や彫り込みを施すことによって作られる。口唇文様はa～mに分け、gは2種類、iは3種類に細別した。特にd～mは口唇上面の彫り込みと口唇外面からの彫り込みにより、土器の外面は波状の浮文的な様相を帯びるようになる。

また、口唇文様は種類が多く完形品などで分類すると1個体、1分類に近くなる場合があり様々なバリエーションがあることが分かった。

- a. 無文のもの。
- b. 楕円形に彫り込まれるもの。
- c. 沈線が巡るもの。
- d. 台形の彫り込みが外面にまで及んでいるもの。
- e. 口唇上面には沈線が巡り、列点が伴うもの。
- f. 鋸歯状の沈線に列点がなされるもの。
- g. 彫り込みにより生じた隆帯に彫去を加えたものをgとした。外面にまで及ぶ弧線の彫去が伴うものをg1とし、列点が施されるものをg2とした。
- h. 口唇上面に沈線が巡り、口唇外面から列点が施されるもの。口唇内面には刻みが伴う。
- i. 口唇上面に三叉状の彫り込みが巡るものをiとした。更に口唇外面からの彫去を伴うものをi1とした。弧線の彫去が巡り更に口唇外面からの彫去を伴うものをi2とし、口唇外面から四角形やノの字の彫去を伴うものをi3とした。
- j. 口唇上面に尾の長い三叉状の彫去が巡り口唇外面から円形の彫去が施されるもの。
- k. 口唇上面には点状の彫去と口唇外面から円形の彫去が施されるもの。
- l. ノの字状の彫去と三叉状の彫去が伴うもの。
- m. 口唇上面に沈線が巡り、両脇に刺突が施されるもの。

模式図2 口唇文様



#### ・体部の特徴

地文の種類と、内面の底部と体部を区画するものの種類を取り上げる。更に文様を描く時に文様帯を割り付ける働きをする区画文と配置文を種類別に分類した。ただし、文様構成が予測できない破片は不明とした。なお、弘大調査の皿形土器の文様帯は上下各2本の沈線で区画されているものが多い。

藤沼邦彦(1989)によれば区画文とは文様帯を区画するものを指す。文様帯は完全に横に区画される。区画された部分を単位文様部と呼ぶ。

配置文は文様帯内部にうめこまれるか、或は文様帯の上・下線のいずれか一方にのみ接続する形を取る。配置文を割り付け、その間に充填文を埋めて生み出した文様を連続文様と称している。

文様の分類は藤沼の論に則って行う。

・文様

[区画文]

区画文Ⅰは3種類に分類した。

区画文ⅠⅠは配置文ⅢⅢのような文様に別の文様が付加され文様帯を区画する上下の沈線に接続したものである。

区画文ⅠⅡはSを横にしたような文様（横S文）に別の文様が付加され文様帯を区画する上下の沈線に接続するようにしたものである。

区画文ⅠⅢは弧線を組み合わせた文様が点対称に施される。上下どちら側で尖るか、付加されるノの字状の文様がどの位置にどの向きで付くかの違いが見られる。

[配置文]

配置文をⅠ～Ⅲに分類した。Ⅰは文様帯を区画する上下どちらか一方の沈線にのみ接続するもの。Ⅱは上下交互に文様が配置され文様帯を区画する上下の沈線に接続するもの。Ⅲは文様帯を区画する沈線には接続しないものである。

配置文Ⅰは6種類に分類した。

配置文ⅠⅠはC字を基調とした文様にノの字の文様が付加されたものである。

配置文ⅠⅡはⅠⅠが沈線化したものである。

配置文ⅠⅢはⅠⅠを反転させたものであるが沈線の接続部は外に開く。

配置文ⅠⅣの上側は横にしたC（横C文）を並べ、間を沈線でつなぎ下側は横C文を下側の沈線に接続する。

配置文ⅠⅤは2段構成の文様帯をとる。それぞれの文様帯の下線に四角形の文様を接続させる。

配置文ⅠⅥは配置文ⅢⅠのような文様であるが文様帯を区画する下線に接続する。

配置文ⅡはⅡⅠのみである。

配置文ⅡⅠは、横C文を上下に配置する。

配置文Ⅲは5種類に分類した。

配置文ⅢⅠは横S文に別な文様を付加する。

配置文ⅢⅡはⅢⅠを反転したもの。

配置文ⅢⅢは弧線を組み合わせて作った菱形状の文様である。

配置文ⅢⅣは横C文である。

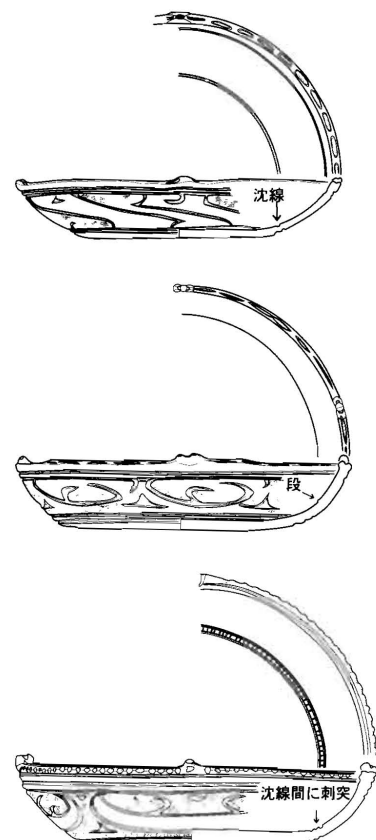
配置文ⅢⅤは横C文があるのは分かるが全体としては文様構成が不明なもの。そのため模式図は作成していない。

・内面に区画を持つもの（模式図3参照）

皿形土器の内面には段や沈線を巡らすことで底部と体部を区画したと思われるものがある。

1. 有段のもの。
2. 沈線が巡るもの。
3. 沈線間に刺突が伴うもの。1点のみである。
4. 小破片のため区画の有無が不明なもの。
5. 区画の無いもの。

模式図3 内面の区画



・体部の地文

弘大調査区の皿形土器には地文として条痕文が見られないことは一つの特徴である。

a. 縄文が施されるもの。

縄文にはLR単節斜位縄文・RL単節斜位縄文がある。

b. 無文のもの。

(iii) 底部の特徴

底部は平底と丸底に分けた。底部が欠損して形状を窺えないものは不明とした。更に地文の有無を分け、底部の作り出しについてもふれた。

・底部形態と作り出し（写真35参照）

a. 丸底ないし丸底気味のもの。底部に沈線が巡るものはまれである。

a 1. 隆帯が巡るもの。（写真36－4）

a 2. へこんでいるもの。（写真36－6）

a 3. 破損などにより装飾がわからないもの。

b. 平底のもの。隆帯が巡るものが多い。

b 1. 作り出しの無いもの。

b 2. 隆帯が巡るもの。（写真36－4）

b 3. 沈線が巡るもの。（写真36－2）

c. 破損などにより底部形態がうかがえないもの。

c 1. 隆帯が巡るもの。

c 2. 破損などにより装飾がわからないもの。

・底面の地文

全て無文であるもののみである。

(iv) 皿形土器に見られる傾向

皿形土器の中で最も多いのはⅡA類である。また、皿形土器にはA突起が4単位つく傾向がある。だが、突起の形状や突起の組み合わせのバリエーションは壺よりも少ない。

皿形土器の多くは口唇が肥厚する傾向がある。口唇が肥厚しない資料はⅠD類、ⅡB類に見られる。殆どの資料には口唇文様が見られる。口唇文様は1個体1分類になるぐらい様々なバリエーションがある。口唇文様で多いものはc、e、g2、i1、i3で、中でもcはⅠC類、ⅠD類、ⅡA類、ⅡB類、ⅡD類、ⅢA類と多くの類型にまたがる口唇文様である。

体部の文様帯は体部全面に及ぶ。文様帯の上限と下限は横走る沈線により区画される。皿形土器には磨消縄文の手法による文様が施される例が多い。文様が施されない場合は地文が無文であることが多い。ⅡD類の破片資料は文様が施されず縄文が巡っているので珍しい例である。今津遺跡の皿形土器によく見られる文様は配置文Ⅰ1、Ⅲ3である。これらが見られる類型はⅠA類、ⅠB類、ⅠD類、ⅡA類、ⅡD類である。

地文として、斜縄文が施されることが多く、次いで無文が伴う。縦縄文と条痕は見られない。

内面に見られる体部と底部の区画帯は有段のものと沈線が巡るものが多数を占める。特に有段のものは破損で体部の様子が不明なⅡA類、ⅡD類を除けば、ⅢA類以外で見られるほど今津遺跡では一般的である。また、1点のみの例であるがⅡA類で内面の区画の沈線間に刺突が伴うものがある。

底部の形態は平底のものが殆どである。丸底ないし丸底気味のものは少なくⅡA類に僅かに見られる

に過ぎない。

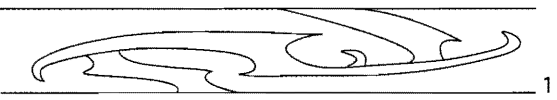

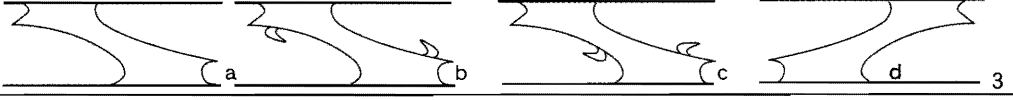

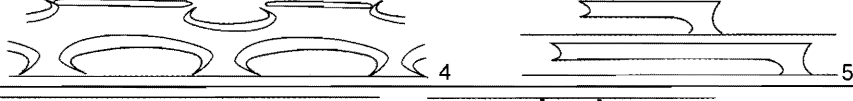
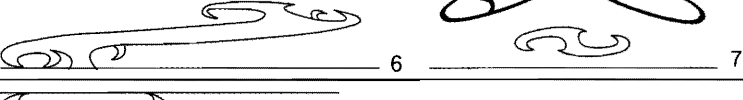

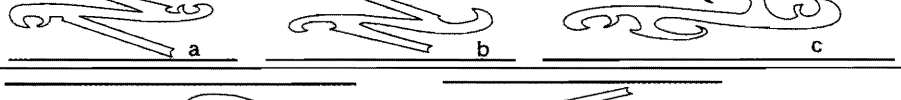
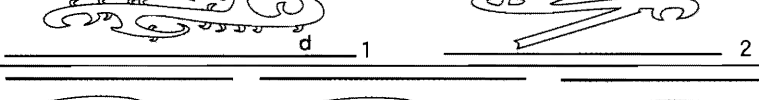

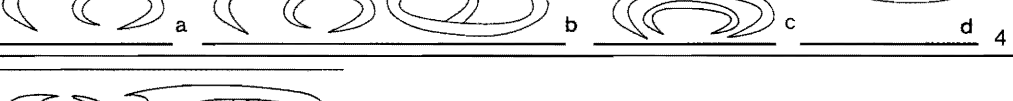

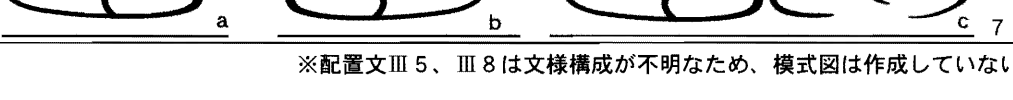
底部の作り出しは隆帯や沈線が巡るものが見られる。ⅡA類に1点、底部がへこむものが見られる。

他に皿形土器に見られる特徴として①赤彩される割合は壺よりも低い、②しかし生漆をニスのように塗って、ツヤを出しているものがある、③台付皿の口縁部の突起の形は、正三角形で両脇にB突起が並ぶなど、皿の突起の配置とは異なる。また、①に関わることであるが台付皿は内外面ともに丁寧に磨いて赤彩される。赤彩は台部の内側にまで及んでおり、皿形土器のなかでも非常に丁寧に作られている。

# ・分類とそれに伴う特徴

分類	口 縁 部		体 部			底 部	
	上端の形状	口唇文様	文様の種類	地文	内面の区画帯	底部形態と作り出し	地文
I A	I	g1	配Ⅰ1	LR	1	b2	無し
I B	I	d、i3	配Ⅲ1、2、5	LR	1、2、5	b1～3	無し
I C	I	a	配Ⅰ6	LR	1	b2	無し
I D	I、Ⅱ	b、c、e、i1、i3、l	配Ⅰ1、Ⅲ3	LR、RL、無文	1、2、4	b1、2	無し
ⅡA	I、Ⅱ	b、c、e、g2、h、i1	区Ⅰ1、3、配Ⅰ1～3、5、Ⅲ1、3、4	LR、RL、無文	1～5	a1、2、b1～3	無し
ⅡA	I	c	—	無文	4	—	—
ⅡB	I	c、j	配Ⅰ4、Ⅱ1	LR、RL	1	b1	無し
ⅡD	I	b、c、e、g2、i3、l	区Ⅰ2、配Ⅰ1、2	LR、RL、無文	1、4、5	b3	無し
ⅡD	I	d、g2	—	LR	4	—	—
ⅢA	I	c、m	配Ⅲ4	LR	2、4	—	—



区画文 I		1
		2
		3
配置文 I		1 2 3
		4 5
		6 7
配置文 II		1 2
配置文 III		a b c
		d 1
		a b c 3
		a b c d 4
		6
		a b c 7

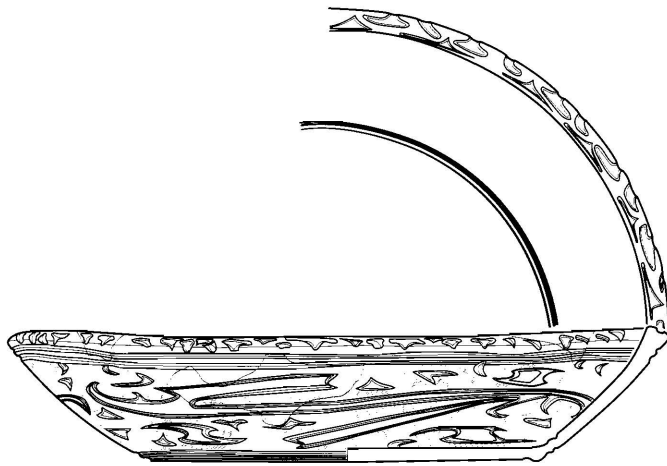
※配置文 III 5、III 8 は文様構成が不明なため、模式図は作成していない。

第 6 図 今津遺跡出土の皿・浅鉢形土器の区画文・配置文の分類及び模式図

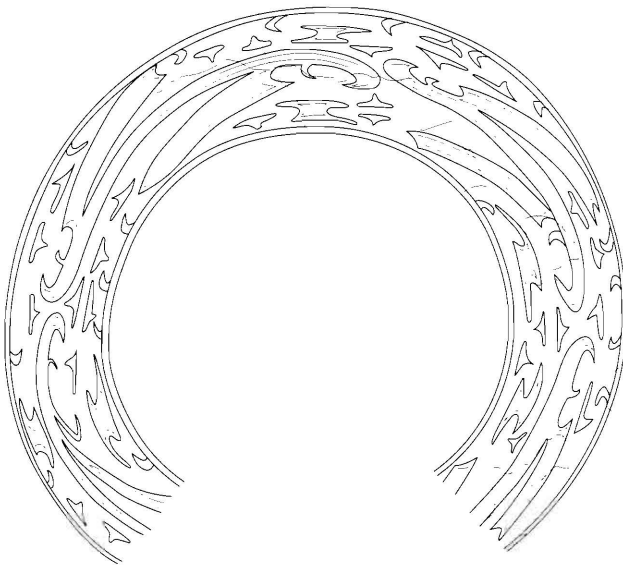


番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
131	A2・I層	ⅠD類	—	—	—	口唇文様：i3、地文：LR縄文。	28-8
132	B2・I層	ⅢA類	—	—	—	口唇文様：m、地文：LR縄文。	28-8
133	A2・Ⅱ層	ⅠD類	—	—	—	口唇文様：e、地文：無文。	28-8
134	B2④⑤・Ⅳ層	ⅠA類	26.0	6.9	16.0	口唇文様：g1、体部文様：配Ⅰ1、地文：LR縄文。	26-1

図版13 皿131～134



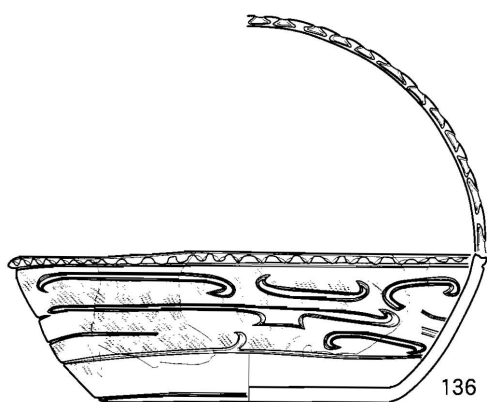
135



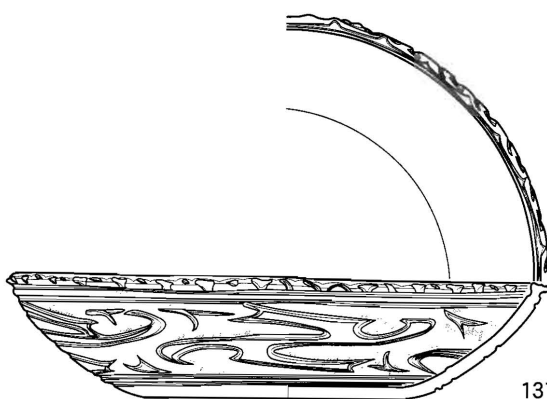
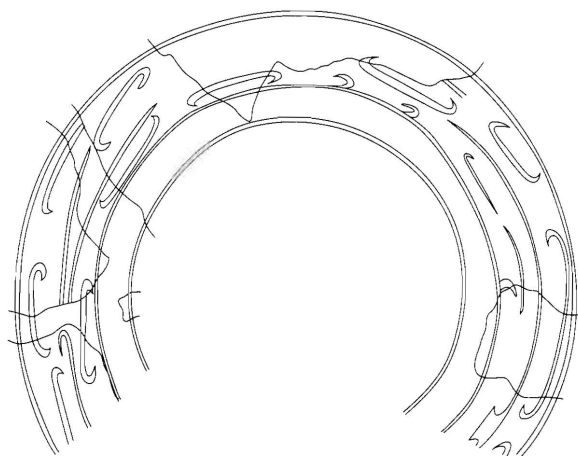
0 10cm

番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
135	B2③⑥⑨・IV層	IB類	26.1	5.0	15.0	口唇文様：i 3、体部文様：配Ⅲ2、地文：LR縄文。	26-2

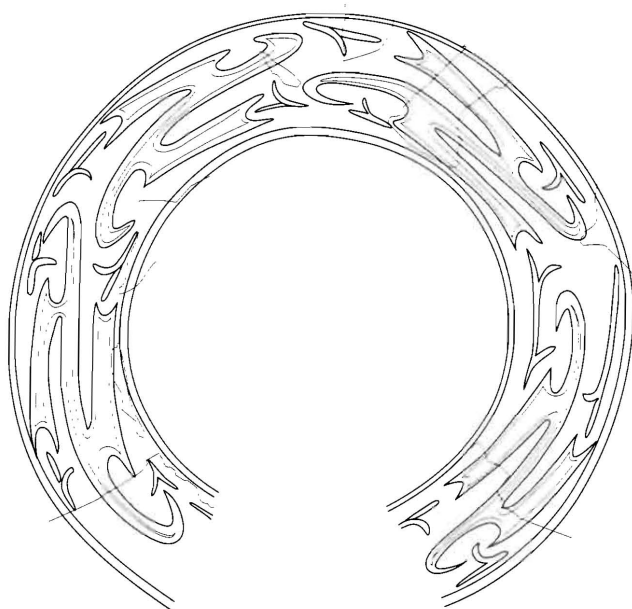
図版14 皿135



136



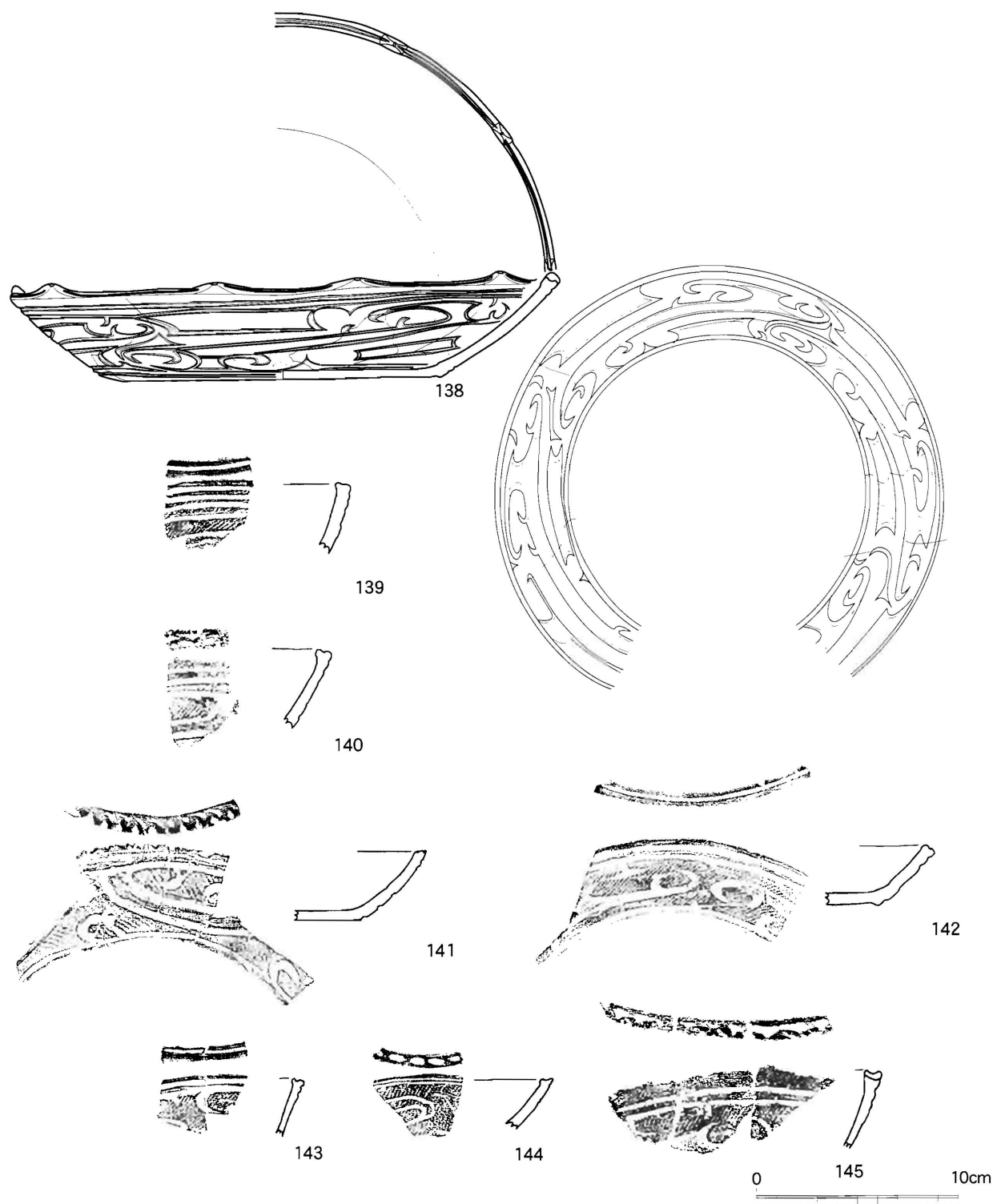
137



0 10cm

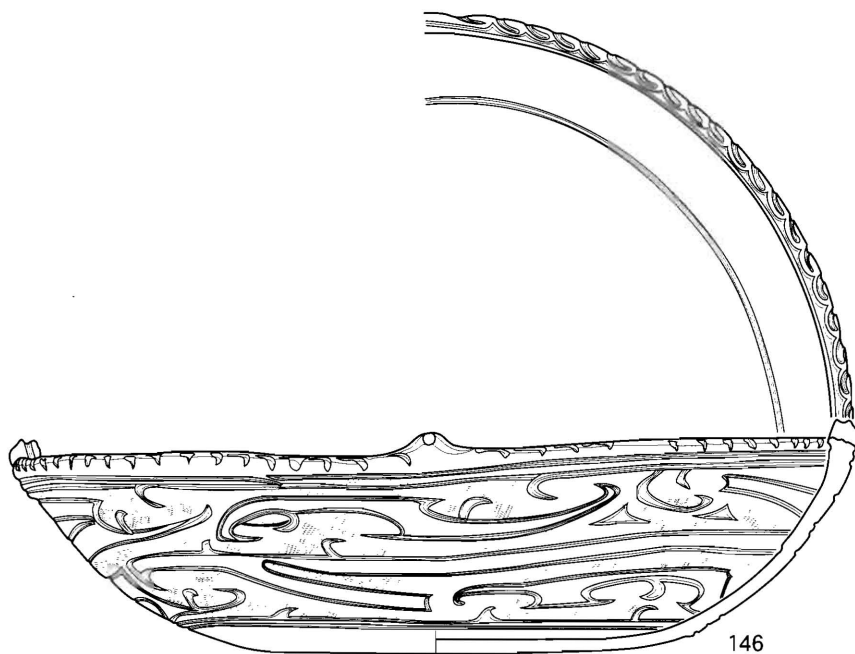
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
136	B 2 ⑥⑦・Ⅲ層	ⅠB類	16.2	6.2	11.0	口唇文様：d、体部文様：配Ⅲ5、地文：L R 縄文。	26-3
137	A2⑥、B2④・Ⅲ層	ⅠB類	21.4	5.0	10.6	口唇文様：i 3、体部文様：配Ⅲ1、地文：L R 縄文。	26-4

図版15 皿136・137

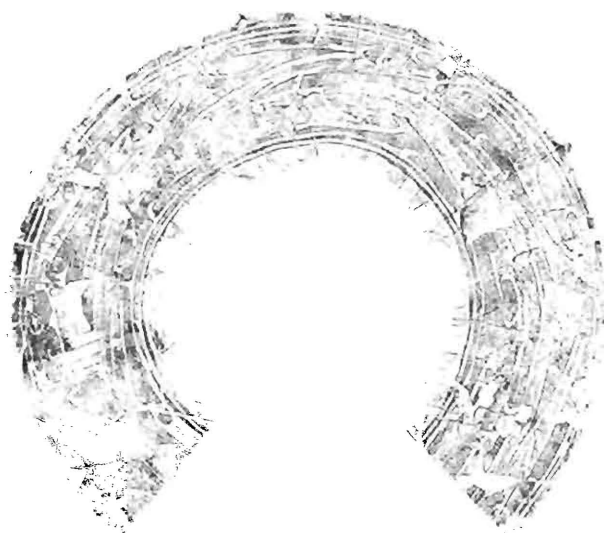


番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
138	B 3 ⑥・Ⅲ層	I C 類	(27.5)	5.0	16.3	口唇文様：c、体部文様：配 I 6、地文：L R 縄文。	26-5
139	B 2 ③・Ⅲ層	I D 類	—	—	—	口唇文様：c、地文：L R 縄文。	29-1
140	A 2 ④・Ⅲ層	I D 類	—	—	—	口唇文様：i 1、地文：L R 縄文。	29-1
141	B 2 ①・Ⅲ層	I D 類	—	—	—	口唇文様：k、体部文様：配 I 1、地文：R L 縄文。赤彩。	26-6
142	A 3 ⑥・Ⅲ層	I D 類	—	—	—	口唇文様：c、体部文様：配 Ⅲ 3、地文：L R 縄文。	26-7
143	B2、A2・Ⅲ層	I D 類	—	—	—	口唇文様：c、地文：L R 縄文。赤彩。	29-1
144	—・Ⅲ層	I D 類	—	—	—	口唇文様：b、地文：L R 縄文。	29-1
145	B 3 ③・Ⅲ層	I C 類	—	—	—	口唇文様：i 1、地文：L R 縄文。	29-1

図版16 皿138～145



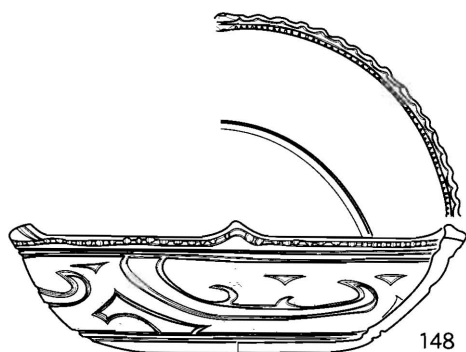
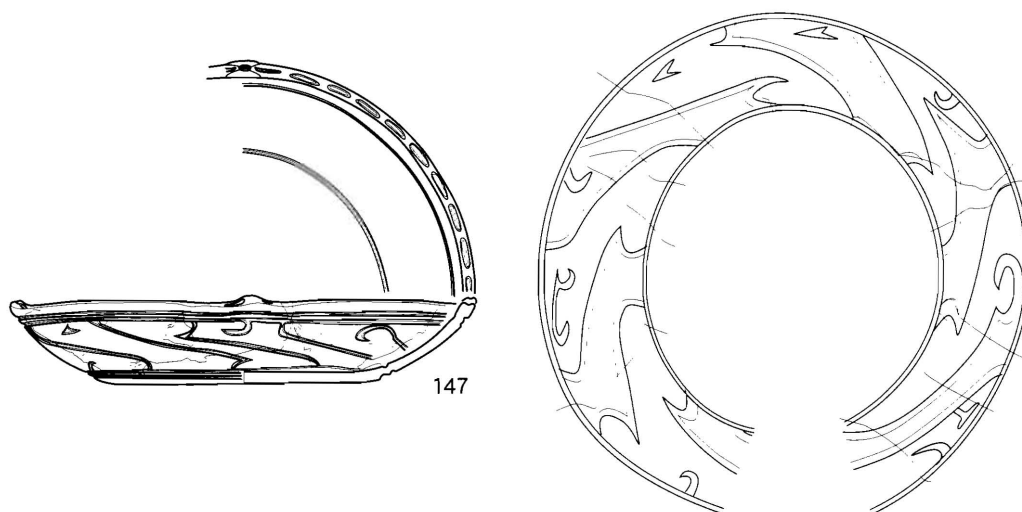
146



0 10cm

番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
146	B2⑦B3①・Ⅲ層	ⅡA類	33.6	9.0	15.0	口唇文様：g 1、体部文様：配Ⅲ 1、地文：L R縄文。	26・8

図版17 皿146



0 10cm

番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
147	A2⑥⑧、B2・Ⅲ層	ⅡA類	18.5	3.6	9.8	口唇文様：b、体部文様：区Ⅰ3、地文：LR縄文。赤彩。	27-1
148	B2⑦・Ⅲ層	ⅡA類	18.6	5.2	8.4	口唇文様：h、体部文様：配Ⅰ1、地文：RL縄文。	27-2

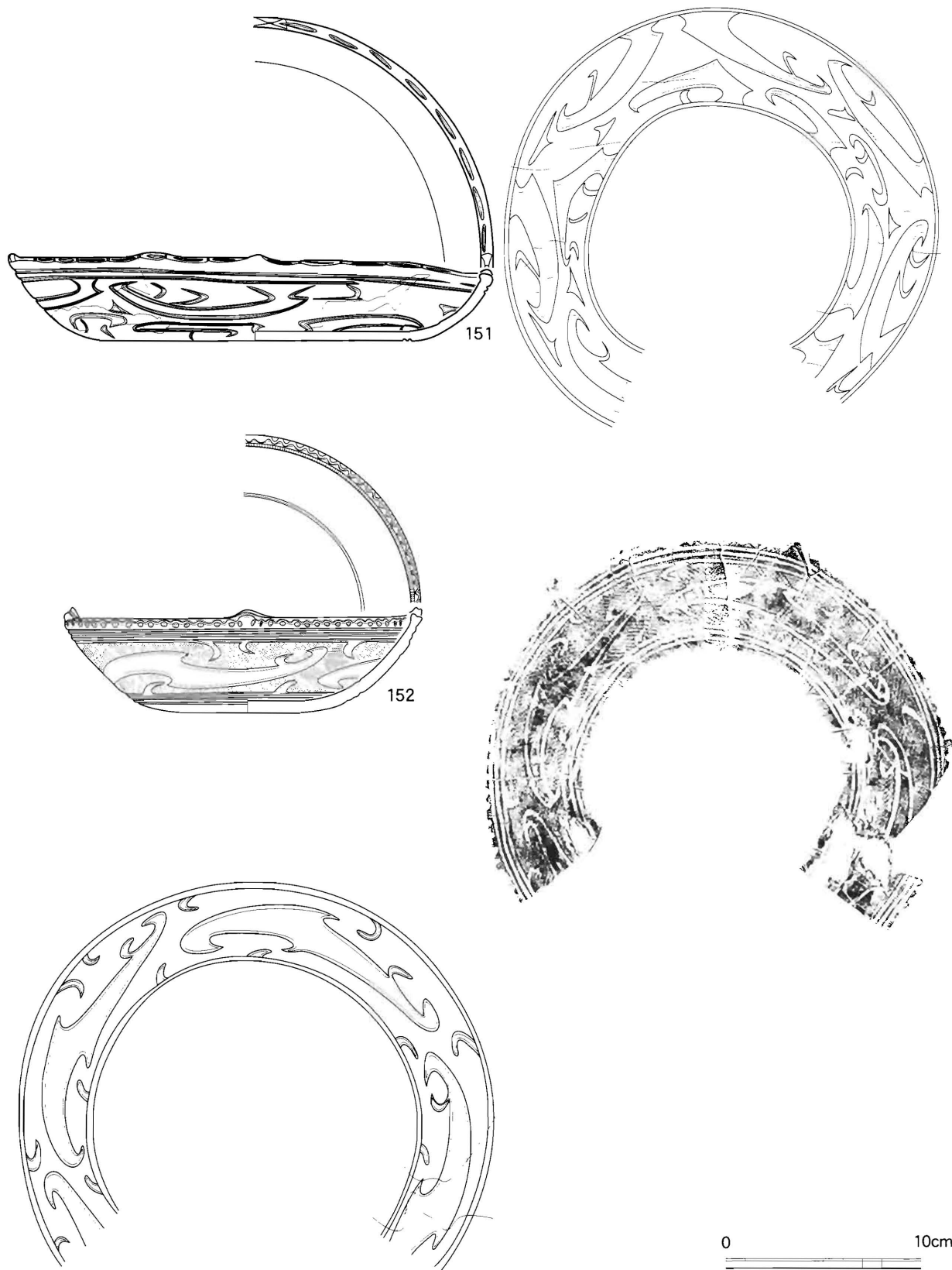
図版18 皿147・148



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
149	B 2 ③⑥・Ⅲ層	ⅡA類	19.1	4.8	9.6	口唇文様：e、体部文様：配Ⅲ3、地文：LR縄文。	27-3
150	B 2 ④・Ⅲ層	ⅡA類	20.9	5.9	9.0	口唇文様：g1、体部文様：配Ⅰ1、地文：LR縄文。	27-4

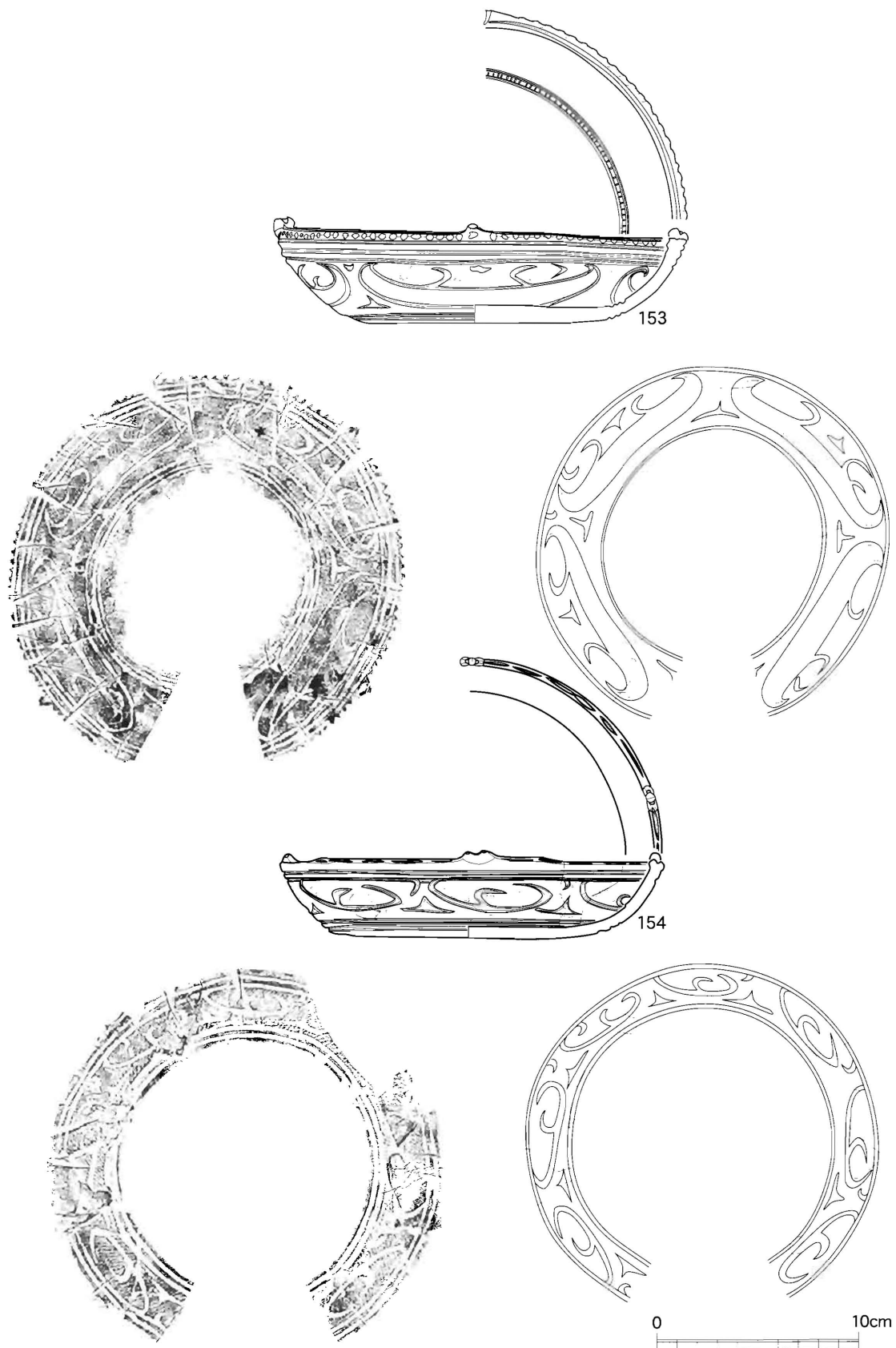
図版19 皿149・150





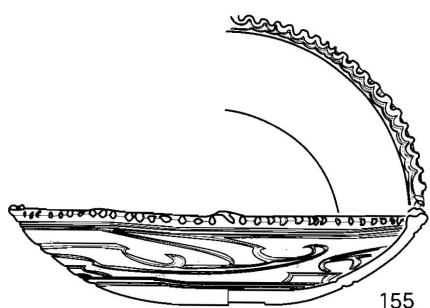
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
151	B 2⑥・Ⅲ層	Ⅱ A類	25.1	4.5	17.0	口唇文様：b、体部文様：配Ⅰ3、地文：無文。	27-5
152	B2④⑦・Ⅲ層	Ⅱ A類	18.4	5.2	10.2	口唇文様：h、体部文様：配Ⅲ3、地文：L R縄文。	27-6

図版20 皿151・152

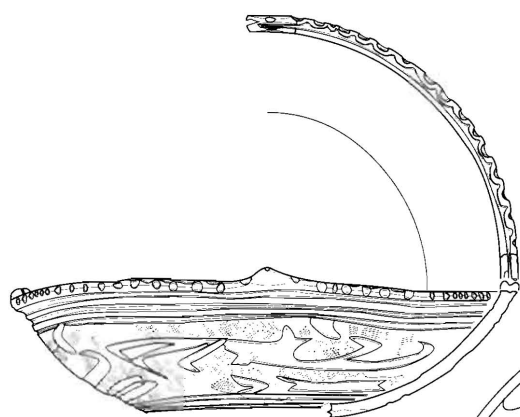
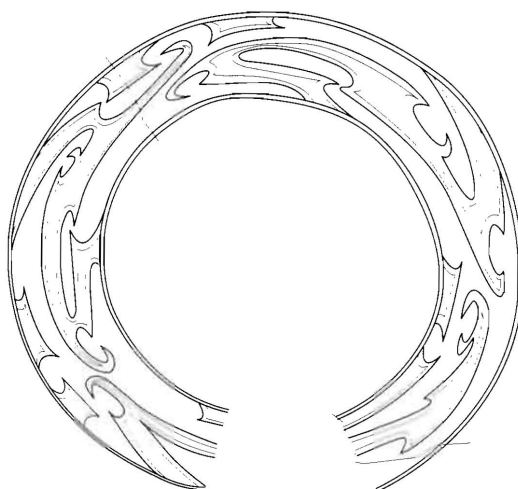


番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
153	B 2 ⑥・Ⅲ層	ⅡA類	20.8	4.9	10.5	口唇文様：e、体部文様：配Ⅲ4、地文：L R 縄文。	27-7
154	A 3 ③・Ⅲ層	ⅡA類	19.5	4.6	13.9	口唇文様：b、体部文様：配Ⅰ2、地文：L R 縄文。	27-8

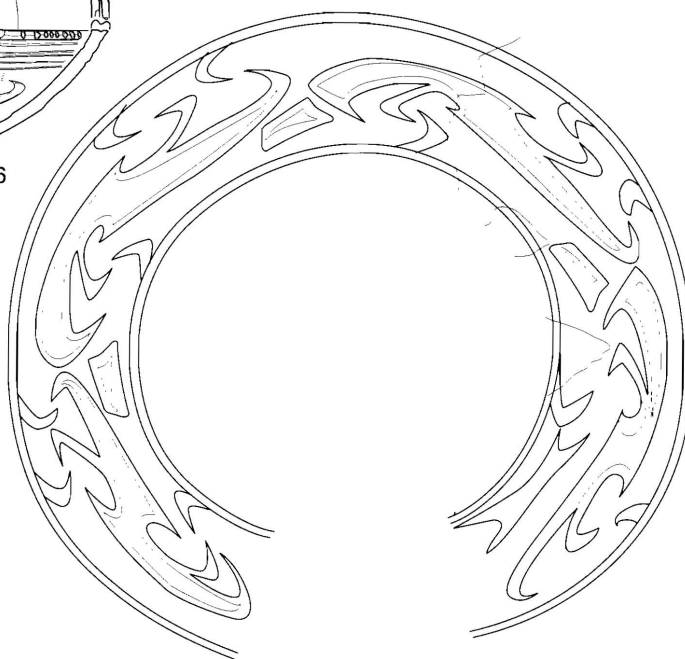
図版21 皿153・154



155



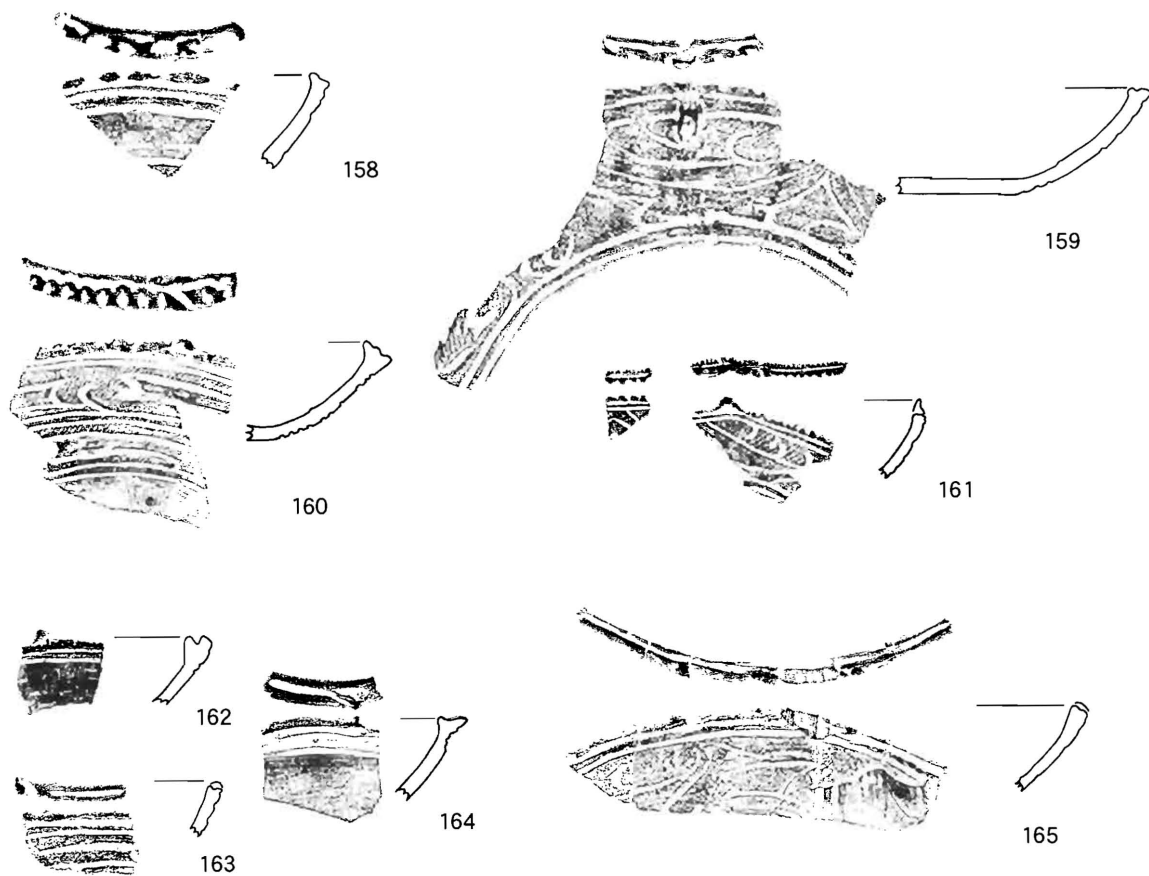
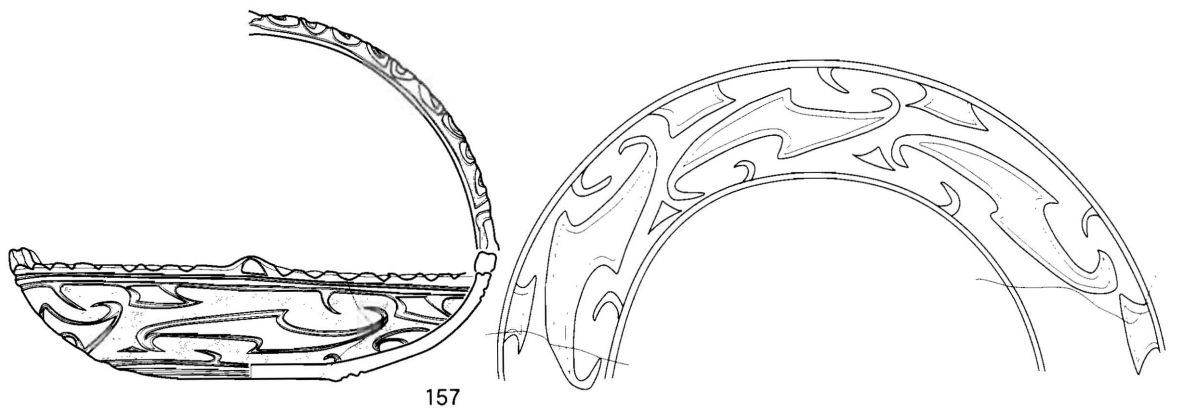
156



0 10cm

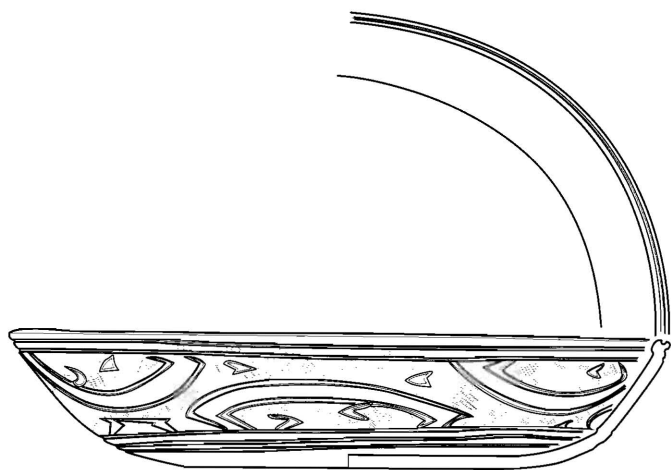
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
155	B 3 ①④・Ⅲ層	ⅡA類	15.7	3.7	4.9	口唇文様：f、体部文様：区Ⅰ1、地文：L R 縄文。	28-1
156	B 2 ⑤⑧・Ⅲ層	ⅡA類	20.4	—	—	口唇文様：g 2、体部文様：配Ⅲ3、地文：R L 縄文。	28-2

図版22 皿155・156

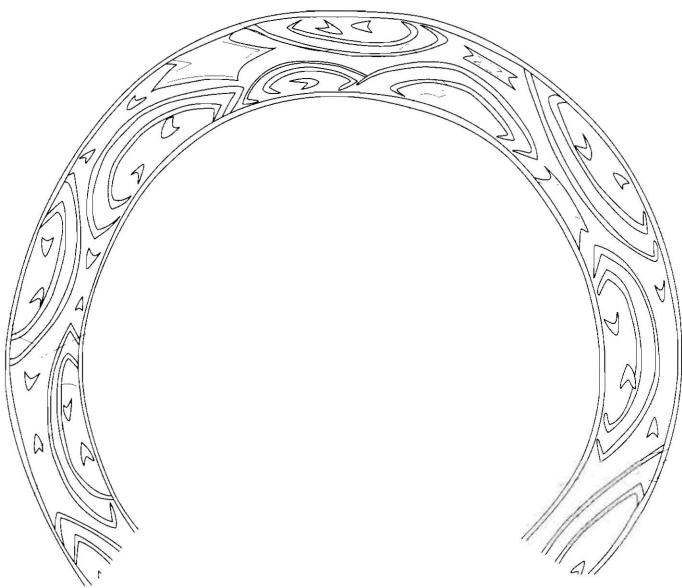


番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
157	B 2 ⑥・Ⅲ層	ⅡA類	17.0	4.9	5.4	口唇文様：g 2、体部文様：配Ⅲ 3、地文：L R 縄文。	28-3
158	B 2 ④・Ⅲ層	ⅡA類	—	—	—	口唇文様：i 3、地文：無文。	29-2
159	B 2 ②③・Ⅲ層	ⅡA類	—	—	—	口唇文様：i 1、体部文様：配Ⅰ 1、地文：L R 縄文。	28-4
160	—・Ⅲ層	ⅡA類	—	—	—	口唇文様：f、体部文様：配Ⅰ 5、地文：L R 縄文。	29-2
161	B 2 ⑦・Ⅲ層	ⅡA類	—	—	—	口唇文様：h、体部文様：配Ⅰ 1、地文：L R 縄文。	29-2
162	B 2 ④・Ⅲ層	ⅡA類	—	—	—	口唇文様：c、地文：無文。	29-3
163	B 2 ④・Ⅲ層	ⅡA類	—	—	—	口唇文様：c、地文：無文。	29-3
164	B 2 ③・Ⅲ層	ⅡA類	—	—	—	口唇文様：c、地文：無文。	29-3
165	A 2 ⑤・Ⅲ層	ⅡA類	—	—	—	口唇文様：c、体部文様：配Ⅲ 3、地文：無文。	29-4

図版23 皿157～165



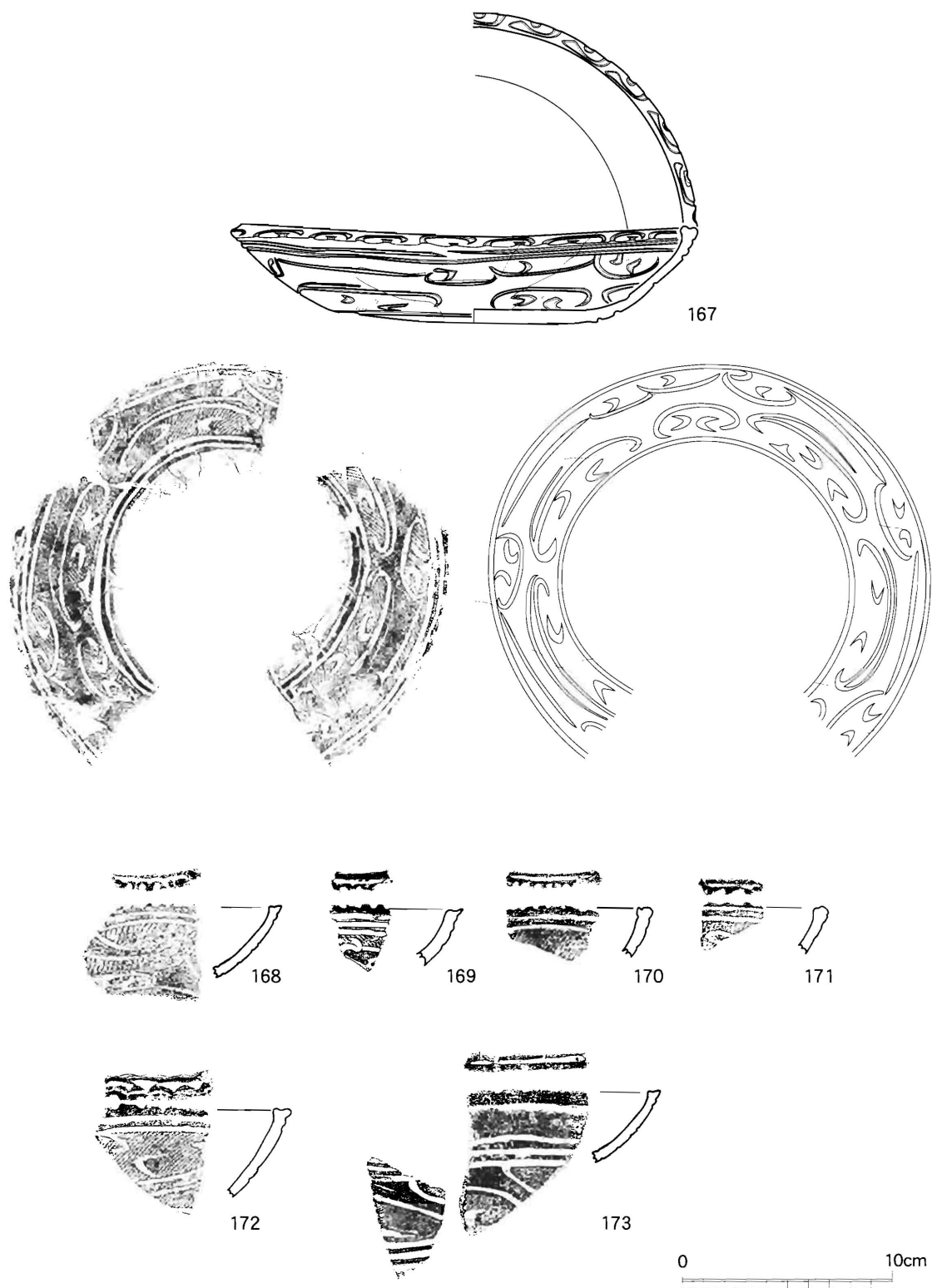
166



0 10cm

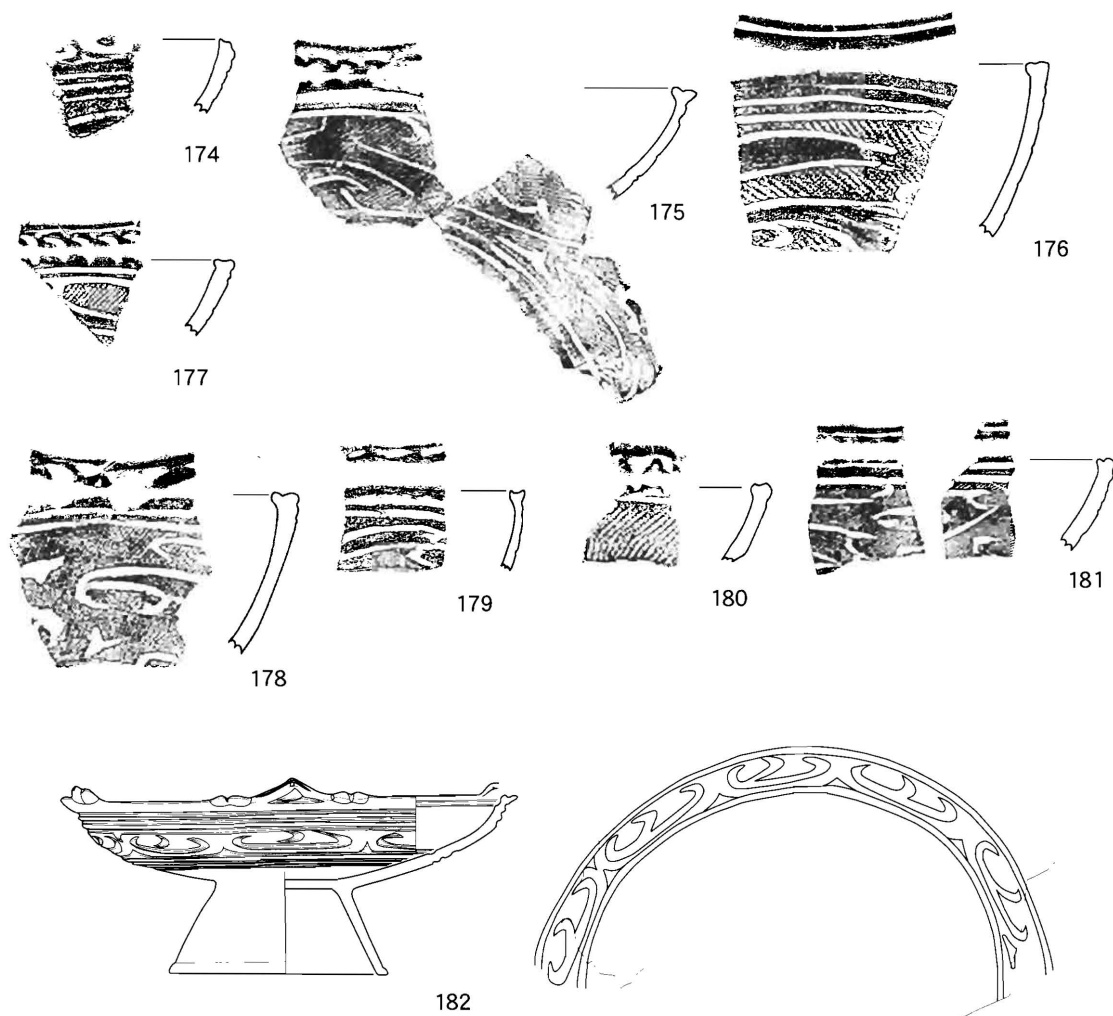
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
166	B 2 ⑦⑧・Ⅲ層	ⅡA類	27.1	5.5	13.3	口唇文様：c、体部文様：配Ⅱ1、地文：RL縄文。	28-5

図版24 皿166



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
167	B2④⑦・Ⅲ層	ⅡA類	22.3	4.4	10.5	口唇文様：j、体部文様：配I 4、地文：LR縄文。	28-6
168	B2①・Ⅲ層	ⅡD類	—	—	—	口唇文様：g 2、体部文様：配I 1、地文：LR縄文。	29-5
169	—・Ⅲ層	ⅡD類	—	—	—	口唇文様：g 2、地文：RL縄文。	29-5
170	B2④・Ⅲ層	ⅡD類	—	—	—	口唇文様：g 2、地文：LR縄文。	29-5
171	B3④・Ⅳ層	ⅡD類	—	—	—	口唇文様：e、地文：LR縄文。	29-5
172	A2③・Ⅲ層	ⅡD類	—	—	—	口唇文様：i 2、地文：LR縄文。赤彩。	29-6
173	A2①⑥・Ⅲ層	ⅡD類	—	—	—	口唇文様：c、地文：LR縄文。	29-6

図版25 皿167～173



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
174	B 3 ⑥・Ⅲ層	ⅡD類	—	—	—	口唇文様：l、地文：L R 縄文。	29-7
175	B 2 ①・Ⅲ層	ⅡD類	—	—	—	口唇文様：g 2、体部文様：区 I 2、地文：L R 縄文。	29-9
176	A 2 ⑥・Ⅲ層	ⅡD類	—	—	—	口唇文様：c、地文：L R 縄文。	29-10
177	B 3 ④・Ⅲ層	ⅡD類	—	—	—	口唇文様：g 1、体部文様：配 I 1、地文：L R 縄文。	29-10
178	B 2 ④・Ⅲ層	ⅡD類	—	—	—	口唇文様：i 3、地文：L R 縄文。	29-8
179	B 3 ④・Ⅳ層	ⅡD類	—	—	—	口唇文様：b、地文：無文。	29-11
180	B 2 ③・Ⅲ層	ⅡD類	—	—	—	口唇文様：d、地文：L R 縄文。	29-11
181	B 2 ⑤・Ⅲ層	ⅡD類	—	—	—	口唇文様：c、地文：L R 縄文。	29-11
182	B 2 ⑥・Ⅲ層	ⅢA類	18.4	7.9	8.7	口唇文様：c、体部文様：配Ⅲ4、地文：L R 縄文。赤彩。	28-7

図版26 皿174～182

#### (4) 浅鉢

##### [浅鉢形土器の分類]

浅鉢形土器を整理する際には口縁部・体部・底部のそれぞれの属性に注目した。その結果をもとに、器形と口縁部の形状の組み合わせで分類を行う。

##### (i) 分類

器形を5つ、口縁部の形状を5つに分けた。

##### ・器形

I類、体部から口縁部が、ほぼ直線的に外に開くもの。

II類、体部から口縁部が内湾しながら外に開くもの。

III類、体部から口縁部が内湾しながら外に開くが口縁部で内傾するもの。

IV類、体部から頸部が内湾しながら外に開き頸部から口縁部がやや外反するもの。

V類、体部から頸部が内湾しながら外に開き頸部から口縁部が直立するもの。

##### ・口縁部の形状

A類、平縁で突起が伴うもの。数は少ない。突起が付く場合は2個一対の山形。突起が1単位もしくは数単位施される例がある。

B類、平縁のもの。

C類、小波状の突起のもの。

D類、刻みが巡るもの。

E類、破損のため突起の有無が不明であるもの。

以上を組み合わせで分類を行なう。

##### (ii) その他の特徴

##### ・口縁部の形状

皿形土器と同じ基準で分類したが、皿のI類は浅鉢にはなかった。また皿には見られない口縁部形状をIII類とした。

II類、口唇は肥厚せず平坦なもの。

III類、口唇が丸みを帯びるか細く尖るもの。

##### ・口唇文様

基本的に口唇文様は無いが、1点のみ口唇文様をもつものがある。(図版34-243)

##### ・体部の特徴

地文の種類、区画文と配置文の種類別、内面の区画の有無で特徴を述べる。ただし、文様構成が予測できない破片は不明とした。

##### ・文様

##### [区画文]

区画文はI 3のみみられた。



## [配置文]

配置文はⅠとⅢに分類した。配置文Ⅰ 7と配置文Ⅲ 6、7が浅鉢形にのみ、見られる文様である。

配置文Ⅰは3種類に分類した。

配置文Ⅰ 1、2は皿形土器と同じ文様である。

配置文Ⅰ 7は配置文Ⅰ 2と配置文Ⅲ 3を組み合わせた文様である。

配置文Ⅲは5種類に分類した。

配置文Ⅲ 3、Ⅲ 4は皿形土器と同じ文様である。

配置文Ⅲ 6は配置文Ⅲ 3を反転した文様である。

配置文Ⅲ 7は配置文Ⅲ 4を沈線化した文様である。

配置文Ⅲ 8は横C文を互い違いに接続させたような、工字文に近い文様である。

文様構成が不明なため、模式図は作成していない。

### ・ 体部の地文

#### a. 縄文が施されるもの。

縄文にはLR単節斜位縄文・RL単節斜位縄文・LR単節縦位縄文・RL単節縦位縄文がある。

#### b. 無文のもの。

#### c. 条痕文が施されるもの。

### ・ 底部の特徴

底部は平底と丸底に分けた。底部が欠損して形状を窺えないものは不明とした。更に地文の有無を分け、底部の作り出しについてもふれた。なお、分類は皿形土器の分類基準にのっとり行った。これに該当しないものは、新たに分類を加えた。

### ・ 底部形態

#### a. 丸底ないし丸底気味のもの。

##### a 2. へこんでいるもの。

##### a 3. 破損などにより装飾がわからないもの。

##### a 4. 作り出しの無いもの。

##### a 5. 沈線が巡るもの。

#### b. 平底のもの。

##### b 1. 作り出しの無いもの。

##### b 4. 破損などにより装飾がわからないもの。

### ・ 地 文

文様の無い浅鉢形土器には、底面にまで縄文が施されるものがある。だが条痕が底部にまで施されるということは無い。底面の縄文は体部と同じものが使われる。

#### a. 無文である。

#### b. 縄文が施される。

## (iii) 浅鉢形土器に見られる傾向

浅鉢形土器は器形がⅠ類、(胴部から口縁部が、ほぼ直線的に外に開く)、Ⅱ類、(胴部から口縁部が内湾しながら外に開く)としたもので殆どを占める。赤彩される資料も見られるが壺よりも数が少ない。

浅鉢形土器は口縁部に突起が伴わないものが多い。口唇文様の無いものが一般的であるがIVB類に限っては口唇文様g 2が伴う。

体部文様は無いものが多い。文様帯は体部の上半に位置する。文様帯の上限と下限は横走する沈線により区画される。

文様のある類型はIE類、IIB類、IID類、IIE類、IIIE類、IVB類である。文様は磨消縄文による手法が多い。浅鉢形土器に見られる文様は全体的にバラツキがあるが配置文Ⅲ 3、7に、やや集中する傾向がある。

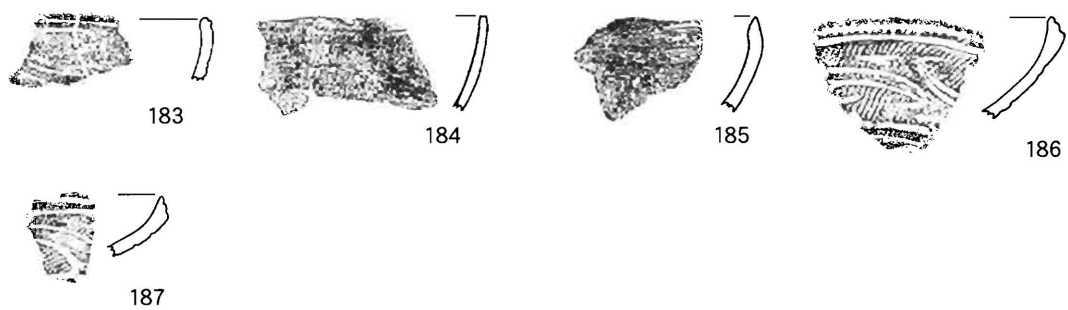
地文は縄文、無文、条痕が見られる。無文の浅鉢は器面が丁寧に磨かれる。丸底の土器の底面に縄文が巡るものもある。内面に区画帯のある資料は見られない。

底面の形態は丸底のものが平底よりも多い傾向がある。底面の作り出しは無いものが多い。

県調査区の資料（ブロック2）と比較を行っても、器形や文様はほぼ同じ内容であるといえる。ただし、県調査区の浅鉢は文様帯が器面全体に巡るものがあり、その場合は皿に見られる配置文Ⅲ 1などを施している。

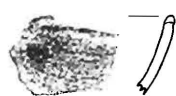
#### ・分類とそれに伴う特徴

分類	口 縁 部		体 部			底 部	
	上端の形状	口唇文様	文様の種類	地 文	内面の区画帯	底部形態と作り出し	地 文
IA	Ⅱ、Ⅲ	a	無し	無文	4, 5	—	—
IB	Ⅱ、Ⅲ	a	無し	LR、RL、条痕、無し	5	a 4, b 1	a 4にRL縄文
IIB	Ⅱ	a	無し	LR、RL、無文	5	a 1, b 1	無し
IE	Ⅱ	a	配Ⅰ 7	LR	5	—	—
IIE	Ⅱ、Ⅲ	a	無し	LR、無し	4, 5	—	—
IIA	Ⅱ	a	無し	無文	4	—	—
IIB	Ⅱ、Ⅲ	a	区Ⅰ 3、配Ⅰ 2、Ⅲ 6、7	LR、RL	5	a 1～3	無し
IIC	Ⅱ	a	無し	無文	5	b 1	無し
IID	I	a	配Ⅲ 8	RL	5	b 1	無し
IIE	Ⅱ、Ⅲ	a	配Ⅲ 3、7	LR	4, 5	a 5	無し
IIE	Ⅲ	a	無し	無文、RL	4, 5	—	—
IIIA	Ⅱ、Ⅲ	a	無し	LR、無文	5	a 4	無し
IIIC	Ⅲ	a	無し	条痕	5	b 1	無し
IIIE	I	a	配Ⅲ 4	LR、RL	4	—	—
IVB	I	g 2	配Ⅲ 1	LR	5	b 1	無し
V	—	—	無し	無文	5	b 1	無し



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
183	B2・I層	IE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：L R縄文。	34-1
184	B3・I層	IE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：無文。	34-1
185	B3・I層	IE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：無文。	34-1
186	B3・I層	ⅢE類	—	—	—	口唇文様：a、体部文様：配Ⅲ4、地文：L R縄文。	34-1
187	B2・I層	ⅢE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：L R縄文。	34-1

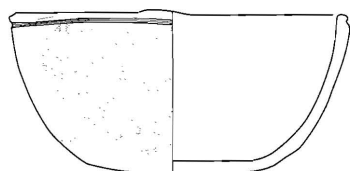
図版27 浅鉢183～187



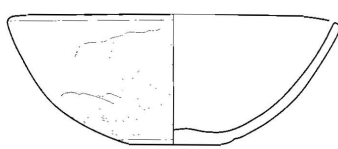
188



189



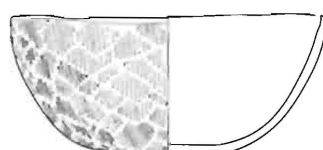
190



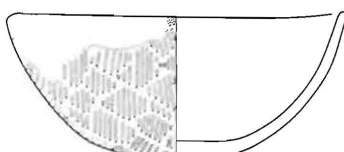
191



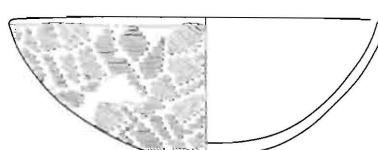
192



193



194



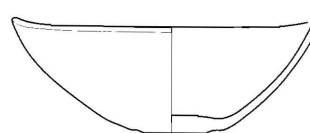
195



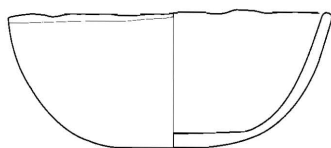
196



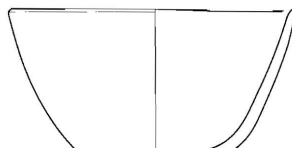
197



198



199



200

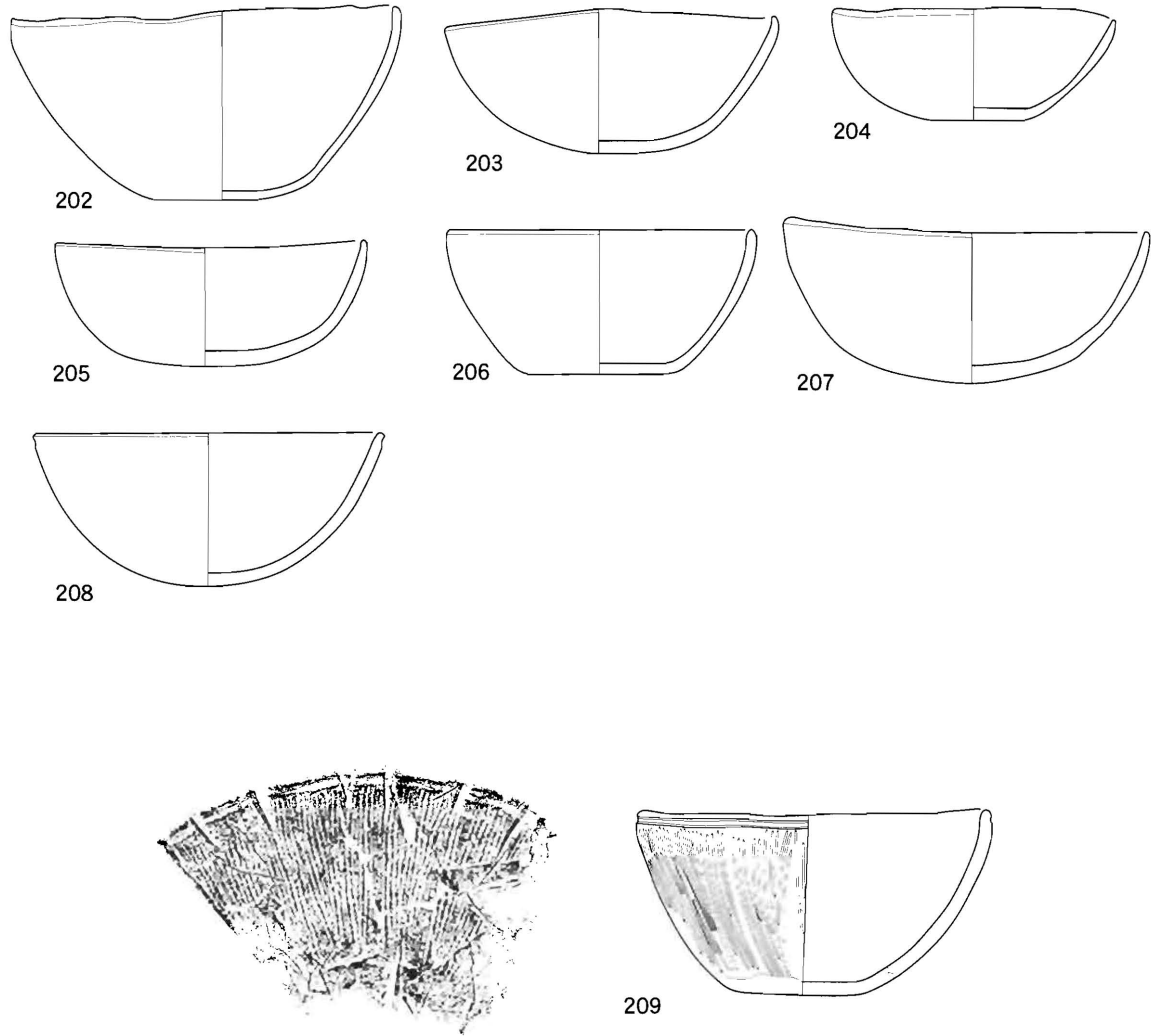


201

0 10cm

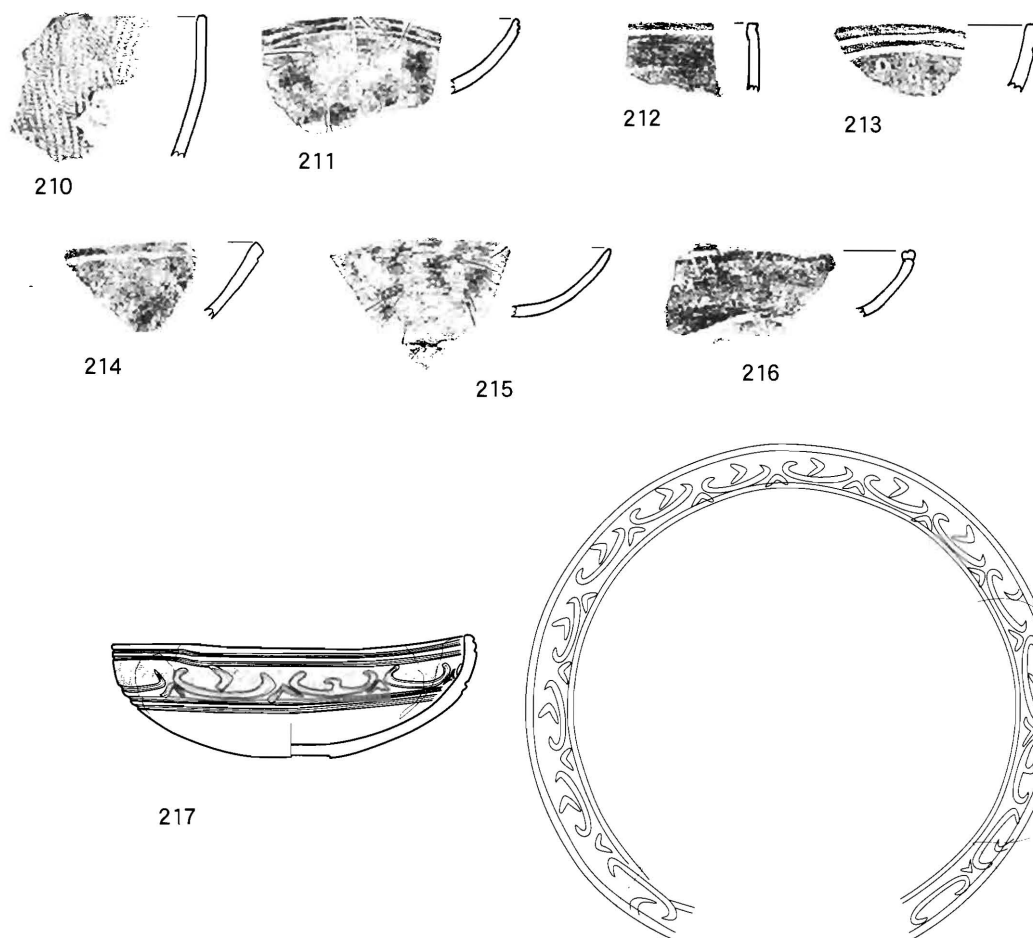
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
188	B2④・Ⅲ層	I A類	—	—	—	口唇文様：a、地文：無文。	34-3
189	B2⑤・Ⅲ層	I E類	—	—	—	口唇文様：a、体部文様：配 I 7、地文：L R 縄文。	34-3
190	B2④・Ⅲ層	I B類	12.8	6.5	4.5	口唇文様：a、地文：L R 縄文。	30-1
191	B3①・Ⅲ層	I B類	12.9	5.6	3.8	口唇文様：a、地文：R L 縄文。	30-2
192	B2⑥・Ⅲ層	I B類	13.2	5.6	4.3	口唇文様：a、地文：R L 縄文。	30-3
193	B2⑦、B3①・Ⅲ層	I B類	12.5	5.7	3.8	口唇文様：a、地文：R L 縄文。	30-4
194	B3①・Ⅲ層	I B類	12.9	5.6	3.8	口唇文様：a、地文：R L 縄文。	30-5
195	B2④⑤・Ⅲ層	I B類	14.3	5.5	4.1	口唇文様：a、地文：R L 縄文。	30-6
196	B3①・Ⅲ層	I B類	13.8	6.0	4.5	口唇文様：a、地文：R L 縄文。	30-7
197	B2⑥⑨・Ⅲ層	I B類	11.8	5.4	5.0	口唇文様：a、地文：L R 縄文。	30-8
198	B2⑦⑧・Ⅲ層	I B類	12.2	4.6	2.6	口唇文様：a、地文：無文。	31-1
199	B2⑨・Ⅲ層	I B類	13.0	5.6	2.4	口唇文様：a、地文：無文。	31-2
200	B2⑨・Ⅲ層	I B類	12.5	6.5	3.5	口唇文様：a、地文：無文。	31-3
201	B2⑥・Ⅲ層	I B類	12.4	7.6	4.6	口唇文様：a、地文：無文。	31-4

図版28 浅鉢188～201



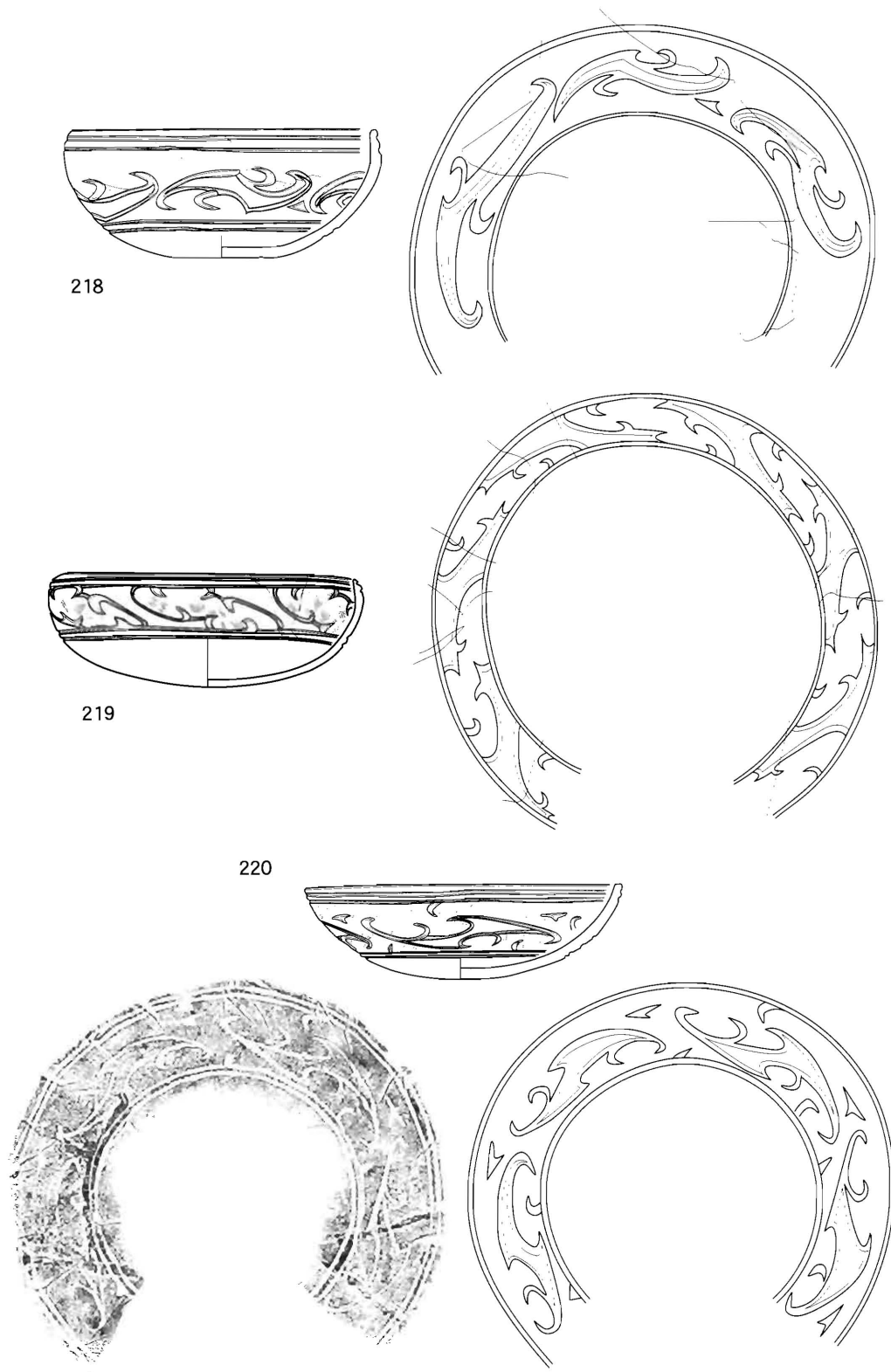
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
202	A3③・Ⅲ層	I B類	13.2	7.8	4.0	口唇文様：a、地文：無文。	31-5
203	A3③・Ⅲ層	I B類	13.3	5.8	2.2	口唇文様：a、地文：無文。	31-6
204	A2⑨、A3③・Ⅲ層	I B類	11.5	4.5	3.9	口唇文様：a、地文：無文。	31-7
205	B2⑥・Ⅲ層	I B類	12.4	5.0	2.5	口唇文様：a、地文：無文。	31-8
206	B2④⑦、B3③・Ⅲ層	I B類	11.7	5.8	5.9	口唇文様：a、地文：無文。	32-1
207	A2③・Ⅲ層	I B類	14.0	6.5	1.0	口唇文様：a、地文：無文。	32-2
208	B3③・Ⅳ層	I B類	(14.1)	—	—	口唇文様：a、地文：無文。	34-4
209	B2⑨・Ⅲ層	I B類	14.4	7.3	5.2	口唇文様：a、地文：条痕。	32-3

図版29 浅鉢202～209



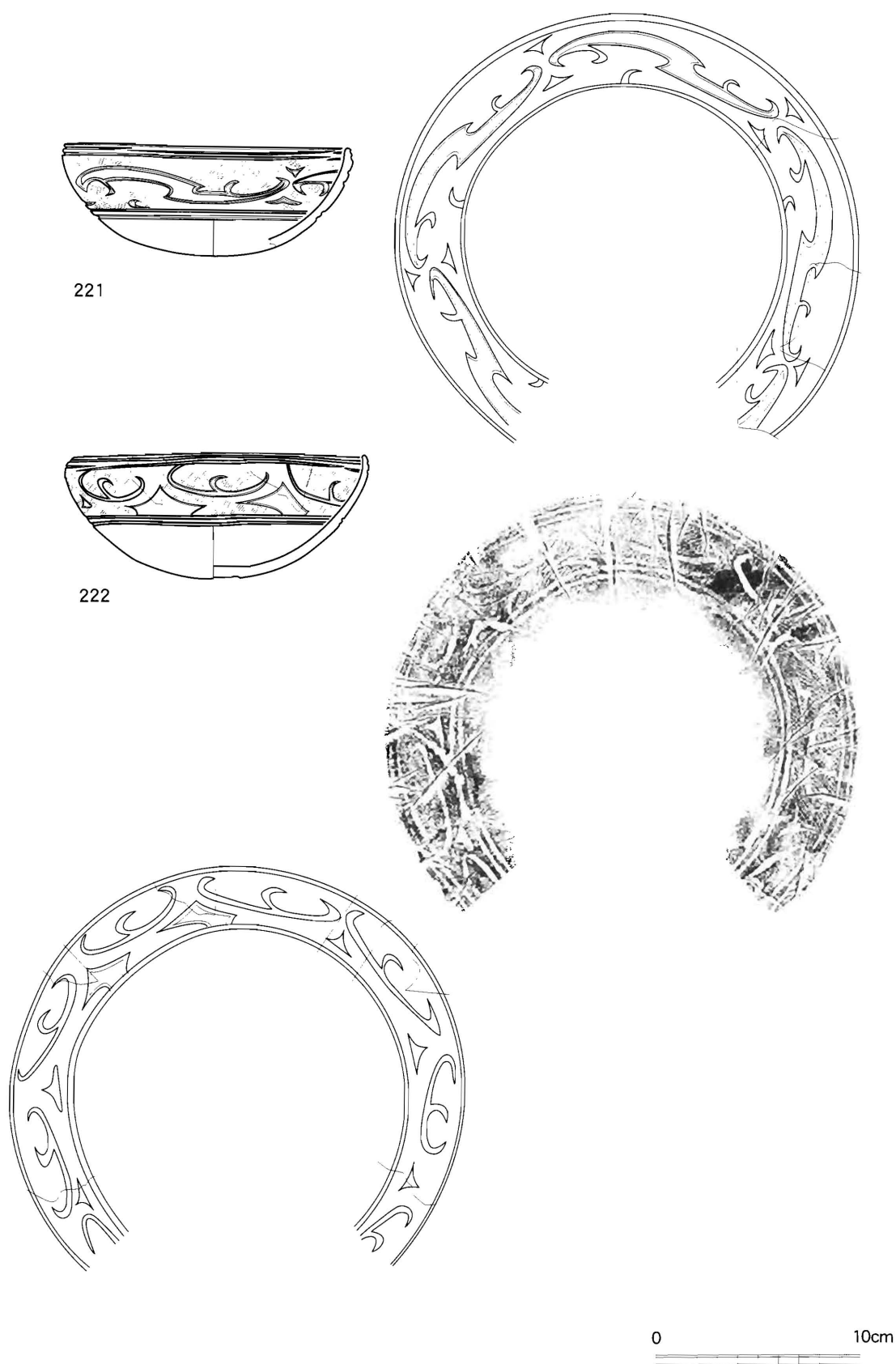
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
210	B3⑨・Ⅲ層	ⅠE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：LR縄文。	34-2
211	B2⑨・Ⅲ層	ⅠE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：無文。	34-2
212	B2①・Ⅲ層	ⅠE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：無文。	34-2
213	B2⑥・Ⅲ層	ⅠE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：無文。	34-2
214	B2⑤・Ⅲ層	ⅠE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：無文。赤彩。	34-2
215	B2④⑦・Ⅲ層	ⅠE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：無文。	34-2
216	B3③・Ⅲ層	ⅡA類	—	—	—	口唇文様：a、地文：無文。	34-2
217	A2⑧・Ⅲ層	ⅡB類	(14.4)	4.5	3.4	口唇文様：a、体部文様：配Ⅲ7、地文：LR縄文。	32-4

図版30 浅鉢210～217



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
218	B2③⑧・Ⅲ層	ⅡB類	(14.0)	5.9	4.8	口唇文様：a、体部文様：配Ⅲ3、地文：LR縄文。	32-5
219	B2⑧・Ⅲ層	ⅡB類	14.1	5.1	1.5	口唇文様：a、体部文様：区Ⅰ3、地文：RL縄文。	32-6
220	B3①・Ⅳ層	ⅡB類	14.5	4.9	2.6	口唇文様：a、体部文様：配Ⅲ6、地文：LR縄文。	32-7

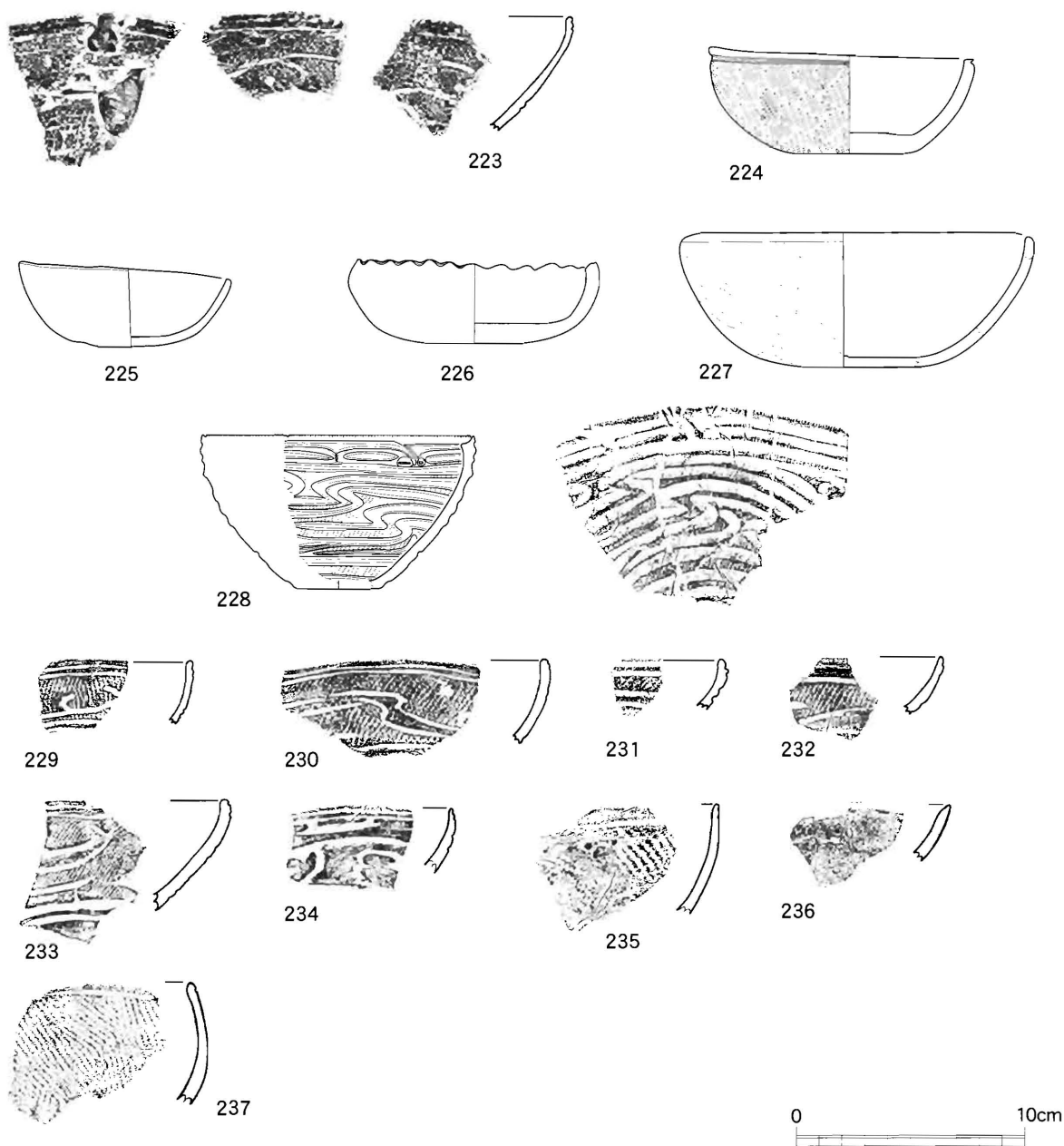
図版31 浅鉢218～220



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
221	一・Ⅲ層	ⅡB類	(14.3)	(5.3)	(1.3)	口唇文様：a、体部文様：配Ⅲ3、地文：LR縄文。	34-5
222	B2⑤、B3①・Ⅲ層	ⅡB類	14.7	6.3	2.6	口唇文様：a、体部文様：配Ⅰ2、地文：LR縄文。	32-8

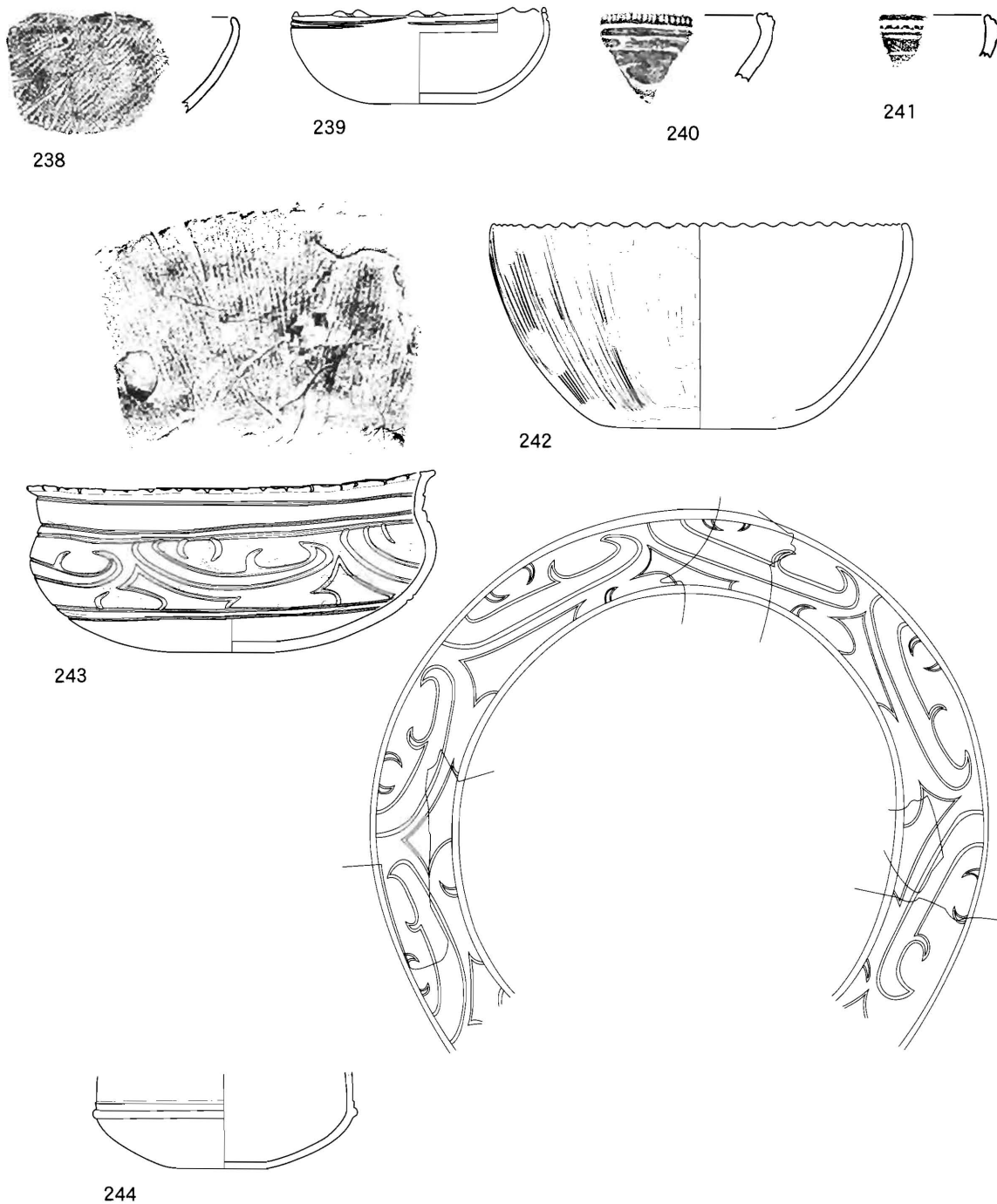
図版32 浅鉢221・222





番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
223	A2①・Ⅲ層	ⅡB類	—	—	—	口唇文様：a、地文：LR縄文。	34-6
224	B3②・Ⅲ層	ⅡB類	11.5	4.3	5.2	口唇文様：a、地文：RL縄文。	33-1
225	B2⑤・Ⅲ層	ⅡB類	9.3	3.8	2.6	口唇文様：a、地文：無文。	33-2
226	A3③・Ⅲ層	ⅡC類	10.5	3.7	3.7	口唇文様：a、地文：無文。	33-3
227	B2⑤・Ⅳ層	ⅡB類	15.0	5.9	5.8	口唇文様：a、地文：LR縄文。	33-4
228	B3⑤・Ⅲ層	ⅡD類	(12.0)	6.7	(3.8)	口唇文様：a、体部文様：配Ⅲ8、地文：RL縄文。	34-7
229	B2⑧・Ⅲ層	ⅡE類	—	—	—	口唇文様：a、体部文様：配Ⅲ7、地文：LR縄文。	34-8
230	B3②・Ⅲ層	ⅡE類	—	—	—	口唇文様：a、体部文様：配Ⅲ3、地文：LR縄文。	34-8
231	B3・Ⅲ層	ⅡE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：LR縄文。	34-8
232	B2⑦・Ⅲ層	ⅡE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：LR縄文。	34-8
233	—・Ⅲ層	ⅡE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：LR縄文。	34-8
234	B2④・Ⅲ層	ⅡE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：無文。赤彩。	34-8
235	B2⑥・Ⅲ層	ⅡE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：RL縄文。	34-9
236	B2④・Ⅲ層	ⅡE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：無文。	34-9
237	—・Ⅲ層	ⅡE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：RL縄文。	34-9

図版33 浅鉢223～237



0 10cm

番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
238	B2③・Ⅲ層	ⅢA類	—	—	—	口唇文様：a、地文：LR縄文。	34-9
239	A2①・Ⅲ層	ⅢA類	12.0	4.2	(5.2)	口唇文様：a、地文：無文。	33-5
240	B2⑨・Ⅲ層	ⅢE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：LR縄文。	34-9
241	B3⑨・Ⅲ層	ⅢE類	—	—	—	口唇文様：a、地文：RL縄文。	34-9
242	B2④・Ⅲ層	ⅢC類	19.1	9.5	8.5	口唇文様：a、地文：条痕。	33-6
243	B2③・Ⅲ層	ⅣB類	(18.6)	4.1	5.0	口唇文様：g2、体部文様：配Ⅰ1、地文：LR縄文。	33-7
244	B3②⑤⑥・Ⅳ層	V類	(11.7)	(4.3)	—	地文：無文。	33-8

図版34 浅鉢238～244

(5) 鉢

鉢形土器は、底部から体部にかけては顕著な器形の変化がないため、口縁部を中心にして分類をおこなった。

(i) 分類

・器形（模式図1 参照）

I：口縁部が内湾するもの。

II：口縁部が直線的に外に開くもの。

III：口縁部がS字状に外反するもの。さらに2種類に分類される。

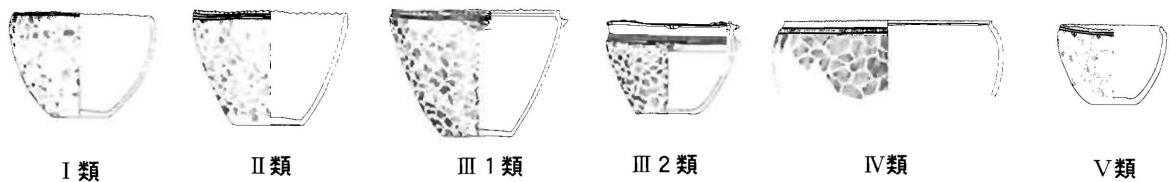
1：外反する短い頸部をもつもの。

2：外反する幅の広い頸部をもつもの。

IV：体部が強く内湾し、口唇部が外反するもの。

V：口縁部が強く屈曲するもの。

模式図1 器形

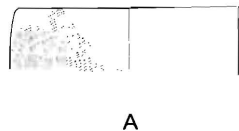


・口縁部の形態（模式図2 参照）

A：平縁であるもの。

B：平縁で突起を伴うもの。

C：小波状の突起を伴うもの。



A

模式図2 口縁部形態



B



C

(ii) その他の特徴

①口唇文様（模式図3 参照）

a. なし。

b. 沈線が施されるもの。

c. 半円状に彫り込まれるもの。

d. 斜めの刻みが施されるもの。

e. 楕円状に彫り込まれるもの。

f. 台形状に彫り込まれるもの。

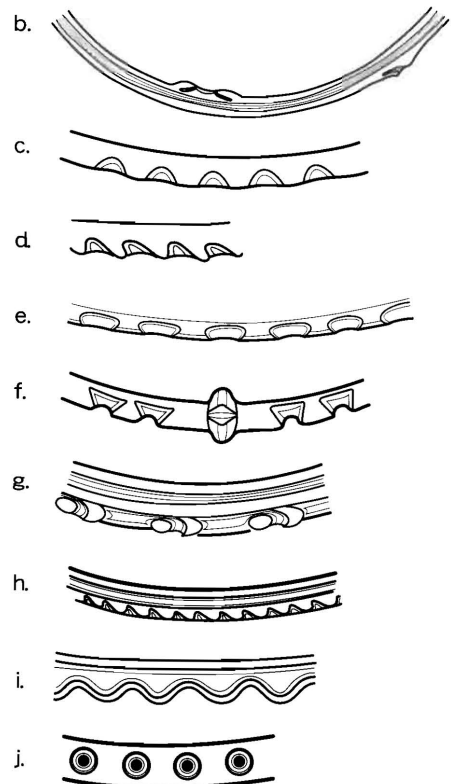
g. 2 瘤のモチーフが施されるもの。

h. 斜めの切り込みと沈線が施されるもの。

i. 三角形状に彫り込まれるもの。

j. 竹管の押圧が施されるもの。

模式図3 口唇文様



皿と同様に口唇文様があるが、皿ほど複雑な文様構成にならず、単純な文様である。また、bの沈線は他の装飾と組み合わせられて施されることが多い。

②口縁部の装飾

口縁部の装飾を大きく分けると、a. 突起、b. 沈線

(1条または数条の平行沈線)、c. 刺突、の三種類があり、それぞれが組み合わせられて施されている。  
またa. 突起の中にも、次の4種類がある。

- 1、A突起+B突起 (A突起が単独で施されたものはない)
- 2、B突起
- 3、眼鏡状突起
- 4、把手状突起

a、b、c、の装飾の組み合わせには、以下の6種類がある。

- 1、装飾なし
- 2、沈線
- 3、突起+沈線
- 4、突起+刺突
- 5、沈線+刺突
- 6、突起+沈線+刺突

### ③体部の特徴

#### ・体部文様

鉢形土器には体部文様を持つものが5点ある。図版38-286・図版40-302・図版45-352・図版46-361・図版47-362がそれに当たる。これらの体部文様を皿・浅鉢形土器の文様模式図にあてはめると、352の体部文様は配置文Ⅰ3、図302と362は配置文Ⅲ4、361は配置文Ⅲ1となる。286の体部文様のみ、皿・浅鉢形土器に該当する類例がなく、鉢形土器に特有の文様である。

#### ・体部の地文

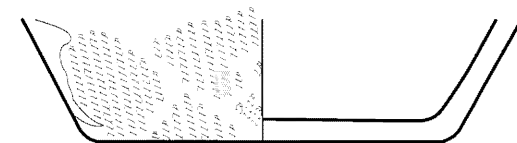
- a. 縄文が施されるもの。縄文にはL R単節斜位縄文・R L単節斜位縄文・L R単節縦位縄文・R L単節縦位縄文・羽状縄文がある。
- b. 条痕文が施されるもの。
- c. 無文のもの。

### ④底部の特徴

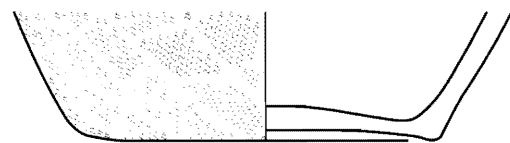
#### ・底部形態

- 1類：平底のもの。
- 2類：上げ底のもの。
- 3類：底がふくらむもの。

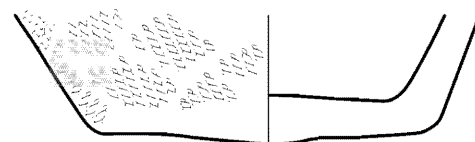
#### ・底部形態



1類



2類



3類

### ⑤台付鉢について

鉢形土器の中には、底に台のついた器形の台付鉢がある。台付鉢の台より上の形は、他の鉢形土器のものと差が無く、また接合しなかった台部も出土している。そのため、今回鉢形土器として扱ったものの中にも、本来台付鉢であったものが含まれている可能性がある。

#### ・台部形態

- A：比較的脚部の長いもの。
- B：比較的脚部の短いもの。

- ・台部装飾

装飾は台部の脚部のみに施される。

- a : 沈線
- b : 突起
- c : 隆帯
- d : 刺突列
- e : 沈線文様

- ・台部の地文

台部の脚部に縄文が施されるものがある。

### (iii) 各類型の特徴

#### I A 類

口縁部が内湾し、平縁であるもの。この類型には口唇文様がなく、口縁部直下に突起や沈線などの装飾を伴わないものが多い。基本的には内面にミガキ調整が施されておらず、比較的粗い作りとなっている。体部の地文にはL RとR Lの単節斜位縄文と条痕文のものがある。底部は全て平底のものである。

#### I C 類

口縁部が内湾し、小波状の突起を伴うもの。口縁部直下には突起がなく、1～5条の沈線がめぐるものがほとんどで、一部、刺突を伴うものもある。体部の地文にはL RとR Lの単節斜位縄文・条痕文・無文のものがある。特に地文が縄文のものには、L RとR Lの縄文を交互に施した羽状縄文がある。底部の形には平底のものと、上げ底のものがある。

#### II A 類

口縁部が直線的に外に開き、平縁であるもの。口唇文様や口縁部直下に装飾を伴わないものが多い。体部の地文にはL RとR Lの単節斜位縄文と条痕文のものがある。底部の形態には、底面が外側に若干ふくらむものがあり、この類型に1点のみ見られる。

#### II C 類

口縁部が直線的に外に開き、小波状の突起を伴うもの。口縁部直下には突起がなく、2～3条の平行沈線が施される。また、小波状突起に刺突を伴うものがある。地文はL RとR Lの単節斜位縄文と条痕文のものがある。また体部文様が施されたものもあり（図版38-286）、この文様は他の器種には見られないものである。底部は全て平底のものである。

#### III 1 C 類

口縁部がS字状に外反し、短い頸部をもつもの。口縁部に小波状の突起を伴う。鉢形土器の全ての類型中で最も数の多いものである。口縁部直下に装飾が施されないものではなく、A突起・B突起・眼鏡状突起、2～5条の平行沈線、小波状突起や沈線間の刺突など、装飾の組み合わせも多く、I・II類に比較して装飾に富む。体部の地文はL RとR Lの単節斜位縄文のものも多く、条痕文もある。また体部文様の施されたものがあり（図版40-302）、この文様は浅鉢・皿形土器の配置文III 4類に当てはまる。底部は平底のものが多いが、上げ底のものもある。またこの類型には底に台部が付く器形の台付鉢があり、口縁部直下に他の鉢形土器には見られない把手状突起が施される。

#### III 2 A 類

口縁部がS字状に外反し、幅の広い頸部をもつもの。平縁で、口唇文様を伴うものも多く、特に口唇文様c類が伴う。口縁部直下にはA突起・B突起や2～4条の平行沈線、刺突列などの装飾が施される。体部の地文はL RとR Lの単節斜位縄文のものがあり、条痕文・無文のものはない。また体部文様の施されたものが2点あり（図版46-361・図版47-362）、この文様はそれぞれ浅鉢・皿形土器の配置文III 1・

Ⅲ4類に当てはまる。底部形態を窺えるものは少ないが、平底のもののみである。

### Ⅲ2B類

口縁部がS字状に外反し、幅の広い頸部をもつもの。平縁で突起を伴う。口唇文様には突起に伴って沈線（口唇文様b類）が施されるものが多い。また、口唇の突起と口唇直下の突起が交互に配置される構成となるものがある。口縁部直下にはA突起・B突起・把手状突起、1～4条の平行沈線、刺突の装飾が施される。体部の地文はLRとRLの単節斜位縄文のものがあり、条痕文・無文のものはない。また体部文様の施されたものがあり（図版45-352）、この文様は浅鉢・皿形土器の配置文I3に当てはまる。底部は平底のものが多いが、上げ底のものもある。この類型には底に台部が付く器形の台付鉢がみられる。図版51-418は底部を欠損しているが、台付鉢に特有と思われる把手状突起が口縁部に付されているため、台付鉢であったと考えられる。

### Ⅲ2C類

口縁部がS字状に外反し、幅の広い頸部をもつもの。小波状の突起を伴う。全体形を窺えるものは少ないが、口縁部にA突起・B突起や1～6条の沈線がめぐる。体部の地文はLRとRLの単節斜位縄文のものがあり、条痕文・無文のものはない。Ⅲ2類の器形には地文として条痕は伴わないようである。底部形態を窺えるものは、台部を持つ台付鉢しかない。

### Ⅳ類

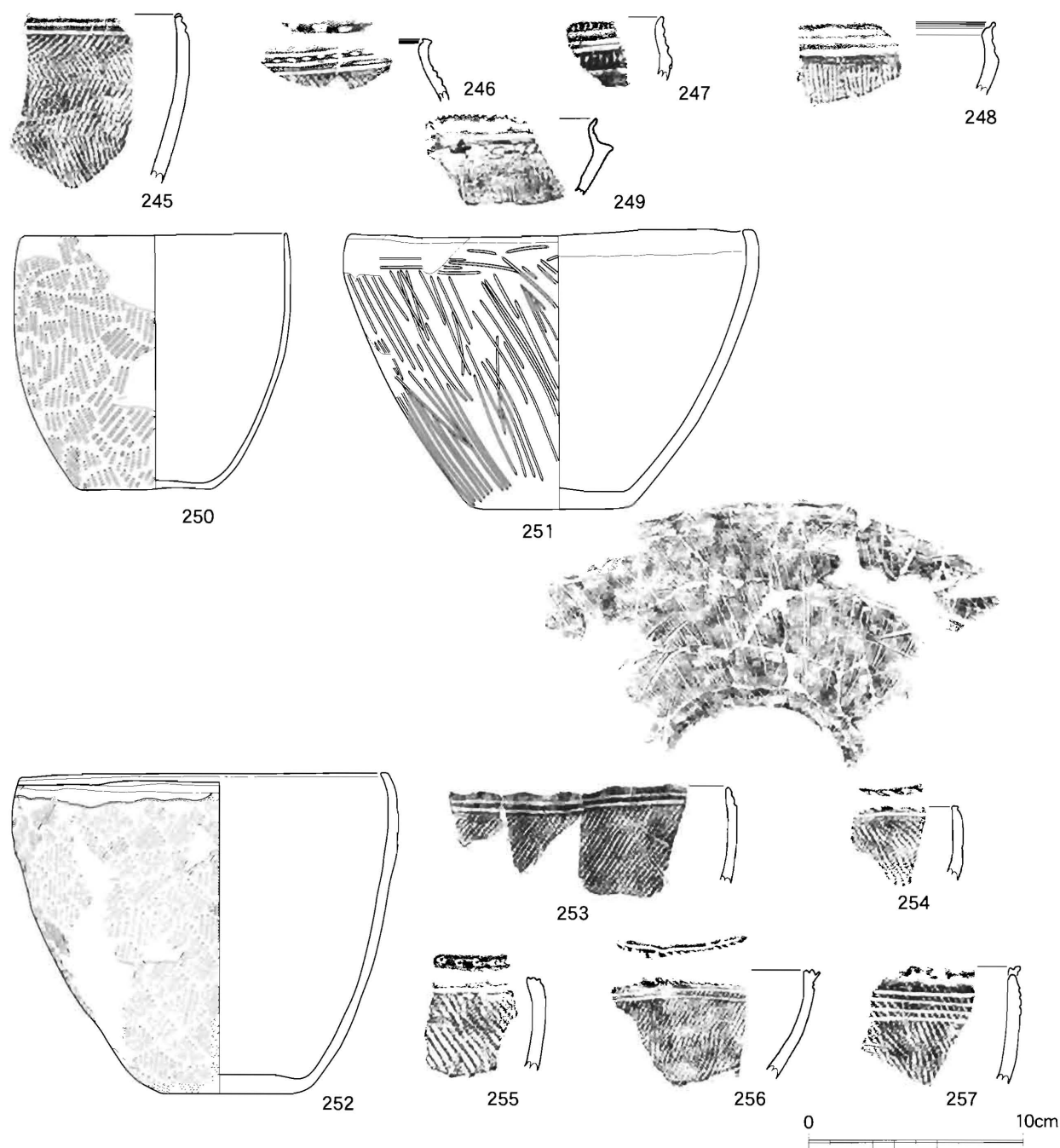
体部が強く内湾し、口唇部が外反するもの。口縁部には小波状の突起を伴う。I・II・Ⅲ1・Ⅲ2類に比べて数が少ない。口縁部にはB突起や1～4条の沈線がめぐる。体部の地文にはLRやRL単節斜縄文のものがある。底部形態を窺えるものはない。

### V類

口縁部が強く屈曲するもの。平縁のものと、口縁部に小波状の突起を伴うものがある。I・II・Ⅲ1・Ⅲ2類に比べて数が少ない。口縁部に突起はなく、平行沈線のみ伴う。体部の地文はLRとRLの単節斜縄文のものがある。底部は平底のものがある。

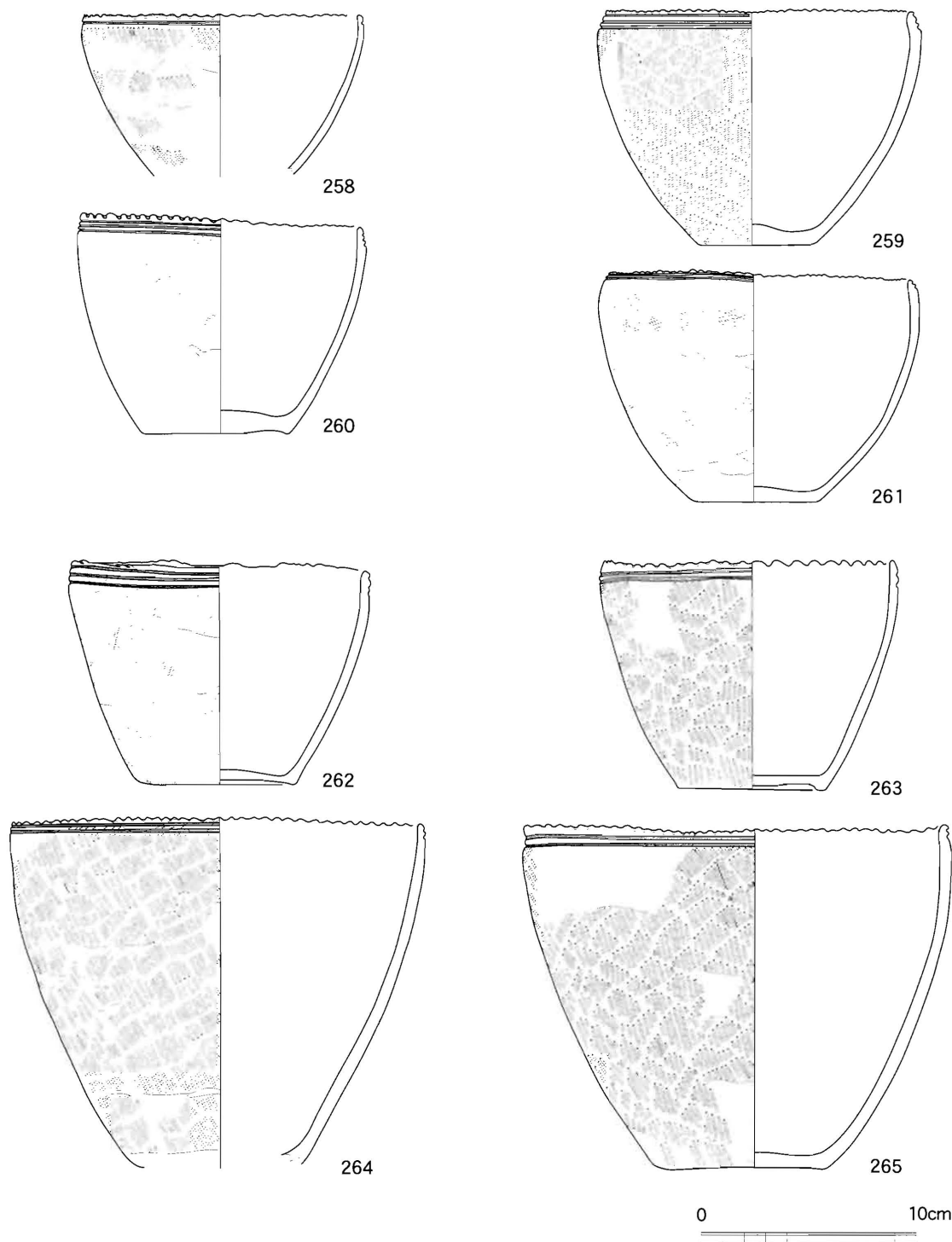
#### (iv) 傾向

I・II類などの口縁部にくびれを持たない類型は、比較的装飾に乏しい。反対にⅢ1・Ⅲ2類などの口縁部にくびれを持つ類型は装飾に富み、I・II類よりも個体数が多い。また、体部文様もⅢ1・Ⅲ2類に伴いやすい傾向にある。口縁部装飾の把手状突起は、弘大調査区においては台付鉢のみに施される装飾であると考えられる。体部の地文には縄文・条痕文・無文があるが、無文のものは極端に少ない。またⅢ2類には条痕文が伴わない。台付鉢はⅢ1類・Ⅲ2類にのみ伴う。特に口縁部に小波状突起を持つⅢ1C類に多い。



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
245	B3・I層	I C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文にRL・LR単節羽状縄文。	54-1
246	B3・I層	Ⅲ2A	—	—	—	口唇部に半円状の彫り込み。口縁部直下に3条の平行沈線と刺突。地文RL単節斜縄文。	54-2
247	B3・I層	Ⅲ2A	—	—	—	平縁である。口縁部直下に4条の平行沈線と刺突。地文不明。	54-2
248	A2・I層	Ⅲ1A	—	—	—	平縁である。口縁部直下に3条の平行沈線。地文条痕。	54-2
249	B2・Ⅱ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起と刺突。地文条痕。	54-3
250	A2⑤・Ⅲ層	I A	(12.4)	11.9	6.2	平縁である。全面にRL単節斜縄文が施され、装飾はない。底部平底。	37-1
251	A2⑨、B2⑥⑦・Ⅲ層	I A	(17.9)	12.9	6.2	平縁。全面に条痕が施され、口縁部が横方向、体部が縦方向の条痕。装飾はない。底部平底。	37-2
252	B3①④・Ⅳ層	I A	17.2	15.0	5.9	平縁である。口縁部に輪積み痕。全面にLR単節斜縄文が施され、装飾はない。	37-3
253	A3①・Ⅲ層	I A	—	—	—	口縁部に比較的大きめの波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。	54-4
254	A3⑥・Ⅲ層	I A	—	—	—	口唇部に斜めの切り込み。口縁部直下に1条の沈線。地文RL単節斜縄文。	54-4
255	A2⑨・Ⅲ層	I A	—	—	—	口唇部に竹管による押圧。口縁部直下に1条の沈線。地文RL単節斜縄文。	54-5
256	B3②・Ⅲ層	I A	—	—	—	口唇部に斜めの切り込みと1条の沈線。口縁部直下に2条の平行沈線。LR単節斜縄文。	54-5
257	B2⑤・Ⅲ層	I A	—	—	—	口唇部に2瘤1単位の装飾。口縁部直下に4条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	54-5

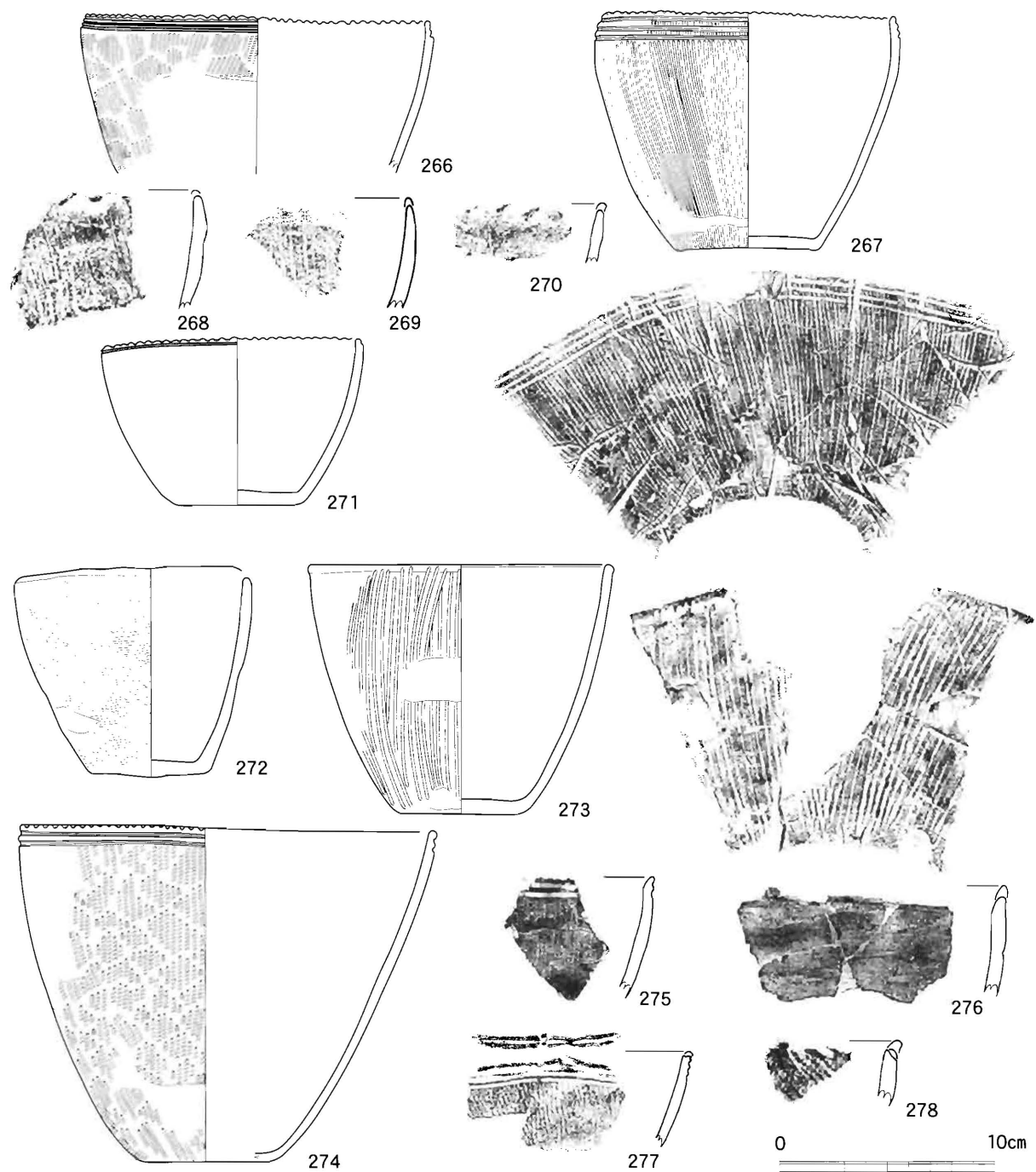
図版35 鉢245～257



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
258	B3②・Ⅲ層	I C	12.9	7.6	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に1条の沈線。地文LR・RL単節羽状縄文。	37-4
259	B2⑤⑧・Ⅲ層	I C	(14.3)	11.0	5.2	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文RL単節縦縄文。底部平底。	37-5
260	B2④・Ⅲ層	I C	13.0	10.6	6.9	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。底部平底。	37-6
261	B2①⑤⑥・Ⅲ層	I C	(14.0)	10.9	5.6	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文RL・LR単節羽状縄文。	38-1
262	B2⑥・Ⅲ層	I C	13.8	10.5	7.7	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。底部上げ底。	38-2
263	B2④⑦・Ⅲ層	I C	13.5	10.6	6.6	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。底部上げ底。	38-5
264	B2⑤、B3④⑤・Ⅳ層	I C	18.9	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	38-4
265	B3③④・Ⅲ層	I C	19.6	15.8	7.7	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。底部平底。	38-3

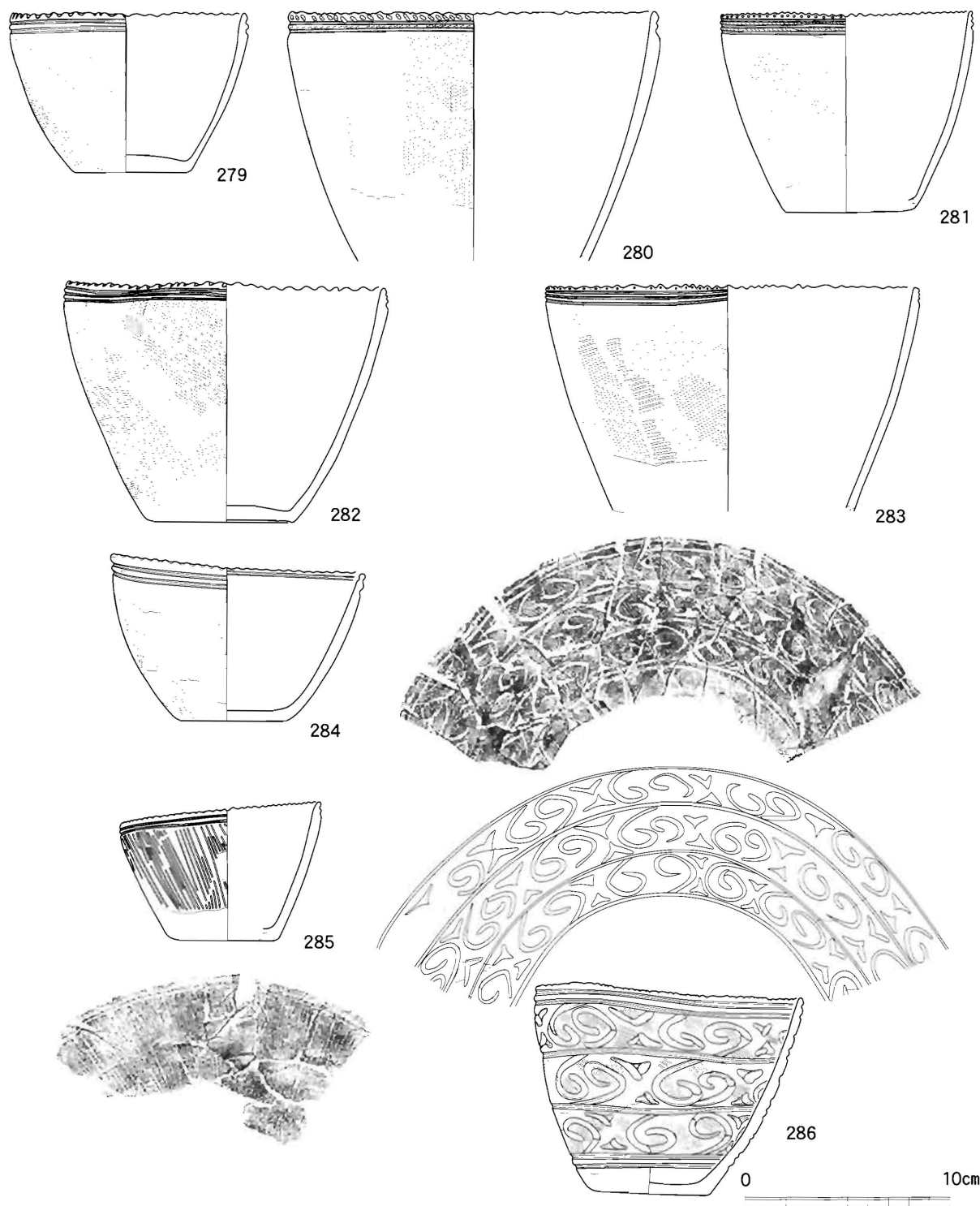
図版36 鉢258～265





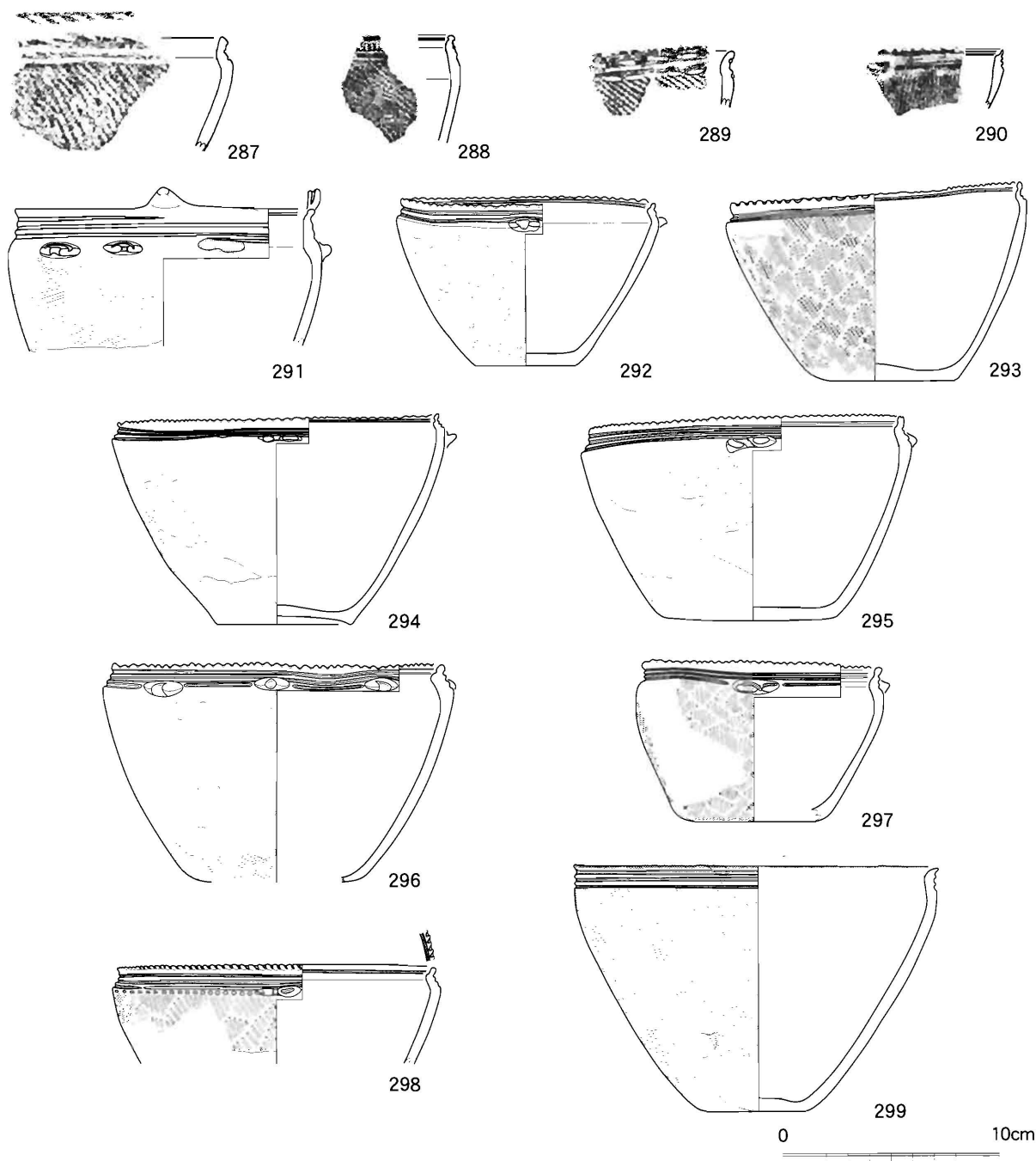
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
266	B2③・Ⅲ層	IC	(16.0)	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	38-6
267	B2⑥・Ⅲ層	IC	13.3	11.2	6.4	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文条痕。底部上げ底。	39-1
268	A2⑥・Ⅲ層	IC	—	—	—	口縁部に小波状突起。地文条痕で、装飾はない。	54-6
269	B2・Ⅲ層	IC	—	—	—	口縁部に小波状突起。地文条痕で、装飾はない。	54-6
270	B2⑦・Ⅲ層	II C	—	—	—	口縁部に小波状突起。地文条痕で、装飾はない。	54-6
271	B3⑥・Ⅲ層	IC	(11.9)	7.2	5.2	口縁部に小波状突起。口縁部直下に1条の沈線。無文。底部平底。	39-2
272	B3①・Ⅲ層	II A	(10.2)	9.7	5.5	平縁である。全面にLR単節斜縄文が施され、装飾はない。底部が膨らんでいる。	39-3
273	B3①③・Ⅲ層	II A	(14.2)	11.6	5.7	平縁である。全面に条痕が施され、装飾はない。底部平底。	39-4
274	B2⑧⑨、B3①②・Ⅲ層	II C	(19.2)	15.9	5.9	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。底部平底。	39-5
275	B2⑤・Ⅲ層	IC	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。無文。	55-1
276	B2②③・Ⅲ層	II B	—	—	—	口縁部に突起が1単位。全面無文で、装飾はない。	55-1
277	B3②・Ⅲ層	II B	—	—	—	口唇部に斜めの切り込みと沈線。口縁部に突起。口縁部直下に3条の平行沈線。RL単節斜縄文。	55-2
278	A2⑥・Ⅲ層	II B	—	—	—	口唇部に斜めの切り込み。口縁部に突起が1単位。地文RL単節斜縄文。	55-2

図版37 鉢266～278



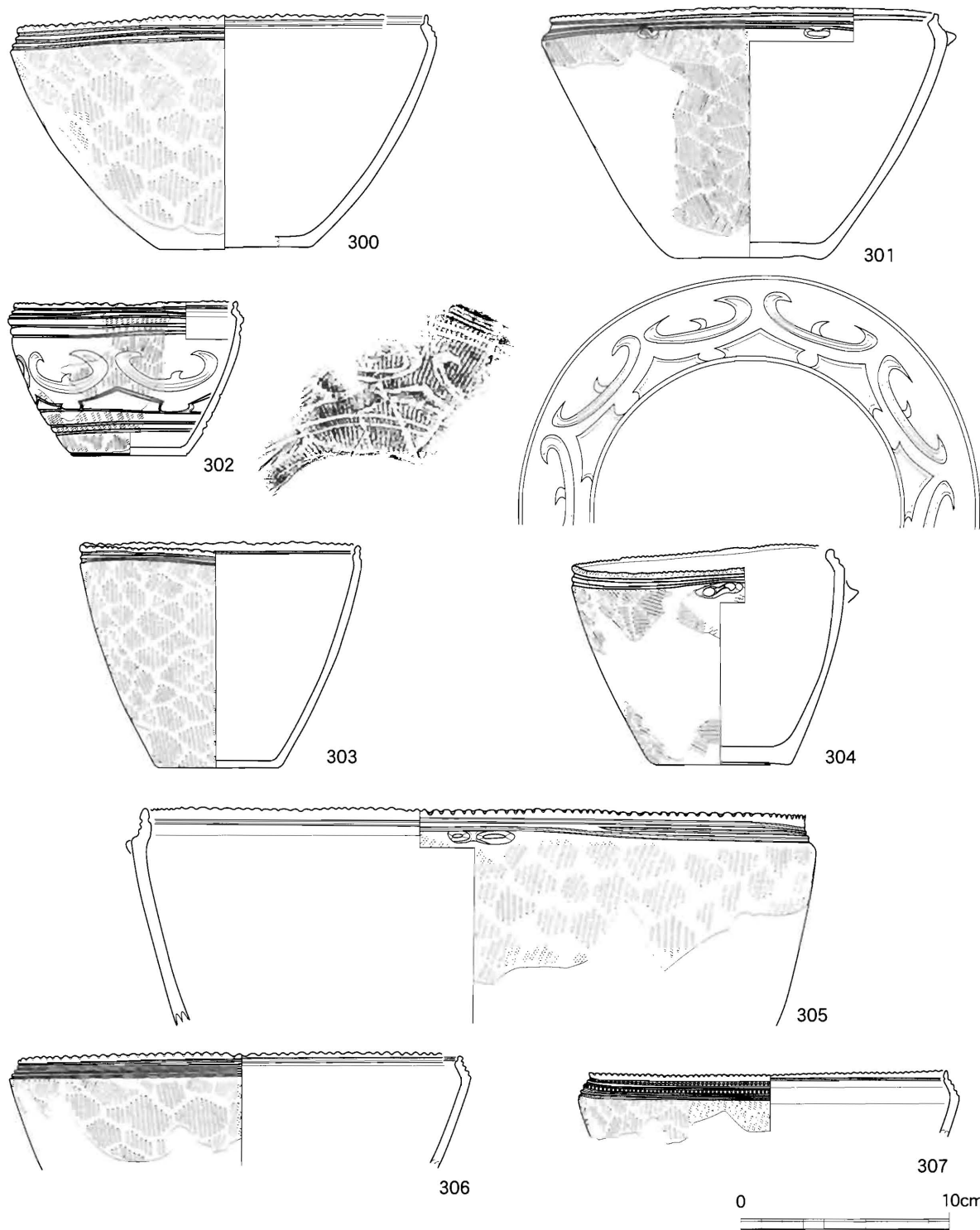
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
279	A3①③・Ⅲ層	ⅡC	(11.4)	7.9	5.6	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。底部平底。	39-6
280	B2①・Ⅲ層	ⅡC	(18.0)	—	—	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部直下に2条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。	40-1
281	B2⑦・Ⅲ層	ⅡC	12.3	9.7	—	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部直下に3条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。	40-2
282	B4①・Ⅲ層	ⅡC	17.1	13.7	6.4	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。底部上げ底。	40-3
283	A2⑦、A3①・Ⅲ層	ⅡC	(17.6)	—	—	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部直下に3条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。	40-4
284	B2③、B3⑤・Ⅲ層	ⅡC	12.5	8.2	5.2	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。底部平底。	40-5
285	B2①・Ⅲ層	ⅡC	10.4	6.4	4.1	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文条痕。	40-6
286	B2⑦⑧・Ⅲ層	ⅡC	13.2	9.9	5.6	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。体部に文様。RL単節斜縄文。底部平底。	41-1

図版38 鉢279～286



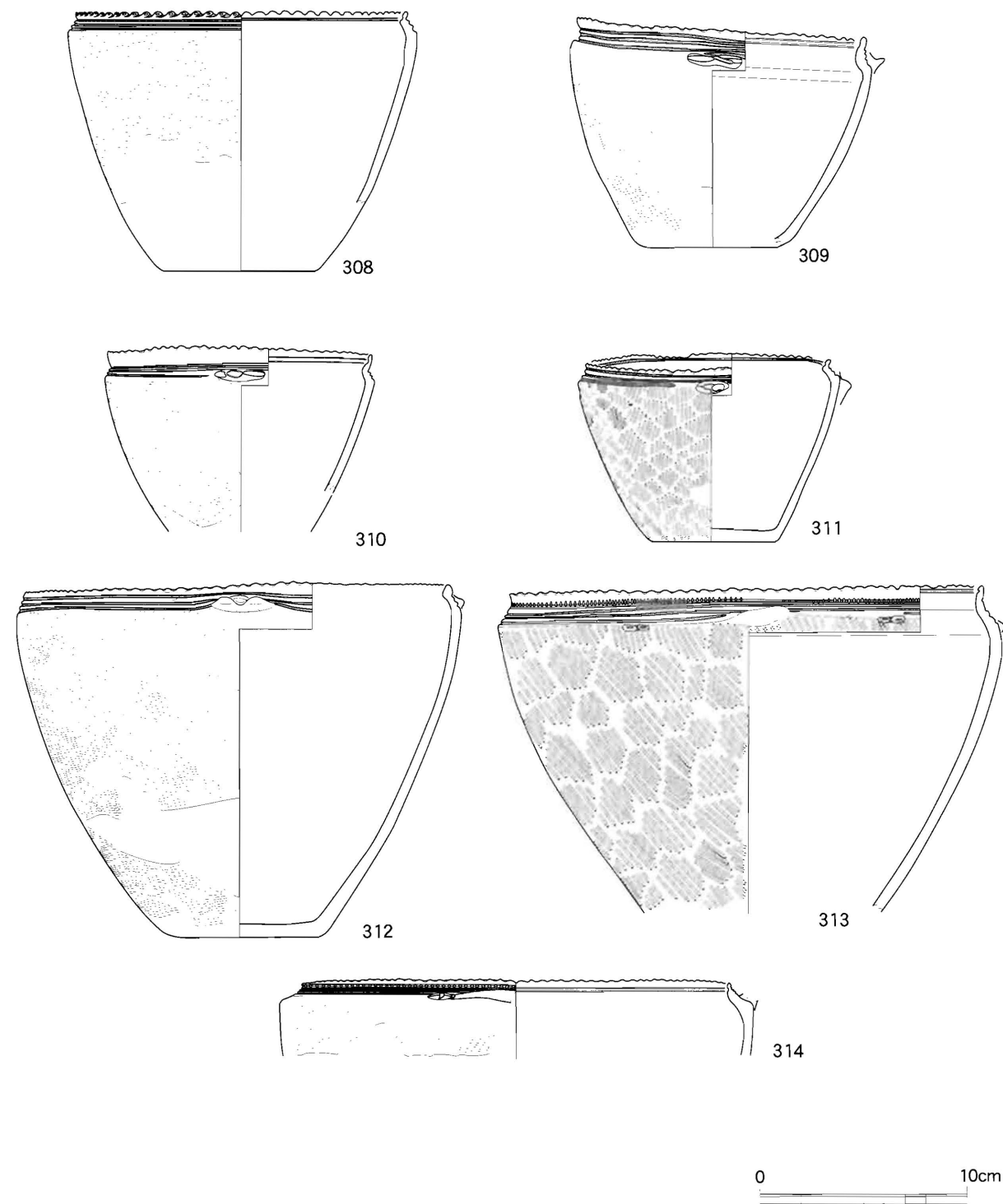
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
287	B2③・Ⅲ層	Ⅲ1A	—	—	—	口唇部に斜めの切り込み。口縁部直下に2条の平行沈線。RL単節斜縄文。	55-3
288	B3③・Ⅲ層	Ⅲ1A	—	—	—	平縁である。口縁部直下に3条の平行沈線、沈線の間に刺突。RL単節斜縄文。	55-3
289	B2⑨・Ⅳ層	Ⅲ1A	—	—	—	平縁である。口縁部直下に1条の沈線、沈線の上下に2列の刺突。RL単節斜縄文。	55-3
290	B2⑤・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起と刺突。LR単節斜縄文。	55-3
291	B2⑧・Ⅲ層	Ⅲ1B	(13.9)	—	—	口縁部に突起が1単位。口縁部直下に3条の平行沈線と突起2単位残存。LR単節斜縄文。	41-2
292	B2⑤⑥・Ⅲ層	Ⅲ1C	11.7	7.8	4.6	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。LR単節斜縄文。底部平底。	41-3
293	B2⑦⑧・Ⅲ層	Ⅲ1C	(13.3)	9.3	5.8	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。RL単節斜縄文。底部平底。	41-4
294	B2⑦、B3②③・Ⅲ層	Ⅲ1C	14.7	10.6	6.2	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起。LR単節斜縄文。底部上げ底。	41-5
295	B3②③④・Ⅲ層	Ⅲ1C	14.9	9.5	7.8	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。RL単節斜縄文。底部平底。	41-6
296	B2⑥・Ⅲ層	Ⅲ1C	14.9	10.0	6.7	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起3単位。RL単節斜縄文。	42-1
297	B2⑦、B3①・Ⅲ層	Ⅲ1C	11.2	7.5	6.6	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。RL単節斜縄文。底部平底。	42-2
298	B3①・Ⅲ層	Ⅲ1C	(14.0)	—	—	口唇部に斜めの切り込みと1条の沈線。口縁部直下に3条の平行沈線と突起と刺突。RL単節斜縄文。	42-3
299	B2⑦・Ⅲ層	Ⅲ1C	16.0	11.4	4.7	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。LR単節斜縄文。底部平底。	42-4

図版39 鉢287～299



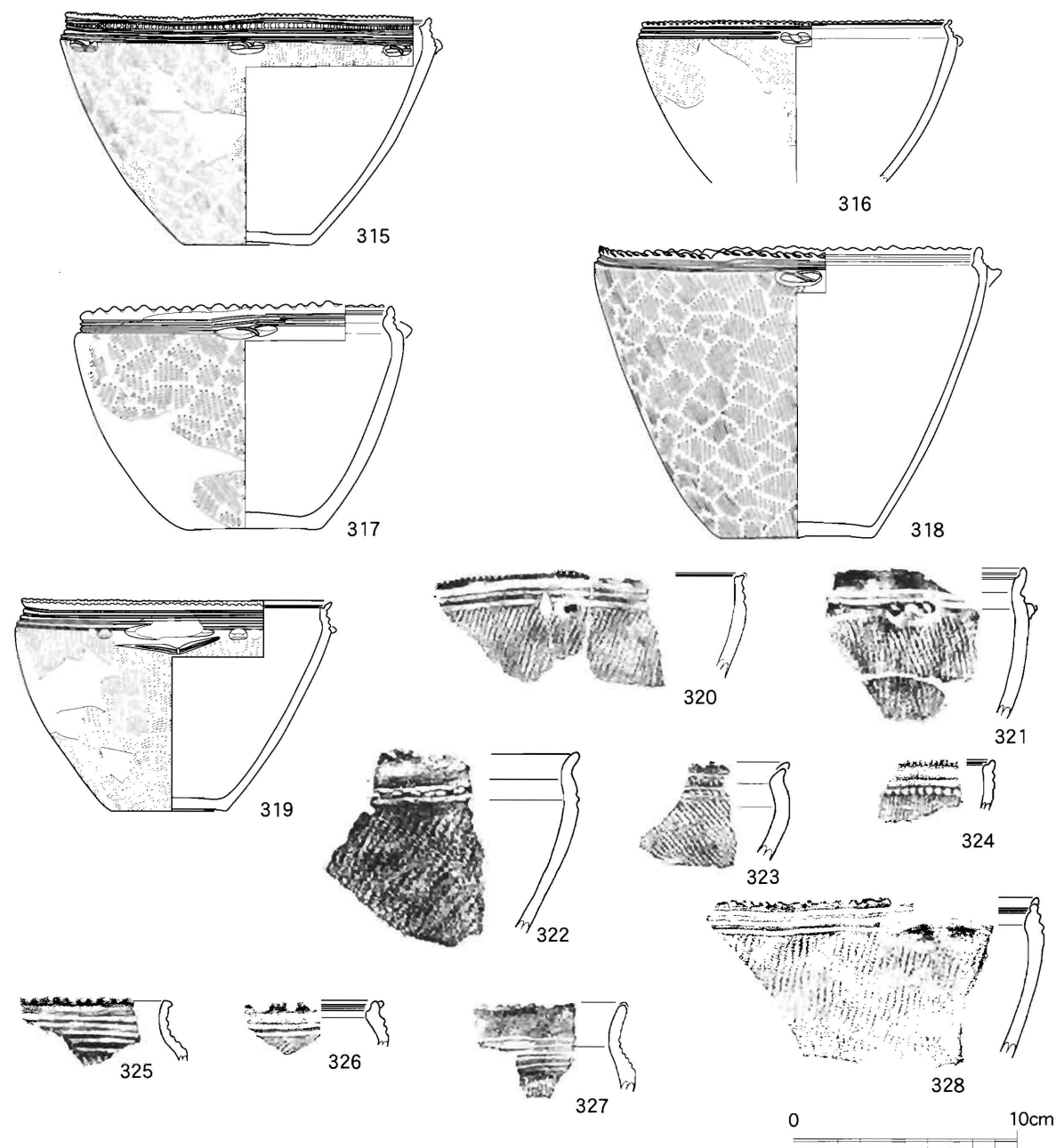
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
300	B2⑥・Ⅲ層	Ⅲ1C	19.7	11.2	7.4	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。底部平底。	42-5
301	B2⑦・Ⅲ層	Ⅲ1C	18.6	12.1	7.1	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。底部平底。	42-6
302	B2⑤⑦⑧・Ⅲ層	Ⅲ1C	(10.7)	7.4	5.5	口縁部に小波状突起。口縁部直下に5条の平行沈線。体部に文様。地文RL単節斜縄文。底部平底。	43-1
303	A2⑨・Ⅲ層	Ⅲ1C	13.3	10.8	5.9	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。底部平底。	43-2
304	B2①⑤⑦⑧・Ⅳ層	Ⅲ1C	12.6	9.4	6.5	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。底部上げ底。	43-3
305	B3①・Ⅲ層	Ⅲ2C	(31.8)	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。	43-4
306	B3⑥・Ⅲ層	Ⅲ1C	(20.1)	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。	43-5
307	B2・Ⅲ層	Ⅲ1C	(17.0)	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線、その間に2列の刺突。地文LR単節斜縄文。	43-6

図版40 鉢300～307



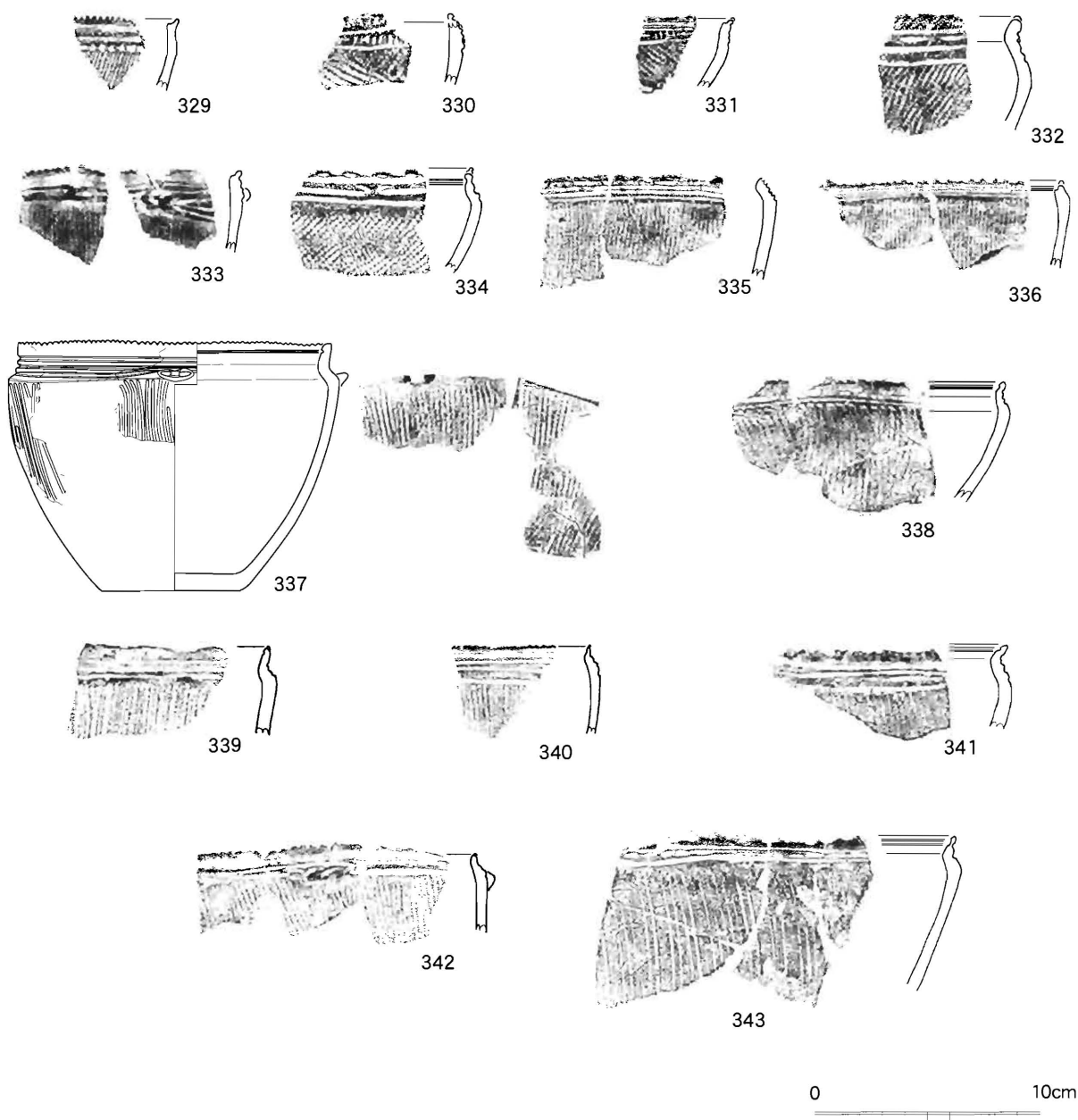
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特徴	写真
308	A2⑧・Ⅲ層	Ⅲ1C (16.0)	—	—	—	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部直下に3条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。	44-1
309	A3、B3①・Ⅲ層	Ⅲ1C	13.8	11.2	6.1	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起1単位。地文LR単節斜縄文。	44-2
310	B2⑥⑦・Ⅲ層	Ⅲ1C	12.5	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起1単位。地文RL単節斜縄文。	44-3
311	B2④⑤⑦⑧・Ⅲ層	Ⅲ1C	11.7	10.1	5.9	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起1単位。RL単節斜縄文。底部平底。	44-5
312	B2⑦・Ⅲ層	Ⅲ1C	20.5	17.1	7.0	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起1単位。LR単節斜縄文。底部平底。	44-4
313	B2①⑦⑧、 B3③④⑤・Ⅲ層	Ⅲ1C (22.8)	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線と刺突とA突起とB突起。RL単節斜縄文。	44-6
314	B2④・Ⅲ層	Ⅲ1C (20.0)	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線と刺突とA突起とB突起。RL単節斜縄文。	45-1

図版41 鉢308～314



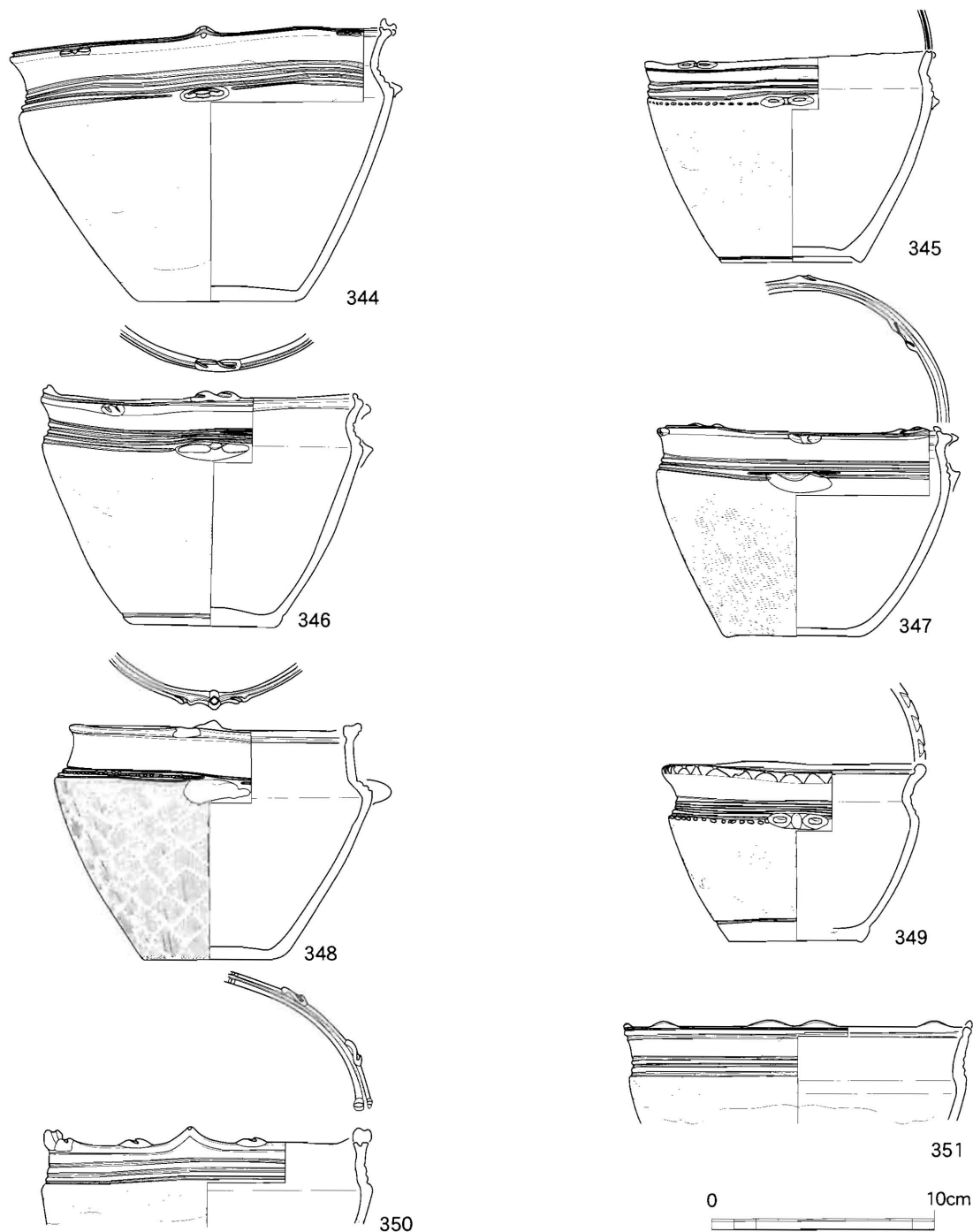
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
315	B3①④・Ⅳ層	Ⅲ1C	16.3	10.5	5.6	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線と刺突と突起。RL単節縦縄文。底部上げ底。	45-2
316	B3①・Ⅲ層	Ⅲ1C	13.9	—	—	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部直下に3条の平行沈線と突起1単位。LR単節斜縄文。	45-3
317	B3②③・Ⅳ層	Ⅲ1C	14.1	10.0	6.2	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起1単位。RL単節斜縄文。底部平底。	45-4
318	B2③・Ⅲ層	Ⅲ1C	16.9	13.1	6.9	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線と突起1単位。RL単節斜縄文。底部平底。	45-5
319	B3③・Ⅲ層	Ⅲ1C (13.8)	9.5	5.3	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線とA突起とB突起。RL単節斜縄文。底部上げ底。	45-6	
320	B2③・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起1単位。地文LR単節斜縄文。	55-4
321	B2⑦・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線と突起1単位。地文RL単節斜縄文。	55-4
322	B3①・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線、その間に刺突。地文LR単節斜縄文。	55-5
323	B2③・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線とその間に刺突2列。地文RL単節斜縄文。	55-5
324	B3②・Ⅳ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と刺突。地文RL単節斜縄文。	55-5
325	B2⑤・Ⅳ層	Ⅲ2C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に6条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	55-6
326	B2⑨・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口唇部に2瘤1単位の装飾。口縁部直下に3条の平行沈線。LR単節斜縄文。	55-6
327	B2⑤・Ⅳ層	Ⅲ2C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に6条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。	55-6
328	B2④・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部直下に3条の平行沈線と突起。LR単節斜縄文。	56-1

図版42 鉢315～328



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
329	B2③・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と刺突。地文RL単節斜縄文。	56-2
330	A3①・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部直下に2条の平行沈線残存、その間に刺突2列。地文RL単節斜縄文。	56-2
331	B3④・Ⅳ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と刺突。地文RL単節斜縄文。	56-2
332	B2⑨・Ⅳ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と刺突。地文LR単節斜縄文。	56-2
333	B3②・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線と眼鏡状突起。地文LR単節縦縄文。	56-3
334	A3③・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部に3条の平行沈線、その1条は文様か。RL単節斜縄文。	56-3
335	B2⑤・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	56-4
336	B2⑤・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	56-4
337	B3②④⑤⑥・Ⅲ層	Ⅲ1C	(14.1)	11.1	6.4	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起1単位。地文条痕。底部平底。	46-1
338	B3①・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線、沈線直下に刺突。地文RL単節斜縄文。	56-5
339	B2③・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文条痕。	56-6
340	B3②・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線。地文条痕。	56-6
341	B2⑥・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線。地文条痕。	56-6
342	B3⑤⑥・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起1単位。地文条痕。	57-1
343	B2③・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文条痕。	57-1

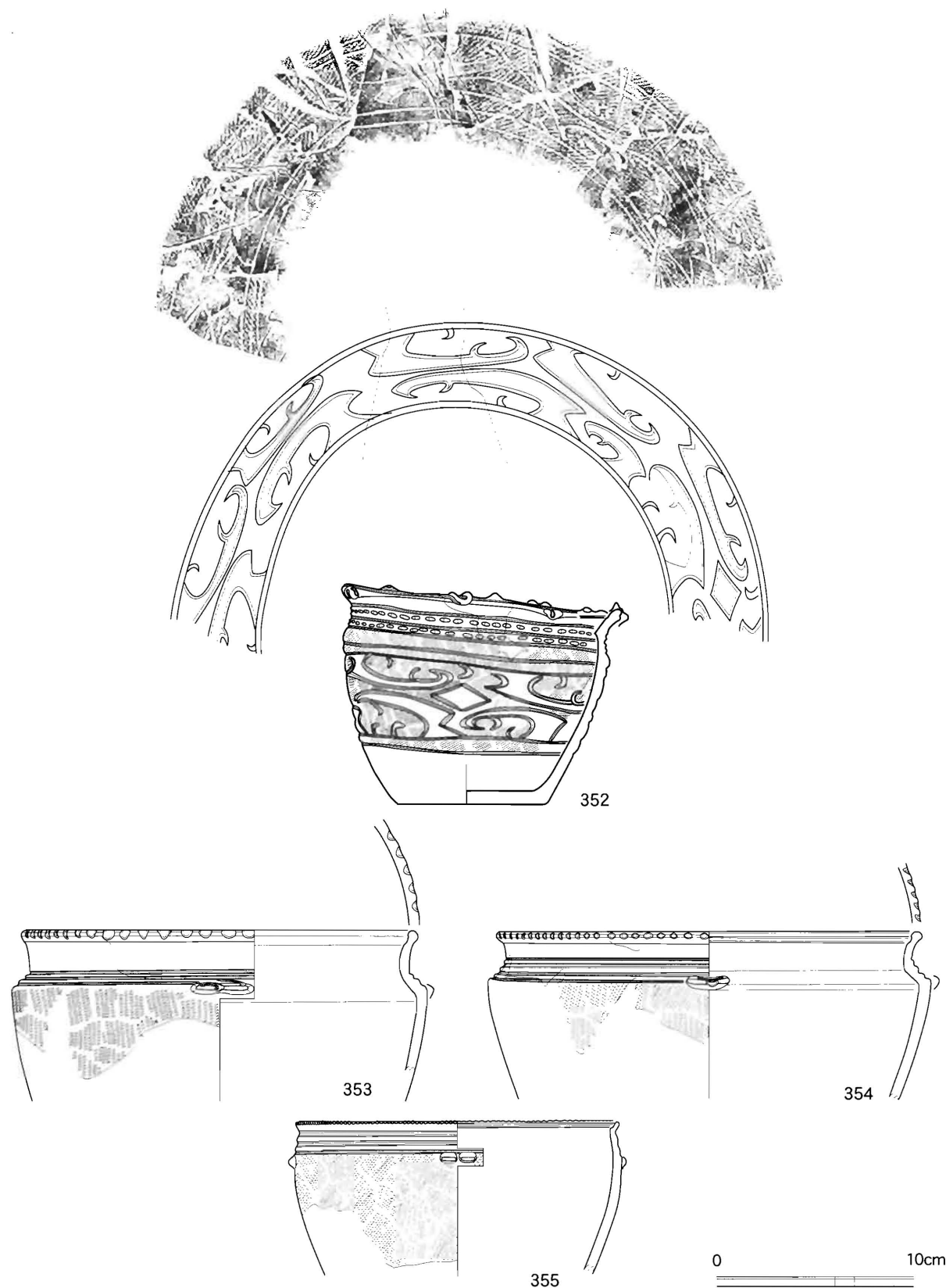
図版43 鉢329～343



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
344	B2⑦⑧、B3①、A3③・Ⅲ層	Ⅲ2B	17.2	12.4	7.3	口唇部に1条の沈線。口縁部にA突起2単位、B突起2単位残存。口縁部直下に4条の平行沈線と突起1単位。地文RL単節斜縄文。底部平底。	46-2
345	B2③・Ⅲ層	Ⅲ2B (12.9)	9.1	6.3	6.3	口唇部に1条の沈線。口縁部に突起1単位残存。口縁部直下に4条の平行沈線、沈線直下に刺突と突起1単位。地文RL単節斜縄文。底部上げ底。	46-3
346	A3③・Ⅲ層	Ⅲ2B	13.7	10.7	6.4	口唇部に1条の沈線。口縁部に突起2単位残存。口縁部直下に4条の平行沈線と突起1単位。地文RL単節斜縄文。底部平底。	46-4
347	A2②③⑥・Ⅲ層	Ⅲ2B	13.3	9.9	6.2	口唇部に1条の沈線。口縁部上端と下端にそれぞれ突起4単位ずつ。口縁部直下に4条の平行沈線と突起1単位。地文LR単節斜縄文。底部平底。	46-5
348	A3⑧・Ⅳ層	Ⅲ2B	13.2	10.8	5.9	口唇部に1条の沈線。口縁部にA突起1単位とB突起2単位1組の突起。口縁部直下に3条の平行沈線と間に刺突。地文RL単節斜縄文。底部平底。	46-6
349	B3①②・Ⅲ層	Ⅲ2A	11.2	8.1	6.0	口唇部に台形状の彫り込み。口縁部直下に4条の平行沈線、沈線直下に刺突。地文RL単節斜縄文。底部平底。	47-1
350	B2②⑦⑧・Ⅲ層	Ⅲ2B (14.6)	—	—	—	口唇部に1条の沈線。口縁部にA突起1単位とB突起2単位1組の突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	47-2
351	B2⑧・Ⅲ層	Ⅲ2B (15.8)	—	—	—	口縁部に突起2単位残存。口縁部直下に4条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	47-3

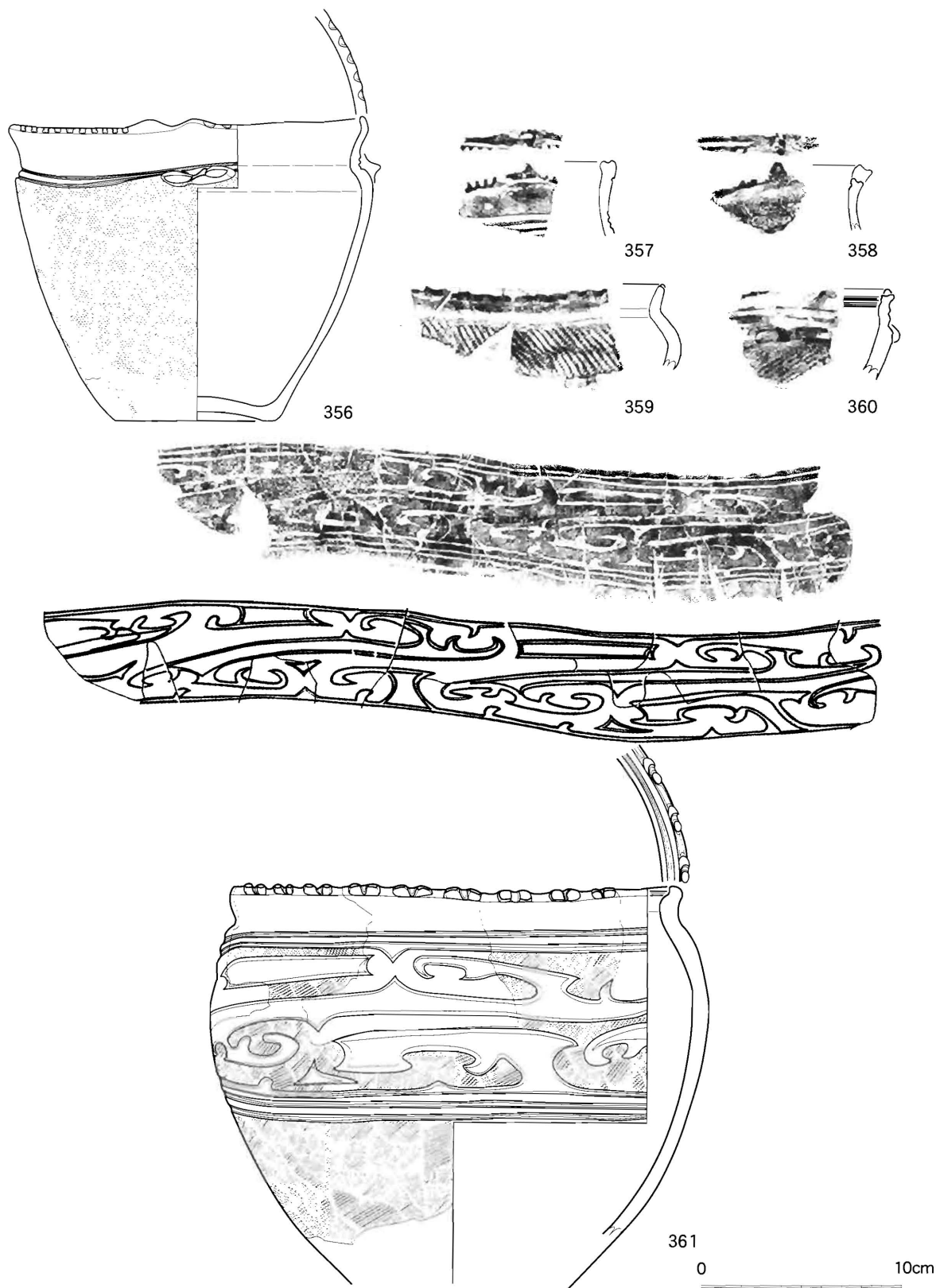
図版44 鉢344～351





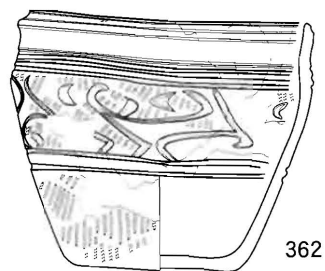
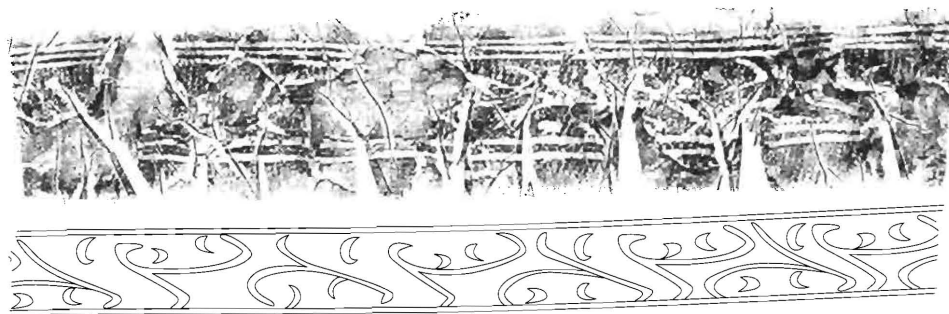
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
352	A2⑧、A3②、 B2⑧・Ⅲ層	Ⅲ2B	14.0	11.0	5.4	口縁部にA突起4単位、2種類のB突起が4単位ずつ。口縁部直下に3条の平行沈線、その間に刺突2列。体部に文様。地文LR単節斜縄文。底部平底。	47-4
353	B2⑦⑧・Ⅲ層	Ⅲ2A	(21.5)	—	—	口唇部に半円状の彫り込み。口縁部直下に3条の平行沈線と突起1単位。地文RL単節斜縄文。	48-1
354	B3②・Ⅲ層	Ⅲ2A	20.0	—	—	口唇部に半円状の彫り込み。口縁部直下に4条の平行沈線と突起1単位。地文RL単節斜縄文。	47-5
355	B2④・Ⅲ層	Ⅲ2C	(16.5)	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起2単位残存。地文LR単節斜縄文。	48-2

図版45 鉢352～355

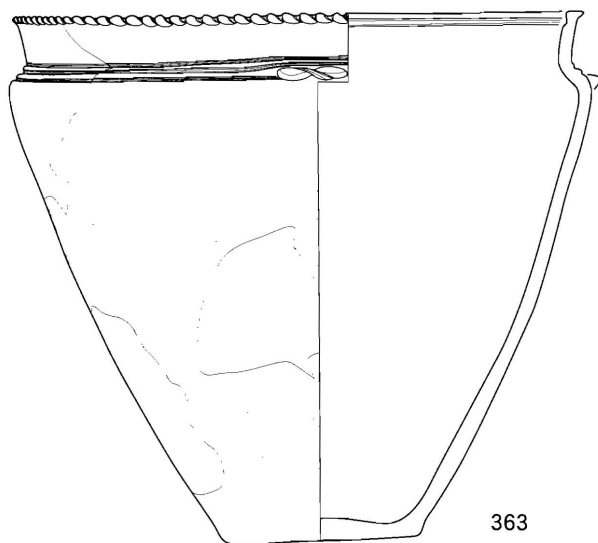


番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
356	A3③・Ⅲ層	Ⅲ2B	17.5	15.1	7.8	口唇部に楕円状の彫り込み。口縁部に2個1対の突起1単位。口縁部直下に2条の平行沈線と突起1単位。地文RL単節斜縄文。底部上げ底。	48-3
357	B2④・Ⅲ層	Ⅲ2B	—	—	—	口唇部に斜めの切り込み。口縁部に突起1単位。口縁部直下に3条の平行沈線残存。地文不明。	57-2
358	B2②・Ⅲ層	Ⅲ2B	—	—	—	口唇部に1条の沈線。口縁部にA突起とB突起が1単位ずつ残存。地文不明。	57-2
359	A2④・Ⅲ層	Ⅲ2C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に1条の沈線。地文LR単節斜縄文。	57-3
360	B3③・Ⅲ層	Ⅲ2B	—	—	—	口唇部に1条の沈線。口縁部直下に4条の平行沈線と眼鏡上突起。地文LR単節斜縄文。	57-3
361	B3⑥⑦・Ⅲ層	Ⅲ2A	21.9	—	—	口唇部に2瘤1単位の突起。口縁部直下に2条の平行沈線。体部に文様。LR単節斜縄文。	48-4

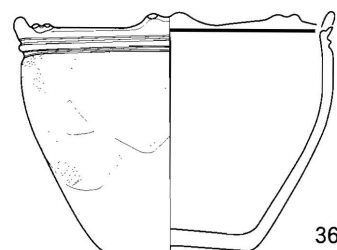
図版46 鉢356～361



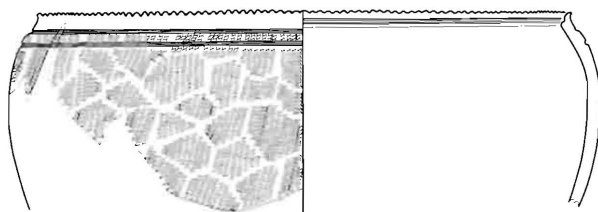
362



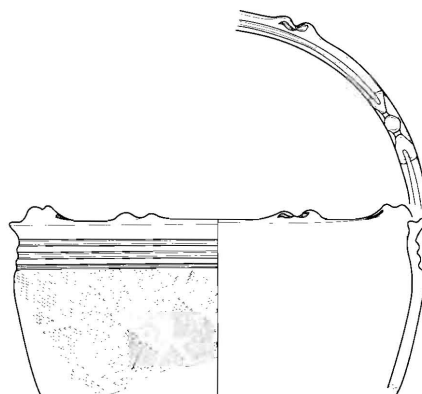
363



364



365

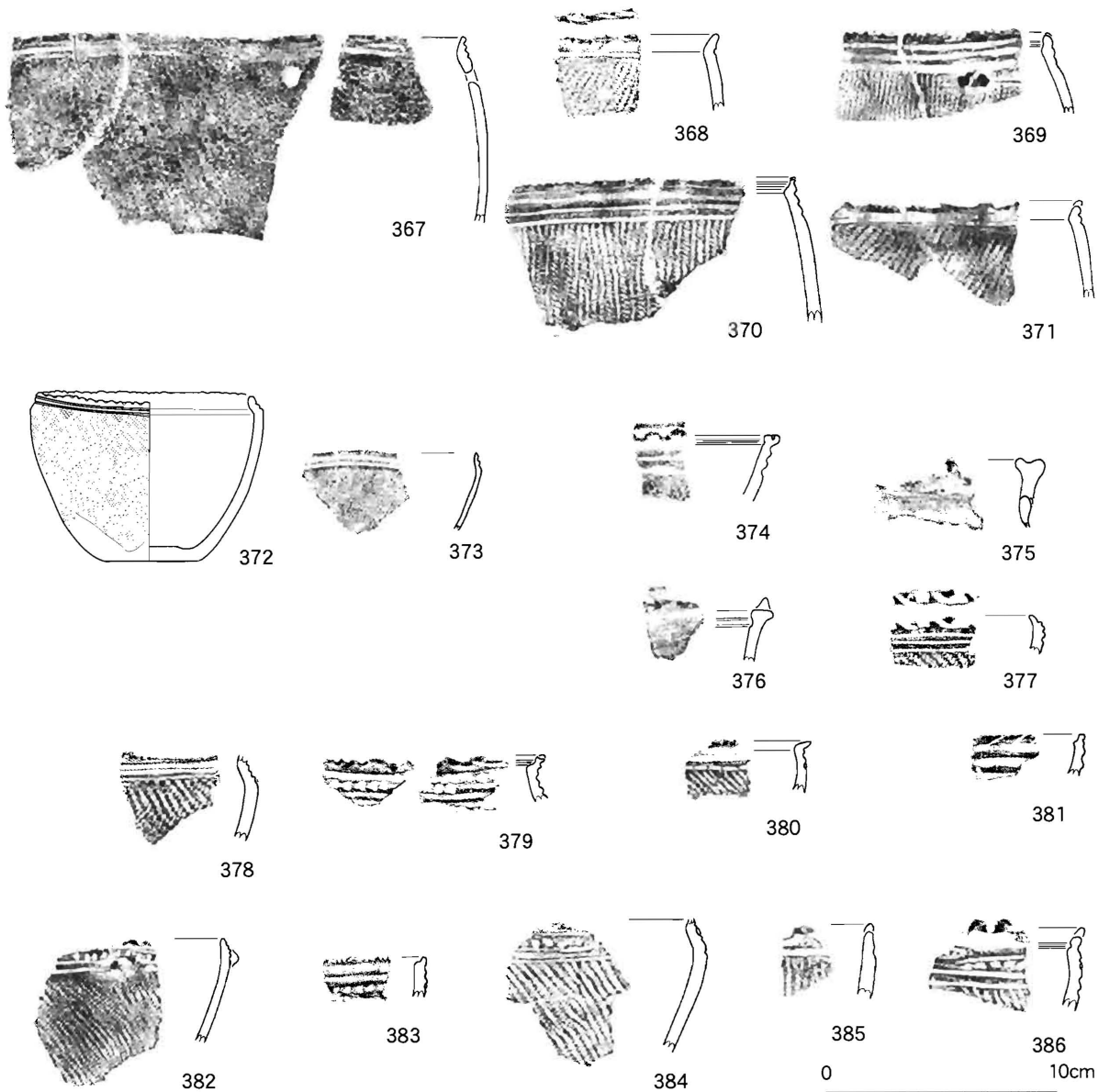


366



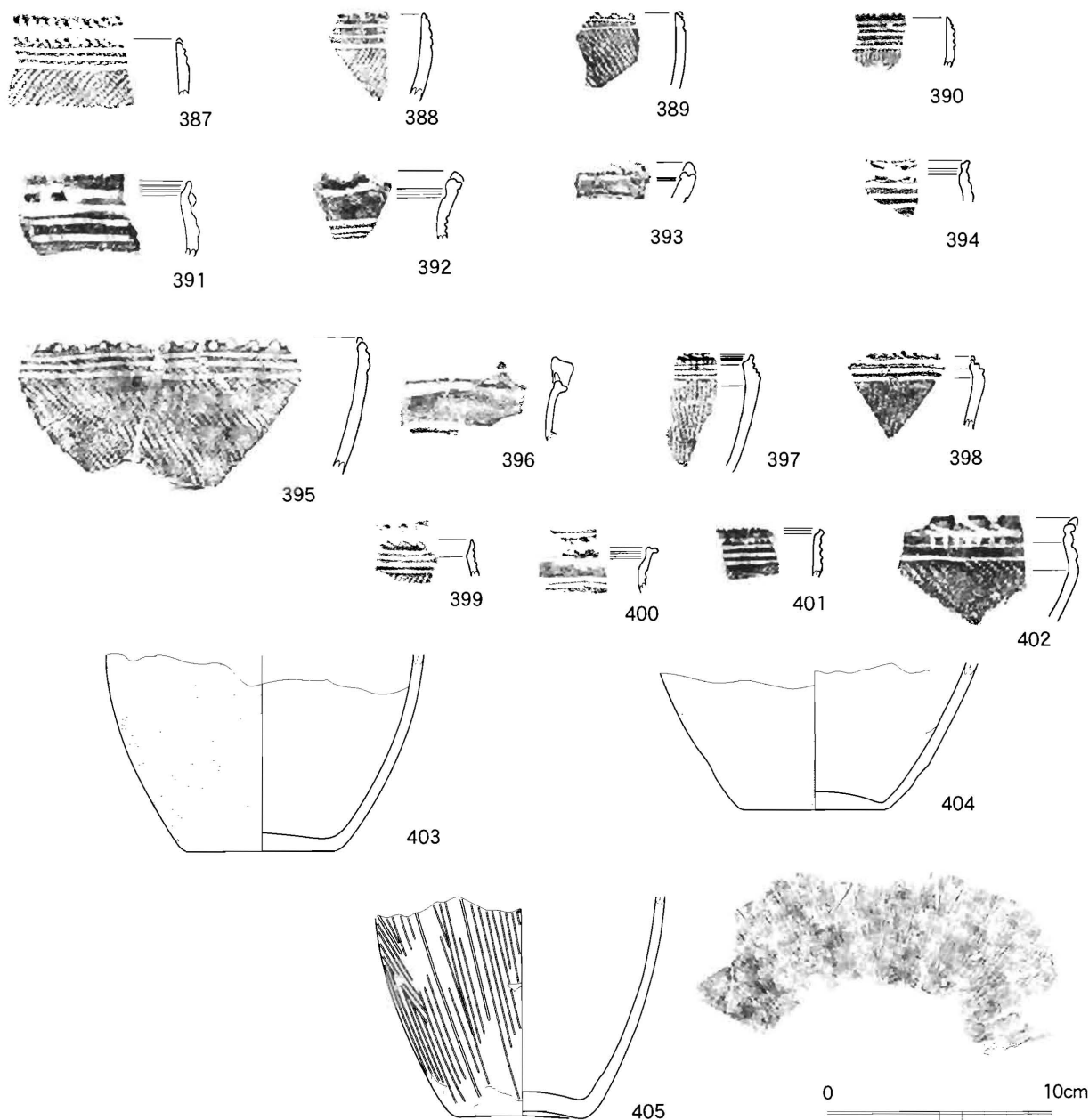
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
362	B3①②・IV層	Ⅲ2A	11.2	10.4	6.8	平縁である。口縁部直下に3条の平行沈線。体部に文様。RL単節斜縄文。底部平底。	49-1
363	B2⑤・Ⅲ層	Ⅲ2A	(22.7)	21.0	7.5	口唇部に斜めの切り込み。口縁部に3条の平行沈線と突起1単位。RL単節斜縄文。底部平底。	49-3
364	B2⑤・Ⅲ層	Ⅲ2B	12.7	10.4	5.7	口縁部に2種類のB突起が4単位ずつ。口縁部に2条の平行沈線。LR単節斜縄文。底部上げ底。	49-2
365	—	IV	(21.2)	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。RL単節斜縄文。	49-4
366	B2⑥・Ⅲ層	Ⅲ2B	(16.6)	—	—	口縁部に突起2単位残存。口縁部直下に3条の平行沈線。LR単節斜縄文。	49-5

図版47 鉢362～366



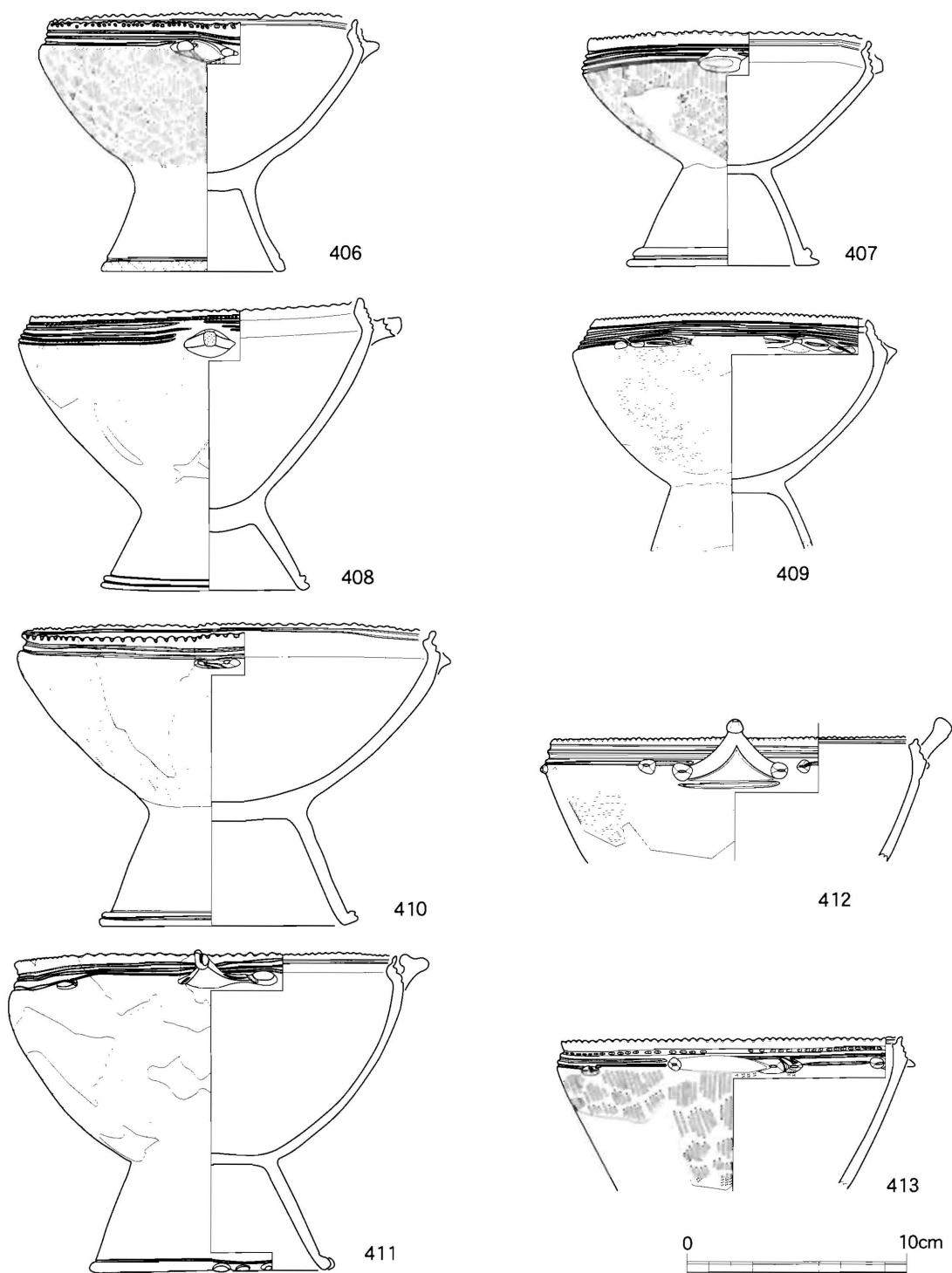
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
367	B2⑥・Ⅲ層	Ⅳ	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線、沈線直下に穿孔。地文LR単節斜縄文。	57-4
368	B2③・Ⅲ層	Ⅳ	—	—	—	口唇部に斜めの切り込み。口縁部に1条の沈線。地文LR単節斜縄文。	57-5
369	B2⑤・Ⅲ層	Ⅳ	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起1単位。地文LR単節斜縄文。	57-5
370	B2①・Ⅲ層	Ⅳ	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。	57-6
371	B3②・Ⅲ層	Ⅳ	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	57-6
372	B3①・Ⅲ層	Ⅴ	(8.7)	7.3	4.0	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	50-1
373	B2⑤・Ⅳ層	Ⅴ	—	—	—	平縁である。口縁部直下に2条の平行沈線、その間に刺突。地文LR単節斜縄文。	58-1
374	A2⑧・Ⅲ層	—	—	—	—	口唇部に三角形の彫り込み。口縁部直下に3条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	58-2
375	B2②・Ⅲ層	—	—	—	—	口縁部にA突起とB突起が1単位ずつ残存。地文不明。	58-2
376	B3・Ⅲ層	—	—	—	—	口縁部に突起1単位。地文不明。	58-2
377	B2⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	口唇部に不整形の彫り込み。口縁部直下に3条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	58-2
378	B3②・Ⅲ層	—	—	—	—	口縁部直下に4条の平行沈線、沈線直下に刺突。地文RL単節斜縄文。	58-3
379	B3・Ⅰ層	—	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に5条の平行沈線、その間に刺突2列。地文不明。	58-3
380	A2⑧・Ⅲ層	—	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線、沈線直下に刺突。地文RL単節斜縄文。	58-3
381	B2③・Ⅲ層	—	—	—	—	口唇部に斜めの切り込み。口縁部直下に3条の平行沈線。地文不明。	58-3
382	B3⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起と刺突。RL単節斜縄文。	58-4
383	B3②・Ⅲ層	—	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線、沈線直下に刺突。地文不明。	58-4
384	A3・Ⅲ層	—	—	—	—	口縁部直下に4条の平行沈線、沈線の間に刺突。地文RL単節斜縄文。	58-4
385	A2・Ⅲ層	—	—	—	—	口縁部に突起1単位。口縁部直下に2条の平行沈線。地文条痕。	58-4
386	B2①・Ⅳ層	—	—	—	—	口縁部直下に羊歯状文が崩れた形の装飾。地文RL単節斜縄文。	58-5

図版48 鉢367～386



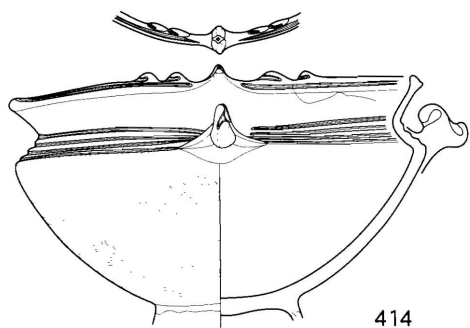
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
387	—	ⅡA	—	—	—	口唇部に斜めの切り込み。口縁部直下に3条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。	58-6
388	—	ⅠC	—	—	—	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部直下に3条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。	58-6
389	—	ⅠC	—	—	—	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部直下に2条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	58-6
390	—	ⅠC	—	—	—	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部直下に5条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	58-6
391	—	Ⅳ	—	—	—	平縁である。口縁部直下に4条の平行沈線、沈線の間に突起1単位。	59-1
392	—	—	—	—	—	口唇部に1条の沈線。口縁部に突起1単位。口縁部直下に3条の平行沈線。地文不明。	59-1
393	—	—	—	—	—	口縁部に突起1単位。地文不明。	59-1
394	—	—	—	—	—	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部直下に3条の平行沈線。地文不明。	59-1
395	—	ⅠC	—	—	—	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部に3条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	59-2
396	—	Ⅲ2B	—	—	—	口唇部に1条の沈線。口縁部にA突起が1単位残存。口縁部直下に1条の沈線残存。地文不明。	59-3
397	—	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	59-4
398	—	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	59-4
399	—	—	—	—	—	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部直下に4条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。	59-3
400	—	—	—	—	—	口唇部に斜めの切り込みと1条の沈線。口縁部直下に2条の平行沈線。地文不明。	59-3
401	—	—	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線、沈線の間に刺突。地文LR単節斜縄文。	59-3
402	—	—	—	—	—	口縁部に3条の平行直線、その間に刺突。地文LR単節斜縄文。	59-5
403	A3③・Ⅲ層	—	—	—	3.6	地文LR単節斜縄文。底部平底。	50-2
404	B3②・Ⅲ層	—	—	—	6.5	地文RL単節縦縄文。底部平底。	50-3
405	B3①・Ⅲ層	—	—	—	5.8	地文条痕。底部上げ底。	50-4

図版49 鉢387～405

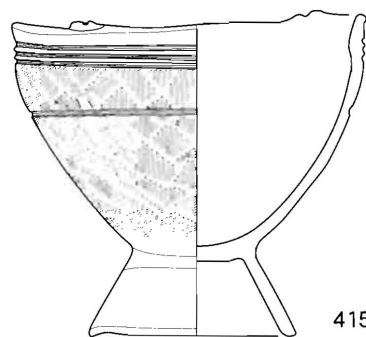


番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
406	A2、B3⑨・Ⅲ層	Ⅲ1C	11.5	13.9	8.3	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部直下に 3 条の平行沈線と突起。RL 単節斜縄文。台部に沈線と縄文。	50-5
407	B2④⑤・Ⅳ層	Ⅲ1C	10.7	12.9	8.4	口縁部に小波状突起。口縁部直下に 4 条の平行沈線と突起。RL 単節斜縄文。台部に沈線。	50-6
408	B2⑧・Ⅲ層	Ⅲ1C	13.5	15.1	9.5	口縁部に小波状突起。口縁部直下に 5 条の平行沈線と突起。RL 単節斜縄文。台部に沈線。	51-1
409	A2⑨、A3⑤・Ⅲ層	Ⅲ1C	7.6	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に 2 条の平行沈線と突起。RL 単節斜縄文。	51-2
410	A2①⑥・Ⅲ層	Ⅲ1C	18.9	13.9	11.8	口縁部に小波状突起。口縁部直下に 2 条の平行沈線と突起。RL 単節斜縄。	51-3
411	A2⑨、B3②・Ⅳ層	Ⅲ1C	14.9	16.6	10.3	口縁部に小波状突起。口縁部直下に 3 条の平行沈線と把手状突起 1 単位と B 突起 2 単位。地文 RL 単節斜縄文。台部に 1 条の沈線と突起 2 単位。	51-4
412	B3①・Ⅲ層	Ⅲ1C	(16.5)	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に 3 条の平行沈線と A 突起と B 突起。地文 LR 単節縦縄文。	51-5
413	B2②・Ⅲ層	Ⅲ1C	(15.1)	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に刺突と 2 条の平行沈線と A 突起、B 突起。RL 単節斜縄文。	51-6

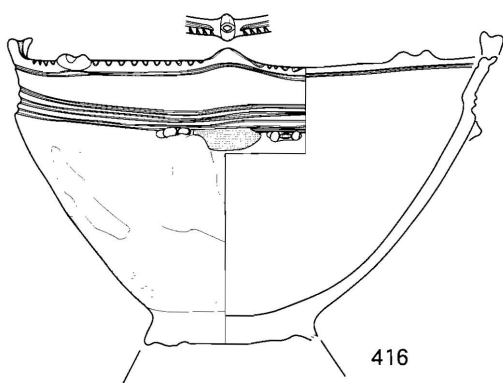
図版50 鉢406～413



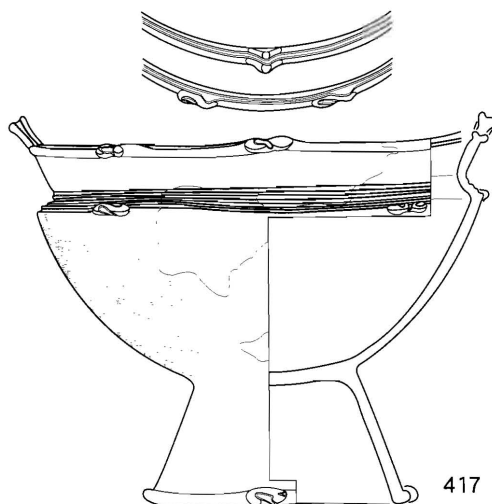
414



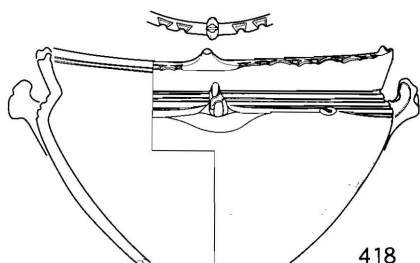
415



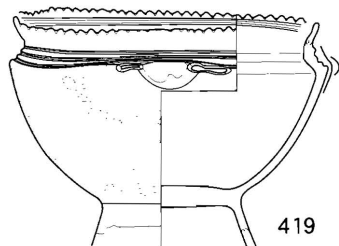
416



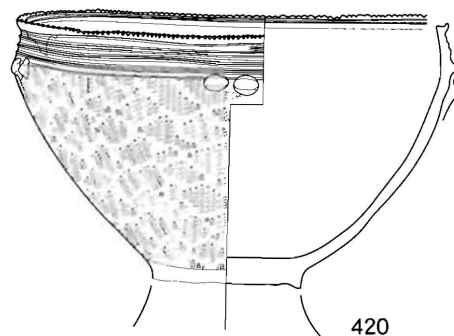
417



418



419

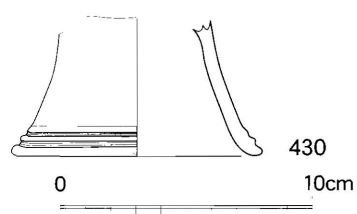
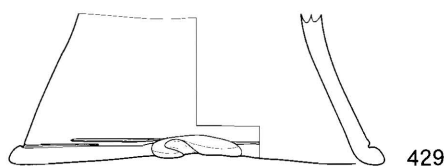
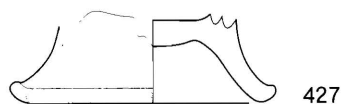
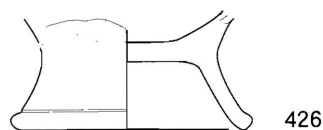
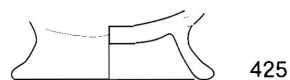
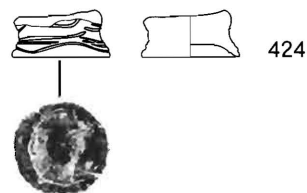
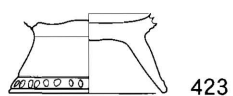
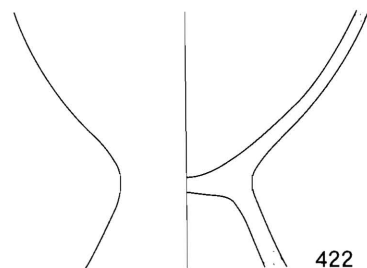
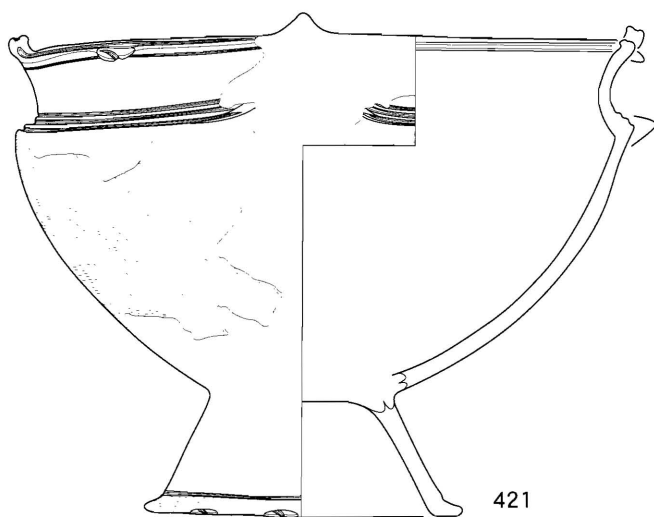


420

0 10cm

番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
414	B2⑦⑧・Ⅲ層	Ⅲ2C	10.4	—	—	口唇部に1条の沈線。口縁部にA突起1単位とB突起2単位。口縁部直下に4条の平行沈線と把手状突起。LR単節斜縄文。	52-1
415	B3④⑤・Ⅳ層	Ⅲ2C	(13.0)	14.1	4.8	口縁部に突起が2単位。口縁部直下に3条の平行沈線。体部に1条の沈線。地文RL単節斜縄文。	52-2
416	B2⑥、B3①②・Ⅲ層	Ⅲ2C	12.4	—	—	口唇部に1条の沈線と斜めの切り込み。口縁部にA突起とB突起。口縁部直下に4条の平行沈線とB突起2単位。地文LR単節斜縄文。	52-3
417	B2⑦、B3②・Ⅲ層	Ⅲ2C	16.0	19.4	10.6	口唇部に1条の沈線。口縁部にA突起とB突起。口縁部直下に4条の平行沈線とB突起。地文LR単節斜縄文。台部に突起。	52-5
418	A3③・Ⅲ層	Ⅲ2C	13.8	—	—	口唇部に台形状の彫り込み。口縁部に突起。口縁部に4条の平行沈線と把手状突起とB突起。地文LR単節斜縄文。	52-6
419	B2⑤・Ⅲ層	Ⅲ2C	9.1	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部に3条の平行沈線と破損した突起。地文LR単節斜縄文。	52-4
420	B2⑥・Ⅲ層	Ⅲ2C	10.9	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部に4条の平行沈線と突起。地文RL単節斜縄文。	53-1

図版51 鉢414～420



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
421	B2⑥・Ⅲ層	Ⅲ 2 A	(20.1)	23.5	12.7	口唇部に1条の沈線。口縁部にA突起とB突起が交互に配置。口縁部直下に3条の平行沈線とA突起。地文LR単節斜縄文。台部に縄文と突起と1条の沈線。	53-2
422	B3①②・Ⅲ層	—	—	—	—	無文の台付鉢である。外面にケズリ痕がのこる。	53-3
423	B3・Ⅰ層	—	—	—	—	台付鉢の台である。刺突が施される。	53-6
424	B2⑧・Ⅲ層	—	—	—	—	台付鉢の台である。	53-4
425	B2⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	台付鉢の台である。	53-5
426	A2⑨・Ⅲ層	—	—	—	—	台付鉢の台である。地文RL単節斜縄文。	53-7
427	B2①・Ⅲ層	—	—	—	—	台付鉢の台である。地文RL単節斜縄文。	53-8
428	A2⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	台付鉢の台である。	53-9
429	B2⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	台付鉢の台である。突起と1条の沈線が施される。	53-10
430	B3⑥・Ⅲ層	—	—	—	—	台付鉢の台である。2条の平行沈線が施される。	53-11

図版52 鉢421～430



## (6) 深 鉢

深鉢形土器は底部から口縁部までの形をうかがえるものが少ない。また、完形資料では、底部から体部にかけては顕著な器形の変化がないため、口縁部を中心にして分類をおこなった。

### (i) 分 類

・器形（模式図 1 参照）

I：口縁部が内湾するもの。

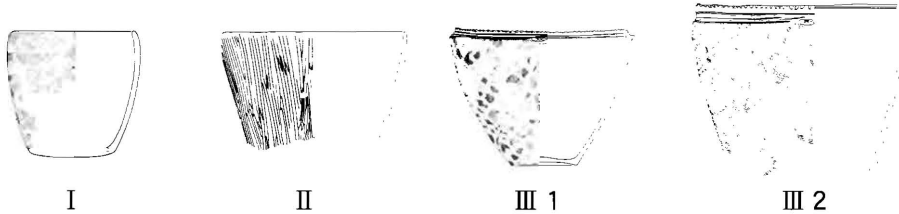
II：口縁部が直線的に立ち上がるもの。

III：口縁部がS字状に外反するもの。さらに2種類に分類される。

1：外反する短い頸部をもつもの。

2：外反する幅の広い頸部をもつもの。

模式図 1 器形



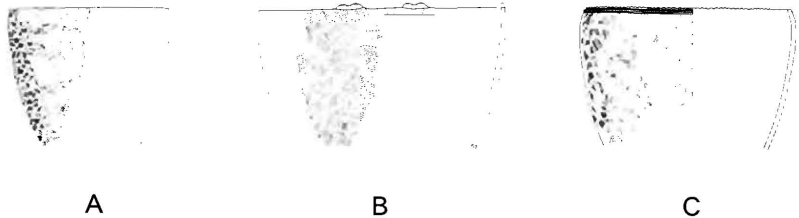
・口縁部の形態（模式図 2 参照）

A：平縁のもの。

B：平縁で突起を伴うもの。

C：小波状の突起を伴うもの。

模式図 2 口縁部形態



### (ii) その他の特徴

①口唇部の文様（模式図 3 参照）

a. 無し。

b. 楕円形に彫り込まれるもの。

c. 台形状に彫り込まれるもの。

d. 半円状に彫り込まれるもの。

e. 沈線が施されるもの。

f. 斜めの刻みが施されるもの。

e の沈線は、他の装飾と組み合わせられて施されることがある。

②口縁部直下の装飾

口縁部の装飾を大きく分けると、a. 突起（B突起のみ）、b. 沈線（1条または数条の平行沈線）、c. 刺突、の三種類があり、それぞれが組み合わせられて施される。組み合わせには以下の5種類がある。

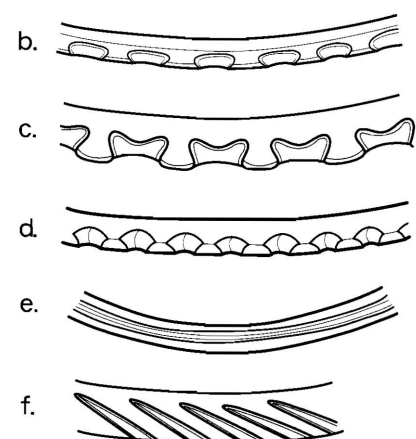
1、なし

2、沈線

3、突起+沈線

4、突起+刺突

模式図 3 口唇文様



## 5、沈線+刺突

### ③体部の特徴

#### ・体部の地文

- a. 縄文が施されるもの。
- b. 条痕文が施されるもの。
- c. 無文のもの。

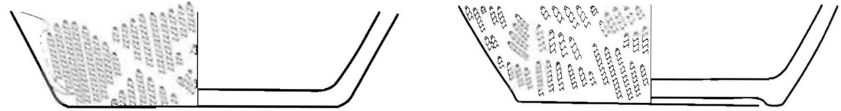
なお、深鉢形土器に体部文様が施されたものは見られなかった。

### ④底部の特徴

#### ・底部形態（模式図4参照）

模式図4 底部形態

- 1類：平底のもの。
- 2類：上げ底のもの。



#### I A類

##### 1類

口縁部がゆるやかに内湾し、平縁のものである。口唇部、口縁部直下に装飾・文様帯がなく、全体に地文が施されるものがほとんどである。地文には縄文のものと条痕文のものが半々ずつある。

#### I B類

口縁部がゆるやかに内湾し、口縁部に突起を伴うものである。口縁部の突起以外には、平行沈線や突起などの装飾がなく、全体に地文が施されるものがほとんどである。地文には縄文のものと条痕文のものが半々ずつある。

#### I C類

口縁部がゆるやかに内湾し、口縁部に小波状の小突起が伴うものである。口縁部直下に1～4条の平行沈線がめぐるものがほとんどで、I A類・I B類よりも装飾に富む傾向にあり、全体に地文が施されるものがほとんどである。地文には縄文のものと条痕文のものが半々ずつある。

#### II A類

口縁部が直線的に立ち上がり、平縁のものである。口唇部、口縁部直下に装飾がなく、全体に地文が施されるものがほとんどである。また地文が縄文よりも、条痕文のほうが多い。

#### II B類

口縁部が直線的に立ち上がり、口縁部に突起を伴うものである。5点のみである。口縁直下の突起以外には、平行沈線や突起などの装飾がない。地文には縄文と条痕文のものとがある。

#### II C類

口縁部が直線的に立ち上がり、口縁部に小波状の突起を伴うものである。口縁部直下に1～4条の平行沈線がめぐるものがほとんどで、II A類・II B類よりも装飾に富む傾向にある。全体に地文が施されるものがほとんどである。また地文が縄文よりも、条痕文のほうが多い。

#### III 1 A類

口縁部がS字状に外反する短い頸部をもち、平縁のものである。4点のみである。口縁部直下に2～4条の平行沈線がめぐり、地文は縄文である。

#### III 1 C類

口縁部がS字状に外反する短い頸部をもち、口縁部に小波状の小突起を伴うものである。また口縁部直下には2～4条の平行沈線がめぐり、地文は縄文が多く、条痕文は少ない。

#### III 2 A類

口縁部にS字状に外反する幅の広い頸部をもち、平縁のものである。口唇部には彫り込みによる装飾、口縁直下にはB突起や3～5条の平行沈線が施されるものが多く、他の類型に比べ装飾に富む。

地文は縄文が多く、条痕文は少ない。

### Ⅲ 2 B類

口縁部にS字状に外反する幅の広い頸部をもち、口縁部に突起を伴うものである。1点のみである。口縁部の突起はB突起である。口唇部に1条の沈線、口縁部直下に4条の平行沈線がめぐる。地文は縄文である。Ⅲ類で口縁部にB突起をもつものは、この1点のみである（図版64-484）。

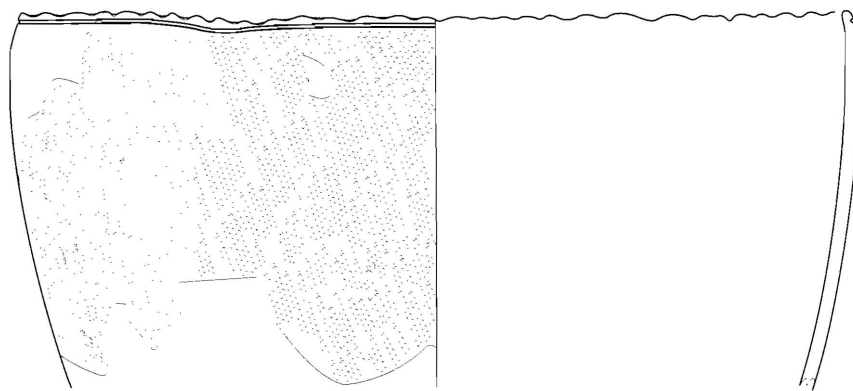
### Ⅲ 2 C類

口縁部にS字状に外反する幅の広い頸部をもち、口縁部に小波状の突起を伴うものである。4点のみである。口縁部直下に2～4条の平行沈線がめぐる。地文が縄文のものが3点、条痕文のものが1点ある。

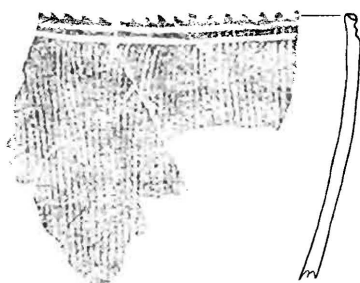
### (iii) 傾 向

深鉢は、器形・装飾が鉢と非常に類似している。よって、鉢と深鉢を明確に判別することは難しい。深鉢には、体部文様が伴うものは無い。また、鉢に比べて条痕文の割合が多く、類型によっては条痕文の割合が縄文を上回る。深鉢の器面にサルボウ貝など二枚貝の腹縁内部に見られる小歯列の圧痕が見られるものが1点ある（図版56-450・写真73）。これは、器面に条痕文を施すときに付いたものと考えられる。だが、これ以外の条痕文の原体について、今回は詳しく触れることができなかった。

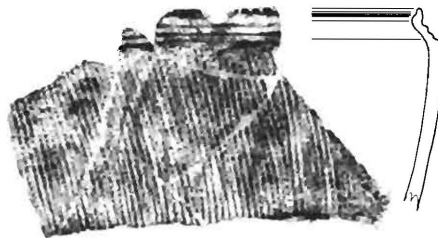
なお、深鉢の中で小型のものには漆を入れる容器として利用したものがあり、これについては第4章第2節(9)を参照してほしい。



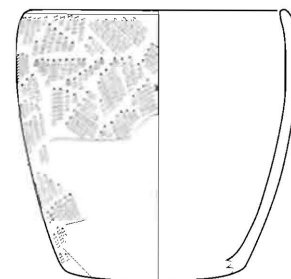
431



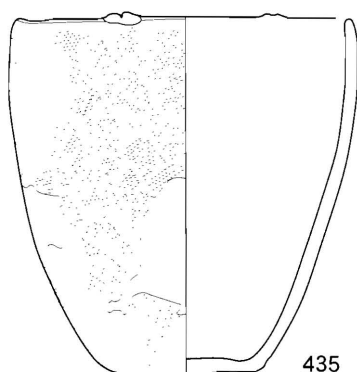
432



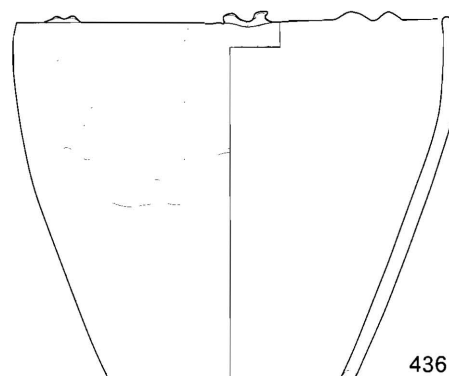
433



434



435

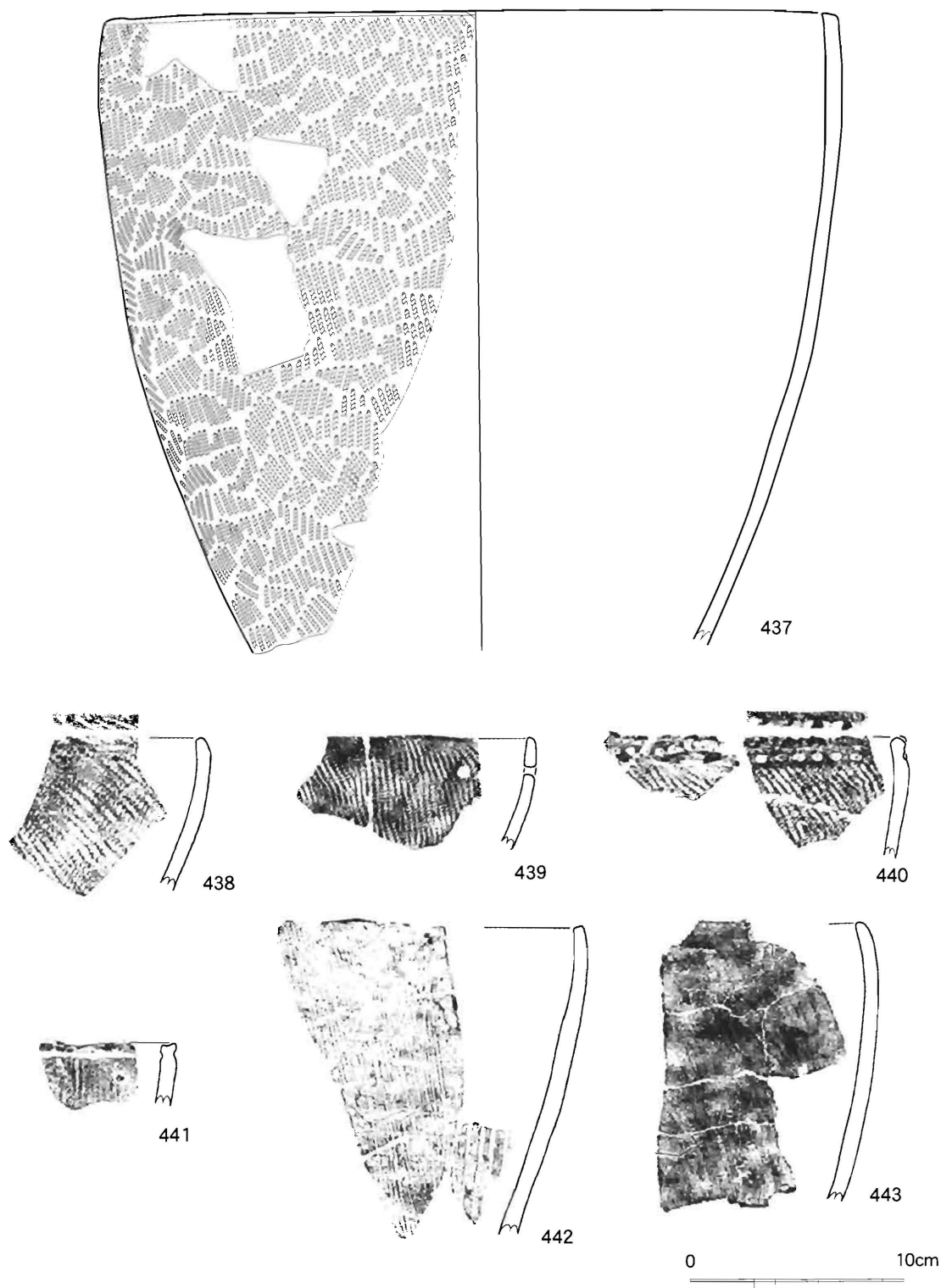


436

0 10cm

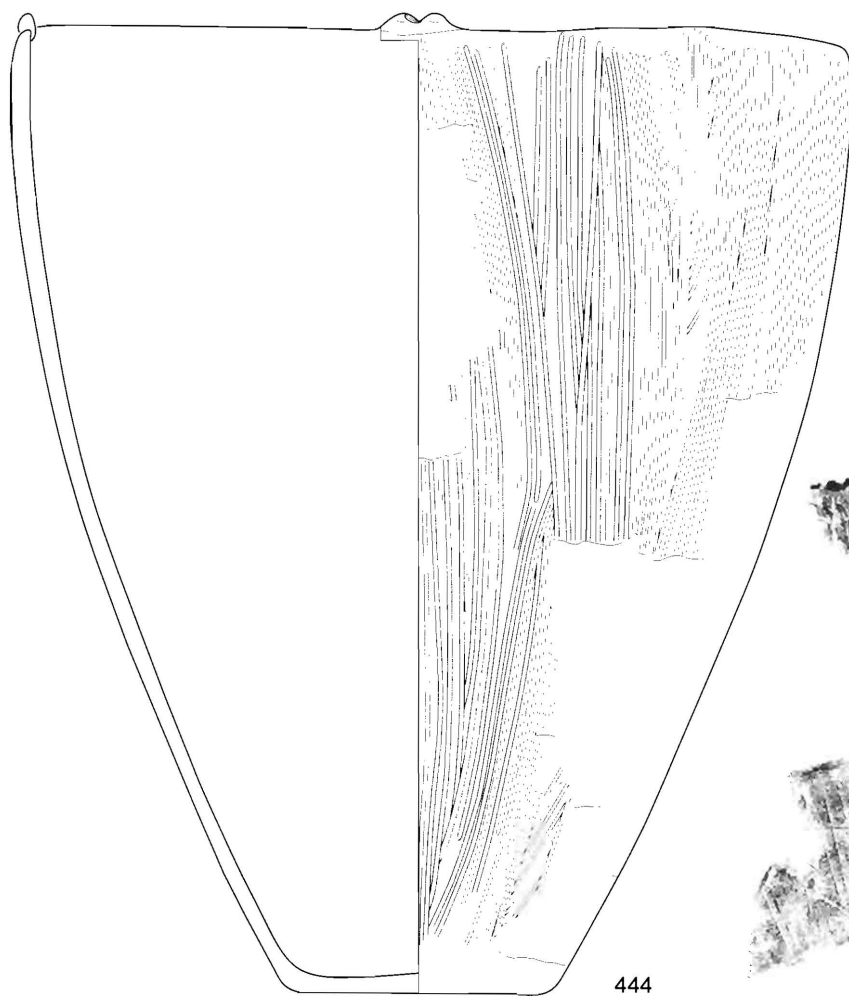
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
431	B2①②③④・Ⅱ層	I C	(34.0)	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部に1条の沈線。地文LR単節斜縄文。	61-1
432	B2・Ⅱ層	I A	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部に2条の平行沈線。地文条痕。	69-1
433	B2・Ⅱ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部に3条の平行沈線。地文条痕。	69-2
434	B2⑦・Ⅲ層	I A	10.4	10.8	(5.3)	平縁である。全面にRL単節斜縄文が施され、装飾はない。	61-2
435	A2③⑥・Ⅲ層	I B	13.5	14.5	5.9	口縁部に2単位の突起。全面にLR単節斜縄文。底部平底。	61-3
436	A2⑥・Ⅲ層	I B	(17.2)	—	—	口縁部にそれぞれ形の違う突起が3単位残存。全面にLR単節斜縄文。	61-4

図版53 深鉢431～436

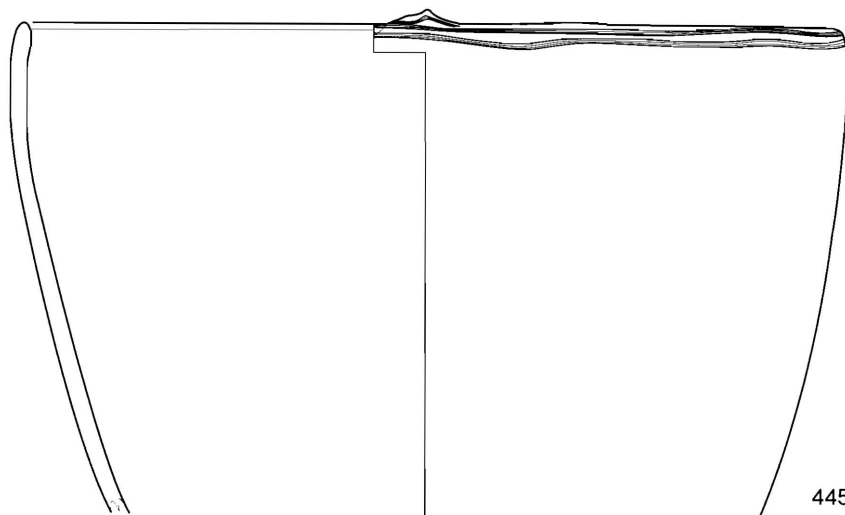


番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
437	B2⑦⑧・Ⅲ層	I A	(33.3)	—	—	平縁である。全面にRL単節斜縄文が施され、装飾はない。	62-1
438	A3③・Ⅲ層	I A	—	—	—	口唇部に斜めの切り込み。口縁部から体部にRL単節斜縄文。	69-3
439	B2⑤・Ⅲ層	I A	—	—	—	平縁である。口縁部直下に穿孔。口縁部から体部にRL単節斜縄文。	69-3
440	A3・Ⅲ層	I A	—	—	—	口唇部に台形状の彫り込み。口縁部に突起1単位と刺突。地文RL単節斜縄文。	69-4
441	B2②・Ⅲ層	I A	—	—	—	平縁である。口唇と口縁部に1条の沈線。地文条痕。	69-5
442	B2⑨・Ⅳ層	I A	—	—	—	平縁である。口縁部から体部に条痕。	69-6
443	B2⑤・Ⅲ層	I A	(10.0)	—	—	平縁である。全面無文である。	70-1

図版54 深鉢437～443



444

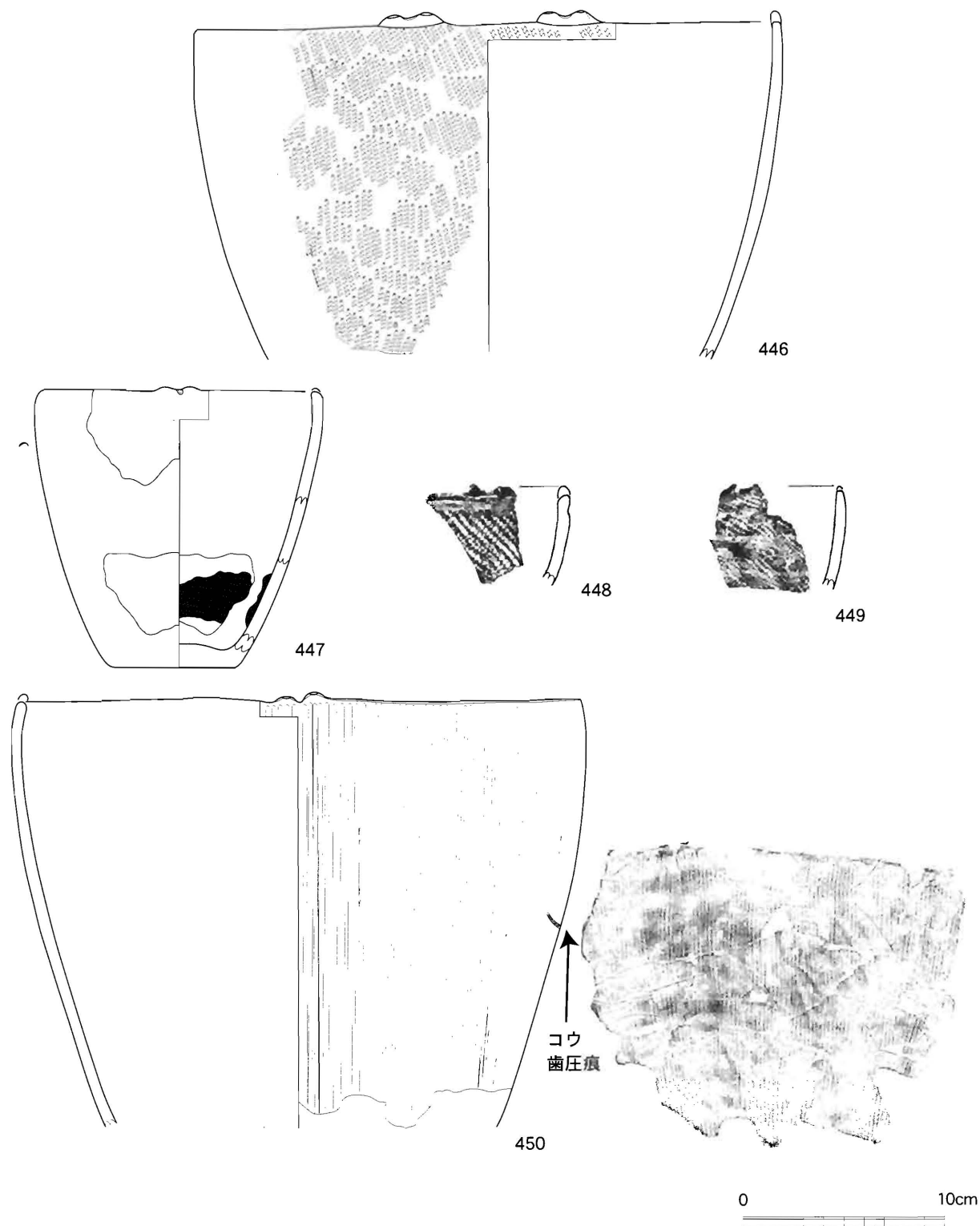


445



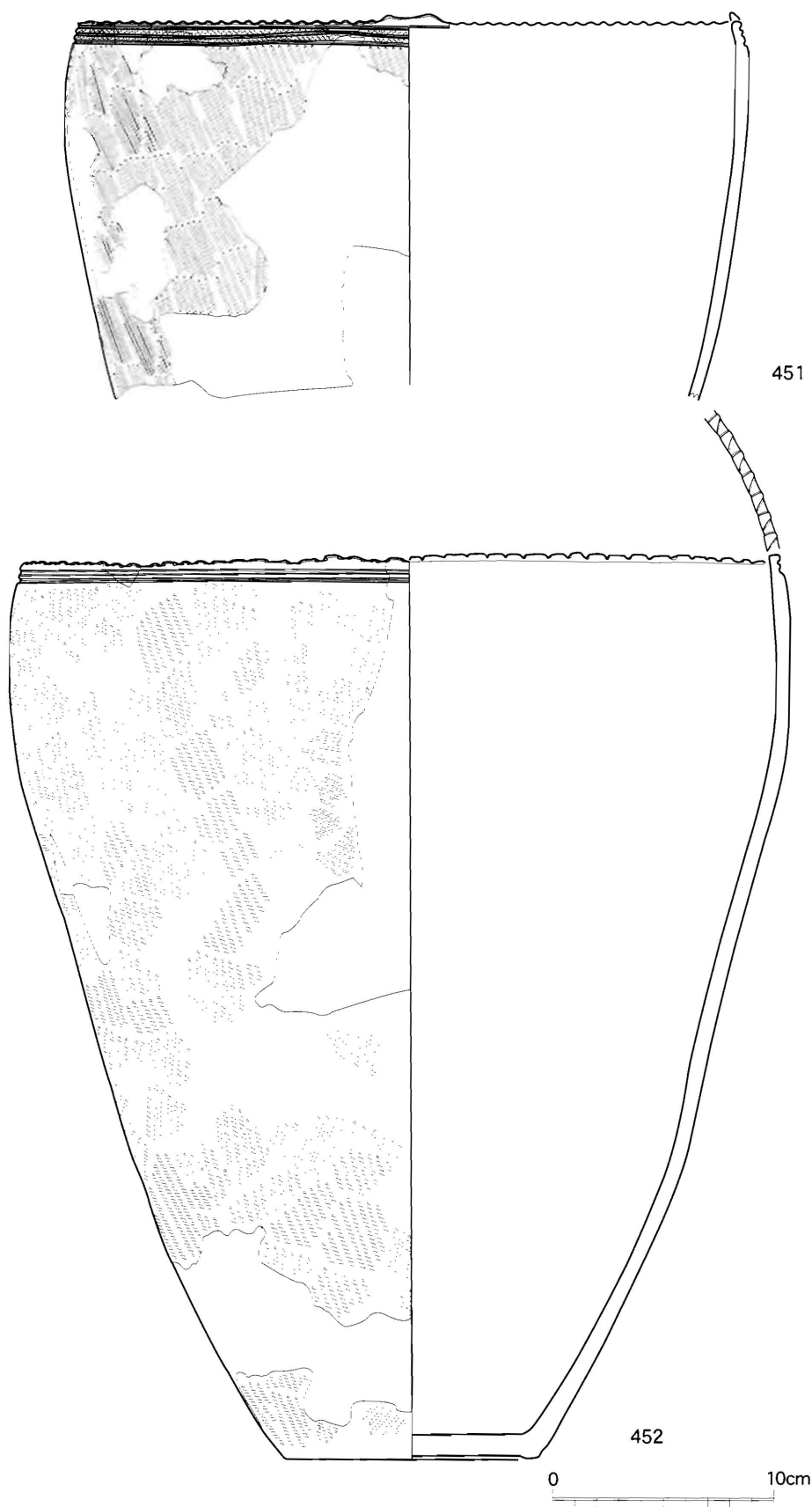
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
444	B2③⑤⑥⑧	I B	(32.0)	39.1	9.9	口縁部に突起が1単位。全面に条痕が施される。底部平縁。	62-2
445	B3⑤・Ⅲ層	I B	(32.0)	—	—	口縁部に形状不明の突起が1単位。口縁部直下に2条の平行沈線。無文である。	61-5

図版55 深鉢444・445



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
446	B2⑥⑦⑧ B3②・Ⅲ層	I B	(29.2)	—	—	口縁部に突起が2単位。全面にRL単節斜縄文。	63-1
447	B2⑦・Ⅲ層	I B	(14.0)	(14.0)	(6.0)	口縁部に突起が1単位。全面にRL単節縦縄文。内面に漆付着。底部平底。	81-4
448	B3⑤・Ⅲ層	I B	—	—	—	口縁部に突起が1単位。口縁部直下に無文帯。その下にRL単節斜縄文。	70-2
449	B3⑧・Ⅲ層	I B	—	—	—	口縁部に突起が1単位。地文RL単節斜縄文。	70-2
450	B2⑥⑦⑧、B3・Ⅲ層	I B	27.9	—	—	口縁部に1単位の突起。全面に条痕が施され、装飾がない。体部に貝殻のコウ歯圧痕。	63-2

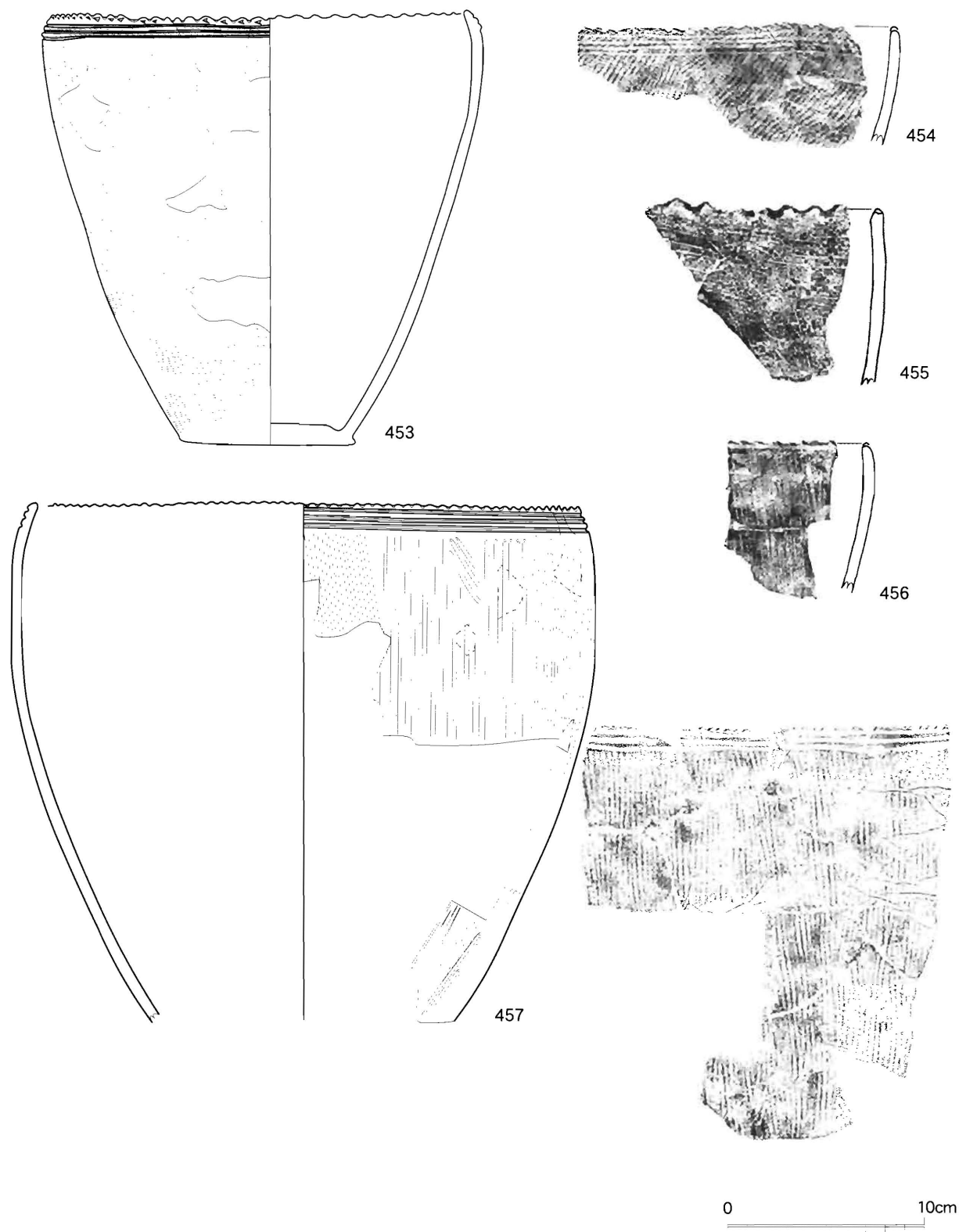
図版56 深鉢446～450



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
451	B3④⑧⑨・Ⅳ層	I C	(29.3)	—	—	口縁部に突起が1単位と小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。RL単節斜縄文。	63-3
452	B2③・Ⅲ層	I C	33.0	40.7	11.3	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。LR・RL単節斜縄文。	64-1

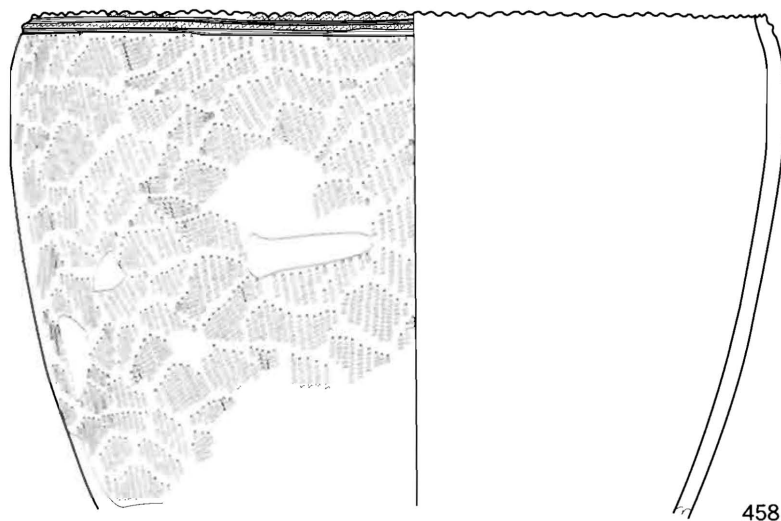
図版57 深鉢451・452



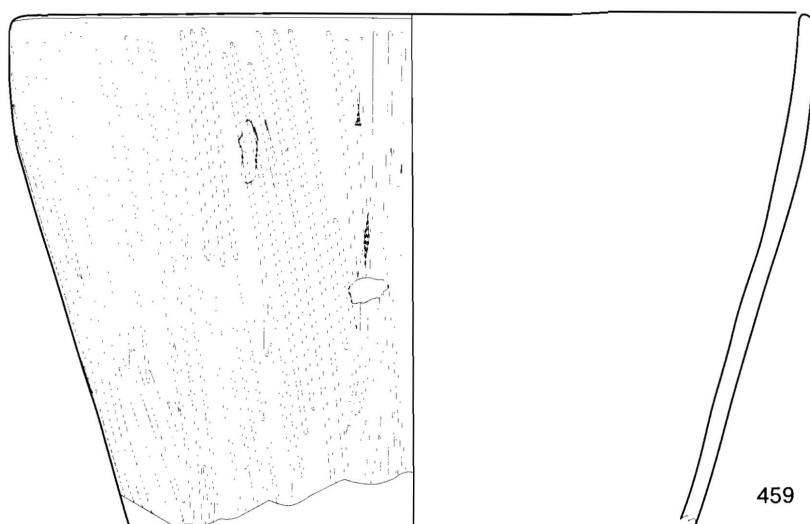


番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
453	A2⑧⑨・Ⅲ層	IC	20.7	21.4	6.9	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部直下に3条の平行沈線。LR単節斜縄文。	63-4
454	A2⑥⑨・Ⅲ層	IC	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線。赤色付着。RL単節斜縄文。	70-3
455	B2①③・Ⅲ層	IC	—	—	—	口縁部に小波状突起。地文条痕。	70-4
456	B2⑥・Ⅲ層	IC	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部に1条の沈線。地文条痕。	70-4
457	B2⑤・Ⅲ層	IC	(27.4)	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文条痕。	63-5

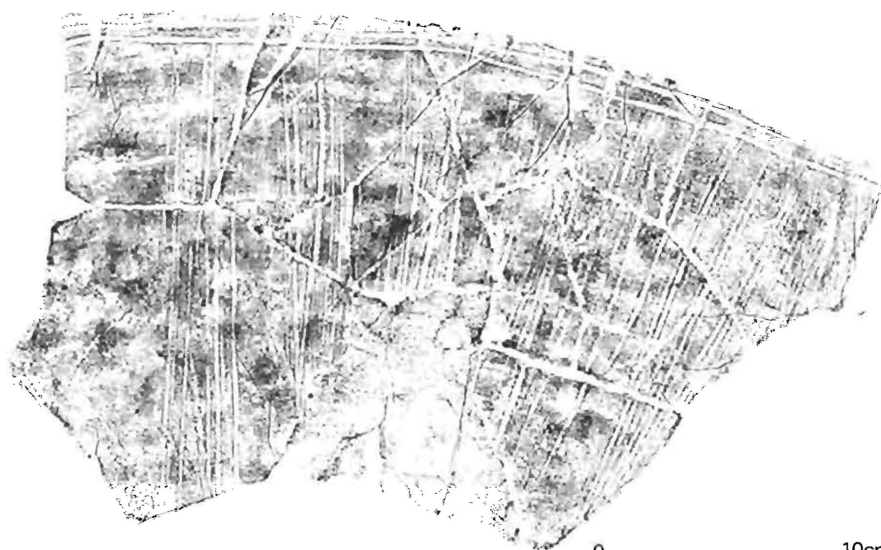
図版58 深鉢453～457



458



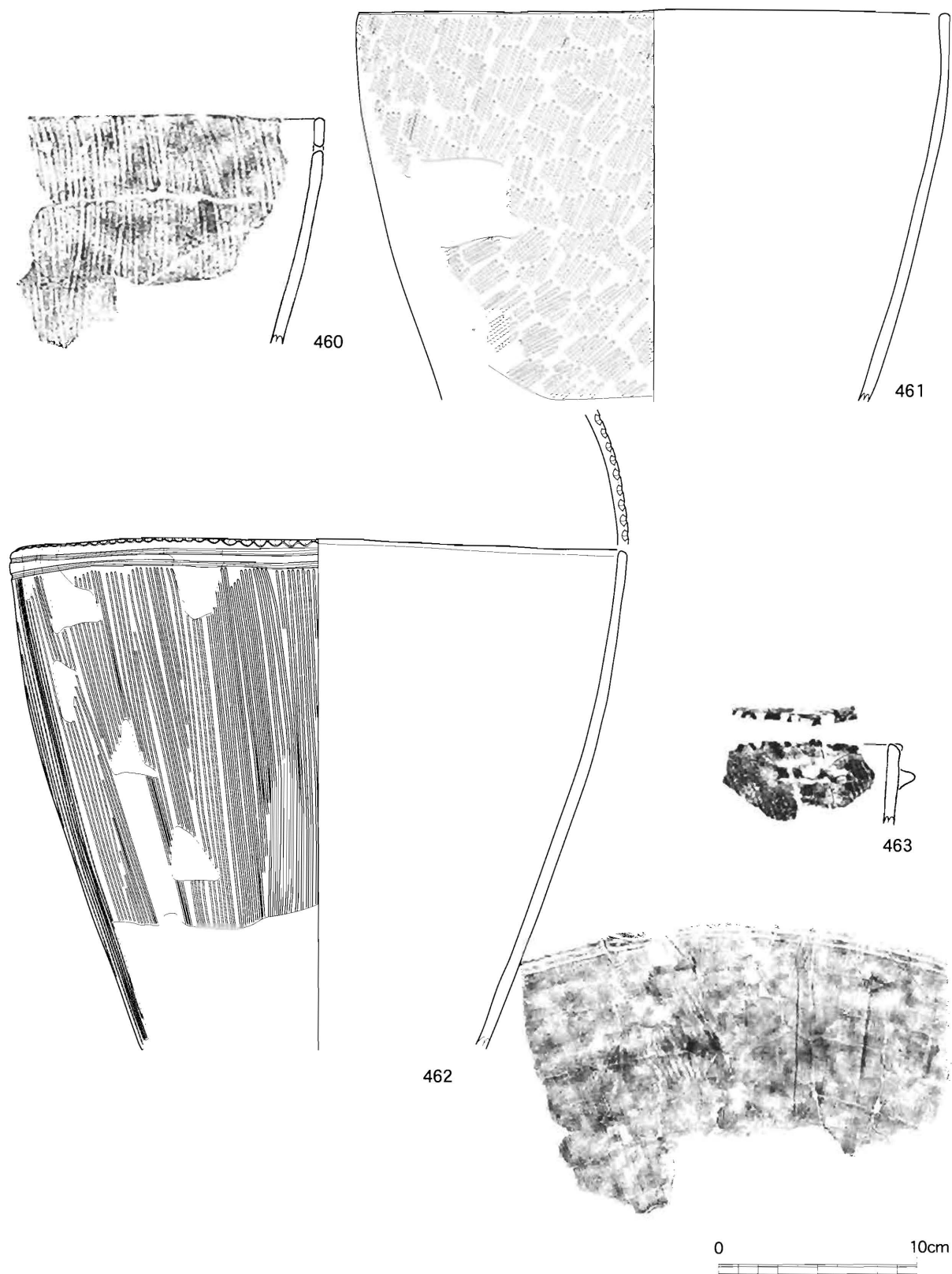
459



0 10cm

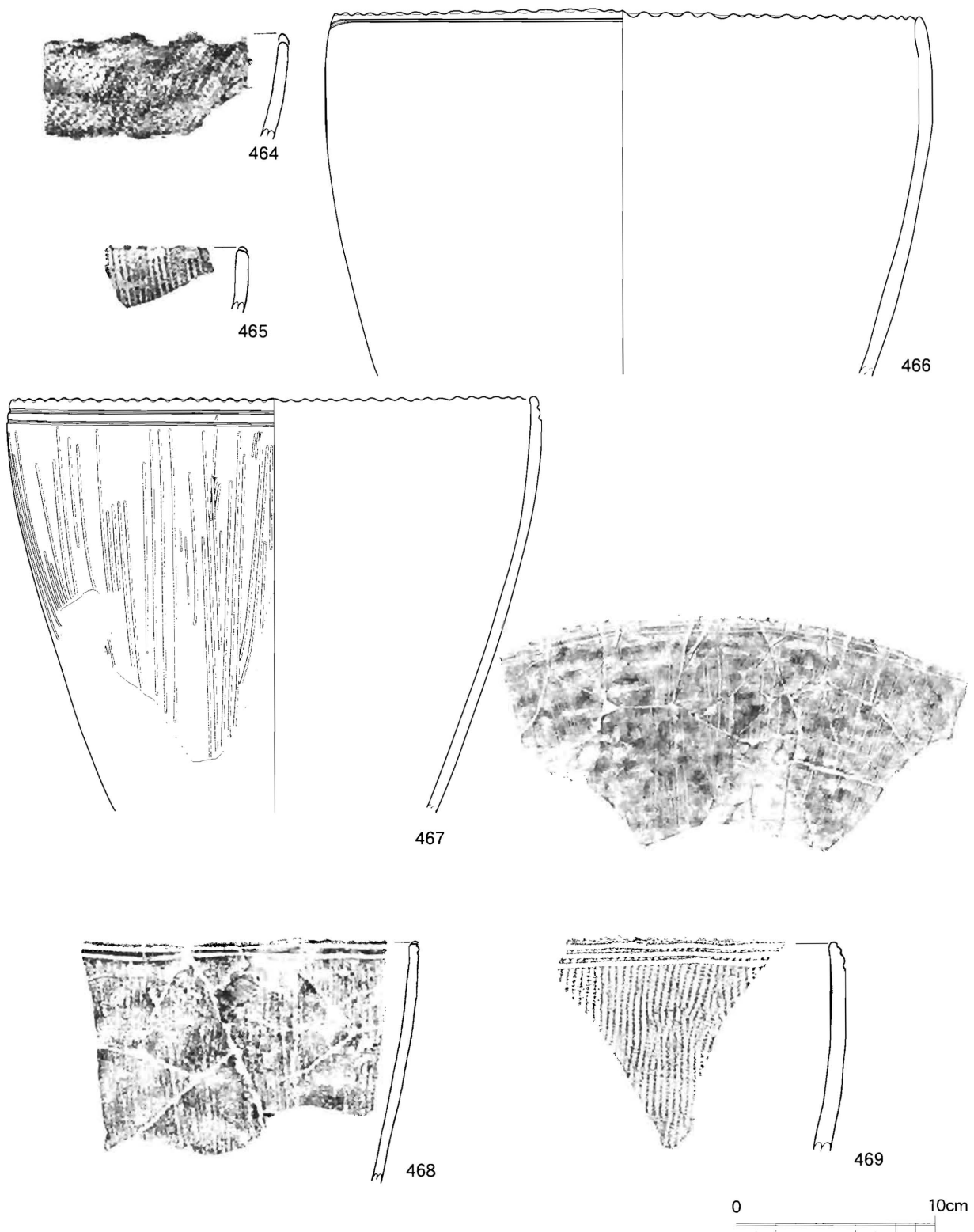
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
458	A2⑥・Ⅲ層	I C	(28.3)	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	64-2
459	A2⑥、B2④⑤⑥・Ⅳ層	ⅡA	(31.4)	—	—	平縁である。全面に条痕が施され、装飾がない。	65-1

図版59 深鉢458・459



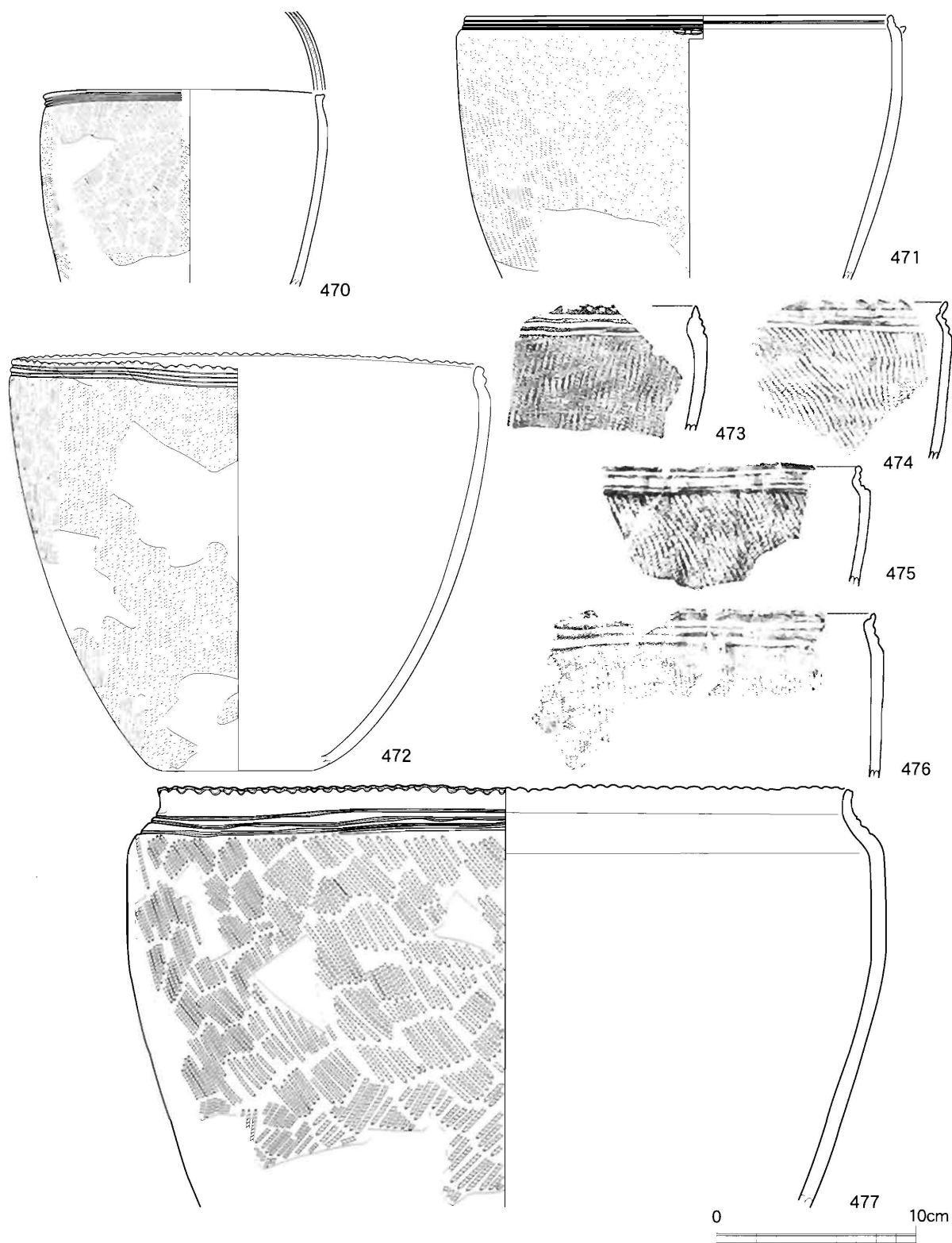
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
460	A2⑥・Ⅲ層	ⅡA	—	—	—	平縁である。口縁部直下に穿孔。地文条痕。	71-2
461	A2⑦・Ⅲ層	ⅡA	(30.0)	—	—	平縁である。全面にLR単節斜縄文が施され、装飾はない。	65-2
462	B2⑥⑧⑨、B3⑤・Ⅳ層	ⅡA	(31.2)	—	—	口唇部に台形状の彫り込み。口縁部直下に2条の平行沈線。地文条痕。	65-3
463	A2・Ⅲ層	ⅡA	—	—	—	口唇部に台形状の彫り込み。口縁部直下に突起が1単位。地文LR単節斜縄文。	70-6

図版60 深鉢460～463



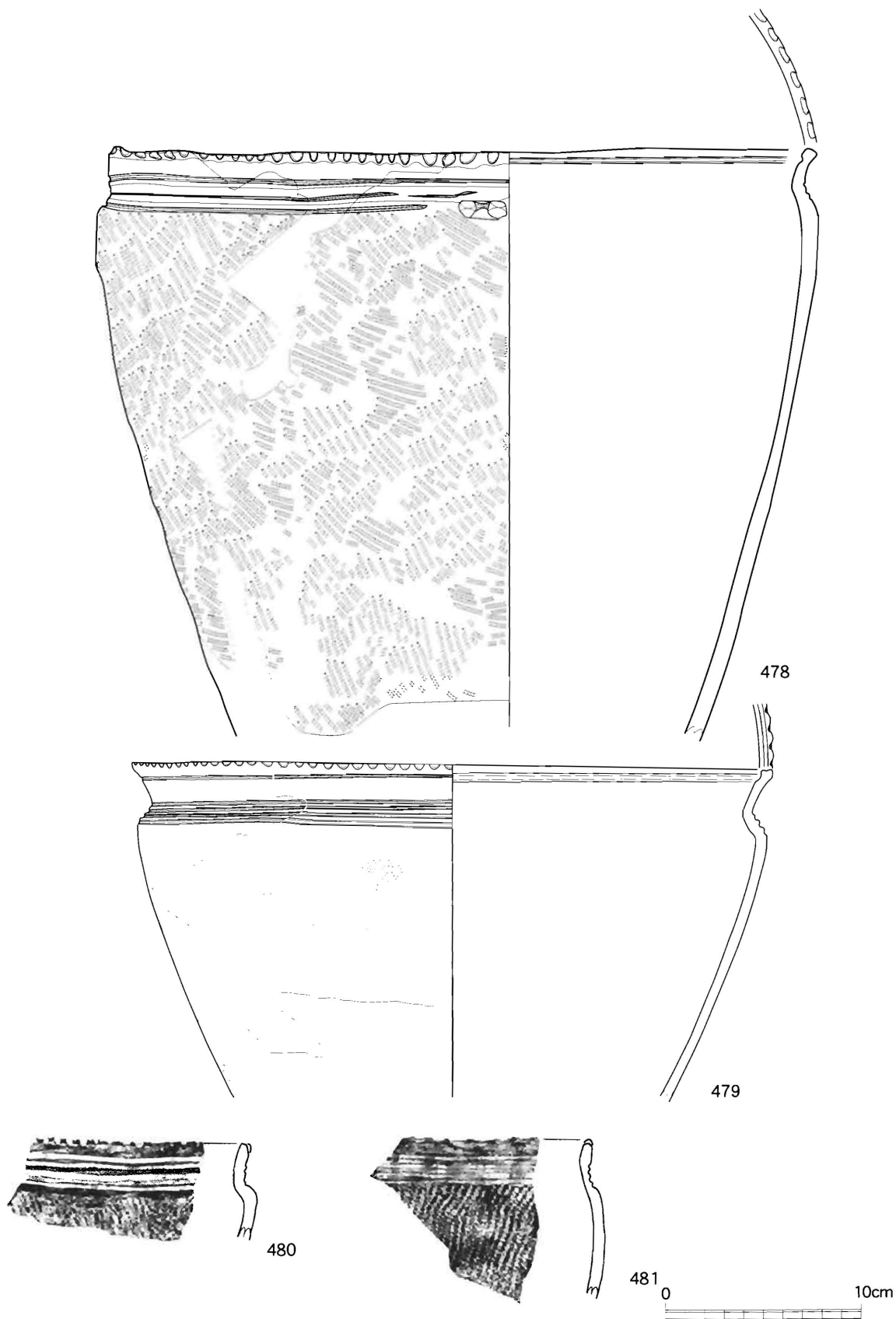
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
464	B2⑧・Ⅲ層	ⅡB	—	—	—	口縁部に突起が1単位。LR単節斜縄文。	70-6
465	B3②・Ⅲ層	ⅡC	—	—	—	口縁部に小波状突起。地文条痕。	71-1
466	B2①⑤・Ⅲ層	ⅡC	(29.0)	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に1条の沈線。無文である。	65-4
467	B3①②・Ⅲ層	ⅡC	(26.4)	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文条痕。	66-1
468	B3②・Ⅳ層	ⅡC	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文条痕。	71-2
469	B2⑤・Ⅲ層	ⅡC	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文LR単節縦縄文。	71-3

図版61 深鉢464～469



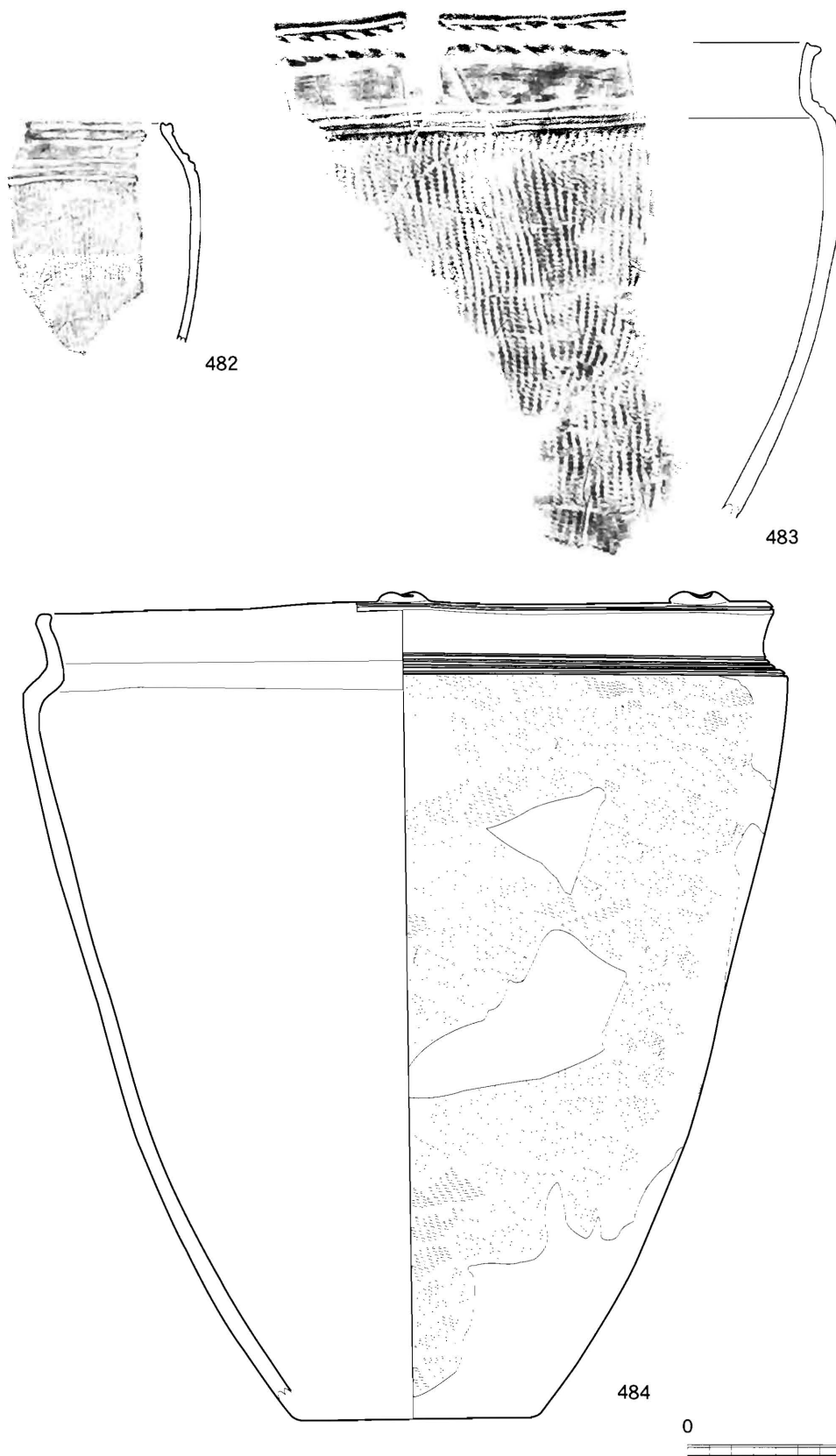
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
470	B2⑥・Ⅲ層	Ⅲ1A	14.1	—	—	平縁である。口唇部に1条の沈線。口縁部直下に2条の平行沈線。RL単節斜縄文。	66-2
471	B2⑦・B2⑨・Ⅲ層	Ⅲ1A	21.5	—	—	平縁である。口縁部直下に3条の平行沈線と突起。LR単節斜縄文。	66-3
472	B2②③⑤・Ⅲ層	Ⅲ1C	20.6	21.0	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線。RL単節斜縄文。	66-4
473	B2④・Ⅲ層	Ⅲ1C	—	—	—	口縁部に小波状突起、突起に刺突。口縁部直下に3条の平行沈線。LR単節斜縄文。	71-4
474	A3⑨・Ⅲ層	Ⅲ2C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。RL単節斜縄文。	71-4
475	B2④・Ⅲ層	Ⅲ3C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線。RL単節斜縄文。	71-5
477	B2⑤・Ⅳ層	Ⅲ2C	37.6	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。RL単節斜縄文。	66-5

図版62 深鉢470～477



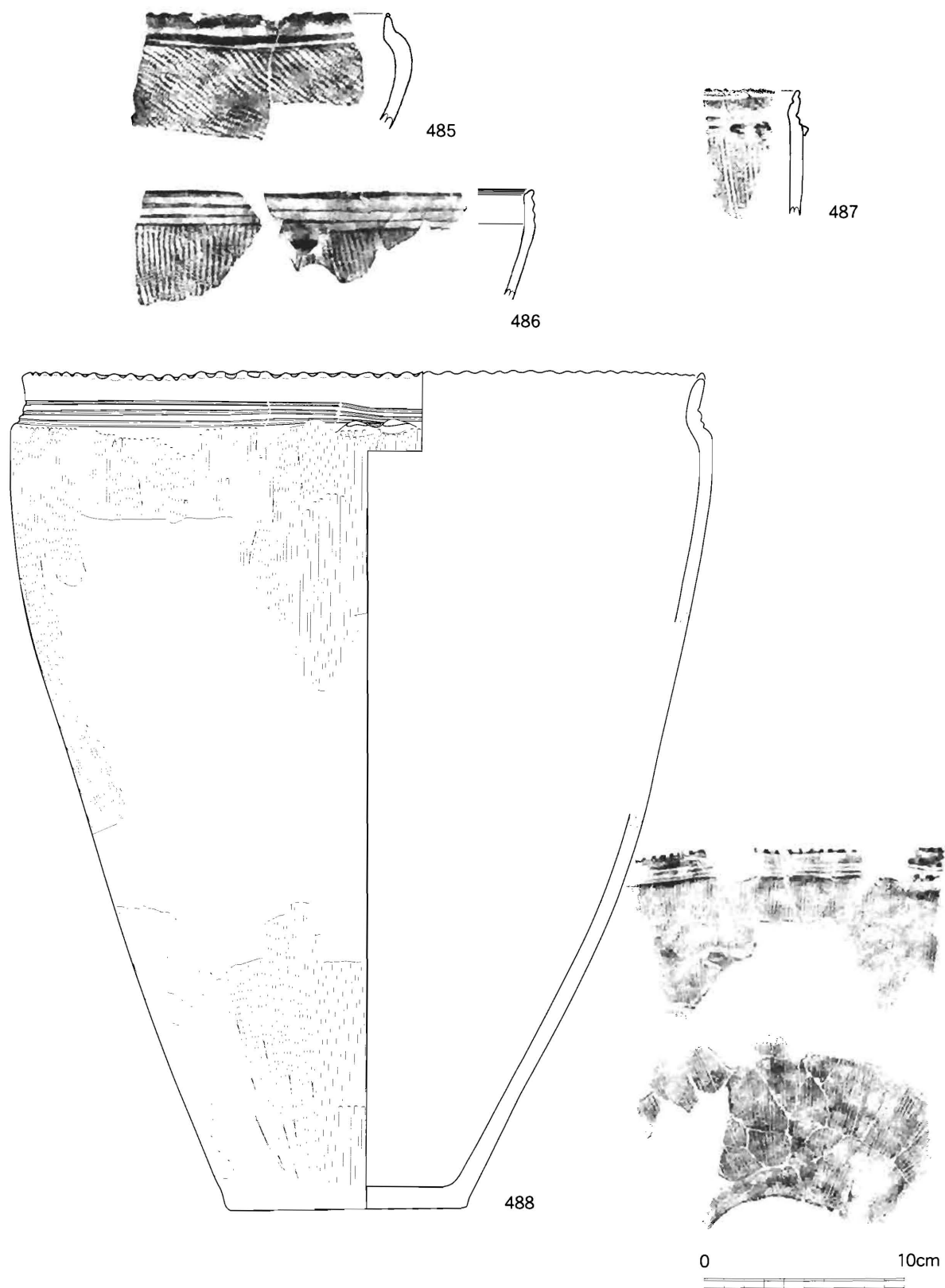
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
478	B2③・Ⅲ層	Ⅲ2A	33.0	—	—	口唇部に楕円形の彫りこみ。口縁部直下に4条の平行沈線。RL単節斜縄文。	67-1
479	A2⑧・Ⅲ層	Ⅲ2A	32.8	—	—	口唇部に半円状の彫りこみ。口縁部直下に4条の平行沈線。RL単節斜縄文。	67-2
480	B2④・Ⅲ層	Ⅲ2A	—	—	—	口唇部に半円状の彫りこみと1条の沈線。口縁部直下に4条の平行沈線。RL単節斜縄文。	72-1
481	A3②・Ⅲ層	Ⅲ2C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に4条の平行沈線。地文LR単節斜縄文。	72-1

図版63 深鉢478～481



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
482	—	Ⅲ2A	—	—	—	平縁である。口唇部に1条の沈線。口縁部直下に4条の平行沈線。地文条痕。	72-2
483	B2⑨・Ⅲ層	Ⅲ2A	—	—	—	口唇部に斜めの切り込みと1条の沈線。口縁部直下に3条の平行沈線。LR単節斜縄文。	72-4
484	B2⑥・Ⅲ層	Ⅲ2B	(32.0)	(36.8)	—	口唇部に1条の沈線。口縁部に2単位の突起。口縁部直下に4条の平行沈線。LR単節斜縄文。	68-1

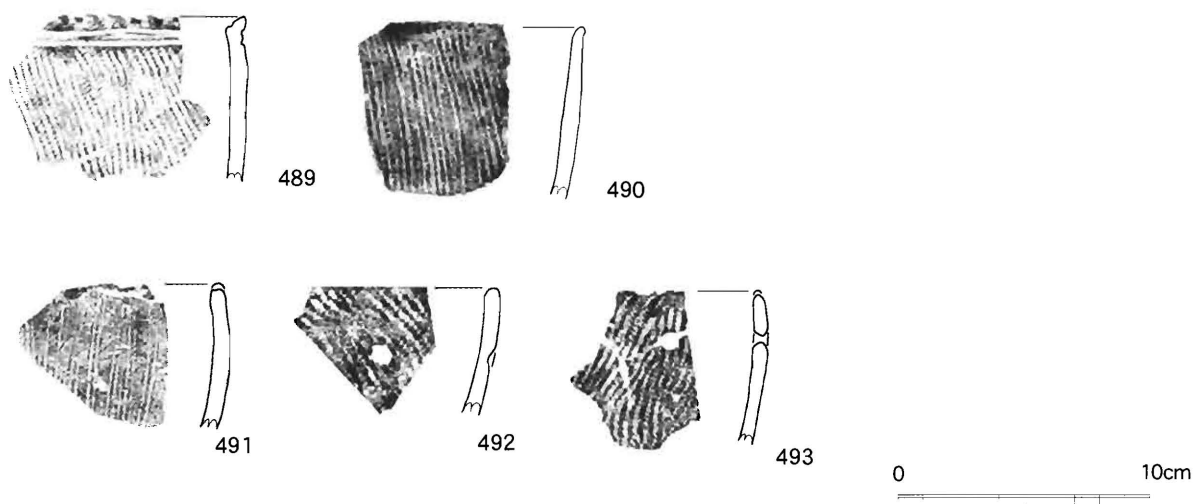
図版64 深鉢482～484



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
485	B2⑧・Ⅲ層	Ⅲ2C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	72-5
486	B2③・Ⅲ層	Ⅲ2A	—	—	—	平縁である。口縁部直下に3条の平行沈線と突起が1単位。地文LR単節斜縄文。	72-5
487	B3①・Ⅲ層	Ⅲ2C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線。地文条痕。	72-3
488	A2⑥・Ⅲ層	Ⅲ2A	33.5	41.7	11.7	口縁部に小波状突起。口縁部直下に3条の平行沈線と突起が1単位。地文条痕。底部平底。	68-2

図版65 深鉢485～488





番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
489	B3④・Ⅲ層	Ⅳ	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に2条の平行沈線。地文RL単節斜縄文。	72-6
490	—	Ⅳ	—	—	—	平縁である。地文条痕。	72-6
491	—	I B	—	—	—	口縁部に小波状突起。地文条痕。	72-7
492	B3・—	I A	—	—	—	平縁である。口縁部直下に穿孔。地文RL単節斜縄文。	72-7
493	—	I C	—	—	—	口縁部に小波状突起。口縁部直下に穿孔。地文LR単節斜縄文。	72-7

図版66 深鉢489～493

## (7) 製塩土器

### 〔製塩土器の認定〕

遺物密集ブロック（第Ⅲ・第Ⅳ層）から多数の製塩土器が発見された。製塩土器は県埋文調査でも村調査でも出土している。製塩土器とは、専ら土器製塩作業に用いられた土器であり、一般的な生活で使用される土器とは区別されている。土器製塩は、製塩土器を用いて、海水あるいは濃縮した海水を煮沸（煎熬）して、水分を蒸発させて塩を得る方法である。製塩土器はこの煮沸工程（煎熬工程ともいう）で、長時間、強く加熱され変色し、さらに海水中の不純物が土器の胎土に析出する現象がおこる。そのため煮沸工程に使用された製塩土器は、一般の土器と比較すると、壊れやすく完全な形を保つものが殆どない・ピンク～薄紫色の斑痕がつくものが多い・黒班がつくものが極端に少ない・土器の表裏が剥離しているものが多い（破片を指で挟んで強く押すと剥離するものがある）・部分によっては細かく砕けやすいなどの特徴をもち、一回の煮沸工程で破損し、二度の使用は不可能になるといわれる。また、製塩土器は、宮城県松島湾に所在する東松島市里浜貝塚西畑地区の縄文時代晩期中葉の製塩炉に伴った製塩土器を観察すると、短期間に大量に消耗・消費するため、内面は比較的ミガキやナデなどの丁寧な調整が見られるが、外面は荒い調整しか行われず、無文でかつ製作時の粘土紐輪積痕が見えるものが多いことが分かる。

今津遺跡の遺物整理では、製塩土器を認定する方法として、以上で述べた製塩土器特有の特徴を持つ土器とそうした特徴をもつ土器の形態に類似する土器を選びだし、前者を煎熬工程に使用した製塩土器、後者を煎熬工程の影響を強く受けなかった製塩土器あるいは煎熬工程に使用しなかった製塩土器と考えることにした。ただし両者の区別はつけにくいものが多い。

### 〔製塩土器の部位からみた特徴〕

製塩土器と認定できた土器はすべて破片で、器種は深鉢に限られる。口縁部・体部・底部の順に説明するが、分類の中心は口縁部の傾き・口縁形態・地文で行った。

（口縁部）口縁部の破片は、小さいものまで含めると個体識別は難しいが、425点（個体分）ある。

（1）口縁部の傾き I 類—やや内湾するもの（156点）。

II 類—直立ぎみにやや外傾するもの（31点）。

III 類—破片が小さいため不明のもの（238点）。

（2）口縁の形態 1 類—小波状口縁となるものは数が多い（412点）。口唇部に上から棒状のものを押しつけて作りだしたもので、幅 1 cm の小波が整然と並ぶものが多いが、乱れたものもある。

2 類—平縁のものは数が少ない（13点）。面取りされているものと丸みを帯びているものがある。また口縁が肥厚するものも見られる。

（3）外面の地文 A 類—無文のものが多い（386点）。成形時の接合部を指で押さえ、その上からユビナデされているが、接合部の輪積痕が残るものが多い。一部にケズリも見られる。輪積痕の幅は 1 ～ 2 cm ほどである。

B 類—条痕文があるものは数が少ない（39点）。条痕の幅は一定でなく、浅く細い線が多い。条痕が交差するものもある。

（4）内面調整は、口縁に近い部分では、ユビナデやヘラナデが横方向になされているものが多い。

また、その上からヘラミガキされているものもあるが、あまり丁寧でない。

（5）胎土は、1 ～ 2 mm の砂を含み、粗雑である。

（6）法量は、破片が小さいものが多く、推定が困難である。口縁部が円周の 8 分の 1 以上残っているもの 7 点から、あえて口径を推定すると、約 22 cm から 29 cm までである。器壁の厚さは約 0.5 ～

0.6mmで比較的薄いものが多い。

(体部) 体部の破片は多数あるが、極めて小さいものまで含み、個体識別は困難で、個体数の算出はできない。特徴に乏しいが、地文は、口縁部と同じように、無文で輪積痕を残すものが圧倒的に多く、条痕文は少ない。

(底部) 製塩土器の底部と推定されるものは109点(個体分)ある。煎熬工程の痕跡がない底部は、一般の土器のものと区別がつかないので、破片が小さく、底部全体の形が分かるものは少ない。すべて平底と推定されるが、若干底面が窪むものも見られる。大きな破片から底径を推定すると約7～10cmのものが多い。また底部側面の立ち上がりにも若干の違いがみられる。

### 〔製塩土器の分類〕

製塩土器の口縁部の傾き・口縁形態・地文に現れた特徴を組み合わせると、製塩土器は6つに大別できる。

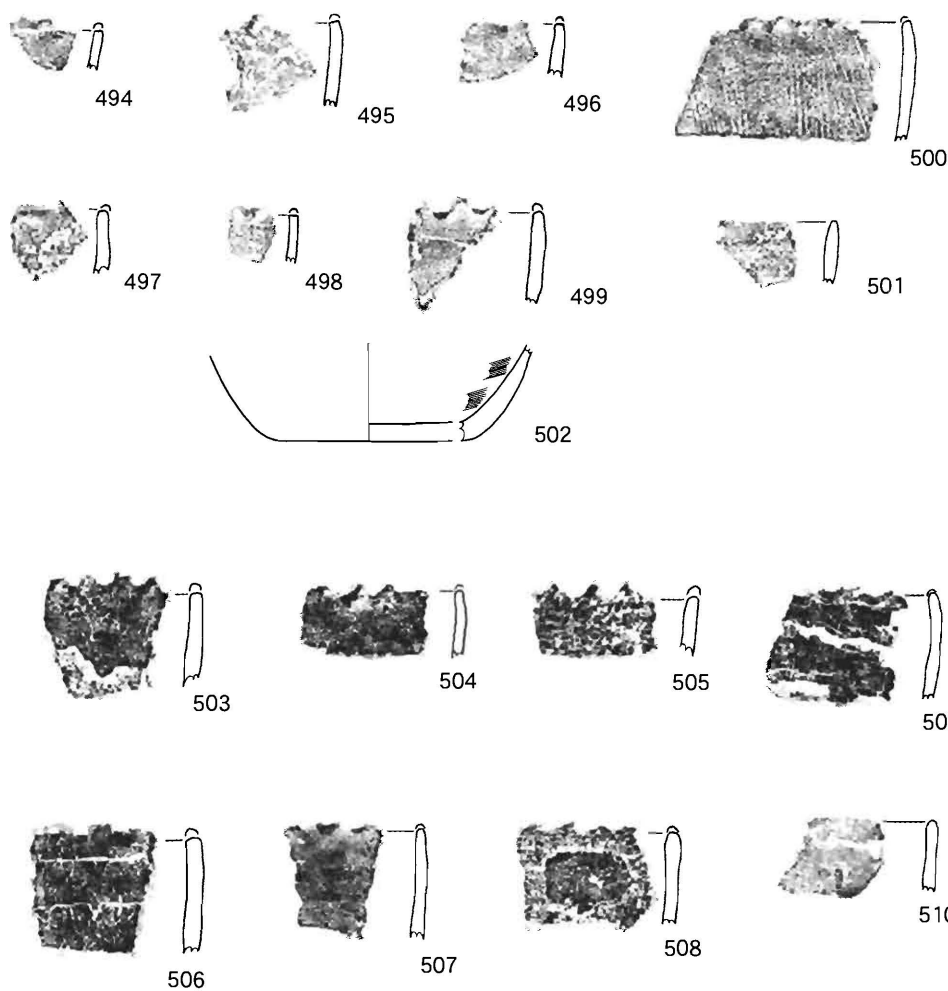
口縁部の特徴（個体数）						口縁部による製塩土器の大別
傾 き		口縁形態		地 文		
Ⅰ. やや内湾	156	1. 小波状縁	153	A. 無 文	132	Ⅰ 1 A類（大別 1 類）
				B. 条痕文	21	Ⅰ 1 B類（大別 2 類）
		2. 平 縁	3	A. 無 文	3	Ⅰ 2 A類（大別 3 類）
				B. 条痕文	0	
Ⅱ. やや外傾	31	1. 小波状縁	27	A. 無 文	25	Ⅱ 1 A類（大別 4 類）
				B. 条痕文	2	Ⅱ 1 B類（大別 5 類）
		2. 平 縁	4	A. 無 文	4	Ⅱ 2 A類（大別 6 類）
				B. 条痕文	0	
Ⅲ. 不 明	238	1. 小波状縁	232	A. 無 文	216	Ⅲ 1 A類
				B. 条痕文	16	Ⅲ 1 B類
		2. 平 縁	6	A. 無 文	6	Ⅲ 1 A類
				B. 条痕文	0	

### (製塩土器の特徴)

以上から、重複する部分もあるが、今津遺跡に於ける製塩土器の特徴をまとめてみよう。

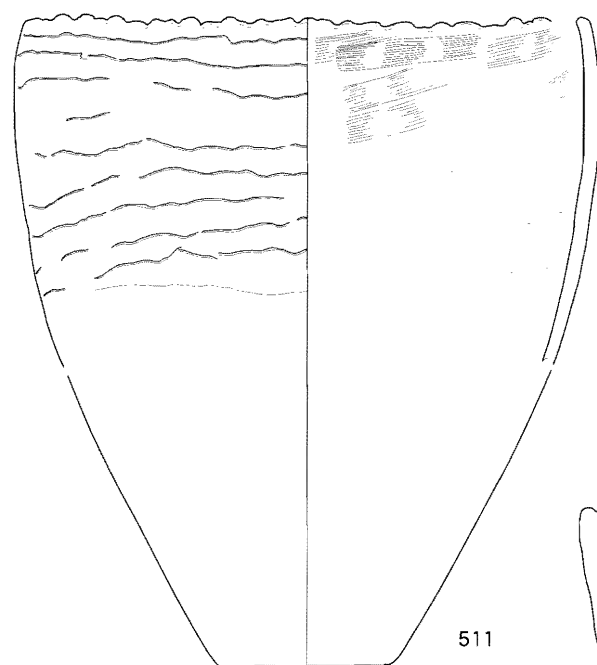
- ① すべて深鉢形である。口縁部の傾きは、不明のものを除くと、やや内湾するものがやや直立ぎみに外傾するものより多い。底部はすべて平底で、大型破片から口径22～29cmほどのものが多いと考えられる。
- ② 口縁の形態は、小波状口縁となるものが圧倒的に多く、平縁のものは数が少ない。
- ③ 外面は無文で、輪積痕を残すものが圧倒的に多いが、条痕文をもつのも少数ある。
- ④ 輪積痕の幅は約1～2cmのものが多い。
- ⑤ 製塩土器の条痕文は、一般的な土器の条痕文と比べると、条痕の幅は一定でなく、浅く細い線が多い。
- ⑥ 口縁部の傾き・口縁形態・地文に現れた特徴を組み合わせると、製塩土器は6つ(大別1類～6類)に大別される。

- ⑦大別1類が最も数が多く、大別4類や大別2類がそれに次ぐ。その他の大別はごく少数である。
- ⑧口縁部の傾きを別にすると、小波状口縁で無文のもの（373点）が圧倒的に多いが、条痕文のもの（39点）も少数ある。平縁で無文のもの（13点）は少なく、条痕文はない。
- ⑧内面の調整は、口縁に近い部分では、ユピナデやヘラナデが横方向になされているものが多い。その上からヘラミガキされているものもある。ヘラミガキは、一般的な深鉢と比べても調整が丁寧でない。胎土は、1～2mmの砂を含み、粗雑である。
- ⑨口径は、口縁部が円周の8分の1以上残っているもの7点から推定すると、約22cmから29cmまでのものが多い。器壁の厚さは約0.5～0.6mmで比較的薄いものが多い。
- ⑩弘大調査で出土した製塩土器は縄文晩期の大洞C2式に伴うものである。県埋文調査や村調査で出土した製塩土器には、共伴した土器から考えて、弘大調査のものよりやや新しい時期のものが含まれている可能性がある。
- ⑪今津遺跡では製塩遺構は発見されていない。製塩土器が発見されているのは標高16.5mの台地であるので、製塩遺構はこの台地の下の汀線に近い部分にあったものと考えられる。しかし、かつての汀線は、住宅や道路の建設、護岸工事などで地形が変わっており、現状では発見は困難である。

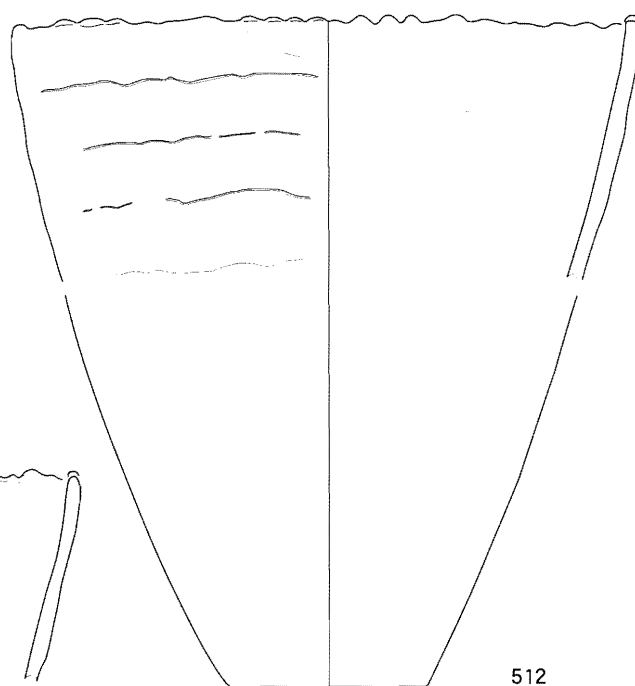


番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
494	B 3・I 層	Ⅲ 1A 類	—	—	—	内外面調整：横指ナデ	74-1
495	B 3・I 層	I 1A 類	—	—	—	内外面調整：斜指ナデ	74-1
496	B 3・I 層	Ⅲ 1A 類	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ、外面調整：横指ナデ	74-1
497	B 3・I 層	Ⅱ 1A 類	—	—	—	内外面調整：横指ナデ	74-1
498	B 3・I 層	Ⅲ 1A 類	—	—	—	内面調整：横ミガキ、外面調整：横指ナデ	74-1
499	A 2・I 層	Ⅲ 1A 類	—	—	—	内面調整：横指ナデ後縦ミガキ、外面調整：横指ナデ、煎熬痕あり	74-1
500	B 3・I 層	I 1B 類	—	—	—	内面調整：横指ナデ、外面：条痕	74-2
501	B 3・I 層	Ⅲ 2A 類	—	—	—	内面調整：横指ナデ、外面調整：斜指ナデ	74-2
502	B 2・I 層	底部	—	—	(8.0)	内面調整：縦横指ナデ、外面調整：縦横指ナデ	74-2
503	B 2・Ⅱ 層	Ⅲ 1A 類	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ後横ミガキ、外面調整：縦横指ナデ	74-3
504	B 2・Ⅱ 層	Ⅲ 1A 類	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ後横ミガキ、外面調整：横ヘラナデ、煎熬痕あり	74-3
505	B 2・Ⅱ 層	Ⅲ 1A 類	—	—	—	内面調整：縦ヘラナデ、外面調整：不明、煎熬痕あり	74-3
506	B 2・Ⅱ 層	I 1A 類	—	—	—	内面調整：横ミガキ、外面調整：縦指ナデ	74-3
507	B 2・Ⅱ 層	Ⅱ 1A 類	—	—	—	内面調整：縦横ヘラナデ、外面調整：縦横指ナデ	74-3
508	B 2・Ⅱ 層	Ⅲ 1A 類	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ後横ミガキ、外面調整：横指ナデ、煎熬痕あり	74-3
509	B 2・Ⅱ 層	I 1B 類	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ後横ミガキ、外面：条痕	74-4
510	B 2 ④・Ⅱ 層	Ⅱ 2A 類	—	—	—	内外面調整：横ヘラナデ、煎熬痕あり	74-4

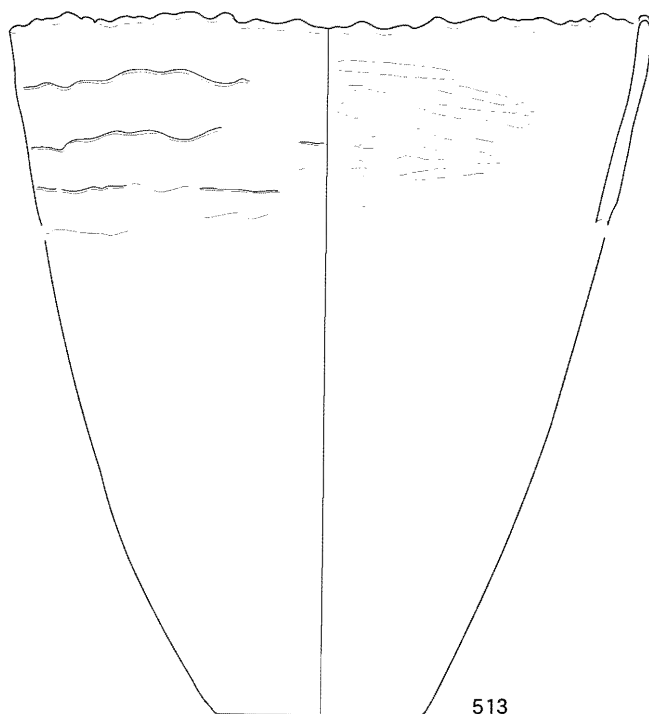
図版67 製塩土器494～510



511



512

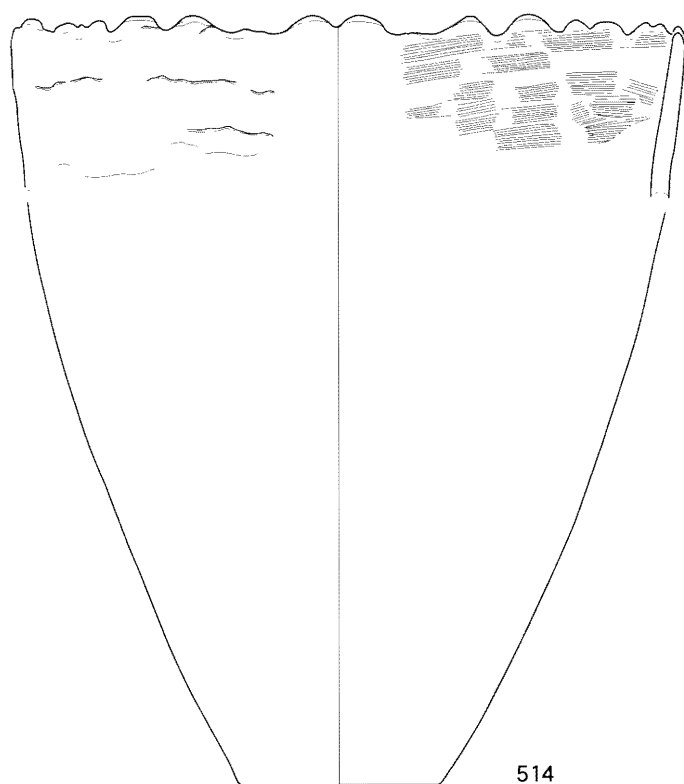


513

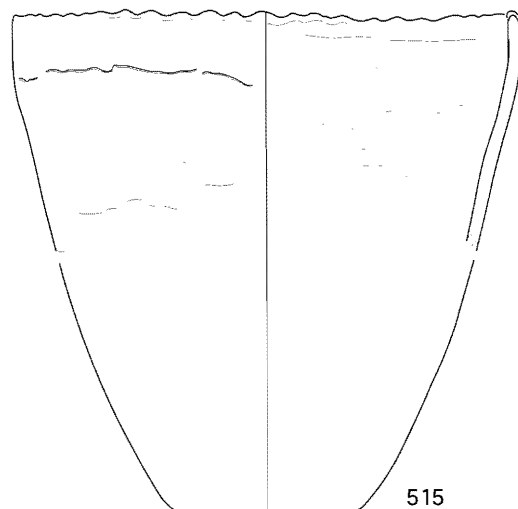
0 10cm

番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
511	B 2 ④⑤⑦・Ⅲ層	I 1A類	(22.4)	—	—	内面調整：横ヘラナデ後縦ミガキ、外面調整：横指ナデ	74-5
512	B 2 ⑤・Ⅲ層	I 1A類	(25.0)	—	—	内面調整：横指ナデ後縦ミガキ、外面調整：横ケズリ後横指ナデ	75-1
513	B 2 ⑤・Ⅲ層	I 1A類	(25.8)	—	—	内面調整：縦横指ナデ後縦横ミガキ、外面調整：横指ナデ	75-2

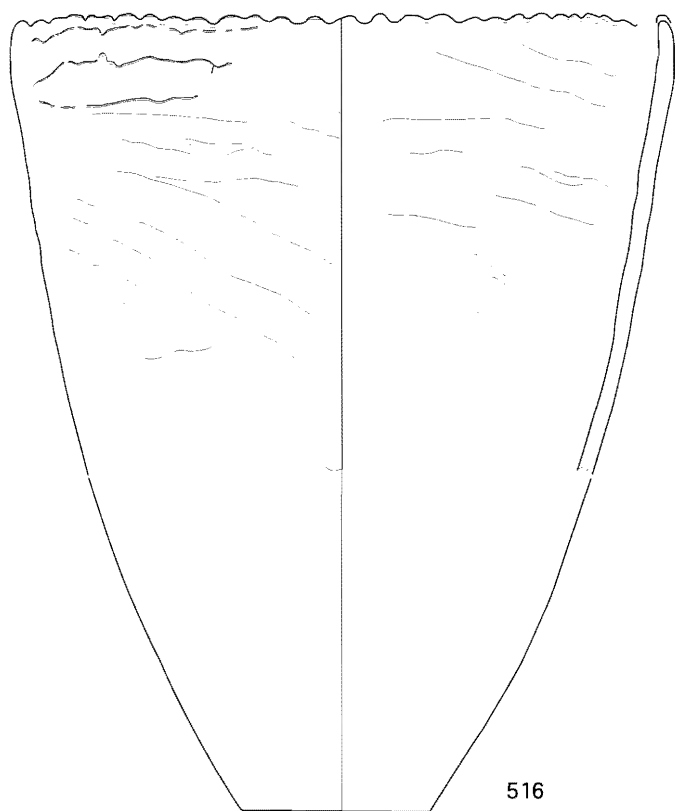
図版68 製塩土器511～513



514



515

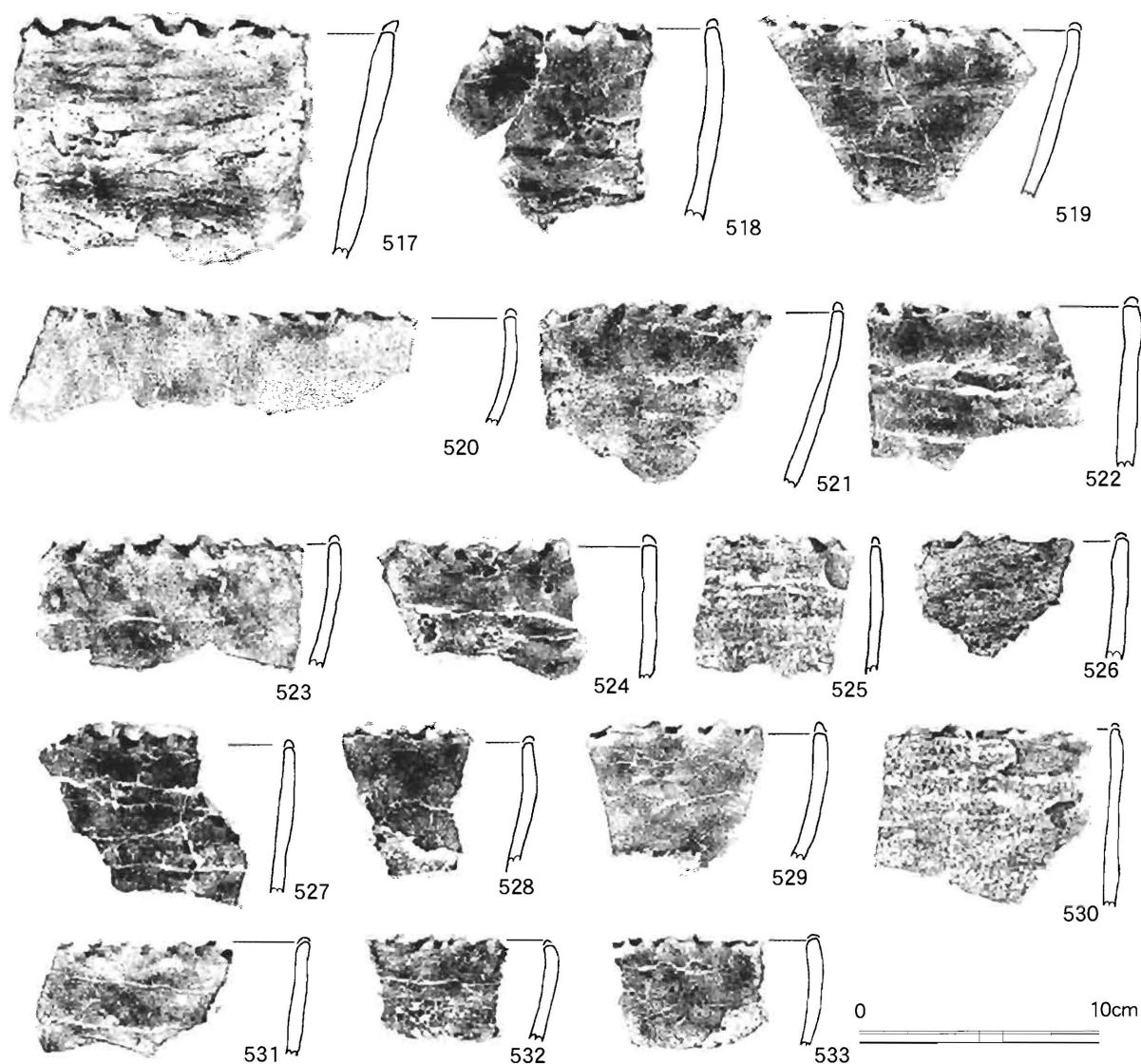


516



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
514	B 2 ⑤⑧・Ⅲ層	Ⅱ 1A類	(27.0)	—	—	内面調整：横ヘラナデ、外面調整：横ヘラナデ	75-3
515	B 2 ⑨・Ⅲ層	I 1A類	(22.4)	—	—	内面調整：横ヘラナデ後横ミガキ、外面調整：横ヘラナデ	76-1
516	B 2 ④・Ⅲ層	I 1A類	(26.0)	—	—	内面調整：横指ナデ、外面調整：横ケズリ	76-2

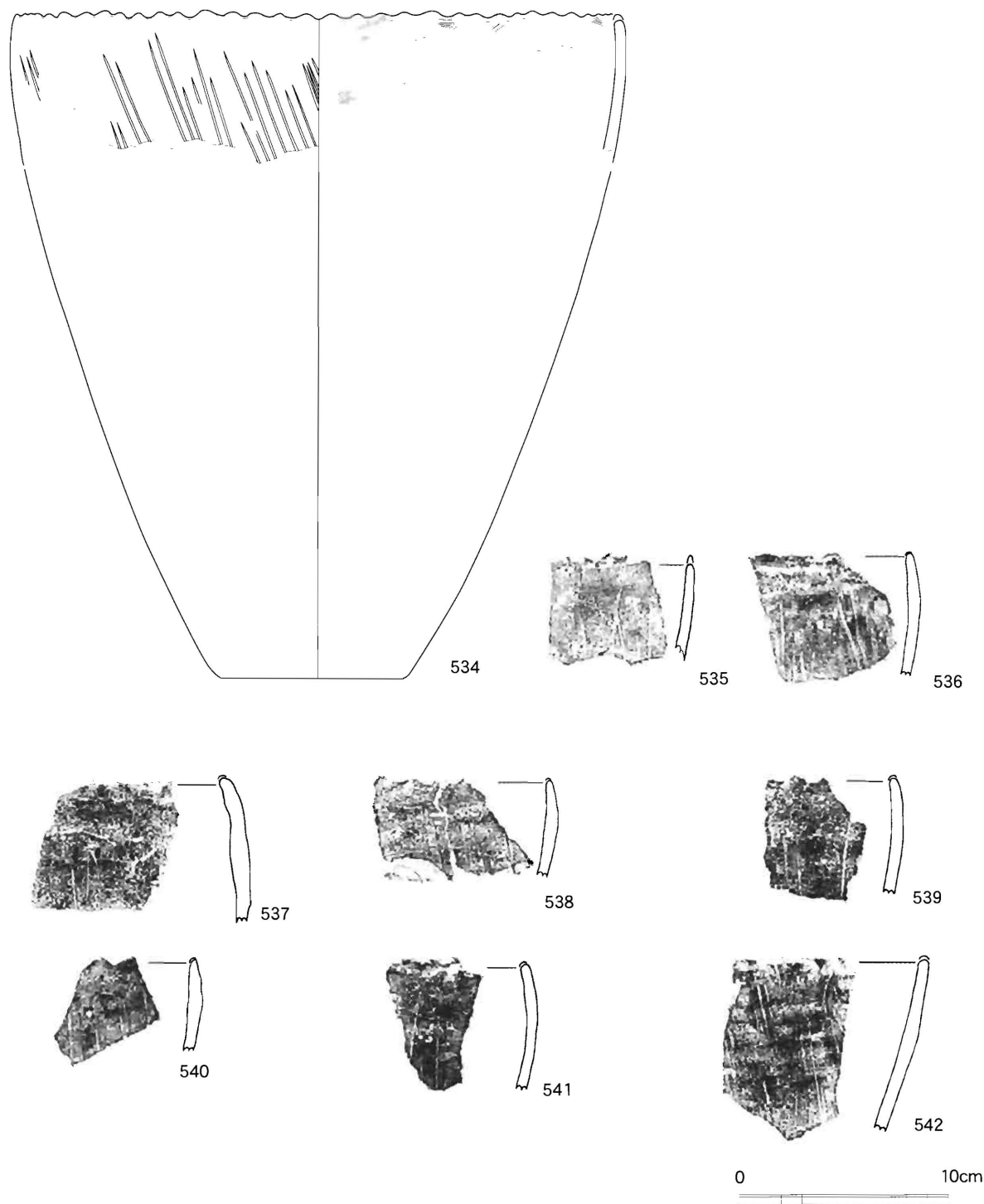
図版69 製塩土器514～516



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特徴	写真
517	B 2 ⑤・Ⅲ層	I 1A類 (23.0)	—	—	—	内面調整：縦横指ナデ、外面調整：横ケズリ	77-1
518	B 2 ⑨・Ⅲ層	I 1A類	—	—	—	内面調整：縦横指ナデ後縦横ミガキ、外面調整：横ケズリ	77-3
519	B 2 ⑤・Ⅲ層	I 1A類 (24.0)	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ後縦ミガキ、外面調整：横指ナデ	77-3
520	B 2 ⑥・Ⅲ層	I 1A類	—	—	—	内面調整：横指ナデ後縦ミガキ、外面調整：横指ナデ	77-2
521	B 2 ⑥・Ⅲ層	I 1A類 (24.0)	—	—	—	内面調整：横指ナデ後縦ミガキ、外面調整：横指ナデ	77-4
522	B 2 ⑤・Ⅲ層	I 1A類	—	—	—	内面調整：斜ミガキ、外面調整：横指ナデ	77-4
523	B 2 ⑤・Ⅲ層	I 1A類 (28.0)	—	—	—	内面調整：縦ミガキ、外面調整：横指ナデ	78-1
524	B 2 ③・Ⅲ層	II 1A類	—	—	—	内面調整：横指ナデ、外面調整：横指ナデ、煎熬痕あり	78-1
525	B 2 ⑥・Ⅲ層	II 1A類	—	—	—	内面調整：横指ナデ後横ミガキ、外面調整：不明、煎熬痕あり	78-4
526	B 2 ②・Ⅲ層	II 1A類	—	—	—	内面調整：横ミガキ、外面調整：横ケズリ	78-4
527	B 2 ⑧・Ⅲ層	II 1A類	—	—	—	内面調整：縦ヘラナデ、外面調整：横指ナデ	78-3
528	B 2 ⑤・Ⅲ層	I 1A類	—	—	—	内面調整：縦指ナデ、外面調整：横指ナデ、煎熬痕あり	78-3
529	B 2 ⑤・Ⅲ層	I 1A類	—	—	—	内面調整：横ミガキ、外面調整：横指ナデ	78-2
530	B 2 ⑥・Ⅲ層	II 1A類	—	—	—	内面調整：横指ナデ、外面調整：横指ナデ、煎熬痕あり	78-2
531	B 2 ⑤・Ⅲ層	II 1A類	—	—	—	内面調整：横ミガキ、外面調整：横指ナデ	78-5
532	B 2 ④・Ⅲ層	I 1A類	—	—	—	内面調整：縦横指ナデ後縦ミガキ、外面調整：縦横指ナデ	78-5
533	B 2 ②・Ⅲ層	I 1A類	—	—	—	内面調整：縦横指ナデ後縦ミガキ、外面調整：縦横指ナデ	78-5

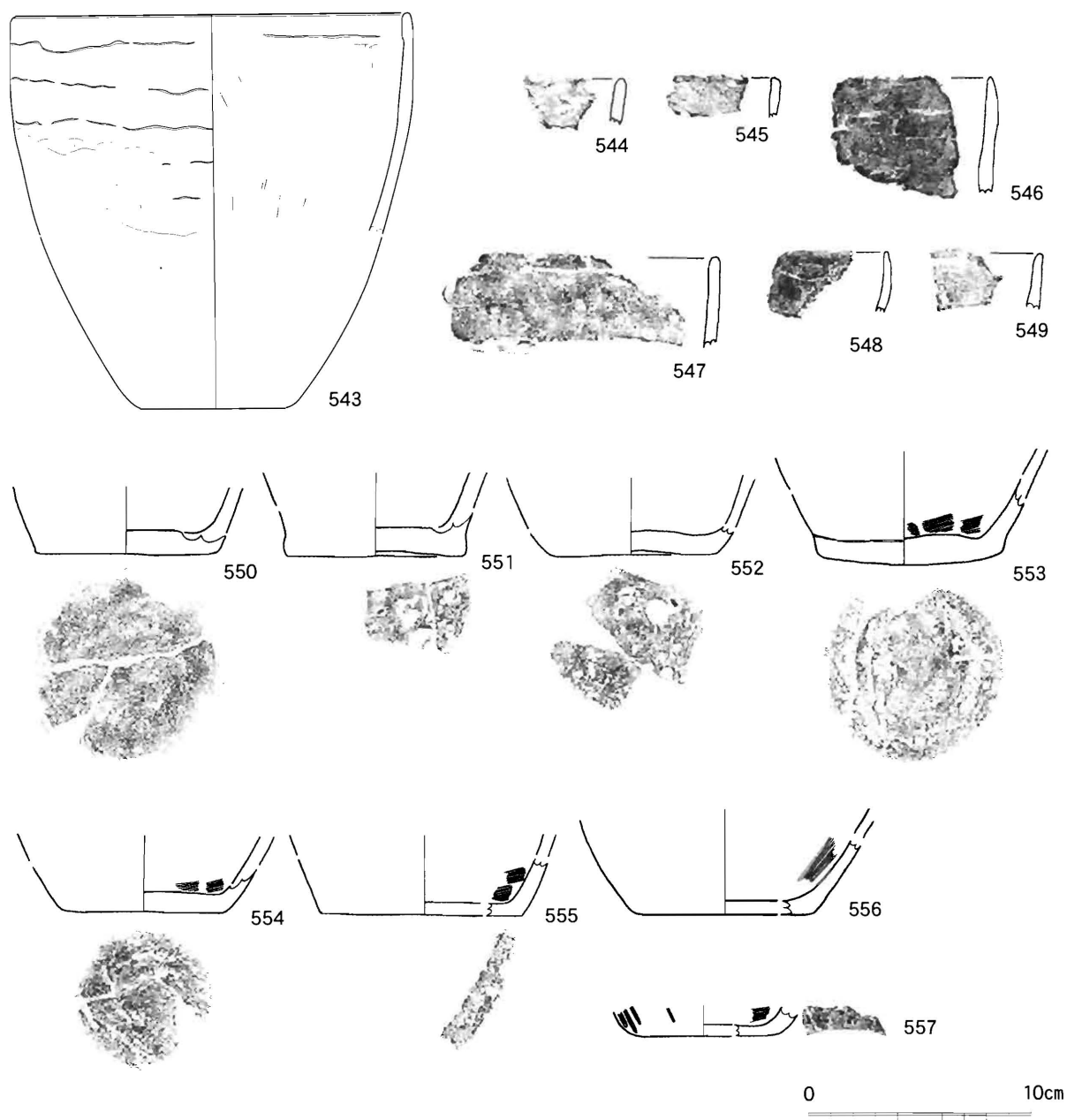
図版70 製塩土器517～533





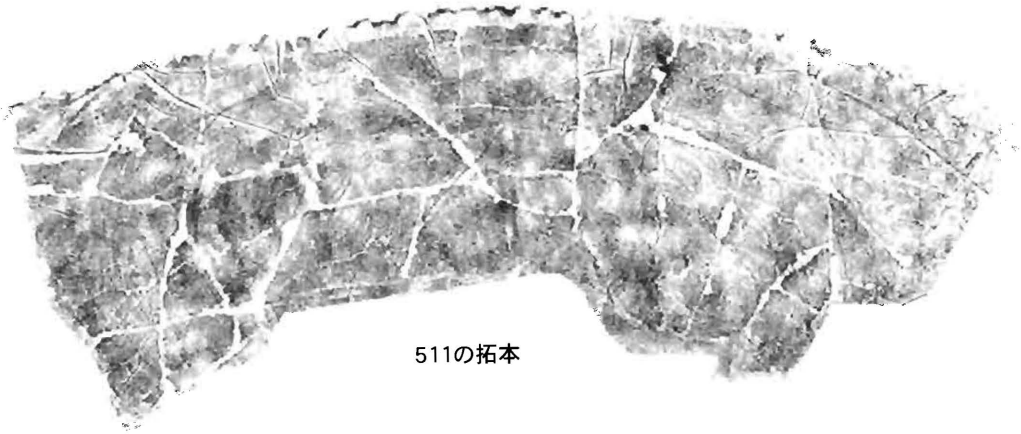
番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
534	B 2 ④・Ⅲ層	I 1B類	(29.0)	—	—	内面調整：横ヘラナデ後縦ミガキ、外面：条痕	79-1
535	B 2 ①・Ⅲ層	I 1B類	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ後縦ミガキ、外面：条痕	79-2
536	B 2 ⑥・Ⅲ層	I 1B類	—	—	—	内面調整：縦ケズリ後縦ヘラナデ、外面：条痕	79-2
537	B 2 ⑤・Ⅳ層	I 1B類	—	—	—	内面調整：横ミガキ、外面：条痕	79-2
538	B 2 ①・Ⅲ層	I 1B類	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ後横ミガキ、外面：条痕	79-2
539	B 2 ②・Ⅲ層	I 1B類	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ後横ミガキ、外面：条痕	79-3
540	B 2 ⑦・Ⅲ層	I 1B類	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ後縦ミガキ、外面：条痕	79-3
541	B 2 ①・Ⅲ層	I 1B類	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ後横ミガキ、外面：条痕	79-3
542	B 2 ⑧・Ⅲ層	II 1B類	—	—	—	内面：スス付着、外面：条痕	79-3

図版71 製塩土器534～542



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特徴	写真
543	B 3 ②・Ⅳ層	Ⅱ2A類	(16.4)	—	—	内面調整：縦横指ナデ、外面調整：縦ケズリ	80-1
544	B 2 ②・Ⅲ層	Ⅲ2A類	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ、外面調整：横指ナデ	80-2
545	B 2 ②・Ⅲ層	Ⅲ2A類	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ、外面調整：横指ナデ	80-2
546	A 2 ②・Ⅳ層	Ⅱ2A類	—	—	—	内面調整：縦横ヘラナデ、外面調整：横指ナデ	80-2
547	A 2 ⑥・Ⅲ層	Ⅱ2A類	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ後横ミガキ、外面調整：横指ナデ	80-4
548	B 2 ⑤・Ⅲ層	I 2A類	—	—	—	内外面調整：横ヘラナデ	80-4
549	B 2 ⑦・Ⅲ層	Ⅲ2A類	—	—	—	内面調整：横ヘラナデ後横指ナデ	80-4
550	B 2 ⑤・Ⅲ層	底部	—	—	(8.0)	内面調整：縦横指ナデ、外面調整：縦横指ナデ、煎熬痕あり	80-3
551	B 2 ②・Ⅲ層	底部	—	—	(8.0)	内面調整：縦横指ナデ、外面調整：縦横指ナデ、煎熬痕あり	80-3
552	B 2 ③・Ⅲ層	底部	—	—	(8.0)	内面調整：縦横指ナデ、外面調整：縦横指ナデ、煎熬痕あり	80-5
553	A 2 ⑨・Ⅲ層	底部	—	—	(7.8)	内面調整：縦横指ナデ、外面調整：縦横指ナデ、煎熬痕あり	80-5
554	B 2 ②⑨・Ⅲ層	底部	—	—	(5.8)	内面調整：縦横指ナデ、外面調整：縦横指ナデ、煎熬痕あり	81-1
555	B 2 ①・Ⅲ層	底部	—	—	(9.0)	内面調整：縦横指ナデ、外面調整：縦横指ナデ、煎熬痕あり	81-1
556	B 2 ⑨・Ⅲ層	底部	—	—	(9.0)	内面調整：縦横指ナデ、外面調整：縦横指ナデ、煎熬痕あり	81-2
557	B 3 ⑤・Ⅲ層	底部	—	—	—	内面調整：縦横指ナデ、外面：条痕、煎熬痕あり	81-2

図版72 製塩土器543～557



511の拓本



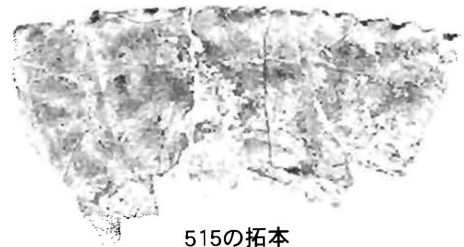
512の拓本



513の拓本



514の拓本



515の拓本



516の拓本



534の拓本



543の拓本

図版73 製塩土器の拓本

# (8) 注口土器・香炉形土器

注口土器や香炉形土器は極めて少ない。これらは共伴土器からみる限り晩期中葉（大洞C2式）に属するが、小破片のため断定できないものもある。

## 〔注口土器〕

注口土器と推定される破片が3点ある。

①そろばん形の注口土器で、体部中央部をめぐる隆帯部から下半部にかけての小破片である。隆帯部は連続したB突起で構成され、上面に連続した刺突痕と突起が見られる。体部下半部に半肉彫りのな雲形文が描かれる。縄文はない。器面は丁寧に研磨され、赤彩されている。極めて大洞C1式に近い文様や形をしたものであるが、やはり大洞C2式土器に伴ったものと考えておきたい。

②くの字形に屈曲する注口土器と思われる体部上半部の小破片である。残存する隆帯部はB突起が付き、中に沈線や三角形の彫り込みが見られる。また、隆帯の周囲には沈線がめぐる。晩期中葉の注口土器にはあまり見られない形や文様の破片である。

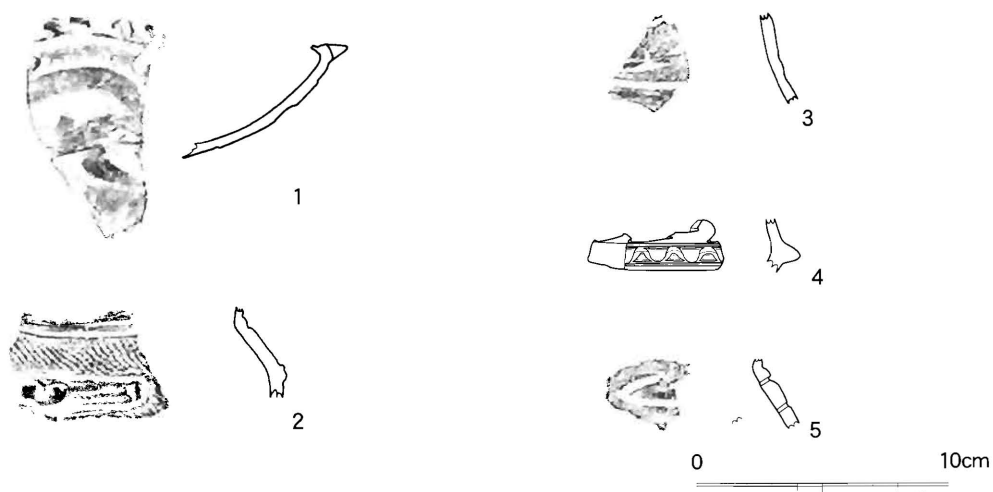
③明確に注口土器と判断するのは困難な小破片である。壺かとも思われるが、内面が丁寧に磨かれているので、注口土器の体部上半部の破片と考えた。磨消縄文による雲形文が描かれているようである。

## 〔香炉形土器〕

香炉形土器と推定される破片が2点ある。

①体部中央の隆帯部の破片である。破片の上端に透かしの部分が観察される。隆帯部には三角形の窪みが並ぶ。縄文は施文されなかったようである。

②体部上半部の小破片である。弧線状の透かしがある。器面はあらく磨かれている。縄文はない。外面から篋状のものを差し込んで透かしを作ったため、内面に粘土の盛り上がりが見られる。



番号	出土区・層位	分類	口径	器高	底径	特 徴	写真
1	A2⑨・Ⅲ層	注口1	—	—	—	赤彩されており、土器表面は非常によく研磨されている	81-3
2	B2②・Ⅲ層	注口2	—	—	—	隆帯を沈線で囲んでいる。隆帯の中にも沈線を入れてある。	81-3
3	B2⑦⑧・Ⅲ層	注口3	—	—	—	体部下半はよく研磨されている。	81-3
4	B2⑥・Ⅲ層	香炉1	—	—	—	隆帯の突起部下面には三角形の彫り込みを入れてある。	81-3
5	—	香炉2	—	—	—	土器裏面には表から穴を開けたため、貫通部周囲に盛り上がりがある。	81-3

図版74 注口土器・香炉形土器

## (9) 漆入り土器

### 〔漆入り土器〕(図版56-447、写真81-4・5)

B2区の第Ⅲ層から内面に漆塊が張り付いた土器の破片が1個体出土した。おそらく漆液を入れた土器であろう。口縁部・体部・底部の破片が数点ずつあるが、連続して接合しないため全体の形を復元することはできなかった。各部位ごとに断面図を作り、器形の傾きや器壁の厚さ・漆塊の付着状況などを考慮しながら、復元図の作成を試みた。それに基づくと、器高約14cm、口径約14cm、底径約6cmの比較的小型の深鉢となる。口縁部には2個1対の小突起が付くが、破片のため、全体に付く数は不明である。外面には原体RLの縦位の縄文が施されている。胎土には石英粒が多く含まれている。

漆塊が張り付いている破片は2片あり、ともに体部下半部と推定される。残存する漆塊の厚さは0.4cm、範囲は約7.0cm×約4.0cmほどである。しかし、漆塊が剥がれ落ちた痕跡の破片もあり、本来はもっと広い面積に付着していたと推定される。底部内面に漆塊が張り付いていないが、それも剥がれてしまったためと思われる。なお、漆塊は皺がより、カサカサした感じで、はがれた漆塊は極めて軽いという印象を受けた。表面の色調は黒を基本とし、一部を削ってみると黄橙色となるが、この漆塊が生漆であったのか、顔料をいれた漆液であったのかは推定することができなかった。

### 〔漆入土器の類例〕

青森県で発見された縄文時代晩期の漆入土器を集成すると、3遺跡で11例を見ることができる。漆製品同様、是川中居遺跡や亀ヶ岡遺跡のような泥炭層遺跡で発見されたものが圧倒的に多い。しかし、今津遺跡例は普通の遺物包含層から出土したものであり、漆入土器が泥炭層遺跡でなくとも発見されるものであることを示している。県外では岩手県安代町曲田遺跡などから発見されている。おそらく、普通の遺物包含層出土の土器を再検討するだけで、多数の漆入土器を確認することができるであろう。漆入土器の存在は、その遺跡で漆製品の製作が行なわれていたことを示すもので、その発見は漆製品の製作が各地で行なわれていたことを示すバロメーターとなる。一覧を見ると漆入土器は深鉢・鉢・台付鉢・壺などがあるが、概して口の広い比較的小さな深鉢や鉢が利用されている。これは漆作業に関わるためであろう。

青森県内の縄文時代の漆入土器の類例								
No.	所在地	遺跡名	時 期	器種	口径	器高	文様等	参考文献
1	平舘村	今津	大洞C2式	深鉢	14.0	14.0	縄文のみ	本報告書
2	八戸市	是川中居	大洞C2式	鉢	12.0	8.5	縄文のみ	宇部・小久保2002
3	八戸市	是川中居	大洞C2式	台付鉢	11.0	8.3	縄文のみ	宇部・小久保2002
4	八戸市	是川中居	晩期	鉢破片	—	—	縄文のみ	宇部・小久保2002
5	八戸市	是川中居	晩期	深鉢	—	—	無文	北海道開拓記念館1998
6	八戸市	是川中居	晩期	深鉢	—	—	縄文のみ	八戸市教育委員会2002
7	八戸市	是川中居	晩期	深鉢	—	8.3	縄文のみ	青森県立郷土館1993
8	八戸市	是川中居	晩期	壺	—	—	?	喜田・杉山1932
9	八戸市	是川中居	晩期	深鉢?	—	—	?	喜田・杉山1932
10	木造町	亀ヶ岡	晩期	鉢	—	9.0	縄文のみ	青森県立郷土館1993
11	木造町	亀ヶ岡	晩期	鉢	—	8.0	縄文のみ	青森県立郷土館1993

#### (10) 弘大調査区出土土器の集成図について

##### 〔弘大調査区出土土器の集成図からみた、赤彩土器・有文土器・炭化物付着土器について〕

この集成図（図版75～82）は、第4章で取り上げた土器の実測図（縮尺3分の1）を更に縮めて6分の1として、集成したもので、合計234点ある。小破片を資料化した拓本などは省略した。

この集成図は、調査区内の遺物密集ブロックに捨てられた土器の累積を示すものであるから、一つのブロック内のさまざまな器種・器形のバラエティを簡単に一覧できるものとなっている。これを見ると、壺の器形がバラエティに富んでいること、皿・鉢・台付鉢・深鉢が規格的に製作されていること、赤彩された土器が極めて少ないこと、雲形文など本格的な文様をもつ土器が少ないこと、文様があるとしても皿と一部の浅鉢に集中すること、炭化物付着の土器が器種の違いできちんと分かれること、鉢などは本格的な文様があってもおかまいなく炭化物が付着していることなど、いろいろなことを視覚的にとらえることができよう。

集成した器種は、壺48点・皿19点・台付皿1点・浅鉢35点・鉢78点・台付鉢17点・深鉢28点・製塩土器8点で、小さな破片しかない注口土器と香炉形土器は含まれていない。

以下で用いる資料の点数は、あくまでも集成図にのせた土器に基づくものである。破片を含めた器種と器形の分類、器種と器形の組成やその比率（組成比）などについては、第4章第2節を参考にして欲しい。

##### 〔集成図のなかの赤彩土器・有文土器・炭化物付着土器〕

ここでは、集成図を利用して、装飾（主として赤彩されたもの・体部にきちんとした文様帯をもつものに限る）が施されている土器や使用されて炭化物が付いている土器などが、どんな器種やどんな器形などにどのくらいあるのかを考えてみたいと思う。そのために赤彩された土器は、赤彩された部分を赤色で、炭化物の付いた土器は、付着部分を青色で示した。これらの土器が、出土土器の中で、どんな傾向を示すのかは、集成図を見ることによって、ある程度窺うことができる。

##### 〔赤彩のある土器〕

赤彩のある土器は、壺6点、皿1点、台付皿1点、浅鉢1点で、合計9点である。破片では注口土器もある。鉢・台付鉢・深鉢・製塩土器には赤彩されたものはない。赤彩土器は集成図全体の中では3.8%であり、極めて数が少ない。

赤彩壺は無文のもの4点、体部にきちんとした文様帯（以下、有文とする）をもつもの2点である。無文のものは、外面がよく研磨され、小型で細い「ハ」の字形の頸部をもち、体部が下脹れとなるものが多い。有文のものは、中型のものと大型のもので、磨消縄文による雲形文をもつ。大型品は、口縁が頸部から横に広がり、端部が短く直立する形態のもので、複雑な突起がつき、極めて装飾的である。

赤彩皿は有文のもの1点である。内外面ともに赤彩され、磨消縄文による雲形文をもつものである。このほか赤彩ではないが、生漆をニスのように塗ったと思われるものがある（※付きのもの）。

赤彩台付皿は有文のものが1点ある。皿部・台部ともに内外面が赤彩されて、皿部外面に磨消縄文による雲形文をもつ。丁寧な製作である。

赤彩浅鉢は有文のものが1点ある。他の浅鉢と違い、頸部が屈曲してすぼまる形である。外面に磨消縄文による雲形文があり、赤彩されている。

##### 〔有文土器〕

有文土器は、体部あるいは肩部にきちんとした文様（文様帯）をもつ土器で、壺2点、皿19点、台付皿1点、浅鉢8点、鉢4点で、合計34点である。小破片の注口土器や香炉形土器にも文様が見られた。

台付鉢・深鉢には有文土器はない。集成図全体の中では14.5%である。有文土器のうち赤彩されているものは5点あり、有文土器の15%を占める。文様の種類は、多くが磨消縄文による雲形文である。

有文壺は2点あり、ともに赤彩されている。

有文皿は19点あり、無文のものはない（破片ではある）。磨消縄文による雲形文が中心で、種類がある。うち1点が赤彩され、3点が生漆らしきものが塗布されている。有文の皿が多いのは、弘大調査区出土土器の大きな特色であり、有文土器の56%を占める。

有文台付皿は1点あり、赤彩されている。

有文浅鉢は8点あり、うち7点は丸底あるいは丸底に近く、浅鉢形の中では口径に対し器高の割合が小さく、皿形に近い形態である。うち1点は赤彩されている。

有文鉢は5点あり、うち4点が小型品で、1点が比較的大型品である。赤彩されたものはない。4点に炭化物の付着が見られる。

### 〔炭化物付着土器〕

炭化物付着土器としたものは、土器の外表面や内面に炭化物が付着しているものである。炭化物が付着する原因の大部分は、食物を土器に置いて煮炊きすることによって生じるもので、こうした土器は、底部に近い部分が二次的加熱のため橙色に変色しているものが多い。

なお、炭化物付着の土器や二次的加熱痕をもつ土器については、実験考古学的な立場から、煮炊きに関してどのように使用されたかなどの研究がある（小林1999）。また縄文晩期のものに関しては、煮炊きの痕跡をパターン化して示したもの（杉山1979）や煮炊きの痕跡と土器の器種や法量の関係を調べ、煮炊きに使用された小型鉢の増加の意味を問題にした研究もある（工藤2002）。

（土器の外表面に付着する炭化物）これは、経験的に考えて、①煮こぼれに由来するものと、②薪などの燃料からの煤に由来するものがある。煮こぼれはある厚さをもって炭化していることがあり、表面がカサカサした感じのものがある。また煮こぼれが流下した状態のまま炭化したものもある。しかし、層をなす炭化物であっても、土器を洗浄した時や復原作業中に剥げ落ちてしまったものが多い。こうしたものでも、沈線や縄文の凹みにぎらついた炭化物として残るものがある。また、数は少ないが、タール状にべったりと器面に張り付いている炭化物もあるが、これは土器の洗浄や復原作業中でも剥げ落ちることはほとんどない。薪などの燃料の煤に由来する炭化物は土器の表面に吸着し、あまり厚さをもたず黒く汚れた感じのものが多いが、炭化物が剥げ落ちた部分と区別がつかないこともある。集成図では薪による煤については、青色を塗らず、煤付着部分として※を付けた。

（土器の内面に付着する炭化物）これは、経験的に考えて、①汁けの無くなった器壁の部分に内容物が粘り付き、器壁の熱で炭化したものと、②汁けが煮詰まりなどして、内容物の一部が底に焦げついたものなどがあると思われる。①の場合、炭化物は土器の内面にぐると帯状に付くことが多い。なお、土器の内面は平滑になっているため、付着していた炭化物が、土器の洗浄中や復原作業中に剥がれ落ちることが多いが、その部分は黒く変色しており、他の部分と区別がつくので、剥がれ落ちた痕跡のあるものも炭化物付着土器と見なしている。

（炭化物付着土器）炭化物が付着している土器は、鉢75点、台付鉢17点、深鉢27点の合計119点ある。壺・皿・台付皿・浅鉢・製塩土器には炭化物の付着は認められない。小破片の注口土器や香炉形土器にも炭化物は認められない。海水の煎熬工程に使用される製塩土器は、深鉢形でしかも底部付近に二次加熱痕が見られるが、炭化物が付着するものは殆どない。

炭化物付着の鉢は75点あり、総鉢形78点中の96.1%を占めている。そのうち①外面のみに炭化物が付着しているもの4点、②内外面ともに付着しているもの68点、③内面のみに付着しているもの3点となり、圧倒的に②内外面ともに付着しているものが多い。また①の外面のみに付着しているものは、煮こ



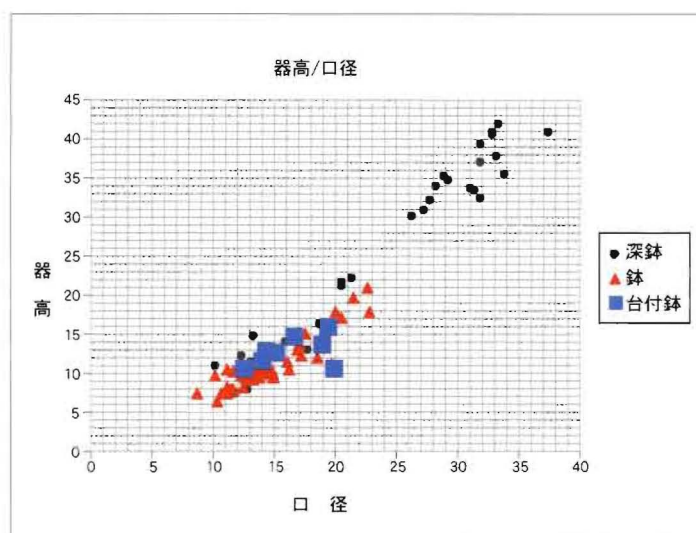
ばれでなく薪の煤に由来するものであった。器高の分かるもの、あるいは推定出来るものを利用すると、器高は6cm から21cmまでである。これを3区分すると①器高6～12cmのもの42点、②12～16cmのもの8点、③16～21cmのもの2点となり、①に最も多く集中する。また、口径でいうと10～15cmに最も多く集中する。したがって小型の鉢が、煮炊きに非常に多く使用されていることが分かる。

炭化物付着の台付鉢は16点あり、総台付鉢数17点中の94%を占める。台部は二次的な加熱で橙色に変色し、ボロボロになっているものが多い。炭化物がすべて内外面ともに付着しているものだけである。炭化物が付着していないものも1点あるが、全体に著しい二次加熱を受けて、内外面とも赤く変色している。器高の分かるもの、あるいは推定出来るものを利用すると、器高は13cmから20cmまでである。口径は11cmから20cmまでである。鉢と同じように小型のものまで煮炊きに使われていることが分かる。

炭化物付着の深鉢は27点あり、総深鉢数28点中の96.4%を占める。そのうち①外面のみに炭化物が付着しているもの16点、②内外面ともに付着しているもの10点、③内面のみに付着しているもの1点となる。①の内訳は煮こぼれに由来するもの15点、薪の煤に由来するもの1点である。なお、鉢や台付鉢と比べると①が多いのが目立つが、体部下半部を欠損しているものが多いため、その部分に炭化物が付着していても点数に数えられないこともあろう。炭化物のついていない1点は漆入れ容器として利用されているものである。また、炭化物付着の深鉢の大きさは、器高の分かるもの、あるいは推定出来るものを利用すると、10.8cmから40.7cmまでである。これを3区分すると①器高10cm～15cmのもの2点、②器高21cm～22cmのもの2点、③36cm～41cmのもの4点となり、③の大型深鉢も煮炊きに利用されていることが分かる（第7図参照）。

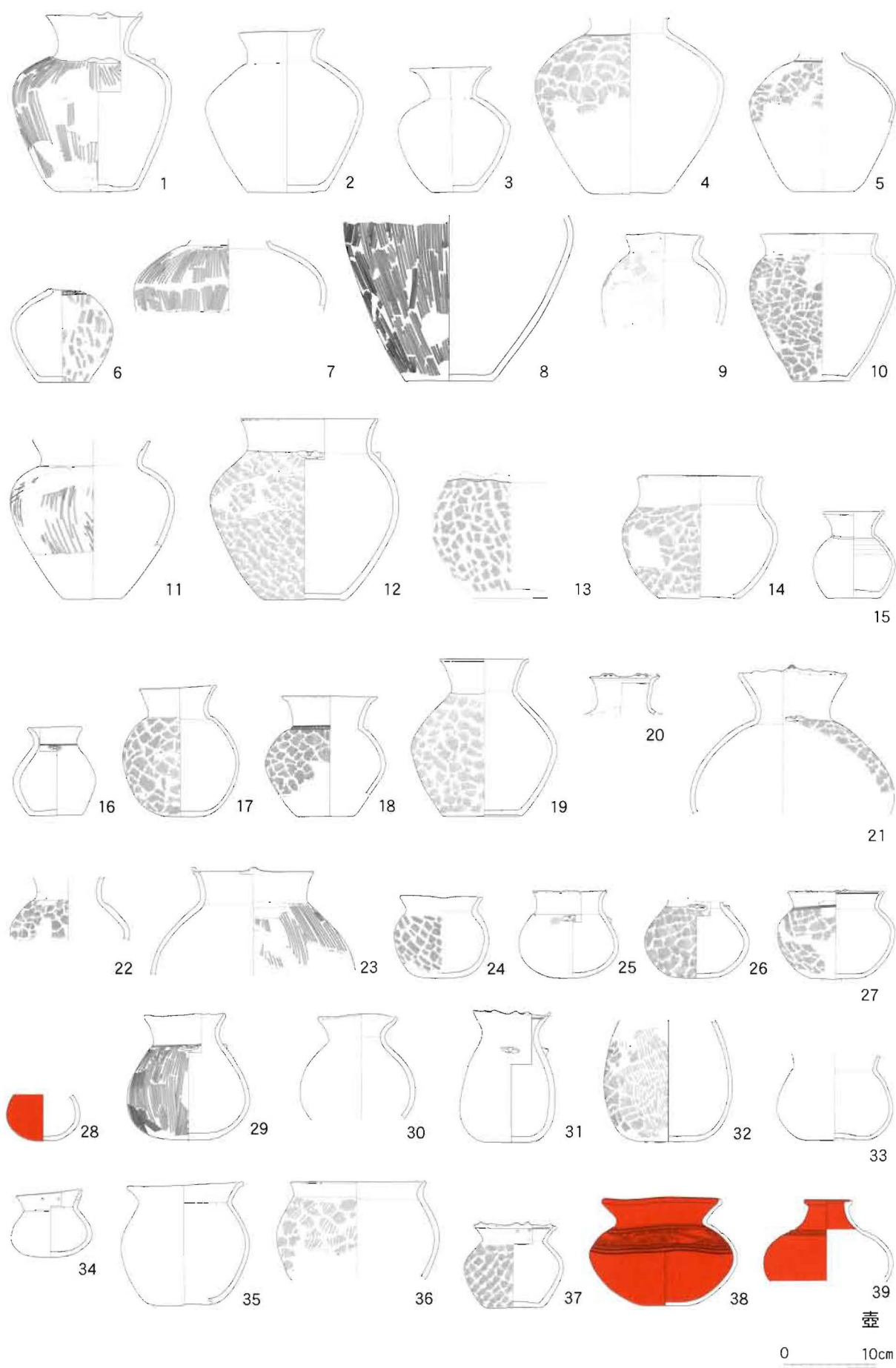
以上のことから分かるのは次のことである。

- ①鉢・台付鉢・深鉢は専ら煮炊き用土器である。
- ②大型の深鉢よりも小型の鉢・台付鉢の方が煮炊きに数多く使用されている。このことは、今津遺跡の村調査区の資料を用いた工藤竹久の煮炊き土器の研究の成果（工藤2002）とほぼ同じ内容である。
- ③装飾的な文様のある鉢も煮炊きに使用されているので、煮炊き用土器と非煮炊き用土器は、装飾の有無ではなく、器種によって決定されている。

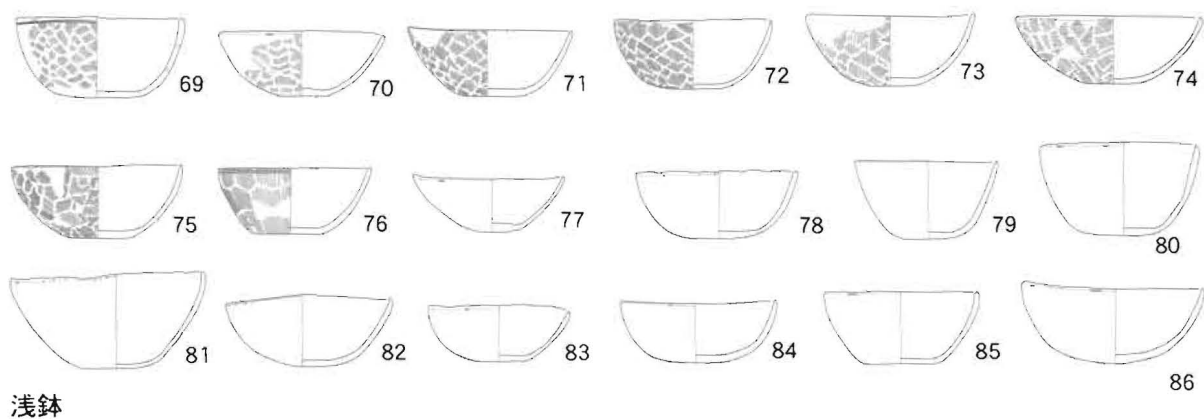
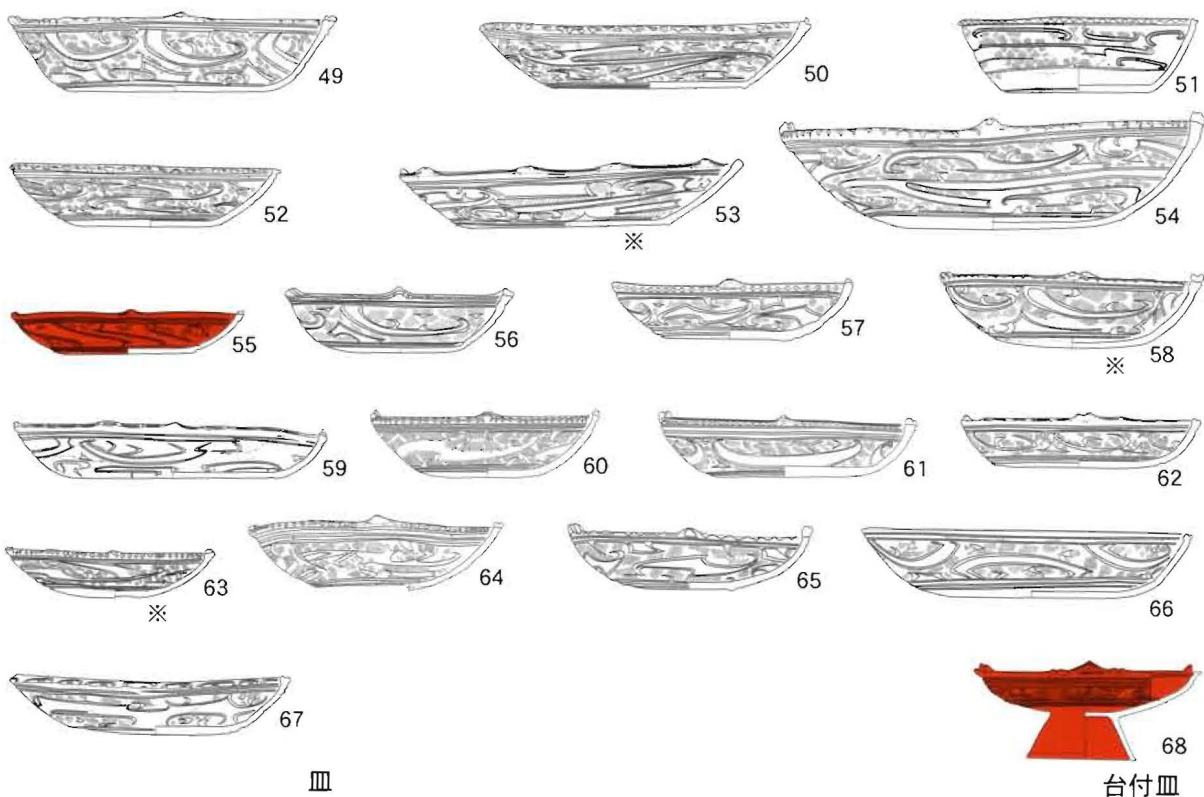
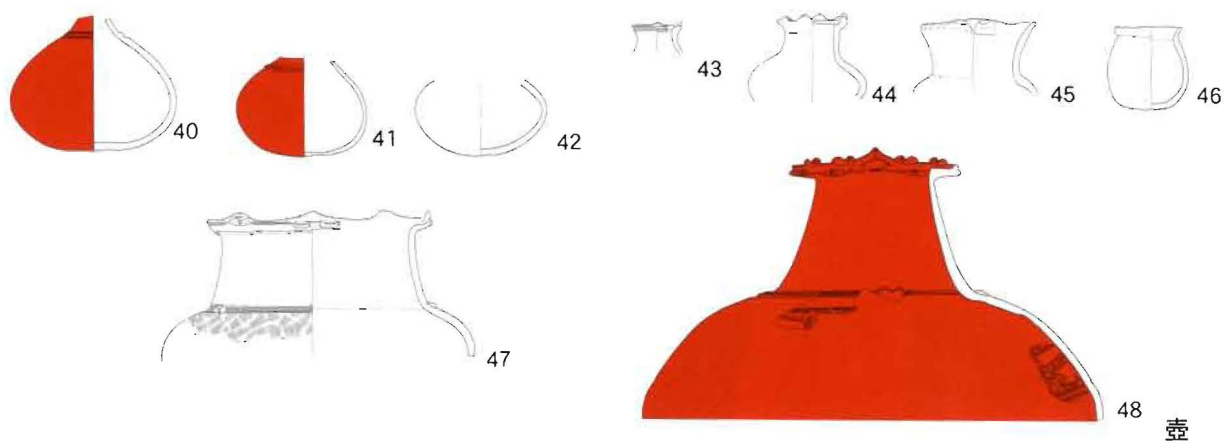


第7図 炭化物が付着した鉢の器高と口径の比率



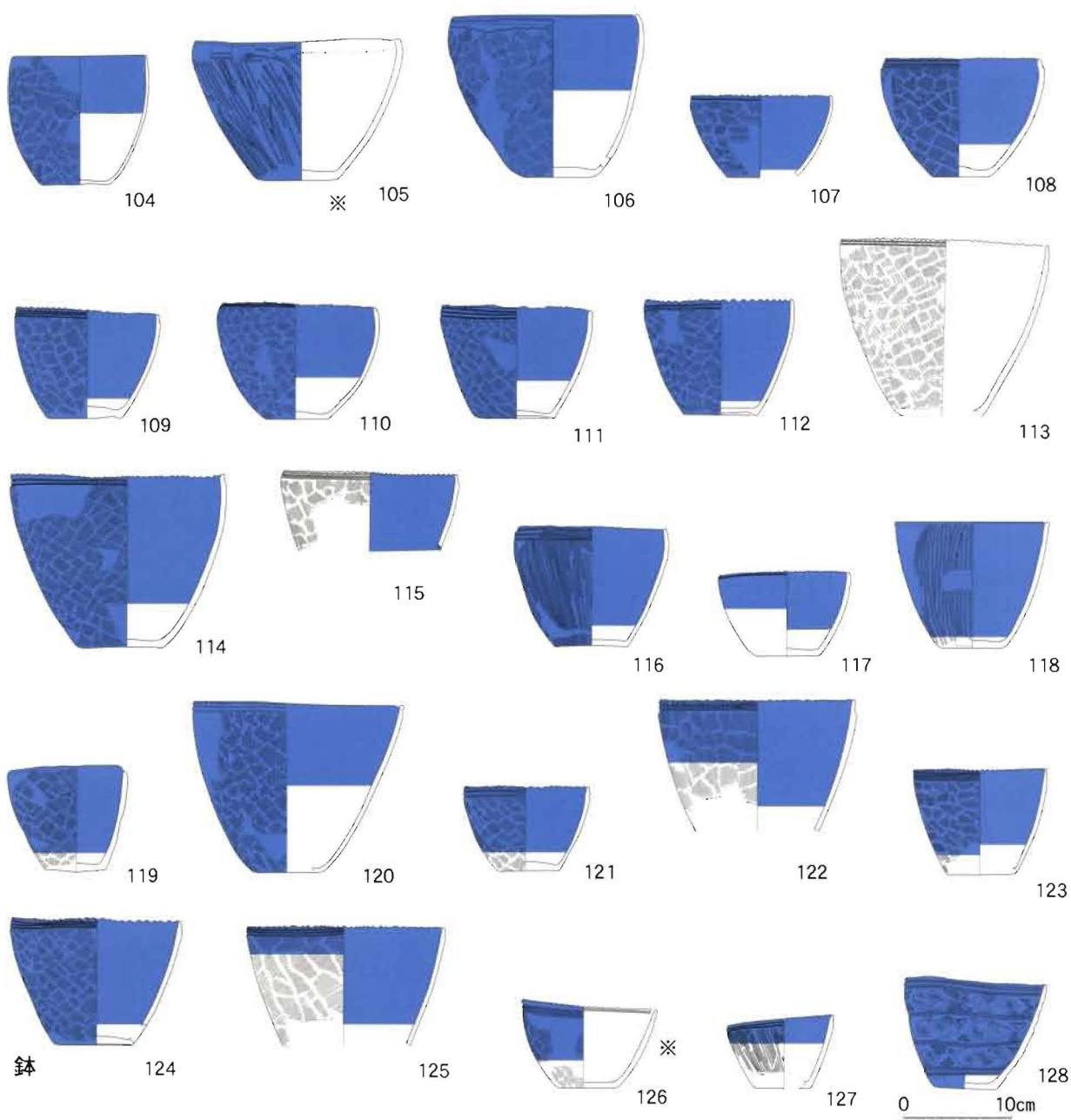
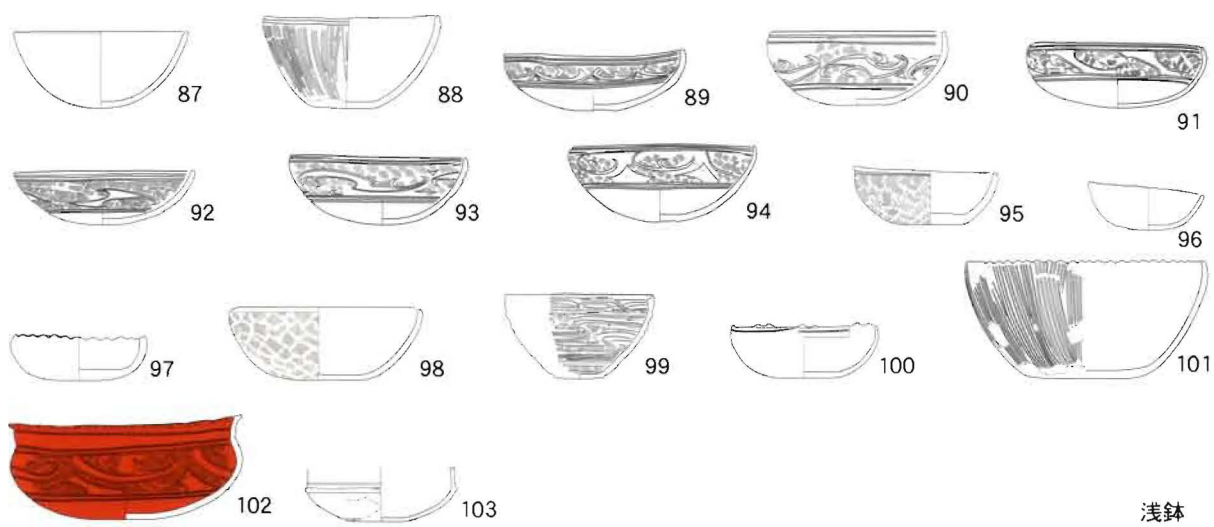


図版75 弘大調査区出土土器集成図 1 (壺)



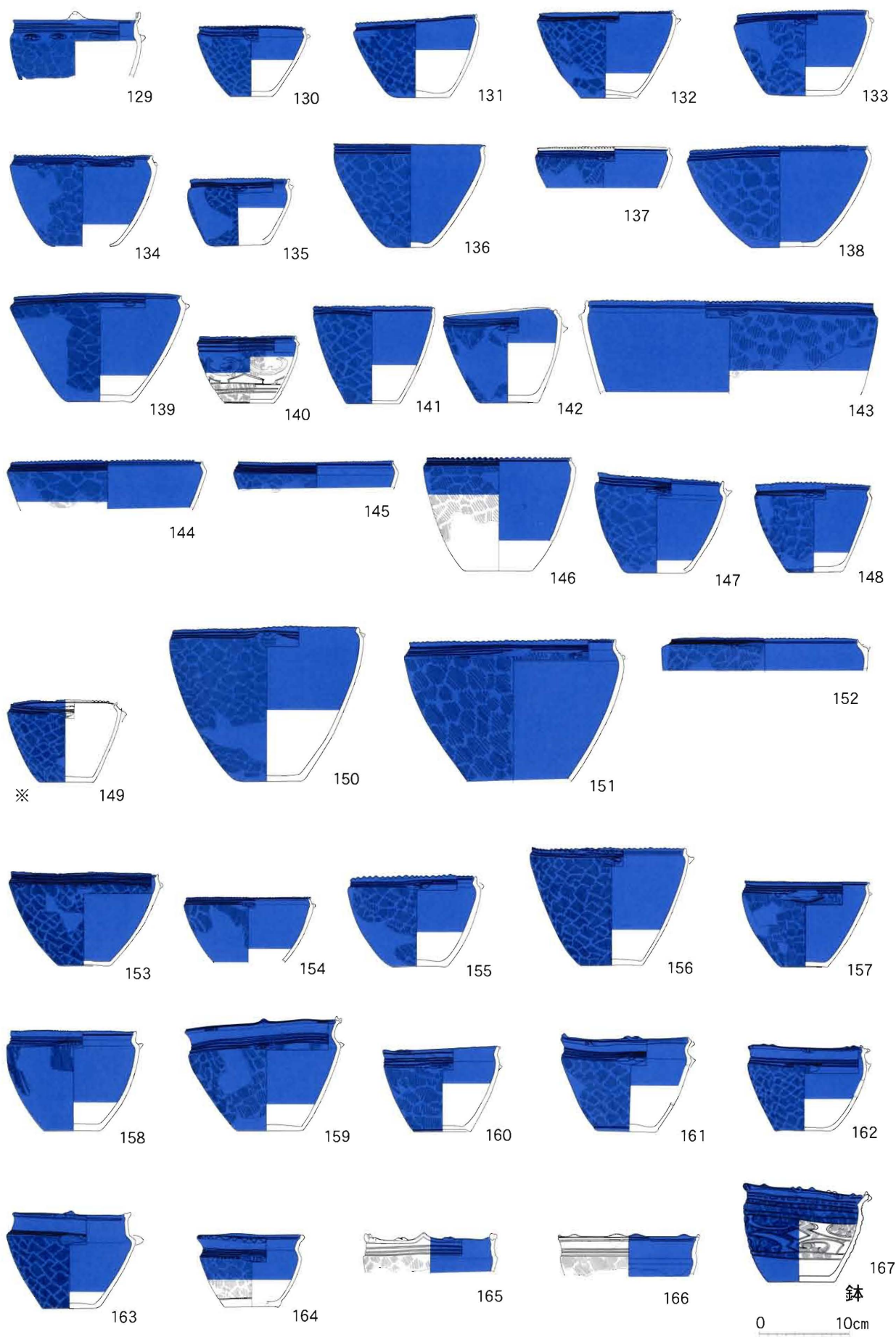
0 10cm

図版76 弘大調査区出土土器集成図2 (壺・皿・浅鉢)

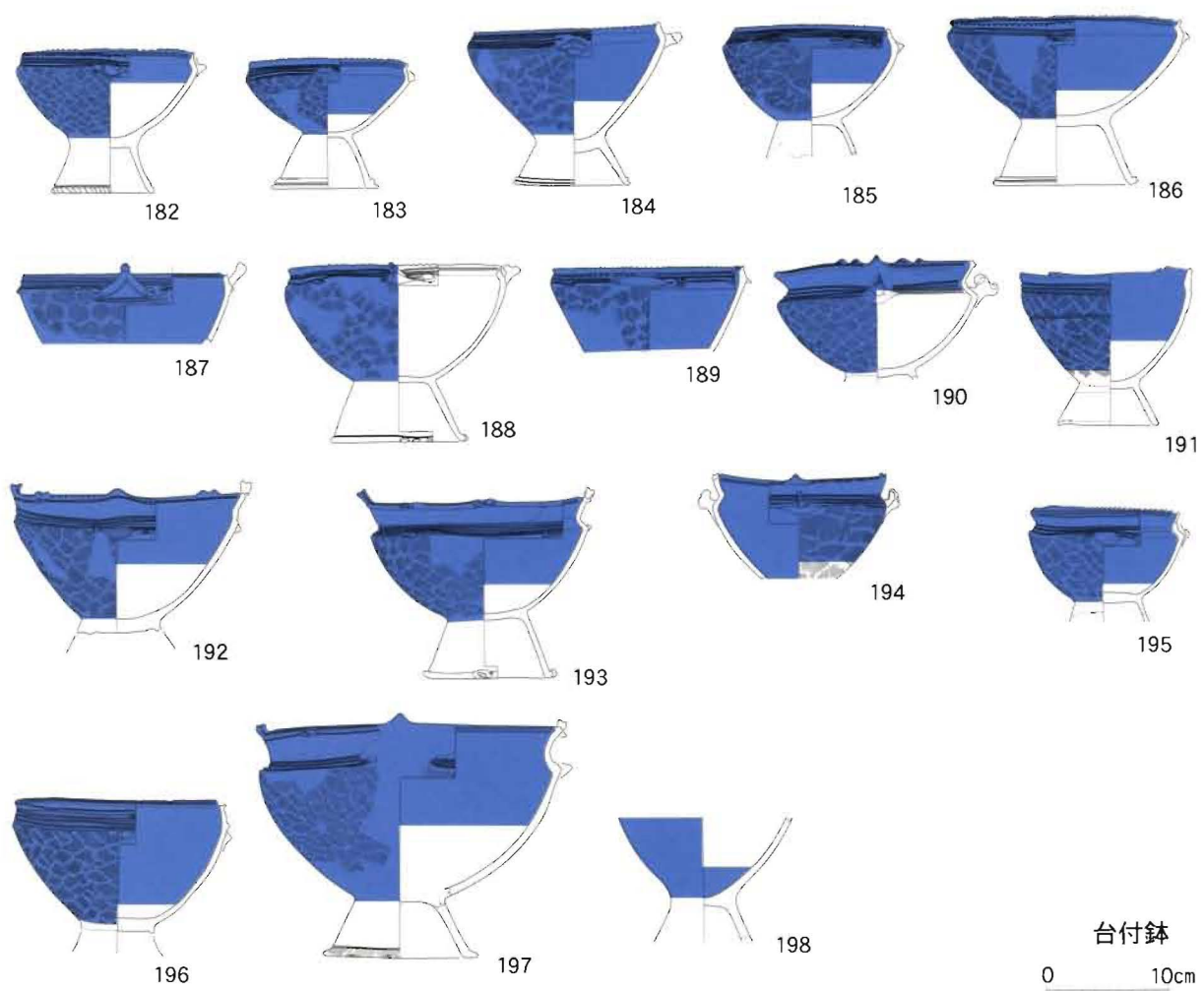
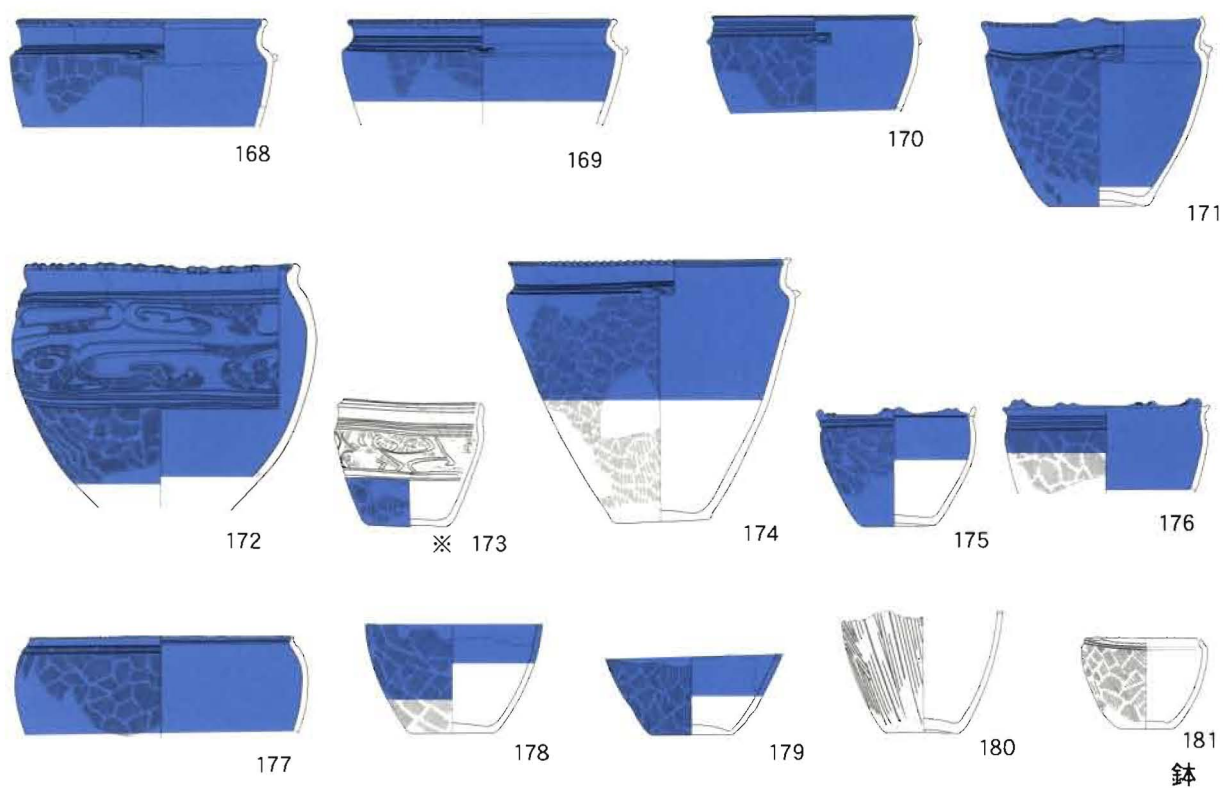


図版77 弘大調査区出土土器集成図3 (浅鉢・鉢)

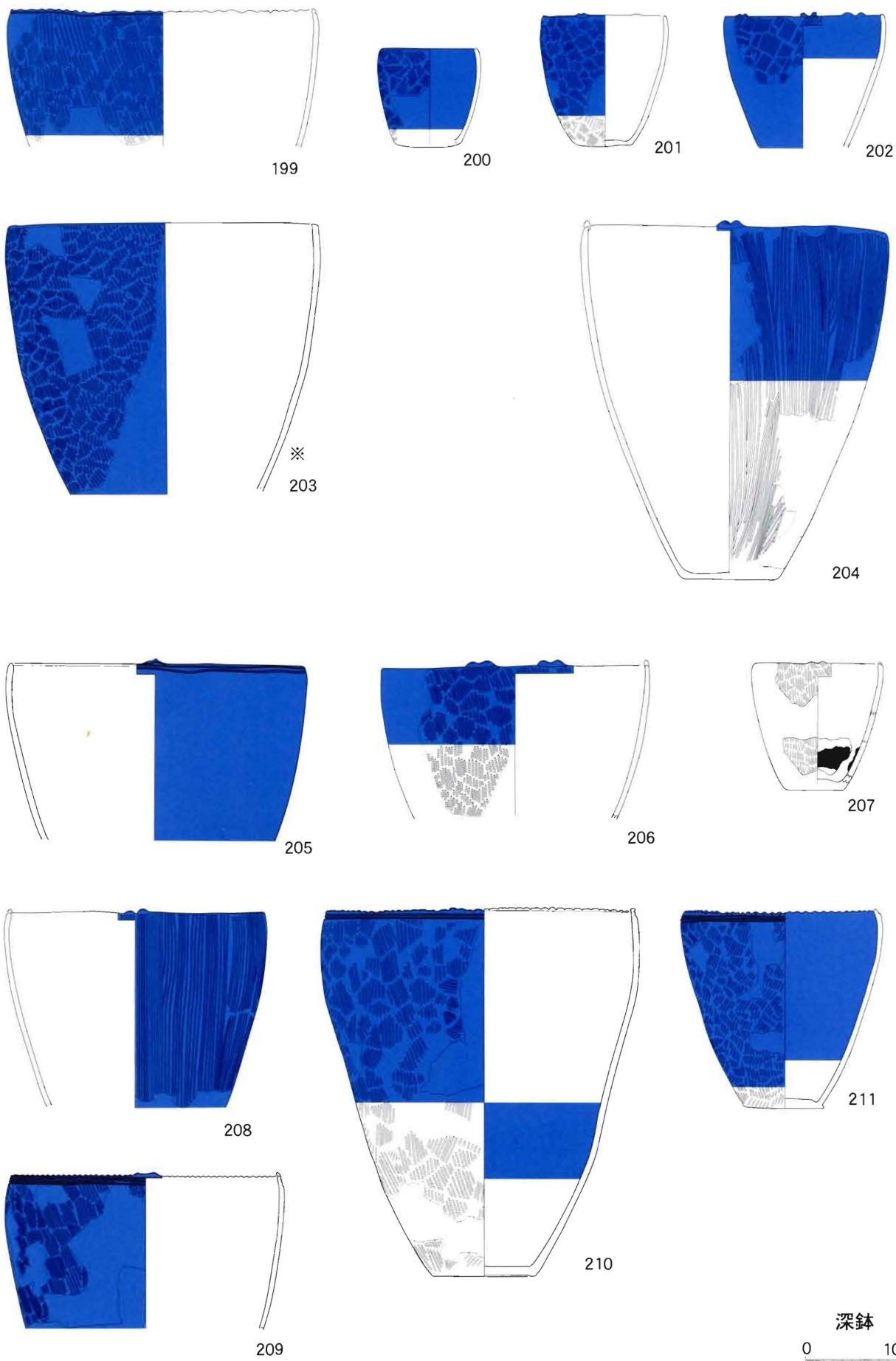




図版78 弘大調査区出土土器集成図4（鉢）

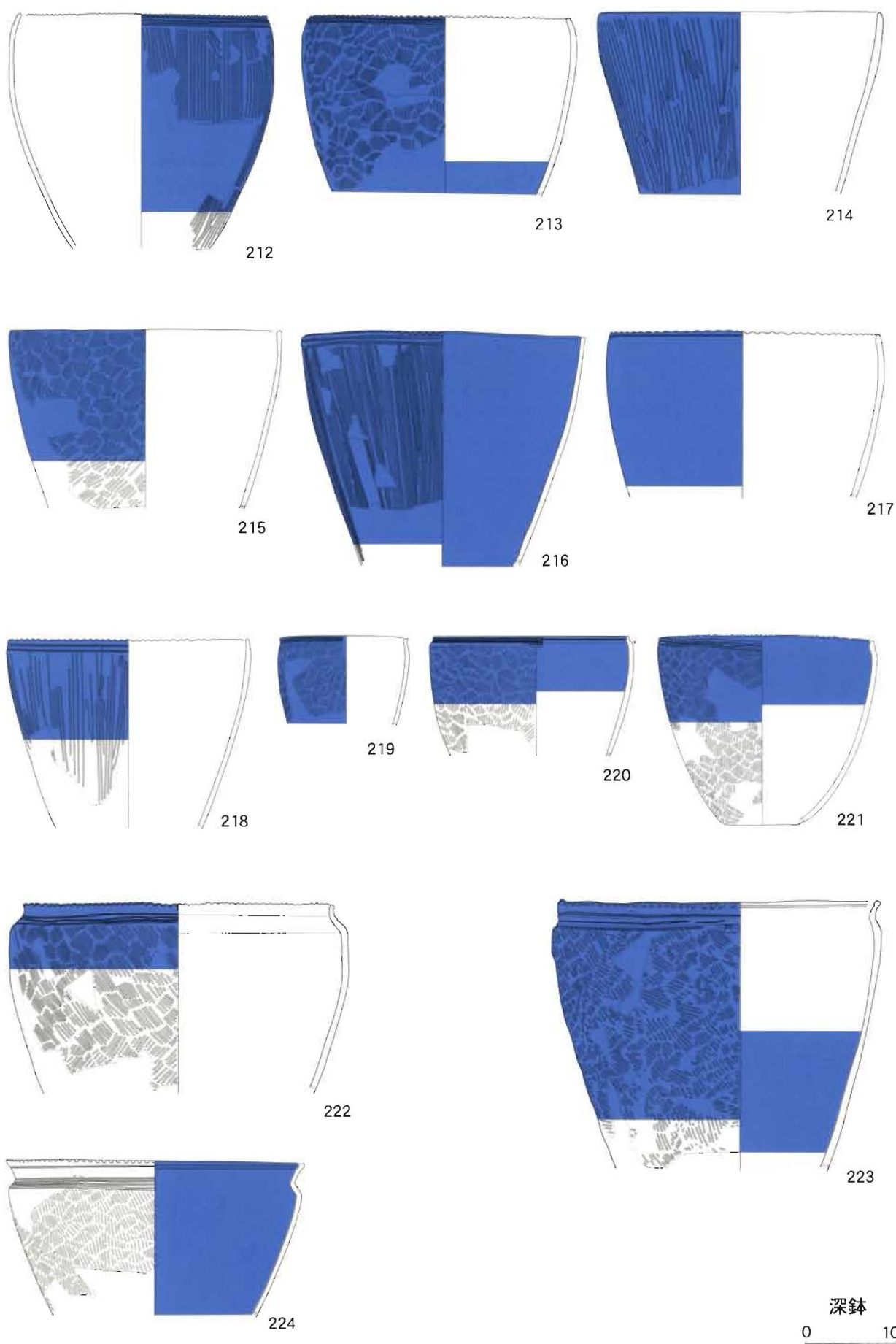


図版79 弘大調査区出土土器集成図5 (鉢・台付鉢)

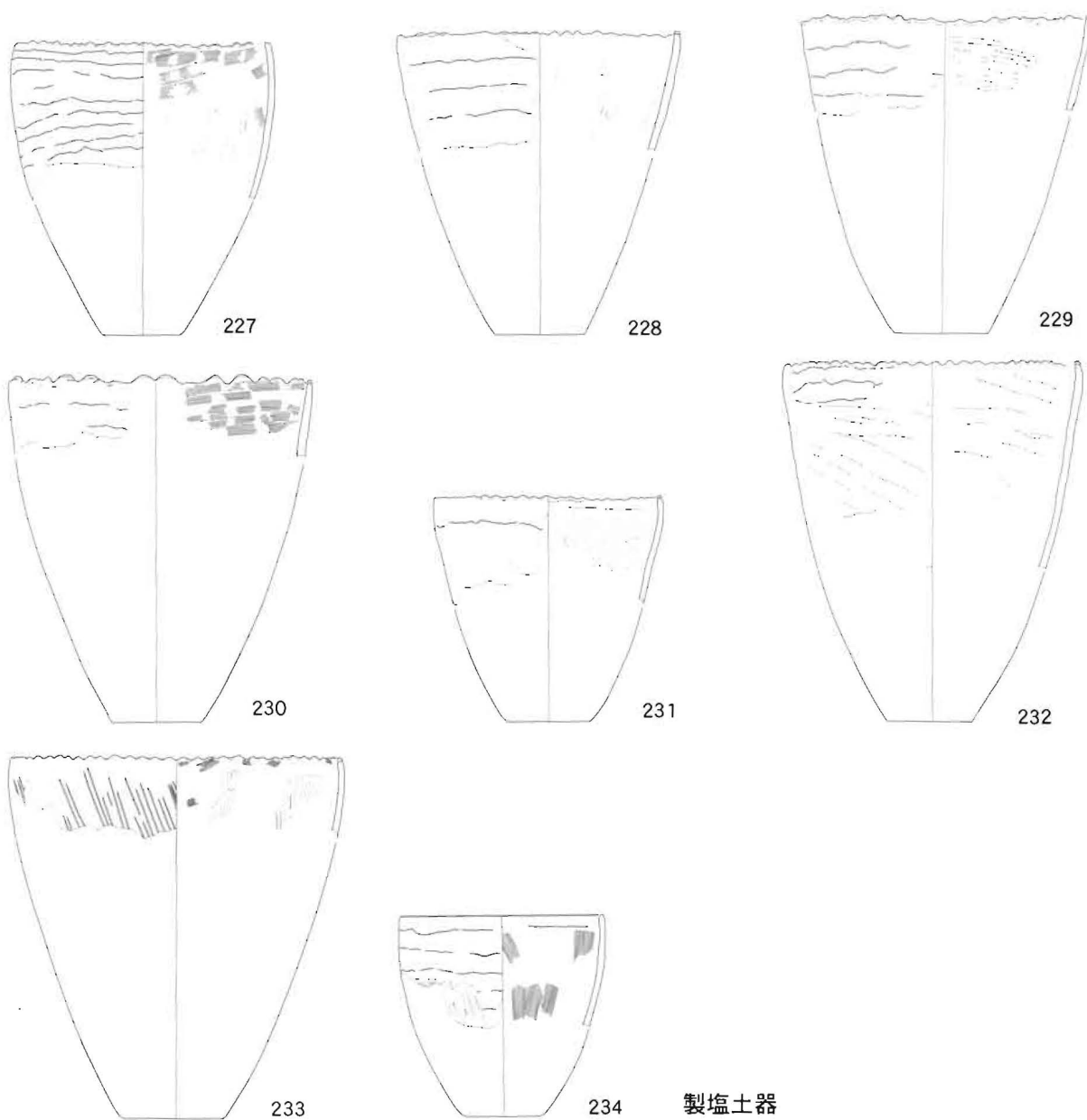
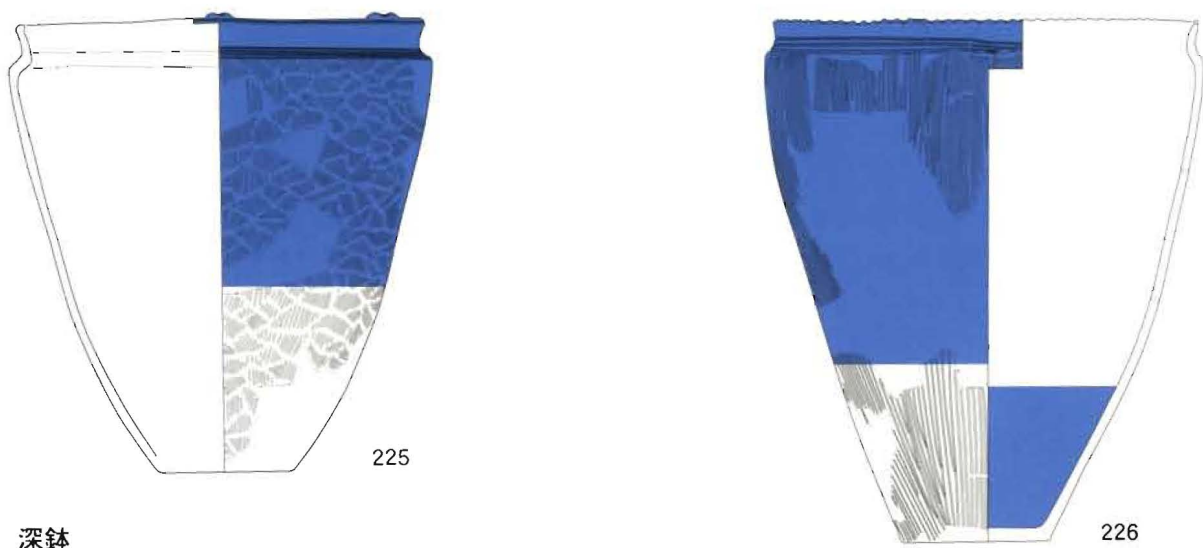


図版80 弘大調査区出土土器集成図6（深鉢）





図版81 弘大調査区出土土器集成図7（深鉢）



図版82 弘大調査区出土土器集成図8（深鉢・製塩土器）



## (11) 今津遺跡出土の土器群について、まとめと考察

### (i) 各器種の特徴

壺は全部で14種類に分類したが、壺F類は類例が無いものばかりをまとめたもので、実際は19種類にも及ぶ。このように壺全体から見て壺の規格は不揃いであることが特徴としてあげられる。

また壺には、文様が伴うものは少ない。しかし比較的、他の器種よりも赤彩のものが多いこと（特に壺E類に多い）や、器面が丁寧に研磨され光沢を帯びるものがあるなど、丁寧に作られた傾向がある。

皿は全部で11種類に分類した。皿は今津遺跡の中で、最も文様が伴う器種である。中でも皿ⅡA類（胴部から口縁部が緩やかに内彎しながら外に開き、突起が施され、文様が伴う）とした資料が多い。口縁部にA突起が規則的に4単位施されることが多い。

また、口唇文様のバリエーションの多さや内面に底部との区画帯や底面に作り出しが見られるなど他の器種よりも文様以外の装飾も著しい。しかし、赤彩される皿の割合は壺よりも低い。稀にニスのように漆を塗ることがある。また、地文に条痕が見られないことは他の器種との大きな違いの一つである。

なお、高杯とも呼ばれる資料を台付皿として扱った。台付皿は口縁部の突起の形が正三角形で両脇にB突起が並ぶなど台の無い皿の突起配置とは異なる点が見うけられた。

浅鉢は全部で16種類に分類した。このうち、器形がⅠ（胴部から口縁部が、ほぼ直線的に外に開く）、Ⅱ（胴部から口縁部が内彎しながら外に開く）としたもので殆どを占める。浅鉢は皿ほどではないが文様が伴う割合が高い。しかし、皿とは異なり口唇文様や内面の区画帯は見られない。更に他の器種には見られない特徴として底面にまで地文が巡ることがあり、この場合は丸底で縄文が巡る。

鉢は全部で10種類に分類した。文様が伴う場合は大抵、小型である。皿と同様に口唇文様があるが、直線や1種類の彫り込みのみのもの、もしくは直線と1種類の彫り込みを組み合わせたものと皿ほど複雑な文様構成は見られない。装飾が簡素な鉢の中でも、比較的装飾が伴うものは鉢Ⅲ1類（口縁部がS字状に外反し、外反する短い頸部をもつもの）や鉢Ⅲ2類（口縁部がS字状に外反し、外反する長い頸部をもつもの）があげられ、数もⅠ、Ⅱ類に比べて多い。これらには台部を伴うことがあり、特に鉢Ⅲ1C類に多い。この場合は口縁部に他の鉢には見られない把手状の突起が伴うことがあり、台付鉢かどうかを見極める、一つの指標になる。

深鉢は全部で11種類に分類した。なお、鉢と深鉢の器形・装飾は非常に似通っており、境界線上の土器は判別が難しい。文様が伴うことは無い。深鉢の特徴は条痕の割合が他の器種を圧倒することである。中には縄文よりも条痕の割合が高い類型もあり深鉢ⅡA類（口縁部が真っ直ぐ立ち上がり、平縁のもの）、深鉢ⅡC類（口縁部が真っ直ぐ立ち上がり、口縁部に小波条の突起を伴うもの）が該当する。逆に縄文の割合が高い、もしくは縄文のみが施文される類型として深鉢Ⅲ1C類（口縁部がS字状に短く外反し、口縁部に小波状の小突起がめぐるもの）、深鉢Ⅲ2A・B類（口縁部にS字状に外反する長い口頸部をもつもの。Aは平縁のもの、Bは突起を伴うもの）があげられる。

器種としては深鉢に含められるが用途が製塩に特化した製塩土器がある。全部で6種類にわけた。中でも大別Ⅰ類が最も多い。

なお、注口土器や香炉形土器は破片のみで、かつ点数が少なく分類は行っていない。

### (ii) 弘大調査区出土の土器組成

これまで器種ごとにいろいろな説明を行ってきたが、ここではすべての器種についてその組成および組成比について考えてみた。

弘大調査区の遺物密集ブロックである第Ⅲ層・第Ⅳ層の土器は、比較的短い期間に形成された捨て場から出土したもので、極めて一括性の高い資料である。この土器組成を明らかにすることは、津軽半島東海岸の縄文晩期中葉の一つの土器型式の内容を具体的に示すことになるであろう。一つの土器型式が

どんな器種から成り立ち、各器種がどんな割合で存在するかを知ることは、土器組成に反映された縄文人の生活や営みをさぐる有効な手段である。また、遺跡間の土器組成を比較することによって、使用された土器群の違いや同質性を見だし、土器文化圏の設定やその細分をもすることができるはずである。しかし、土器組成の比較は次のような大きな問題点を抱えている。①一型式の土器組成を明らかにした発掘報告書が少ないこと、②土器組成の数字を挙げているが、それを検証できる図面などを公表していないことがある（報告書を出さずに論文の中で切り売りするもの）、③数型式にまたがる土器と一緒にして土器組成を出したものの、④土器組成の器種比率を算定する基準が曖昧だったり、提示されなかったりするもの、⑤土器組成の器種比率を算定する基準が、研究者や機関によって異なっていること、である。願わくは、発掘調査で、良好な土器群に恵まれたものは、事実報告の一つとして、土器組成を取り上げ、報告して欲しいものである。

ここでも事実報告の一つとして弘大調査区の土器組成（器種組成）を報告しよう。

土器組成を構成する各器種の個体数は、多い順から挙げると、鉢（台付鉢を含む）923点、製塩土器331点、浅鉢254点、深鉢200点、壺160点、皿（台付皿1点を含む）70点、注口土器3点、香炉形土器2点で、合計1943点に達する。各器種の組成比は、鉢（台付鉢を含む）47.5%、製塩土器17.0%、浅鉢13.1%、深鉢10.3%、壺8.2%、皿（台付皿1点を含む）3.6%、注口土器0.2%、香炉形土器0.1%、である（次頁の表参照）。

器種ごとの器形の組成をみると、壺の形はバラエティに富んでいるが、皿・鉢（台付鉢）・深鉢などは形や大きさの点でもかなりの規格性があることが分かる。

最も数が多い鉢形土器の大多数は、炭化物の付着状況や二次的加熱痕から、煮炊きに使用されたものであることが分かる。大きさも比較的小さく器高10cm前後のものが最も多い。数が多いのは、煮炊きに使用するため消耗が激しかったこと、小型化したため数多く使用されたことなどがその理由と思われる。鉢には基本的な文様をもつものがあるが、やはり煮沸に使用されている。文様のない土器と使われ方で違いがあったのか、なかったのか問題である。

製塩土器が比較的数多く出土しているのは、この捨て場を形成した人々が、製塩活動を行っていたためであろう。

深鉢も炭化物の付着状況や二次的加熱痕から、煮炊きに使用されたものであることが分かるが、鉢形土器にくらべると器高が高く、容量が大きなものも利用されている。数も鉢形と比べれば圧倒的に少ない。同じ煮炊き用土器であっても鉢と深鉢とでは、煮炊きする中身の違い、使用する場の違い、煮炊きするときの人数の違い、個人用？と共用の違いなどに応じて使用されたことが考えられるが、具体的な研究はこれからの課題である。

浅鉢と皿は、食べ物を盛り付ける器で、飾られるものと飾られないものがあるのが注目される。皿や浅鉢の一部（口径が広いもの）は文様を持ち、飾られることが多い。一方、碗形の浅鉢は、飾られない食器である。底部が丸底気味で、文様をもつものが少なく、地文も無文あるいは単節の縄文をもつものが大部分で、大きさも規格的であるのが注目される。

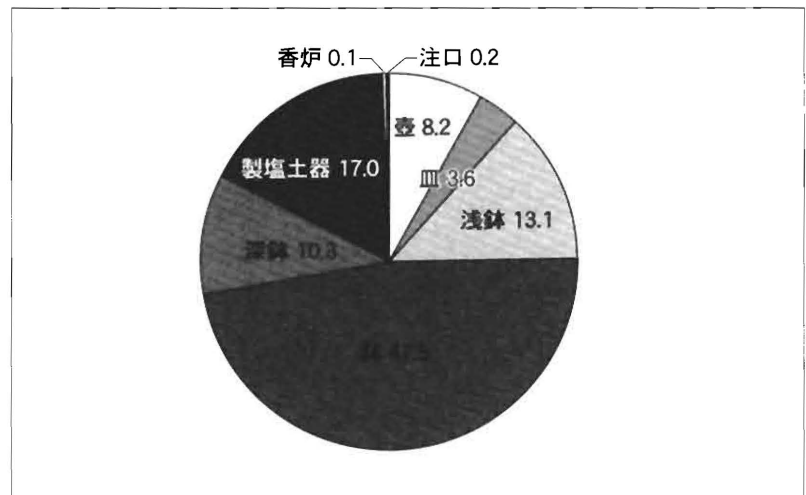
壺は、皿・鉢・深鉢と比べると、形や大きさの点でのバラエティに富み、まとまりがすくない印象である。文様のあるものが少なく、粗製のものが多いのが特徴である。中・小型のものが多く、用途を特定するのは困難である。

香炉形土器と注口土器が、器種組成の中でごくわずかしかなないのも大きな特色かもしれない。しかし、少数であっても、発見されていることは、生活用具としての土器組成のなかに確かな形で組み入れられていたのは事実であろう。

### 〔他遺跡の土器組成との比較〕

縄文晩期中葉の土器組成が出されている報告書として、北海道七飯町聖山遺跡（芹沢1979）、青森県亀ヶ岡遺跡（清水1959）、青森県ドウマンチャ遺跡（江坂1967）、宮城県里浜貝塚（東北歴史資料館1983）、岩手県安堵屋敷遺跡（岩手県埋蔵文化財センター 1984）、青森県右エ門治郎窪遺跡（青森県教育委員会 1982）、岩手県東裏遺跡（岩手県教育委員会1980）、宮城県香ノ木遺跡（宮城県埋蔵文化財センター 1985）、岩手県九年橋遺跡（北上市教育委員会1977～1979、1980、1984～1988）、宮城県摺萩遺跡（宮城県教育委員会1990）、秋田県戸平川遺跡（秋田県埋蔵文化財センター 2000）、秋田県向様田A遺跡（秋田県教育委員会2004）などがある。非常によい組成を示しているものもあるが、最初にあげた問題点をもつものが多く、現在検討中である。

器種	個体数	比率
壺	160	8.2
皿	70	3.6
浅鉢	254	13.1
鉢	923	47.5
深鉢	200	10.3
製塩土器	331	17
香炉	2	0.1
注口	3	0.2
合計	1943	100



#### (iii) 県調査区(ブロック2)との器形分類から見た比較(ブロック2 出土土器集成図、図版91～93参照)

弘大調査区と県調査区（ブロック2）の土器群は器形・法量・文様・地文などが似通っていることを第5章で述べている。ここでは全器種について概観する。

壺は弘大調査資料と殆ど変わらない。図版93-18・27・30などが弘大調査では見られない器形であるが、装飾などの点では何も変わらない。

皿は図版92-49や52の口縁部の突起配置が1単位だけ付く例は弘大調査には見られない。口縁部に彫去が施された隆帯が巡るものが県調査に見られる（図版92-55）。また、台付皿、台付浅鉢の口縁部の突起配置はA突起の両脇にB突起が付くもしくは、A突起の間にB突起が配置される（図版92-65・66・69）など皿と台付皿、台付浅鉢では突起配置の仕方が異なる。このことは、他の同時期の遺跡にも当てはまることだろう。

浅鉢は器形での違いは見られない。文様帯の幅が弘大調査の資料よりも広いものが見受けられる。

鉢の図版91-37は大きめの波状口縁になっており、このような口縁部が伴う資料は弘大調査には見られない。また、図版91-42は台付浅鉢とすべきなのかもしれないが、この器形に台が付く例は弘大調査には見られない。また、台付鉢には把手状の突起が伴うが42には付かないのも特徴的である。

#### (iv) 土器に見られる地域性

今津遺跡の土器に見られる地域性を確認するため、津軽半島の土器と比較検討した結果、津軽半島の

中でも地域差があることがわかった。つまり今津遺跡とそれより南の木造町亀ヶ岡遺跡や五所川原市観音林遺跡でも違いが見られるのである。

また、地文に着目すると条痕文の比率が津軽半島南部よりも高いように思える。亀ヶ岡遺跡は報告書を見ただけの感想であるが観音林遺跡は発掘資料を実見する機会があり、条痕文が少ない感想を覚えた。

今津遺跡の土器群の特徴は、北海道渡島半島の津軽海峡沿岸部に類似する（例えば木古内町札苅遺跡など）。また、条痕文は北海道の積丹半島付近に分布する大洞C2式併行の桃内式土器の特徴（例えば泊村洪井遺跡など）でもある。このことは野村崇も述べていることであるが、弘大調査の資料でも同様のことが言える（野村1984）。

かつて、下北半島脇野沢村九叟泊岩陰遺跡の発掘調査を行った江坂輝弥らは1965年、雑誌『石器時代』7号で報告を行う際、下北半島は東北北半部の影響を受けてはいるものの津軽半島と渡島半島南部との土器の類似性から、これら3つの半島を一つの文化圏に括ったことがある（江坂他1965）。だが、今回の比較により同じ津軽半島でも地域差があることがわかり亀ヶ岡遺跡以北の陸奥湾側、夏泊半島、下北半島と、渡島半島という陸奥湾を媒介とした地域圏が構成されていたのかもしれない。

#### （v） 編年的考察

弘大調査区、県調査区ブロック2の文様は非常に似通った内容であると考えることができる。両者の土器群は同時期のものであろう。高橋龍三郎は県調査の資料を大洞C2式前半にあたる第I期に位置付けた理由として文様のモチーフの種類が少なく、文様が施される器種が皿・浅鉢に限られることをあげているが、この特徴は弘大調査区にもあてはまるので、弘大調査の土器群は大洞C2式の範疇と見てよい。

### 第3節 縄文時代晩期の土製品

土偶2点、ミニチュア土器2点、円盤状土製品6点が出土した。

#### I 土 偶

脚部が破損している土偶1点と腕1点が出土した。

(図版83-1) 作りは中実である。両脚と左腕の一部が破損している。破損部は面になっているため脚部や腕部をはり合わせて製作されたと思われる。乳房は表現されていない。正中線も表現されていない。顔には沈線によって眉、目、口と思われるものが表現されている。鼻と思われるものは円形に隆起して表現されている。首をめぐる沈線は一周していない。背面の首と体部の境には段差がある。右腕側面の沈線内に赤彩がみられる。左腕側面に施されている沈線は背面の沈線と繋がっていない。体部文様は沈線で施されており、いわゆるX字形土偶に施されるものと似ている。手の指は二又に分かれている。左足付け根の破損部にアスファルトと思われる黒色物質が付着している。黒色物質は接着剤として使用されていた可能性がある。胎土には雲母、石英が混入している。色は全体的に黒い。

(図版83-2) 作りは中実である。右腕であると判断した。破損部を観察すると、2本の粘土紐をはり合わせて製作されたことが観察できる。破損部付近がわずかに盛り上がり、乳房に続く可能性がある。接合部から破損している。指の表現はされていない。

#### II ミニチュア土器

他の土器と比べて法量が著しく小さいものをミニチュア土器と判断した。破損しているものが2点出土した。

(図版83-3) 残存部が底部付近のみのため、器種の判断は難しい。内面調整は粗い。表面には体部下半から底部にかけて広く炭化物が付着している。しかしこの炭化物は鉢・深鉢形土器に付着している煮沸の使用をうかがわせるものとは性質が異なる。

(図版83-4) 口縁部付近のみが残存している。1/4ほどの破片だがあえて推定復元した。器種は鉢であると判断した。図版83-3と比較すると、内面調整が丁寧である。

#### III 円盤状土製品

土器片の周囲を打ちかいて円盤状に加工したものである。6点ある。うち5点が穿孔されているが、1点が穿孔途中である(図版83-10)。炭化物が付着しているものは煮沸に使用した土器の破片を再利用したためであろう(図版83-5・7・8・9・10)。また内面には穿孔部に対して同心円状になる擦痕がみられ、穿孔工具との関係がうかがえる(写真83-7)。

青森県教育委員会及び各市町村により刊行されている報告書を参考に、青森県における縄文時代に伴う円盤状土製品が出土している遺跡とその出土数を集成した(下表)。参考文献番号は「円盤状土製品参考文献」に対応しているが、今後も文献を集めていく必要がある。

集成してわかったことは、全体的に穿孔されているものは少ないということである。特に後期に伴うものには穿孔されているものがほとんどない。また大量に出土している遺跡にも穿孔されているものがほとんどない。

今後の研究課題として、土器片を再利用したものとそうでないもの・穿孔の有無・側面調整の有無による違いの検討、穿孔工具の検討、使用方法の検討が挙げられる。

表 青森県における縄文時代に伴う円盤状土製品が出土している遺跡とその出土数

所在地	遺跡名	時期	点数	乳(途中含む)	参考文献	所在地	遺跡名	時期	点数	乳(途中含む)	参考文献
平館村	今津遺跡(弘大)	晩期	6	6	1	八戸市	松ヶ崎遺跡	中期・後期	2	0	75
平館村	今津遺跡(埋文)	晩期	34	25	2	青森市	近野遺跡	中期・後期	41	15	76~78
平館村	今津遺跡(村史)	晩期	2	不明	3	金木町	妻の神遺跡	中期・後期	9	4	79
弘前市	砂沢遺跡	晩期・弥生	1	1	4	青森市	三内丸山遺跡	前期・中期・後期	複数	複数	79~91
弘前市	野脇遺跡	晩期	12	8	5	三厩村	中の平遺跡	前期・中期・後期	13	3	92
八戸市	是川中居遺跡	晩期	8	2	6~7	八戸市	酒美平遺跡	前期・後期	20	0	93
八戸市	八幡遺跡	晩期	41	0	8	青森市	稲山遺跡	前期・後期	791	1	94~98
青森市	長森遺跡	晩期	5	0	9	むつ市	上道遺跡	前期・後期	2	0	99
十和田市	明戸遺跡	晩期	9	5	10~11	川内町	熊ヶ平遺跡	前期・後期	4	3	100
五所川原市	観音林遺跡	晩期	112	5	12~17	碓ヶ関村	大面遺跡	前期・後期	24	1	101
木造町	亀ヶ岡遺跡	晩期	8	3	18~19	八戸市	新井田古館遺跡	早期・前期・後期	13	2	102
三戸町	杉沢遺跡	晩期	2	0	20	青森市	安田遺跡	中期	1	0	103
大畑町	涌館遺跡	晩期	6	不明	21	五所川原市	隈無(1)遺跡	中期	4	0	104
南部町	荒屋敷遺跡	晩期	1	0	22	三戸町	中野(2)遺跡	中期	5	1	105
名川町	寺下遺跡	晩期	2	1	23	青森市	桜峯(1)遺跡	前期・中期	5	2	106
三厩村	宇鉄遺跡	晩期	47	11	24	八戸市	笹ノ沢(2)・(3)遺跡	前期・中期	24	6	107
岩木町	薬師1号遺跡	晩期	6	6	25	鯉ヶ沢町	鳴沢遺跡	前期・中期	9	7	108
福地村	埴渡遺跡	晩期	52	0	26	鯉ヶ沢町	餅ノ沢遺跡	前期・中期	11	6	109
天間林村	底田(3)遺跡	晩期	1	0	27	階上町	白座遺跡	前期・中期	6	3	110
六ヶ所村	上尾跡(1)遺跡C地区	晩期	3	0	28	青森市	熊沢遺跡	前期	2	1	111~112
三戸町	泉山遺跡	後期・晩期	118	4	29~31	八戸市	昼場遺跡	前期	25	0	113
弘前市	十腰内(1)遺跡	後期・晩期	10	5	32~33	八戸市	売場遺跡	前期	23	19	114
階上町	野場遺跡	中期・後期・晩期	19	0	34~35	野辺地町	槻ノ木(1)遺跡	前期	26	1	115
青森市	上野尻遺跡	後期	2	0	36~37	上北町	上北町古屋敷貝塚	前期	1	1	116
青森市	小牧野遺跡	後期	124	0	38~42	脇野沢村	瀬野遺跡	前期	1	0	117
八戸市	風張(1)遺跡	後期	282	0	43~44	南郷村	畑内遺跡	前期	8	3	118~119
八戸市	丹後平(1)遺跡	後期	11	0	45~46	森田村	石神遺跡	前期	4	4	120
八戸市	田面木平遺跡	後期	25	0	47	八戸市	長七谷地遺跡	早期・前期	8	8	121
八戸市	鳥河岸遺跡	後期	1	0	48	六ヶ所村	家ノ前遺跡	早期・前期	2	1	122
五所川原市	隈無(4)遺跡	後期	1	0	49	六ヶ所村	上尾跡(1)遺跡A地区	早期	7	6	123
五所川原市	隠川(1)遺跡	後期	14	0	50	六ヶ所村	鷹架遺跡	早期	1	0	124
五所川原市	原子城跡	後期	4	1	51	六ヶ所村	新納屋(2)遺跡	早期	4	0	125
黒石市	花巻遺跡	後期	4	0	52	八戸市	赤御堂遺跡	早期	8	2	126
黒石市	一ノ渡遺跡	後期	234	0	53	八戸市	鴨平(2)遺跡	不明	4	0	127
三戸町	沖中遺跡	後期	5	0	54	八戸市	長者森遺跡	不明	1	0	128
三戸町	松原(1)遺跡	後期	1	0	55	八戸市	見立山(1)遺跡	不明	18	0	129
六ヶ所村	102号遺跡	後期	8	0	56	黒石市	築館遺跡	不明	6	0	130
六ヶ所村	大石平遺跡	後期	517	0	57~59	黒石市	長坂遺跡	不明	18	0	131
南郷村	馬場瀬遺跡	後期	3	0	60	黒石市	白丸(1)遺跡	不明	2	0	132
南郷村	田ノ上遺跡	後期	1	1	61	弘前市	独狐七面山遺跡	不明	1	1	133
弘前市	十腰内(2)遺跡	後期	22	0	62	弘前市	小栗山館遺跡	不明	1	1	134
三沢市	小田内沼遺跡	後期	1	0	63	青森市	朝日山遺跡	不明	1	0	135
十和田市	中村平遺跡	後期	11	0	64	青森市	宮本(2)遺跡	不明	1	0	136
野辺地町	野辺地蟹田(1)遺跡	後期	10	0	65	六ヶ所村	表館(1)遺跡	不明	2	2	137
川内町	板子塚遺跡	後期	3	0	66	六ヶ所村	富ノ沢遺跡(2)	不明	7	1	138~139
尾上町	李平Ⅱ号遺跡	後期	5	0	67	むつ市	最花貝塚	不明	1	0	140
金木町	神明町遺跡	後期	1	0	68	階上町	小坂橋(2)遺跡	不明	3	0	141
平賀町	堀合遺跡	後期	9	0	69	平賀町	小金森遺跡	不明	2	0	142
福地村	西張(3)遺跡	後期	1	0	70	野辺地町	槻ノ木遺跡	不明	3	0	143
脇野沢村	尾野崎遺跡	後期	23	0	71	七戸町	上田遺跡	不明	1	0	144
森田村	鶴喰(6)遺跡	後期	1	0	72	南郷村	三合山遺跡	不明	2	0	145
八戸市	黒坂遺跡	中期・後期	16	0	73						
八戸市	弥次郎窪遺跡	中期・後期	6	0	74						

# 円盤状土製品参考文献

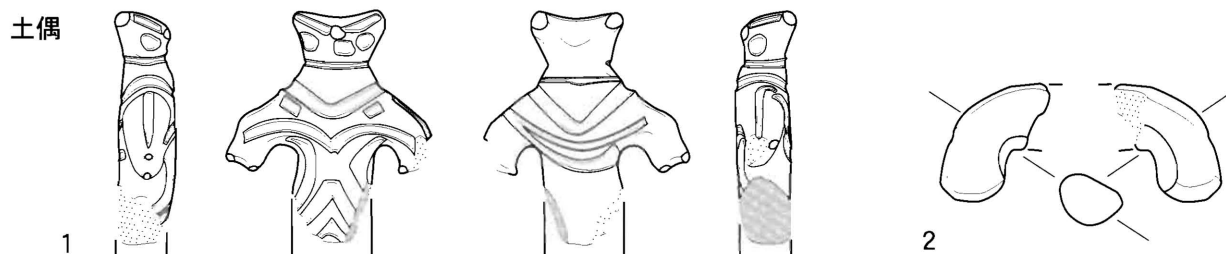
番号	年代	発 行 者	参 考 文 献
1	2005	弘前大学人文学部日本考古学研究室	『青森県東津軽郡平館村今津遺跡発掘調査報告書』
2	1986	青森県埋蔵文化財調査センター	『今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書』
3	1974	平館村	『青森県東津軽郡今津遺跡調査概報』
4	1991	弘前市教育委員会	『砂沢遺跡発掘調査報告書』
5	1992	青森県教育委員会	『野脇遺跡発掘調査報告書』
6	2002	八戸遺跡調査会	『是川中居遺跡長田沢地区』
7	1998	青森県八戸市教育委員会	『是川中居遺跡』
8	1987	青森県八戸市教育委員会	『八幡遺跡発掘調査報告書』
9	1985	青森市教育委員会	『長森遺跡発掘調査報告書』
10	1982	青森県十和田市教育委員会	『明戸遺跡発掘調査概報』
11	1983	青森県十和田市教育委員会	『明戸遺跡発掘調査報告書』
12	1984	青森県五所川原市教育委員会	『観音林遺跡（第二次発掘調査報告書）』
13	1985	青森県五所川原市教育委員会	『観音林遺跡（第三次発掘調査報告書）』
14	1987	青森県五所川原市教育委員会	『観音林遺跡（第五次発掘調査報告書）』
15	1988	青森県五所川原市教育委員会	『観音林遺跡（第六次発掘調査報告書）』
16	1989	青森県五所川原市教育委員会	『観音林遺跡（第七次発掘調査報告書）』
17	1991	青森県五所川原市教育委員会	『観音林遺跡（第九次発掘調査報告書）』
18	1959	三田史学会	『亀ヶ岡遺蹟』
19	1984	青森県立郷土館	『亀ヶ岡石器時代遺蹟』
20	1997	青森県立郷土館	『馬淵川流域の遺跡調査報告書』
21	1977	大畑町教育委員会	『涌館遺跡試掘調査報告書』
22	1997	青森県立郷土館	『馬淵川流域の遺跡調査報告書』
23	1997	青森県立郷土館	『馬淵川流域の遺跡調査報告書』
24	1995	青森県三厩村教育委員会	『宇鉄遺跡』
25	1968	岩木山刊行会	『岩木山』
26	1997	青森県立郷土館	『馬淵川流域の遺跡調査報告書』
27	2001	青森県教育委員会	『底田(3)遺跡』
28	1987	青森県教育委員会	『上尾駮(1)遺跡C地区』
29	1975	青森県教育委員会	『泉山遺跡発掘調査報告書』
30	1994	青森県教育委員会	『泉山遺跡』
31	1995	青森県教育委員会	『泉山遺跡Ⅲ』
32	1999	青森県教育委員会	『十腰内(1)遺跡』
33	2001	青森県教育委員会	『十腰内(1)遺跡Ⅱ』
34	1992	青森県教育委員会	『野場(5)遺跡』
35	2000	青森県階上町教育委員会	『野場遺跡(1)発掘調査報告書』
36	1999	青森県教育委員会	『山下遺跡・上野尻遺跡』
37	2001	青森県教育委員会	『上野尻遺跡Ⅱ』
38	1989	青森市教育委員会	『小牧野遺跡発掘調査報告（第一次）』
39	1997	青森市教育委員会	『小牧野遺跡発掘調査報告Ⅲ』
40	1998	青森市教育委員会	『小牧野遺跡発掘調査報告Ⅳ』
41	1999	青森市教育委員会	『小牧野遺跡発掘調査報告Ⅴ』
42	2002	青森市教育委員会	『小牧野遺跡発掘調査報告Ⅵ』
43	1990	青森県八戸市教育委員会	『八戸市内遺跡発掘調査報告書2』
44	1991	青森県八戸市教育委員会	『八戸市内遺跡発掘調査報告書4』
45	1989	青森県八戸市教育委員会	『八戸新都市区内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ』
46	1995	青森県八戸市教育委員会	『丹後平(1)遺跡・丹後平古墳』
47	1987	青森県八戸市教育委員会	『八戸新都市区内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』
48	1999	青森県教育委員会	『高岩(1)遺跡・高岩(2)遺跡・白蛇(1)遺跡・鳥河岸遺跡』
49	1995	青森県教育委員会	『隈無(4)遺跡』
50	1999	青森県教育委員会	『隠川(1)遺跡Ⅰ・隠川(2)遺跡Ⅱ』
51	1995	青森県五所川原市教育委員会	『原子城跡』
52	1986	黒石市教育委員会	『花巻遺跡』
53	1983	青森県教育委員会	『一ノ渡遺跡発掘調査報告書』
54	2000	青森県八戸市教育委員会	『沖中遺跡』

番号	年代	発 行 者	参 考 文 献
55	1997	青森県立郷土館	『馬淵川流域の遺跡調査報告書』
56	1978	青森県教育委員会	『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』
57	1984	青森県教育委員会	『大石平遺跡発掘調査報告書』
58	1985	青森県教育委員会	『大石平遺跡Ⅱ発掘調査報告書』
59	1986	青森県教育委員会	『大石平遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
60	1981	青森県教育委員会	『馬場瀬遺跡発掘調査報告書』
61	1980	青森県教育委員会	『国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
62	2004	青森県立郷土館	青森県立郷土館調査研究年報第28号
63	1988	青森県三沢市教育委員会	『三沢市遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』
64	1989	青森県十和田市教育委員会	『中村平遺跡発掘調査報告書』
65	2002	青森県野辺地町教育委員会	『明前(4)遺跡・明前(5)遺跡・野辺地蟹田(1)遺跡』
66	1994	青森県教育委員会	『板子塚遺跡』
67	1980	尾上町教育委員会	『季平Ⅱ号遺跡発掘調査報告書』
68	1979	青森県教育委員会	『神明町遺跡発掘調査報告書』
69	1981	青森県平賀町教育委員会	『堀合Ⅰ遺跡』
70	1995	青森県教育委員会	『西張(3)遺跡』
71	1998	青森県脇野沢村	『青森県脇野沢村渡向(2)遺跡・尾野崎遺跡』
72	2003	青森県森田村教育委員会	『八重菊(1)遺跡Ⅲ・鶴喰(6)遺跡・鶴喰(9)遺跡』
73	2001	青森県教育委員会	『黒板遺跡』
74	1988	青森県教育委員会	『弥次郎窪遺跡』
75	2001	青森県八戸市教育委員会	『八戸市内遺跡発掘調査報告書14』
76	1974	青森県教育委員会	『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』
77	1976	青森県教育委員会	『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)』
78	1997	青森県教育委員会	『近野遺跡Ⅴ』
79	1975	青森県教育委員会	『白山堂遺跡・妻の神遺跡発掘調査報告書』
80	1995	青森県教育委員会	『三内丸山遺跡Ⅴ』
81	1995	青森県教育委員会	『三内丸山遺跡Ⅵ』
82	1996	青森県教育委員会	『三内丸山遺跡Ⅶ』
83	1997	青森県教育委員会	『三内丸山遺跡Ⅸ』
84	1997	青森県教育委員会	『三内丸山遺跡Ⅺ』
85	1999	青森県教育委員会	『三内丸山遺跡ⅩⅤ』
86	1999	青森県教育委員会	『三内丸山(6)遺跡Ⅰ』
87	2000	青森県教育委員会	『三内丸山(6)遺跡Ⅱ』
88	2001	青森県教育委員会	『三内丸山(6)遺跡Ⅲ』
89	2002	青森県教育委員会	『三内丸山(6)遺跡Ⅳ』
90	2003	青森県教育委員会	『三内丸山遺跡23』
91	2003	青森県教育委員会	『三内丸山遺跡24』
92	1974	青森県教育委員会	『中の平遺跡発掘調査報告書』
93	2000	青森県八戸市教育委員会	『酒美平遺跡Ⅱ』
94	2000	青森県教育委員会	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
95	2001	青森県教育委員会	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
96	2002	青森県教育委員会	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
97	2003	青森県教育委員会	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
98	2003	青森県教育委員会	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
99	1980	むつ市教育委員会	『むつ市文化財調査報告第7集』
100	1994	青森県教育委員会	『熊ヶ平遺跡』
101	1979	青森県教育委員会	『大面遺跡発掘調査報告書』
102	2002	青森県八戸市教育委員会	『新井田古館遺跡』
103	1999	青森県教育委員会	『安田(2)遺跡』
104	1995	青森県教育委員会	『隈無(1)遺跡・隈無(2)遺跡・隈無(6)遺跡』
105	2001	青森県三戸町教育委員会	『中野(2)遺跡』
106	1997	青森市教育委員会	『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』
107	2001	青森県教育委員会	『笹ノ沢(2)・(3)遺跡』
108	1991	青森県教育委員会	『鳴沢遺跡・鶴喰(9)遺跡』
109	2000	青森県教育委員会	『餅ノ沢遺跡』
110	1988	青森県階上町教育委員会	『白座遺跡・野場遺跡(3)発掘調査報告書』

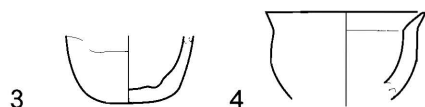


番号	年代	発 行 者	参 考 文 献
111	1999	青森市教育委員会	『熊沢遺跡発掘調査報告書』
112	1978	青森県教育委員会	『熊沢遺跡』
113	1998	青森県八戸市教育委員会	『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
114	1984	青森県教育委員会	『売場遺跡発掘調査報告書』
115	1994	青森県教育委員会	『槻ノ木(1)遺跡』
116	1983	上北町教育委員会	『上北町古屋敷貝塚・Ⅰ』
117	1998	青森県脇野沢村	『青森県脇野沢村瀬野遺跡』
118	1999	青森県教育委員会	『畑内遺跡Ⅴ』
119	2002	青森県教育委員会	『畑内遺跡Ⅶ』
120	1997	青森県森田村教育委員会	『石神遺跡』
121	1982	青森県八戸市教育委員会	『長七谷地遺跡発掘調査報告書』
122	1993	青森県教育委員会	『家ノ前遺跡Ⅱ・鷹架遺跡Ⅱ』
123	1987	青森県教育委員会	『上尾駸(1)遺跡A地区』
124	1980	青森県教育委員会	『鷹架遺跡発掘調査報告書』
125	1980	青森県教育委員会	『新納屋(2)遺跡発掘調査報告書』
126	1988	青森県八戸市教育委員会	『赤御堂遺跡』
127	1982	青森県教育委員会	『鴨平(2)遺跡発掘調査報告書』
128	1982	青森県教育委員会	『長者森遺跡発掘調査報告書』
129	1998	青森県教育委員会	『見立山(1)遺跡・弥次郎窪遺跡Ⅱ』
130	1999	青森県黒石市教育委員会	『築館遺跡・石倉下遺跡』
131	1998	青森県黒石市教育委員会	『長坂(1)遺跡』
132	1995	青森県黒石市教育委員会	『白兀(1)遺跡』
133	2000	青森県・弘前市教育委員会	『独狐七面山遺跡発掘調査報告書』
134	1999	青森県弘前市教育委員会	『弘前市内発掘調査報告書4』
135	1993	青森県教育委員会	『朝日山遺跡Ⅲ』
136	2001	青森県教育委員会	『宮本(2)遺跡』
137	1988	青森県教育委員会	『表館(1)遺跡Ⅲ』
138	1974	青森県教育委員会	『むつ小川原開発地域関係埋蔵文化財試掘調査概報』
139	1992	青森県教育委員会	『富ノ沢(2)遺跡Ⅵ(1)』
140	1982	むつ市教育委員会	『むつ市文化財調査報告第9集』
141	2002	青森県階上町教育委員会	『青森県階上町小板橋(2)遺跡』
142	1974	葛西励	『青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
143	1982	青森県教育委員会	『松原遺跡・陣馬川原遺跡・槻木遺跡発掘調査報告書』
144	1995	青森県教育委員会	『上田遺跡』
145	1981	青森県教育委員会	『右エ門次郎窪遺跡・三台山遺跡・石ノ窪遺跡発掘調査報告書』

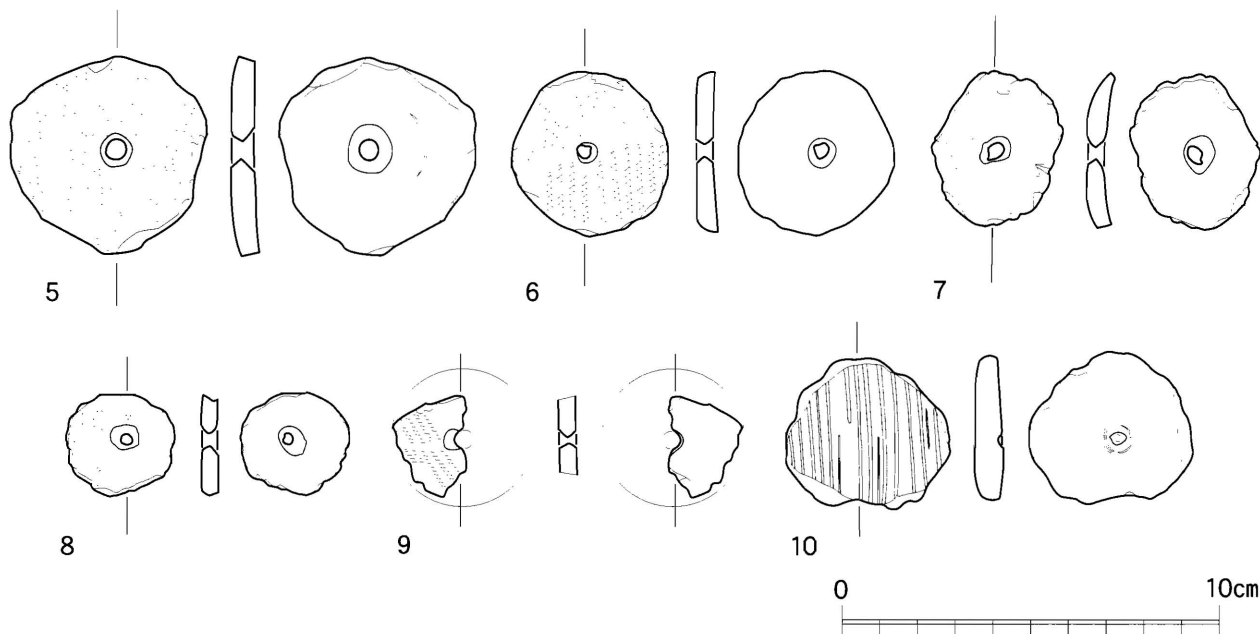
# 土偶



## ミニチュア土器



## 円盤状土製品



## 土 偶

番号	出土区	残存部	作り	乳房	性器	正中線	文様	赤彩	付着物	縦	横幅	重量	特 徴	写真
1	B 2 ⑥	頭、胴、腕部	中実	×	×	×	沈線	○	アスファルト	6.2	5.4	30.1	破損している。右腕側面に赤彩有り。	82-1・2・3・4
2	A 2 ⑨	腕部	中実	—	—	—	×	×	×	3.7	1.9	9.9	右腕。粘土紐をはり合わせて作成。	82-5・6・7

## ミニチュア土器

番号	出土区	分類	器高	最大径	口径	底径	重量	付着物	特 徴	写真
3	B 2 ⑥	—	(1.8)	3.4	—	1.4	7.8	炭化物	底部、体部の一部が残存している。外面全体に炭化物付着。	83-1
4	A 2 ③	鉢	(2.3)	(4.2)	(4.2)	—	4.3	×	口縁部、体部の一部が残存している。内面調整がされている。	83-2

## 円盤状土製品

番号	出土区・層位	長径	短径	断面径	最大厚	穿孔最大径	重量	素材	文様	付着物	穿孔	穿孔方向	特 徴	写真
5	B 3 ④	5.3	4.9	5.2	0.7	0.6	20.3	体部	縄文LR	炭化物	貫通	両面	表面の一部に炭化物付着。	83-3・5・7
6	—	4.4	3.9	4.0	0.6	0.5	10.5	体部	縄文RL	×	貫通	両面		83-3・5
7	B 2 ④	4.2	3.2	4.1	0.5	0.5	6.6	体部	縄文LR	炭化物	貫通	両面	表面の一部、裏面全体に炭化物付着。	83-3・5
8	B 3 ⑧	2.9	2.6	2.7	0.5	0.3	4.0	体部	縄文RL	炭化物	貫通	両面	裏面全体に炭化物付着。	83-4・6
9	—	2.7	2.0	2.1	0.6	0.3	2.5	体部	縄文LR	炭化物	貫通	表面	破損している。表面の一部に炭化物付着。	83-4・6
10	—	4.3	3.8	3.8	0.8	0.4	15.5	底部付近	条 痕	炭化物	途中	裏面	条痕は5本1単位。表面の一部に炭化物付着。	83-4・6・8

## 図版83 土製品

#### 第4節 縄文時代晩期の石器・石製品の概要

石器・石製品は表面採集のものを加え約129点あるが、その多くは第Ⅲ層・第Ⅳ層である遺物密集ブロックから出土したものである。時期は縄文時代晩期（大洞C2式）である。ここでは石器・石製品の概要について説明するにとどめ、詳しい報告は次回の研究報告3で行う予定である。

##### 〔石器（写真86～89参照）〕

石器は、製作方法から打製石器・磨製石器・礫石器に大別される。

（打製石器）打製石器は石鏃29点、石錐9点、尖頭器13点、剥片尖頭器4点、石筥4点、石匙5点、ラウンド・スクレイパー15点、ノッチ5点、チョッパー1点、基部整形石器2点、鋸歯縁石器1点の合計100点に達する。石材は頁岩が多い。

石鏃は殆どのが凸基有茎鏃である。長さは22mmから48mmまであり、大きさは不揃いである。茎部が二股に分かれるものが1点ある。茎部にアスファルトが付着しているものが4点ある。

尖頭器は木葉状のことが多いが、基部に抉りが入っているものも1点ある。長さは40mmから57mmまで、大きさに大きな差はない。アスファルトが付着しているものが1点ある。

石錐はつまみ状の頭部を持つもの、断面菱形の細身で棒状のもの、棒状で中央部が張り出すものなど形態が様々である。長さは37mmから82mmのものまであり、大きさも様々である。

石匙には、つまみ状の突起に対し、体部が縦に長いものと横に長いものがある。長さ56mmから104mmまであり、大きさはいろいろである。

ラウンド・スクレイパーの刃部近くにアスファルトが付着しているものがある。

（磨製石器）磨製石器は磨製石斧4点である。破損しているものが多く、大きさは不明である。擦切手法による製作痕跡を示すものも含まれている。石材は緑色片岩が多い。完全な形の変成チャート製の小型石斧が1点あるが、形も石質も美しく、玉斧のようである。

（礫石器）礫石器は石皿2点、磨石35点、砥石3点、合計40点である。大部分は磨石が占める。

石皿は2点とも安山岩製で、加工は著しくない。表面に赤色顔料が付着しており、赤鉄鉱を磨り潰して赤色顔料を作るために使用されたことを示している。

磨石は手頃な大きさの安山岩の礫を用いたもので、磨った痕跡や叩いた痕跡をもつものが多い。石皿の傍らから出土した磨石に赤色顔料が付いているものが1点ある。

##### 〔石製品〕

石製品は、凝灰岩製の小玉1点、軽石製の浮子1点がある。軽石製浮子の形はあまり類例をみないもので、両端に孔が開けられている。

##### 〔その他〕

その他として、赤鉄鉱と六角柱状の石を取り上げたい。

赤鉄鉱の塊が遺物包含層から出土している。大きさは握り拳より小さいものであるが、その総重量は約2.5kgに達する。すでに記したが、石皿や磨石に赤色顔料が付着しているものがあり、遺跡内で赤鉄鉱を材料とした赤色顔料が生産されていたことを示している。原料の赤鉄鉱は、今津遺跡の北約12kmにある今別町の赤根沢で採集され、運ばれたものとみられる。

六角柱状の石は、人為的に加工されたものでなく、流紋岩の自然石である。使用痕も認められない。太さ約4cm～10cm、長さ約3cm～28cmである。縄文人が集落内に持ち込んだものであるが、用途は不明である。なお、石器・石製品などに用いられた石材のうち、頁岩と安山岩は遺跡周辺に多数存在するが、緑色片岩、変成チャート、流紋岩などは遺跡周辺では産出しないものである。

## 第5節 縄文時代中・後期の土器（図版84・85）

縄文時代晩期の土器に混じって縄文時代中期と後期の土器片が16点出土した。すべて深鉢と思われるものの小破片である。

また、調査区の西壁際で検出された焼土遺構に伴ったとみられる後期の深鉢が1個体分ある。

### A. 包含層から出土した中・後期の土器

#### 〔縄文時代中期の土器〕

中期中葉の円筒上層d式と推定される破片が5点ある（1～5）。すべてに横方向の隆線による弧線文の一部が観察されるが、縦方向の隆線がみられるものもある。この5点は全て同一個体である可能性がある。

中期後葉の榎林式と思われる破片が3点ある（6～8）。LR縄文の上に、縦方向の2本一組の平行沈線文や渦巻沈線文を施文している。

中期末の大木10式土器に平行すると思われる口縁部破片がある(9)。口縁部が面取りされ、体部にR燃りの無節縄文が施文されている。もう1個の底部破片は、大型の深鉢のもの(10)で、外面のRL縄文が底部際の部分でナデ消されていること、胎土が大木10式や十腰内式土器のものに類似していることから中期末から後期前葉のものと考えられる。なお、胎土には海綿骨針が含まれている。

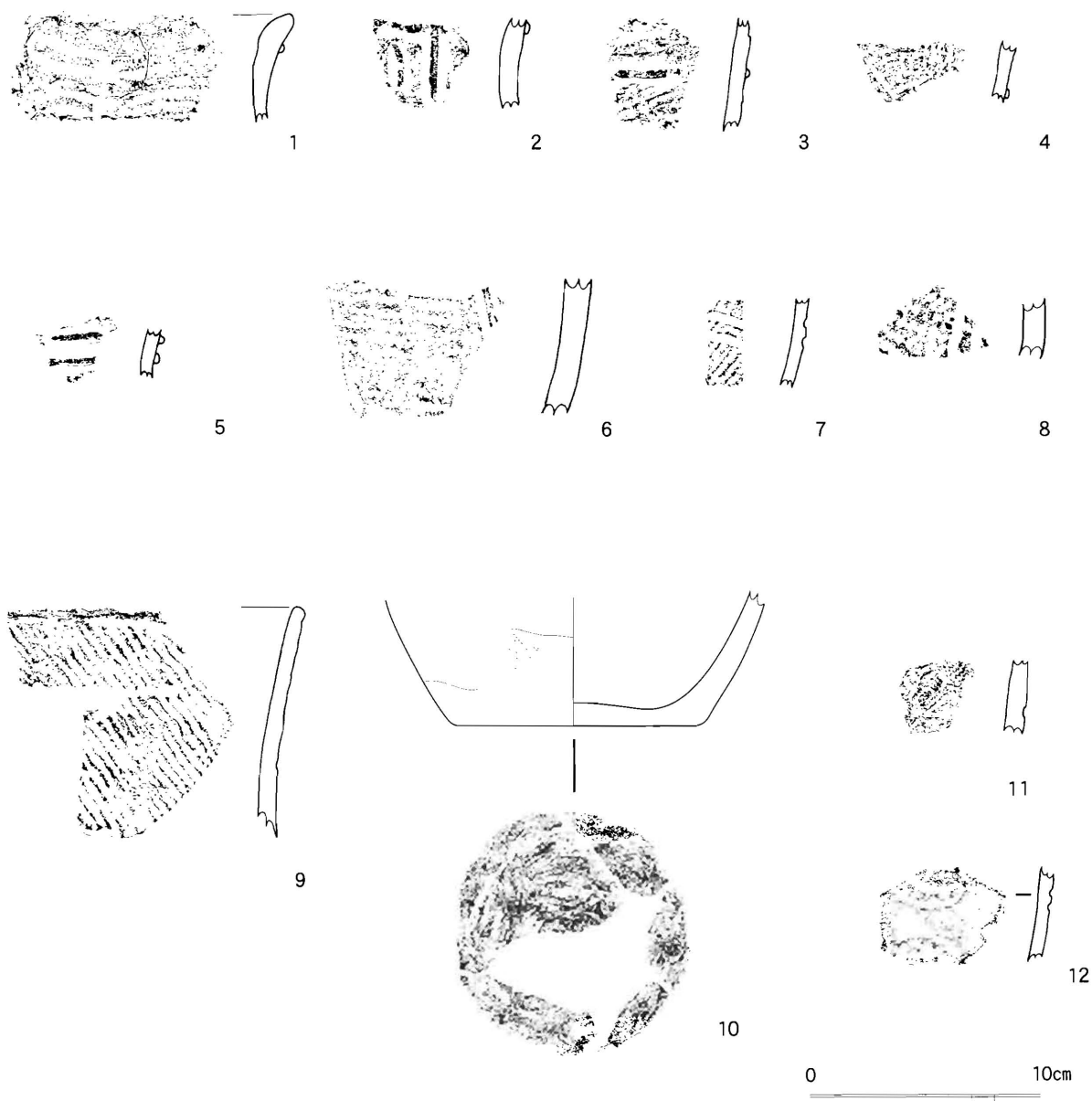
#### 〔縄文時代後期の土器〕

後期前葉の十腰内I式土器と思われる破片が6点ある（11～16）。口縁部破片は口縁に沿って2本の平行沈線があり、頸部の縄文は磨り消されて無文帯となる。また、口縁部内側にも沈線が1本めぐる。他の体部破片は、曲線的な沈線文で飾られるもの（12・14）、3本一組の平行沈線が横や斜めに施文されているもの（13・15）、縄文のみのもの(11)などがある。なお、胎土には海綿骨針が含まれているものがある。

### B. 焼土遺構周辺から出土した後期の深鉢土器

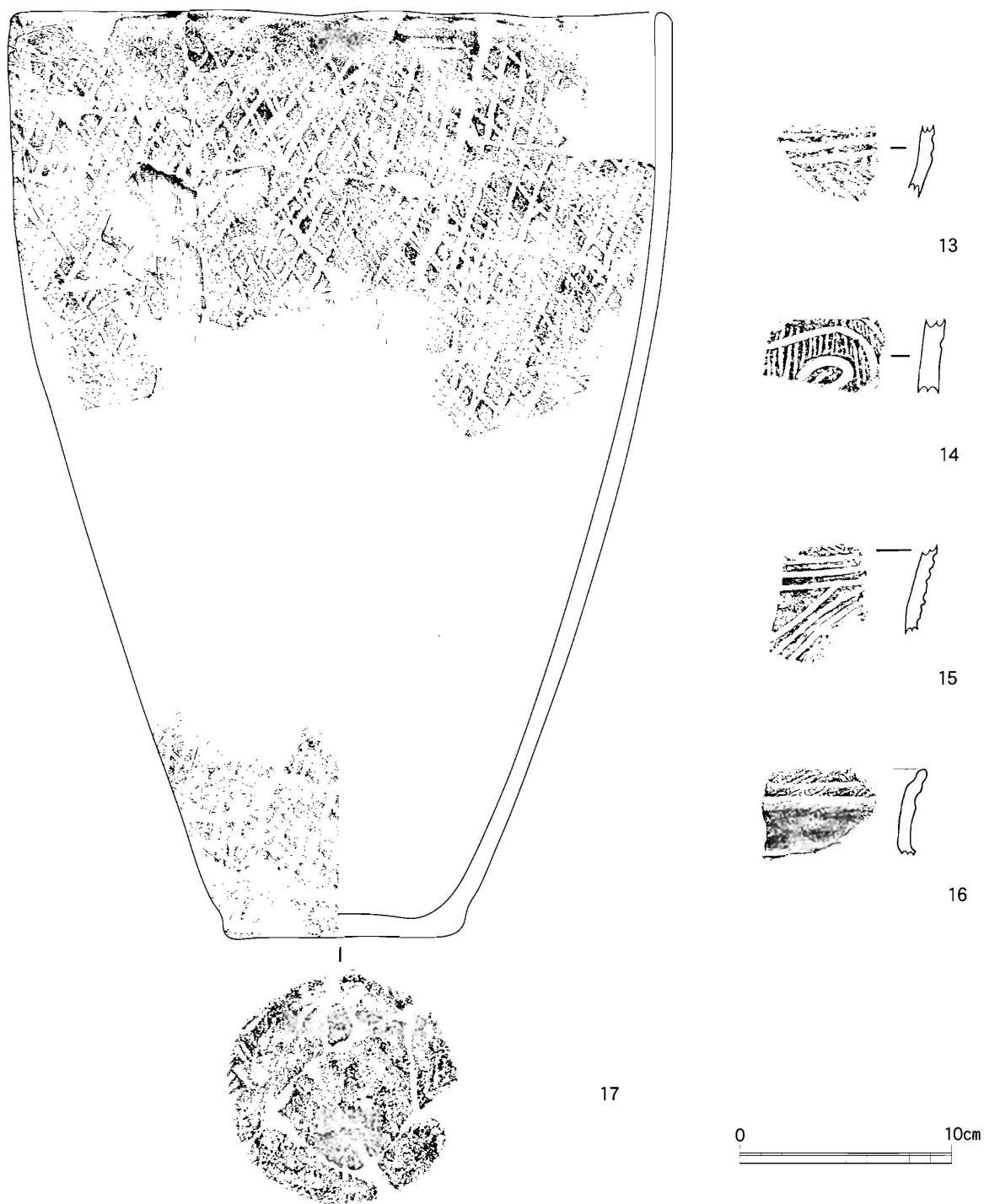
A2区とA3区の境付近の西壁際で検出された焼土遺構の周辺から縄文時代後期の土器破片が1個体分発見された。この土器は焼土遺構に伴うものと考えられる。口縁部から底部までかなりの破片があるが、体部下半の破片が二次加熱のため脆くなっており、接合して形を復元することはできなかったので、図上復元したものを示した（17）。

この土器は、高さ約44cmと推定される深鉢で、外面の口縁から底部まで網目状燃糸文が隙間なく施文されている。縄文原体Lを絡めたものを縦の方向に転がしたものと推定される。口縁部近くの破片の焼成状況は良好であるが、やや軟質である。体部下半から底部にかけては二次加熱のため脆くなり、小さな破片となっている。胎土に石英や雲母を含む。年代は後期前葉の十腰内I式土器と推定される。



番号	出土区・層位	時 期	破片部位	底径	特 徴	写真
1	B2・B3・IV層	円筒上層d式	口縁部	—	弧線文の一部と思われる粘土紐の貼付あり。1～5は全て同一個体と思われる。	85-1
2	B3・III層	円筒上層d式	体部	—		85-1
3	B2・IV層	円筒上層d式	体部	—		85-1
4	B3・III層	円筒上層d式	体部	—		85-1
5	—	円筒上層d式	体部	—		85-1
6	B3・I層	榎林式	体部	—	2本一組の沈線が縦位に走る。LR縄文。	85-2
7	B3・III層	榎林式	体部	—	渦巻文の一部と思われる文様が見られる。LR縄文。	85-2
8	B3・III層	榎林式	体部	—	2本一組の平行沈線が縦位に走る。LR縄文。	85-2
9	A4・I層	中期末葉～後期初頭	口縁部	—	口唇部に面取りが施されている。R燃りの無節縄文。	85-3
10	B2・B3・III層	中期末葉～後期初頭	底部	10.8	煤が内外面に付着している。胎土に海绵骨針が含まれている。RL縄文。	85-5
11	B3・III層	十腰内I式	体部	—	LR縄文。	85-4
12	—	十腰内I式	体部	—	波頭入組文と思われる曲線の沈線が施されている。無文。	85-4

図版84 縄文時代中・後期の土器 1～12



番号	出土区・層位	時 期	破片部位	底径	特 徴	写真
13	B 2・Ⅲ層	十腰内Ⅰ式	体部	—	2本一組の平行沈線が横や斜めに施されている。外面に煤、内面に炭化物が付着している。RL縄文。	85-4
14	B 3・Ⅲ層	十腰内Ⅰ式	体部	—	波頭入組文と思われる曲線の沈線が施されている。縦に燃糸文が施されている。胎土に海綿骨針が含まれている。	85-4
15	—	十腰内Ⅰ式	体部	—	3本一組の平行沈線が横や斜めに施されている。無文。	85-4
16	A2・Ⅰ層	十腰内Ⅰ式	口縁部	—	口縁部に2本の平行沈線が施されている。外面に炭化物が付着している。口縁部内側にも沈線が1本めぐり、LRの異条縄文。	85-4
17	A2・A3区 焼土遺構	十腰内Ⅰ式	1個体分	11.3	口唇部に面取りが施されている。土器外面の口縁から底部までには網目状燃糸文が隙間なく施されている。縄文原形Lを絡めたものを縦の方向に転がしたと思われる。底部に6つの爪痕がみられる。内面調整は、口縁部に横方向へのナデの後ミガキ、体部に縦方向へのナデの後ミガキがみられる。	84-1・2・3

図版85 縄文時代中・後期の土器13～17

## 第5章 平館村教育委員会と青森県埋蔵文化財調査センターの調査の紹介

### 第1節 平館村教育委員会による今津遺跡の発掘調査

#### 〔平館村教育委員会の発掘〕

平館村教育委員会（発掘担当者は橘 善光氏）は、昭和47年（8月14日～18日）、平館村史編さん事業の一環として、今津遺跡を発掘調査し、その成果を『平館村史』に発表している。主な資料は第Ⅱ層出土の縄文時代晩期中葉のものであり、報告者はこの層を大洞C2式期単一のものとする。しかし、弘大調査資料である大洞C2式土器の内容と異なる点も見受けられるので、『平館村史』を利用して土器図版を再録させていただき、土器を中心に内容を簡単に紹介し、内容を検討することにした（注）。

平館村教育委員会の調査（村調査）区の発掘面積は、A区・B区あわせて24m<sup>2</sup>である。『平館村史』に示された地形略図によって現在の地形図に調査区の位置を復元すると、1984年の青森県埋蔵文化財調査センターの調査（県埋文調査）区内に含まれるようである（第5図参照）。しかし、青森県埋蔵文化財調査センターの報告書では、村調査区の有無・痕跡などについては全くふれていない。

#### 〔発掘区の基本層位〕

発掘区の基本層位を『平館村史』を利用して纏めてみると次のようになる。

第Ⅰ層 茶褐色、耕作土。

第Ⅱ層 暗褐色土層、腐食土。大量の大洞C2式土器を含む。

完形土器(19個)や多量の土器片(ダンボール5箱分)、石器(石鏃など140点)が集中的に出土。

炭化物の付着した土器が多い。精製土器や朱塗土器は少量。

意識的に投棄または埋没したものではないであろう。

第Ⅲ層 褐色土層、基本的には無遺物層。部分にこの層がないところもある。

第Ⅳ層 黄褐色土層、少量の中期末や後期初頭の土器を含む。

第Ⅴ層 黄色土層、地山、川原石を大量にふくむ。

#### 〔第Ⅱ層出土の縄文時代晩期の土器〕（図版86～88）

第Ⅱ層から出土した縄文時代晩期の土器を中心に紹介する。集成図（図版95）は大きさを統一したが、土器の分類と図版番号は『平館村史』のままである（第1類は第Ⅳ層出土の中後期の土器片なので省略）。

第2類 条痕文土器である。器種は壺・鉢・浅鉢・コップ形に近いものなど。

条痕文は殆ど縦位の方向で、施文具は貝殻ではなく竹管工具という。

条痕文の種類は、太い・細い・その中間のもの、深い・浅い・その中間のものなど変化に富む。

口縁部を沈線がめぐりめぐらぬものがある。

口縁帯幅の発達したものには工字文化したものがある。

炭化物の付着が多い。

第3類 無文粗製土器で、製塩土器と推定されている。殆ど深鉢形であるが、例外として皿形もある。器面につなぎ痕や剥離痕をもつもの、二次的加熱を受け色調も変化したものが圧倒的に多い。すべて破片で、大きさは不明であるが、口径25～30cm、高さ30cm以上と推定できるものがある。

口縁は平縁と波状縁があるが、波状のものが圧倒的に多い。

第4類 文様（雲形文・工字文・平行沈線文）を施文した有文土器である。

口縁に3本ほどの平行沈線文がめぐりめぐらぬ深鉢・鉢・台付鉢が多い。

平行沈線文と比べると工字文・雲形文らしき文様は少ない。工字文は平行線的である。  
口唇部に刻み目や突起をもつもの、肩部に大小の突起や瘤がつくものなどがある。

#### 第5類 第3類（無文粗製土器）に含まれない無文土器

数量的に少ない。精製土器と粗製土器があり、浅鉢・壺・鉢・台付壺がある。  
壺には朱塗りのものがある。

以上の土器群を、『平館村史』では、大洞C2式土器の単純型式ととらえている。

なお、遺物整理を担当した工藤竹久氏（現、八戸市教育委員会）の御教示によると、土器の接合率・復元率の高いのに驚いたという。この地点も遺物密集ブロックを形成していたのであろう。

#### 〔村調査区と弘大調査区の出土品の比較〕

『平館村史』の土器図版は小さくて、地文や文様の細部がよく見えないものもあるが、弘大調査区の出土土器と比較してみたい。弘前大学の日本考古学ゼミナールで実測・観察できた一部の土器については、参考資料として新たな実測図を掲載したが、実物資料を見ることが出来なかった工字文の土器1点（8）は、工藤竹久氏の原因をトレースして利用させていただいた。

村調査区と弘大調査区の出土品を大きな目で比較すると、器形や法量がよく似ており、型式学的に近いことが分かる。土器の色調や胎土（土質）から受ける雰囲気も同じである。口縁部や肩の部分に複数の平行沈線が巡る深鉢・鉢・台付鉢が多いこと、椀形の浅鉢が多いこと、条痕文土器が多いこと、製塩土器を含むこと、平行沈線文以外の文様をもつ土器が少ないこと、注口土器や香炉形土器が極端に少ないことなども共通する。

しかし、異なっている点も幾つか指摘できる。弘大調査区では雲形文をもつ皿形が比較的多いのに対し、村調査区では皿形自体が少ない。また、文様をもつ鉢や壺は両調査区ともに少ないが、その文様は弘大調査区のものには雲形文的なものが多く、村調査区のものには工字文的なものが多い。また村調査区の壺の文様などには沈線多重手法による連繫入組文らしき文様が含まれている。これらは大きな違いといえよう。

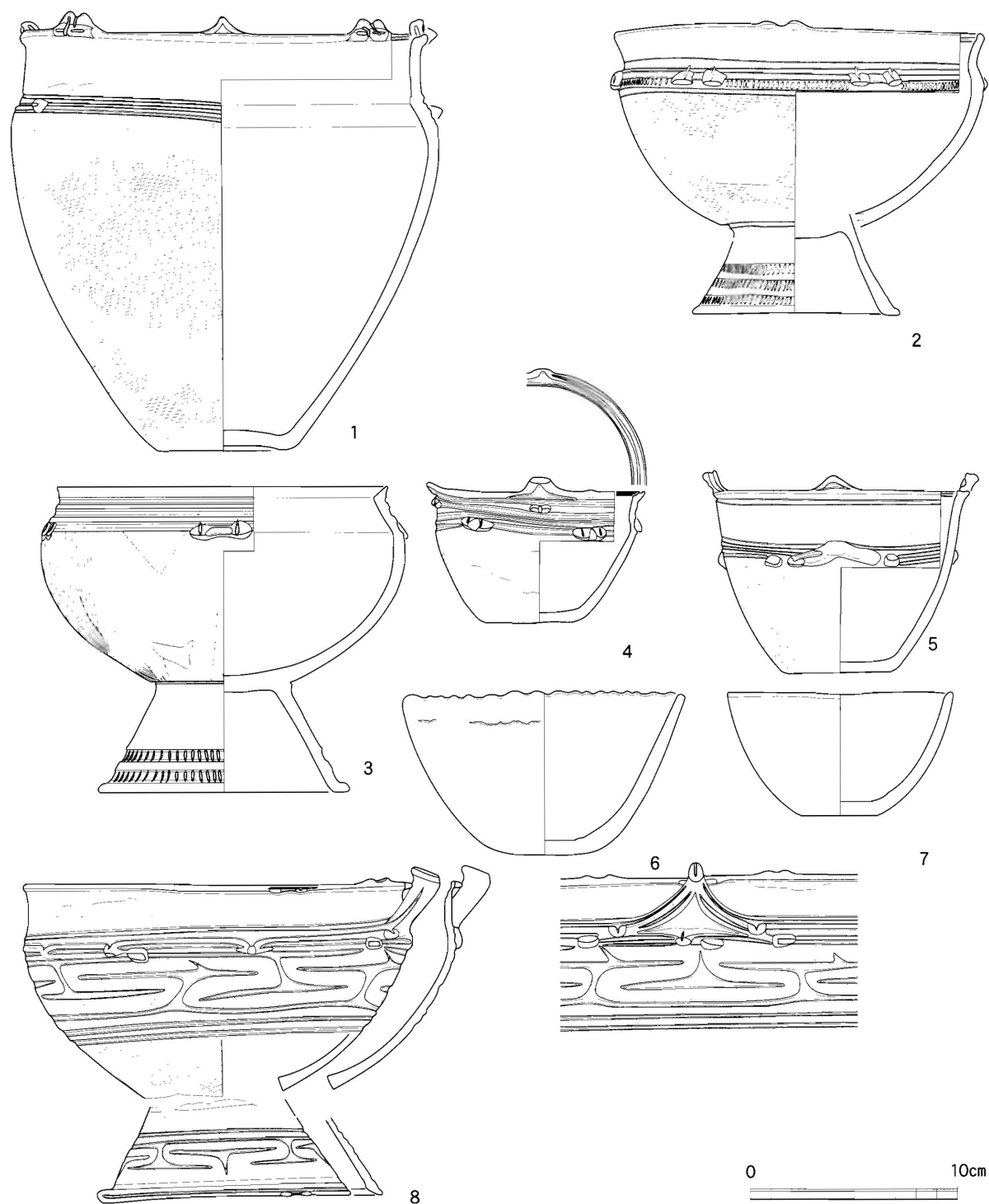
以上から、村調査区と弘大調査区の出土土器は、型式学的に極めて近い関係にあるが、内容的に村調査区のものの方が弘大調査区のものより新しい要素を含んでいる。したがって両調査区のをそれぞれ型式学的にまとまりをもつものとみるならば、弘大調査区の土器群は今津Ⅰ式、村調査区の土器群を今津Ⅱ式と呼ぶことも可能であろう。県埋文調査区の遺物密集ブロックは、報告書ではやはり大洞C2式の単一型式からなるとされているが、土器の分布状態から再検討すると、ブロックそのものが一つではなく、今津Ⅰ式を中心とするブロックと今津Ⅱ式を中心とするブロックに分かれる可能性が高い。県埋文調査区のことについては、第2節で詳しく検討したい。

弘大調査区から出土した今津Ⅰ式の土器群は、これまでの研究成果から見れば、大洞C2式土器の範疇と考えて良からう。しかし今津Ⅱ式の土器群を大洞C2式の新しい部分とするのか、あるいは大洞C2式と大洞A式との中間型式とするのかは難しい問題をふくむ。また、今津Ⅰ・Ⅱ式は、新井田川流域の是川中居遺跡の長田沢地区第11a・b層の大洞C2式土器と器種組成や器形・文様などが異なっている点が多いので、大洞C2式土器の地域差を把握する研究はこれから大きな課題となるであろう。

○参考資料—村調査で出土した土器のうち弘前大学人文学部日本考古学ゼミナールで再実測したものを中心に掲載した（図版86～88）。8・10・14・20の工字文的な文様は弘大調査区では出土していないものである。また22の注口土器もこの時期のものとしては余り見られない形と文様をもつ。各土器の説明は一覧表の中で簡単に述べた。村調査資料については工藤竹久氏の協力・指導があった。

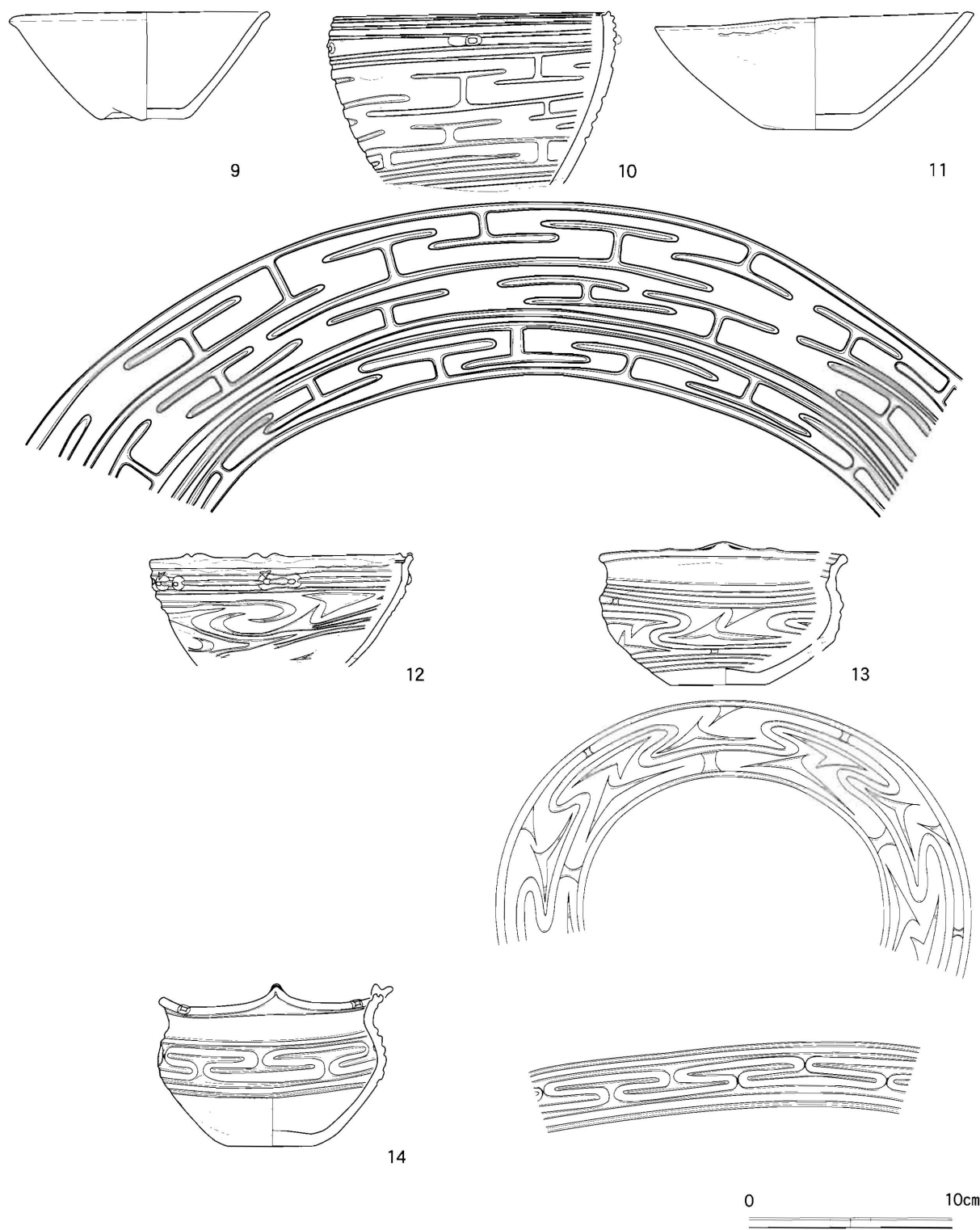


注) 村調査区の土器以外の出土品として土製品、石器、石製品がある。土製品には土器の破片を利用した円板状土製品(2点)がある。石器には尖頭器(19点)、石錐(6点)、石鏃(47点)、不定型スクレーパー(46点)、有茎スクレーパー(9点)、籠状石器(8点)、磨製石斧(4点)、凹石・石冠?など(4点)、剥片670点(うち60%に剥離が見られる)などがある。石製品には石刀(3点)、石棒(2点)がある。



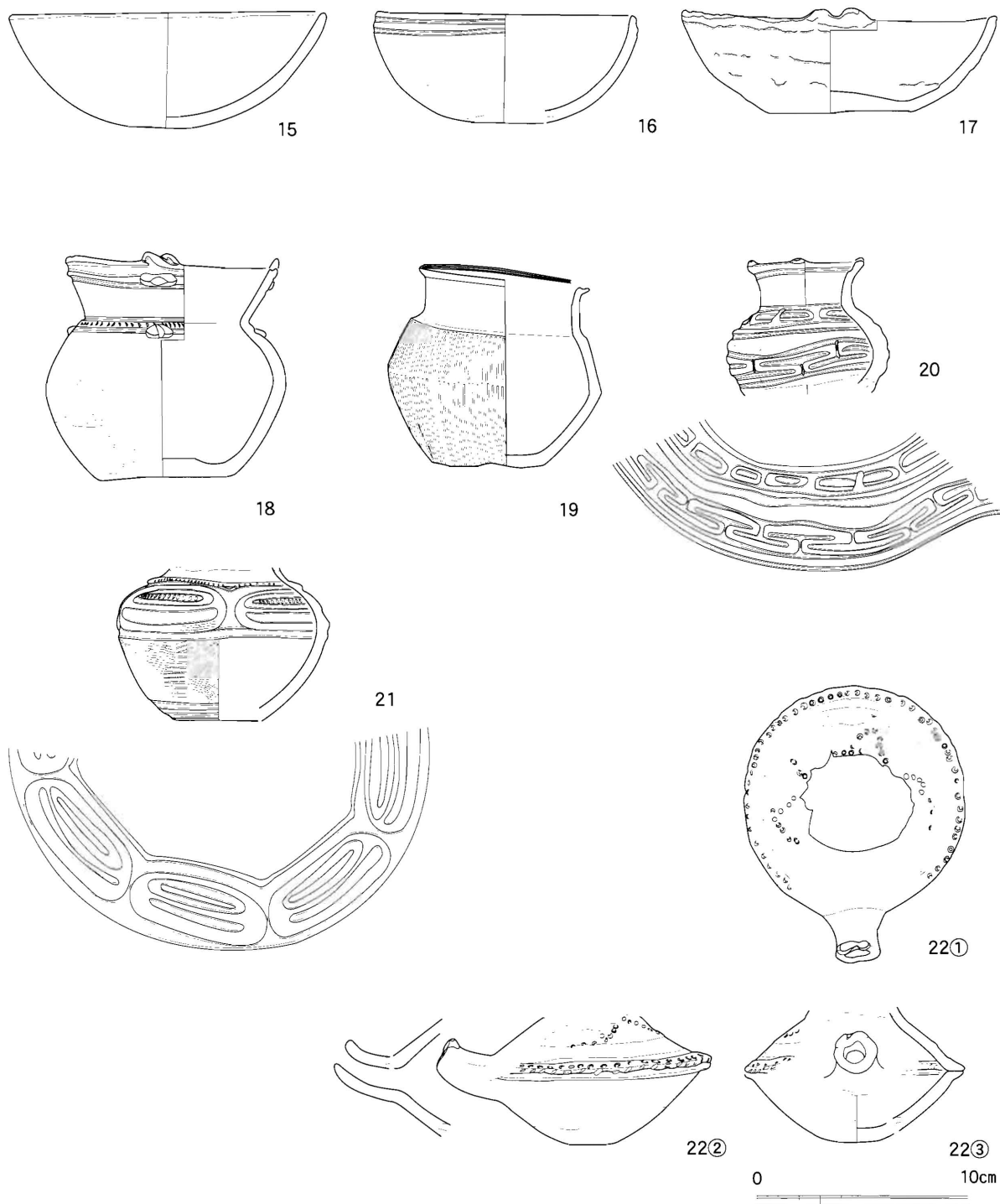
番号	器種	特 徴	大 き さ (cm)			村史分類
			器高	底径	最大径	
1	深鉢	口唇部にA突起、N型の突起が各4単位。胴部にも突起が2単位残存。炭化物、煤が付着。RL縄文。	20.6	5.8	21.6	4
2	台付鉢	口端にB突起。肩部にはB突起が2単位。頸部と台部に列点。LR縄文。	10.2	10.1	18.3	—
3	台付鉢	肩部に2個1対のB突起。頸部に5～10本の条痕。台部に列点。炭化物が付着。	15.0	12.0	17.7	4
4	鉢	口唇部に大形突起と2単位のB突起。口縁部にB突起。炭化物が付着。LR縄文。	7.1	4.4	10.7	—
5	鉢	口唇部にA突起が4単位。頸部にもA突起があり、その左右にB突起が各1単位。炭化物が付着。LR縄文。	9.0	4.9	12.6	—
6	鉢	口縁部に小波状突起。胴部には輪積み痕。外面に煤が付着。無文。	8.0	4.0	13.8	5
7	鉢	口唇部は面取りされている。内面には横ナデがみられる。無文。	6.1	3.8	11.0	—
8	台付鉢	口縁部にA突起。胴部と台部に工字文。LR縄文。	15.7	12.2	20.5	4

図版86 村調査区出土土器



番号	器種	特 徴	大きさ (cm)			村史分類
			器高	底径	最大径	
9	浅鉢	外面と内面の一部に赤彩。底部に押し出しによって作られた4つの足がある。無文。	5.3	4.3	12.6	5
10	鉢	口縁部に2個1対の突起が4単位。胴部に工字文。RL縄文。	9.0	—	14.3	4
11	浅鉢	口唇部は面取りされている。口縁部に輪積み痕。外面に煤が付着。無文。	5.5	4.5	16.0	3
12	鉢	口唇部に突起。口縁部に眼鏡状突起が3単位残存。横S字の配置文。三叉文・三角文を充填。RL縄文	(5.2)	—	13.1	4
13	鉢	口唇部にA突起。その左右には小さな突起が1つずつ配置。工字文。三叉文が充填。	6.8	4.8	12.4	4
14	鉢	口縁部にA突起。その左右にも突起が1つずつ配置。胴部に工字文。赤彩。LR縄文。	8.1	4.4	11.4	4

図版87 村調査区出土土器



番号	器種	特 徴	大きさ (cm)			村史分類
			器高	底径	最大径	
15	浅鉢	ケズリ後にヘラナデ、一部にミガキがあり、口唇部は面取りされている。無文。	5.5	3.9	15.2	5
16	浅鉢	横方向へのナデがあり、口縁部には2本の沈線が施されている。無文。	5.0	3.8	12.7	—
17	浅鉢	口縁に2個1対の突起。外面・内面に輪積み痕。外面・内面に炭化物が付着。無文。	5.1	6.9	15.3	3
18	壺	口唇部にN型突起が1単位。口縁にB突起。頸部の沈線の間に刻み、B突起が4単位。LR縄文。	10.3	6.4	11.5	—
19	壺	胴部には3～4条で1単位の条痕。胴部の1カ所に穴があいているが、自然か人工かは不明。	9.8	5.4	10.3	2
20	壺	口唇部に突起が4単位。胴部上半部に楕円文、下半部に工字文。RL縄文。	—	—	7.8	4
21	壺	頸部に4単位の突起、刻み。胴部上半部には楕円文と刻み。赤彩。R縄文。	—	4.2	9.2	4
22	注口	算盤珠の形状の胴体。注口部先端上部にB突起。胴部上半部に隆帯のはがれた跡と円文。	—	—	10.5	—

図版88 村調査区出土土器

## 第2節 青森県埋蔵文化財調査センターによる今津遺跡の発掘調査

280号道路改良事業に伴う今津バイパス施設工事に先立ち、今津遺跡の発掘調査（県埋文調査と略する）を行い、3280㎡を調査した。調査期間は1984年5月7日～10月13日である。

### （標準層序）

青森県埋蔵文化財調査センターで編集した今津遺跡の報告書『今津遺跡・間沢遺跡』によると、県埋文調査区の基本層序は次の通りである。

第Ⅰ層－褐色土である。表土で、現在の耕作土となっている。近・現代の遺物、縄文時代後・晩期の遺物が出土した。

第Ⅱ層－黒褐色である。縄文時代晩期の遺物包含層となっており、遺物が包含されている部分にだけ存在する。いわゆる遺物密集ブロックを構成しており、捨て場と想定されている。遺物のほかに微細な炭化物や焼土などを多数含んでいる。この第Ⅱ層（遺物密集ブロック）は、調査区の北端に近い所で、東側に寄って分布しており、その面積は380㎡、最も厚いところで80cmあった。

遺物は縄文時代晩期の大洞C2式土器とそれに伴うもののみである。第Ⅱ層下面から屋外石囲炉3基が検出されたが、第Ⅲ層を掘り込んで構築されているところから、やはり大洞C2式期のものと推定された。

第Ⅲ層－鈍い黄褐色土である。微細な炭化物・焼土を含み、第Ⅱ層の分布範囲の下層に広く分布するが、その範囲をこえて調査区の所々に、第Ⅰ層と第Ⅳ層の間にレンズ状に挟まれる形で分布している。層中から縄文時代後期初頭の土器片などの遺物が少数出土した。また、土坑1基、縄文時代後期初頭の埋設土器2基が検出された。

第Ⅳ層－鈍い黄褐色土である。締まりのある層で、径30mm以上の安山岩の礫を多数含んでいる。無遺物層で、いわゆる地山層である。第Ⅱ層・第Ⅲ層が分布しない所では、第Ⅰ層の耕作土の直ぐ下が第Ⅳ層となっている。この層の上面では10基の土坑が検出されたが、時期・年代は不明である。

### （遺構）

発見された遺構の所属時期と種類・数は、標準層位の説明の中でもふれたが、次の通りである。なお、土坑や埋設土器の性格（機能）については考察されていない。

①縄文時代晩期の大洞C2式期の遺構は、遺物密集ブロック（捨て場）1ヶ所、野外石囲炉3基である。

野外石囲炉は第Ⅱ層下面で検出されたもので、遺物密集ブロック（捨て場）を囲むように存在していた。

②縄文時代後期初頭の遺構は、土坑1基、埋設土器2基（1号は壺、2号は深鉢を埋設）である。

③所属時期不明の遺構は第Ⅳ層上面で確認されたもので、野外石囲炉1基、土坑10基である。

### （第Ⅱ層の遺物密集ブロック（捨て場）の土器）

ここでは、弘大調査区で出土した資料と年代的に関わりのある第Ⅱ層の遺物密集ブロック（捨て場）からの縄文時代晩期の土器にしばって概要を紹介する。土器はすべて大洞C2式期のものとされ、これに伴って、土製品、石器・石製品などが多数出土した（注2）。

土器は、深鉢・鉢・台付鉢・浅鉢（皿を含む、注1）・台付浅鉢・壺・注口・香炉形・ミニチュア土器などの器種からなるが、組成の比率は発表されていない。深鉢には無文の製塩土器が含まれている。注口土器と香炉形土器は極端に少ない。

口縁部付近に平行線からなる文様が付くものは深鉢・鉢・台付鉢・浅鉢・台付浅鉢などに多くみられる。磨消縄文からなる雲形文的な文様は浅鉢（皿を含む）・台付浅鉢には多いが、他の器種では鉢や壺にわずかに見られる程度である。工字文的な文様や沈線多重手法による入組文的な文様をもつ台付鉢・浅

鉢・台付浅鉢・壺も出土している。

県埋文調査区の遺物密集ブロック（第Ⅱ層）の土器群を、弘大調査区の遺物密集ブロック（第Ⅲ・Ⅳ層）の土器群と比較すると、器種構成・器形・文様などの在り方がきわめてよく似ている。しかし、弘大調査区の土器群には、工字文的な文様をもつ土器は出土していないし、沈線多重手法による入組文的な文様も少ない。県埋文調査区の遺物密集ブロックの方が、弘大調査区のものより、新しい要素の文様をもつ土器が含まれているのである。県埋文調査の報告書では、層の形成や土器の分布状況の在り方から、遺物密集ブロックは纏まりとしては一つであり、出土土器はすべて縄文時代晩期中葉の大洞C2式土器の単一型式であると結論しているが、微妙な時期差をもつ土器群が含まれている可能性がある。

そこで、県埋文調査の報告書から、遺物密集ブロックに於ける土器（実測図のある土器に限られるが）の分布図を再構成してみた（第8図を参照）。その結果、県埋文調査区の遺物密集ブロックは、3つの小ブロックに分かれる可能性がある。この3つの小ブロックと弘大調査区の遺物密集ブロック（弘大ブロック）とを、大まかではあるが比較検討し、時期差などについて考えてみたい。

**小ブロック②**—弘大ブロックの土器と比較すると、器種の組み合わせや器形、法量、文様、地文などがほぼ共通する。土器の色調や胎土（土質）から受ける雰囲気も同じである。多数の製塩土器を含むこと、注口土器や香炉形土器が極端に少ないことなども共通する。また、口縁部や肩の部分に複数の平行沈線が巡る深鉢・鉢・台付鉢が多いこと、椀形の浅鉢が多いこと、条痕文土器が多いこと、磨消縄文による雲形文は、皿に多数みられるが、鉢や壺には極めて少ないこと、雲形文の種類に似たものが多いことなど、共通することが多い。両者の土器群は型式学的に共通の纏まりをもつので同じ型式（今津Ⅰ群土器と仮称）と考えてよいであろう。この小ブロック②は、弘大調査ブロックと同じ時期に形成された可能性が高い。

**小ブロック③**—図示されている資料が少ないので、内容的に不明な点もあるが、弘大ブロックの土器と比較すると、器種や器形、法量、文様、地文などがほぼ共通するようである。また、多数の製塩土器を含むこと、口縁部や肩の部分に複数の平行沈線が巡る深鉢・鉢・台付鉢が多いこと、平行線以外の文様をもつ土器が少ないこと、椀形の浅鉢が多いこと、条痕文土器が多いことなども共通する。しかし、弘大ブロックでは磨消縄文による雲形文をもつ皿形が比較的多いのに対し、小ブロック③では、皿形そのものの数が極端に少なくなっており、雲形文をもつものもない。代わりに沈線多重手法によると見られる入組文の三足壺形土器、渦巻状文の鉢、沈線による綾杉文の壺などがある。このように、小ブロック③の土器群は、弘大ブロックのものに極めて似ている点も多いが、器種に皿形土器があまりないこと、磨消縄文による雲形文をもつ土器がないこと、沈線多重手法による入組文が現れることなどで大きな違いを示しており、弘大ブロックの土器群よりも新しい様相をもつと考えてよいであろう。したがって、小ブロック③の形成は、弘大ブロックや県埋文調査の小ブロック③よりやや新しい時期に形成された可能性が高い。

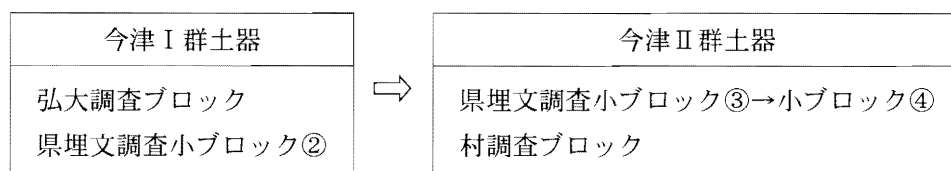
**小ブロック④**—このブロックも、土器の図示されている資料が少ないので、内容が不明な点があるが、弘大ブロックのものと比較すると、器種を構成する大部分の土器の器形、法量、文様、地文などがほぼ共通するようである。また、多数の製塩土器を含むこと、口縁部や肩の部分に複数の平行沈線が巡る深鉢・鉢・台付鉢が多いこと、平行線以外の文様をもつ土器が少ないこと、椀形の浅鉢が多いこと、条痕文土器が多いことなども共通する。しかし、弘大ブロックでは雲形文をもつ皿形が比較的多いのに対し、ここでは、皿形そのものがなくなり、磨消縄文による雲形文をもつ土器もなく、代わりに工字文が鉢や台付鉢、壺などに見られるようになる。したがって、小ブロック④の土器群も、弘大ブロックや県埋文調査の小ブロック②のものより、新しい様相をもつと考えてよいであろう。

次に小ブロック③と比較すると、器種組成から皿がなくなることでは共通するが、工字文が現れている点からすれば、小ブロック④のほうが新しい様相をもつことになる。しかし、小ブロック③と小ブロッ

ク④は、図示されている土器が少なく、型式としてのまとまりを欠いている恐れがある。また、村調査区では、県埋文調査の小ブロック③と小ブロック④のそれぞれの特徴をもつ土器群（今津Ⅱ群土器と仮称）が一緒に出土している。したがって、この二つの小ブロックは、小ブロック④のほうが小ブロック③より新しいものになるか、あるいは同時期のものになるかであろう。

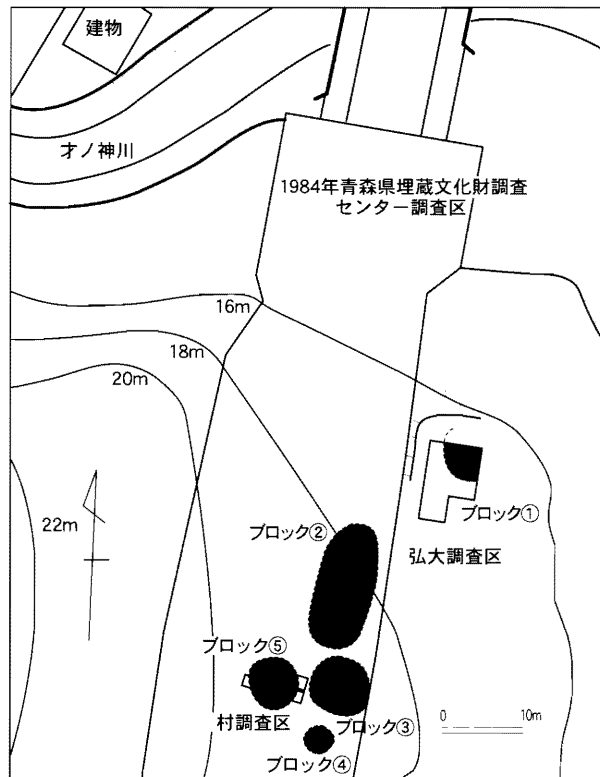
以上を整理してみよう。

1. 今津遺跡で発見された遺物密集ブロックは5つある。それぞれから出土した土器群を検討すると、極めて類似性が多いが、異なっている点もあり、これらのブロックの形成に同時性や若干の時期差を見ることができる。
2. 弘大ブロックと県埋文調査の小ブロック②は、土器の内容が同じで、ほぼ同じ頃に形成されたものである。
3. 県埋文調査の小ブロック③と小ブロック④は、土器の数が少なく不明な点があるが、器種組成の違い（皿が少ないこと）や文様の違いから、弘大ブロックと県埋文調査の小ブロック②より、新しく形成されたものである。
4. 県埋文調査の小ブロック④は、小ブロック③と器種組成はほぼ同じであるが、工字文が現れる点で、小ブロック③よりも新しく形成された可能性がある。
5. 村調査区では、県埋文調査の小ブロック③と小ブロック④を合わせたような土器群が出土している。したがって、この2つの小ブロックの形成に時期差があるにしても、同一の土器型式に含めることができそうである。



注 1) 弘大調査区の土器の器種分類では、県埋文調査の浅鉢を浅鉢と皿に細分している。

注 2) 〔土製品〕土偶11個体・仮面 1点・土版 2点・土冠 1点、土器片円盤34点、勾玉状垂飾品 4点、その他10点が出土している。〔石器〕剥片石器763点・礫石器40点があり、合計803点が出土した。剥片石器の内容は、石鏃431点・尖頭器33点・石槍11点・石錐77点・石匙25点・石篋34点、非定形石器27点、器種不明の破損品53点、剥離痕のある剥片72点である。礫石器は、磨製石斧23点・すり石（凹石・敲石）10点・石皿 4点・砥石 1点、その他 2点である。〔石製品〕石剣類8点・岩版13点・玉類8点・その他3点がある。



第 8 図 今津遺跡における遺物集中ブロック（捨て場）の位置



### 第3節 今津遺跡における遺物集中ブロック（捨て場）の問題

青森県埋蔵文化財調査センターが行った今津遺跡の発掘調査では、「遺物密集ブロック（捨て場）」が検出されているが、その規模は東西約9m、南北約36m、面積にしておよそ320㎡とされる（青森県教育委員会1986）。今回弘前大学で調査した捨て場は、全体を完掘していないため正確な比較は困難であるが、青森県で調査した捨て場を一つのまとまりとみた場合、それに比べ著しく規模が小さいこととなる。出土土器から判断する限り、この二つの捨て場が同時に使われていた時期があったことはほぼ確実であるが、青森県で調査した捨て場からは、今回弘前大学で調査した捨て場には見られない、新しい要素を持つ土器も出土している。今津遺跡を理解するには、捨て場の変遷を明らかにする必要があるが、そのためには、青森県で調査した捨て場の再検討が必要と判断した。

報告書に掲載された遺物に関して、観察表・計測表等に記された出土グリッドをもとに、出土地点の復元を試みた結果、青森県埋蔵文化財調査センターで調査した捨て場は、全体で一つではなく、本来3箇所のブロックに分かれていた可能性が出てきた。その位置と規模は、報告書に添付された「遺物ドットマップ」からもある程度推定可能である。

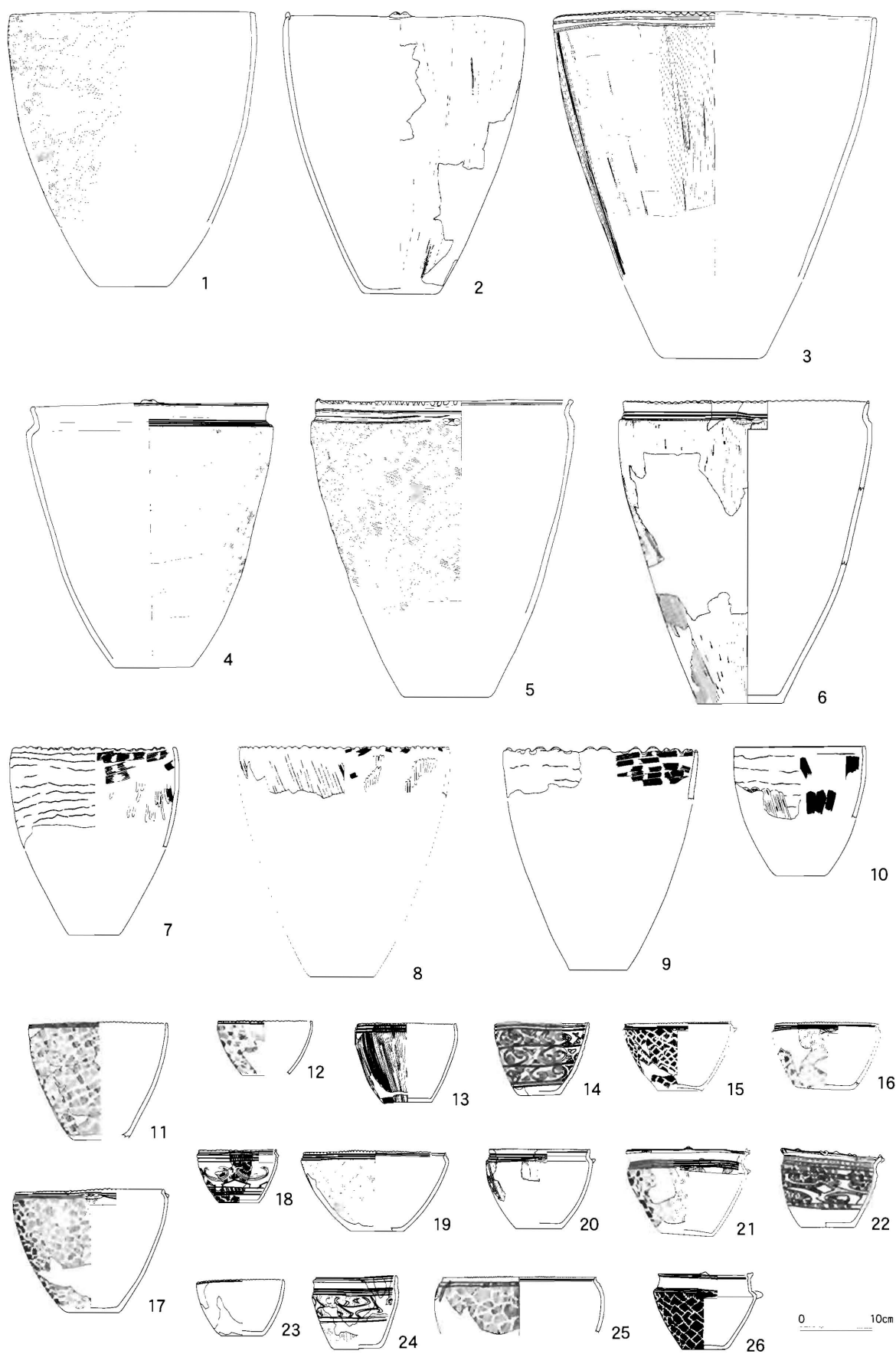
今津遺跡では、2002年の弘前大学調査区で1箇所、1984年の青森県埋蔵文化財調査センター調査区で3箇所、1972年の平館村史編纂事業に伴う発掘調査区で1箇所、合計5箇所の遺物集中ブロック（捨て場）が検出されていることになる（第8図）。これら5箇所の捨て場は、標高16mから20mの北東方向に傾斜する緩斜面に位置する。遺物の散布状況からみて、より標高の高い西側の未調査範囲に別の捨て場が存在する可能性は低いが、弘前大学調査区の南側、ちょうど青森県埋蔵文化財調査センターの調査で発見された捨て場の東側には、別の捨て場が存在している可能性が高い。

弘前大学の調査で検出された遺物集中ブロック（捨て場）については、前に詳述したとおりであり、平館村の調査区で検出された遺物集中ブロックについては詳細不明である。次に青森県埋蔵文化財調査センターの調査区内の遺物集中ブロック（捨て場）について述べる。

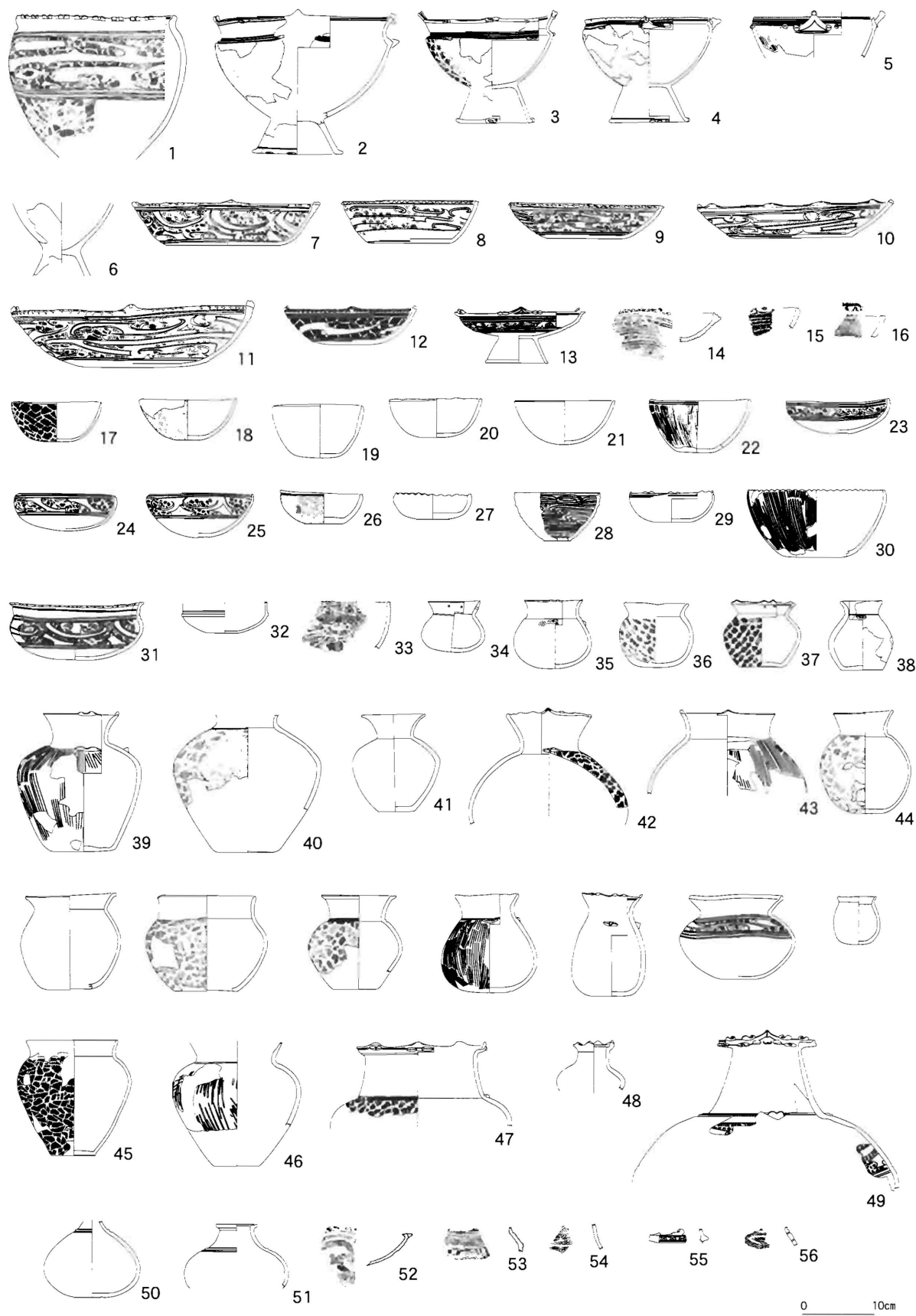
ブロック②は、G86・G87区を中心とし、南北約8m、東西約6m程の規模を有する。F～H-86～88区から出土した遺物は、本ブロックに含まれる可能性の高いものとして扱った。ブロック③は、G84区を中心に、H・G-83区、F・H-84区やG85区の一部を含み、直径6mほどの範囲に広がる。

ブロック④は、G82区に位置する直径3m程度の比較的規模の小さい捨て場である。

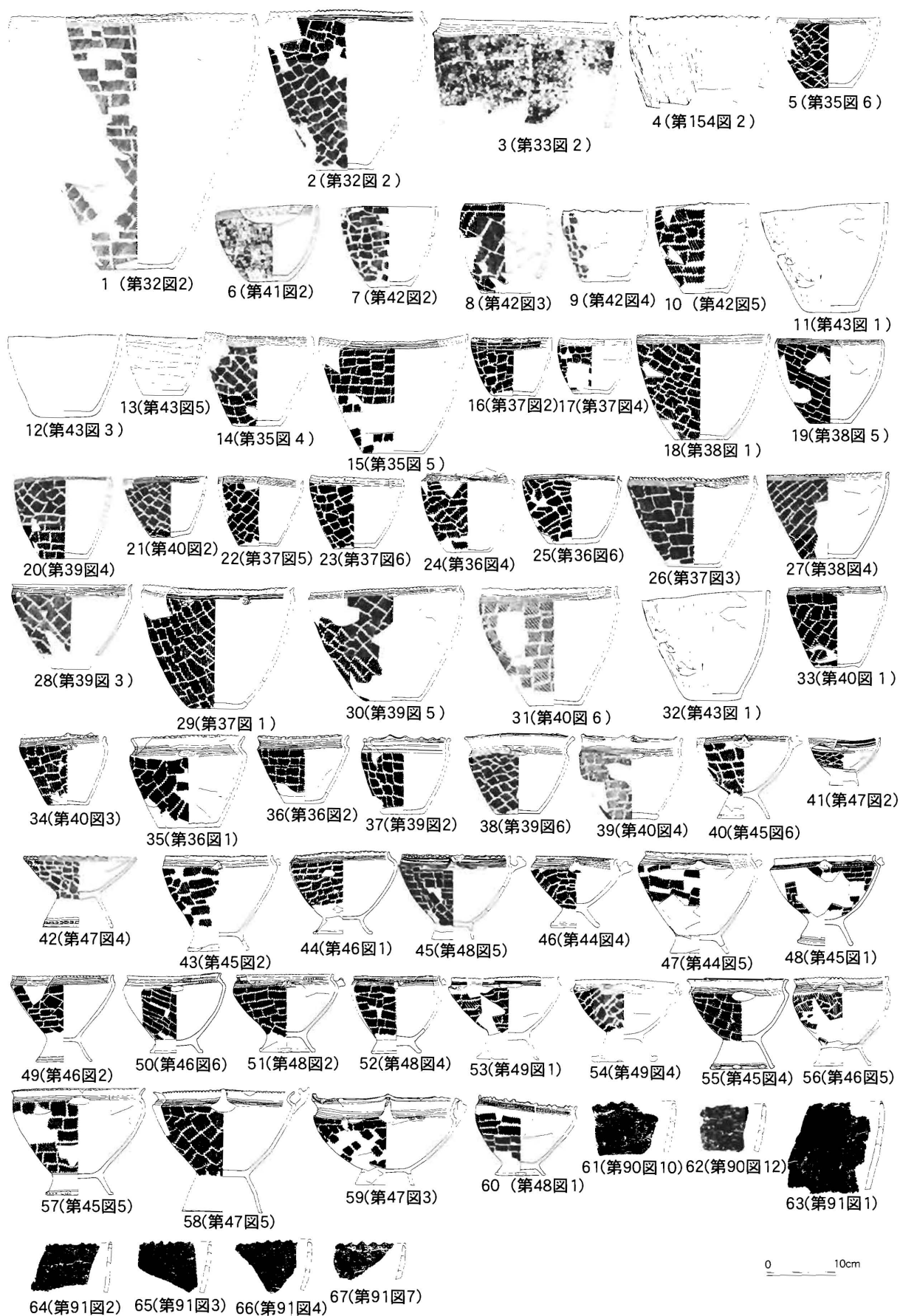
既に述べたとおり、弘前大学調査区で検出されたブロックと県埋蔵文化財センター調査区のブロック①では今津Ⅰ群土器が主体を占め、ブロック④と村史調査区のブロックではより新しい今津Ⅱ群土器が主体を占める。ブロック⑤出土土器は今津Ⅱ群を主体とするが、より中間的な様相が看取される。このことから、今津遺跡では常に隣接する複数の場所に併行する形で捨て場が形成されており、捨て場の位置は、遺跡全体から見れば、斜面の下方にあたる北東側から次第に斜面の上側である南西部に移動した可能性が高い。遺物の散布状況からみて、未調査域に存在すると思われる捨て場の数がこれまでに発見された5箇所を大きく上回る可能性は低い。おそらく遺跡内で同時に機能している捨て場は、2～4箇所程度であろう。同時期に形成されたと考えられる捨て場から出土する土器は、製塩土器の存在を含め、器種構成など基本的様相が一致し等質性が高い。各捨て場は、「世帯共同体」を単位として営まれたのではなかろうか。今後、捨て場から出土した石器や土製品などの詳細な分析や、未だ確認されていない住居域との位置的関係の検討等により、捨て場を残した単位集団の実態を明確にする必要がある。



図版89 ブロック1出土土器集成図(1)

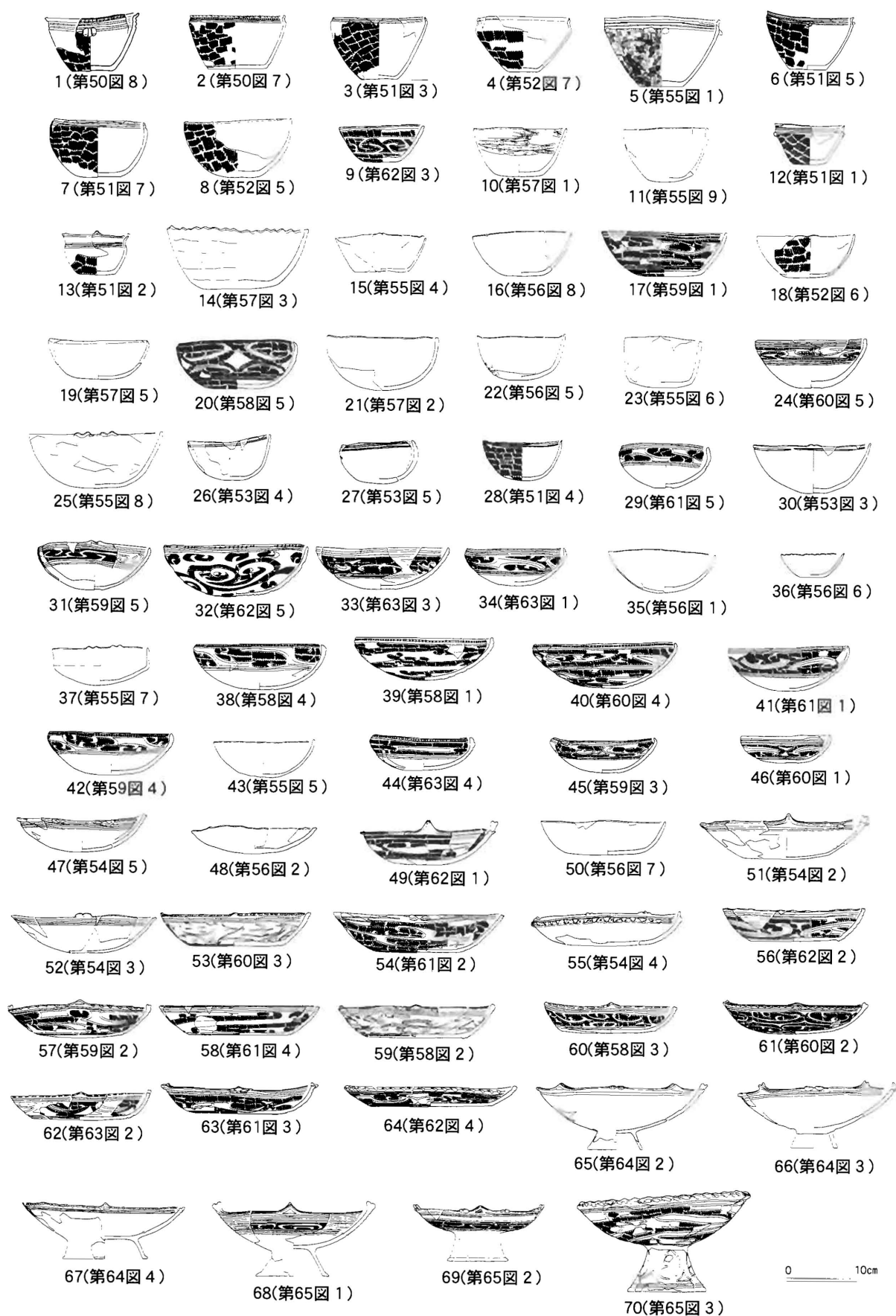


図版90 ブロック1出土土器集成図(2)



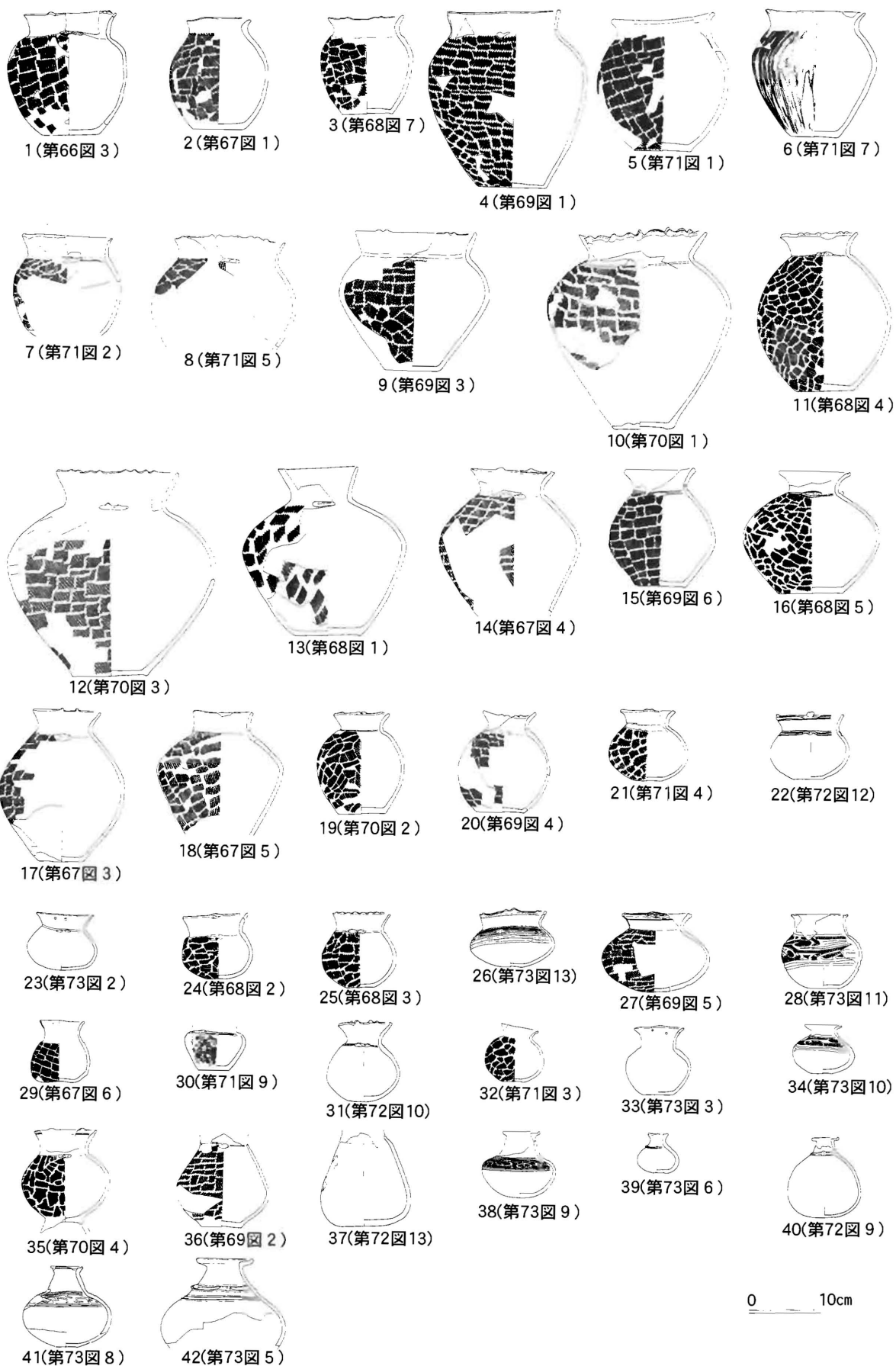
カッコ内は県埋文報告書の図版番号

図版91 ブロック2 出土土器集成図(1)



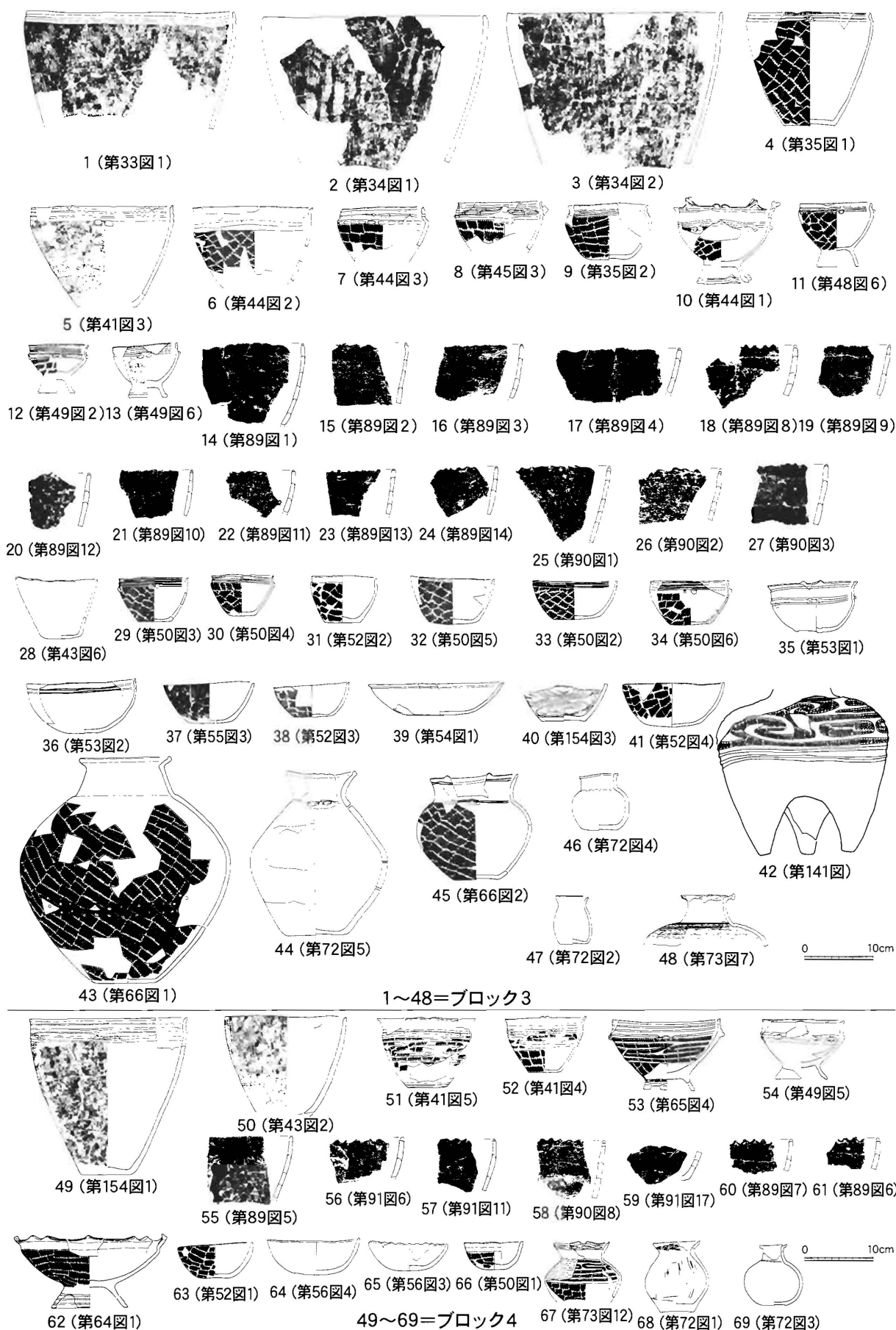
カッコ内は県埋文報告書の図版番号

図版92 ブロック2 出土土器集成図(2)



カッコ内は県埋文報告書の図版番号

図版93 ブロック2 出土土器集成図(3)



カッコ内は県埋文報告書の図版番号

図版94 ブロック3、ブロック4出土土器集成図





カッコ内は平館村史の図版番号

図版95 ブロック5出土土器集成図



# 論考Ⅰ 青森県の縄文時代の製塩土器について

藤沼・蔦川

はじめに今津遺跡の製塩土器に関する総括を行い、ついで青森県内の製塩土器とその出土遺跡について考えてみたい。

## 第1節 平館村今津遺跡の製塩土器

今津遺跡はこれまで3回の発掘調査が行われ、村調査区・県埋文調査区・弘大調査区のそれぞれから多数の製塩土器が発見されている。ここではそれぞれの調査区ごとに製塩土器の認定法や製塩土器の特色をとりあげ、比較検討して、今津遺跡の製塩土器の在り方を考えてみたい。

### 〔弘大調査区の製塩土器〕

（製塩土器の選定基準）すでに、今津遺跡の製塩土器のところで記したように、製塩土器とは、専ら土器製塩作業に用いられた土器である。煎熬工程で、長時間、強く加熱されるため、赤く変色し、さらに海水中の不純物が土器の胎土に析出し、器壁が剥離しやすくなるという現象がおこる。また、短期間に大量に消耗・消費するため、製作時の外面調整は丁寧でなく、無文でかつ粘土紐輪積痕が見えるものが多い。こうした特徴をもつ土器を、製塩土器として、他の土器から区別・選定した。製塩土器として製作されたが、煎熬工程に使用しなかったもの、あるいは使用したが、その影響をあまり受けなかったものも、当然、製塩土器に含めた。

（製塩土器の特徴）弘大調査区出土の製塩土器の特色を簡単に纏めると次のようになる。

- ①すべて平底の深鉢である。
- ②小波状口縁で、無文のものが圧倒的に多いが、条痕文も少数ある。
- ③平口縁で、無文のものは少数あるが、条痕文をもつものはない。
- ④条痕文は、一般的な土器の条痕文と比べると、条痕の幅は一定でなく、浅く細い線のものが多い。
- ⑤推定口径は、約22cmから27cmまでのものが多い。

### 〔村調査区・県埋文調査区・弘大調査区の製塩土器の比較検討〕

『平館村史』によると、村調査区の第Ⅱ層から他の遺物と共伴して、製塩土器が出土している。すべて破片で、大洞C2式に伴ったものとされる。

県埋文の報告書（岡田1986）によると、県埋文調査区の第Ⅱ層（遺物密集ブロック）から他の遺物と共伴して、製塩土器が出土している。すべて破片で、大洞C2式に伴ったものとされる。

この二つの調査区の製塩土器は、弘大調査区のものとはほぼ共通した特色をもつが、若干の相違点もあるので、検討してみよう。

①村調査区では、例外として浅鉢形もしくは皿形の製塩土器があるという。しかし、この形態は煎熬工程に使用するものとして相応しくないので、製塩土器の範疇から外したほうがよい。なお、外面が無文で、輪積み痕をもつ浅鉢は、今津遺跡の県埋文調査区や五所川原市観音林遺跡でも出土している。

②県埋文調査区では、「程度の違いはあるものの小波状口縁しかない」とするが、拓本や実測図を検討すると、平口縁のものもごく少数含まれている。

③村調査区と県埋文調査区には、条痕文をもつ製塩土器はない。これは、製塩土器を選定する二つの基準のうち「無文で輪積み痕跡あるもの」を重視した結果であろう。おそらく、「剥離痕（煎熬痕）」があ

るもの」を再検討するならば、村調査区と県埋文調査区においても、条痕文をもつ製塩土器を見つけ出すことができるであろう。なお、条痕文をもつ製塩土器は、今津遺跡とほぼ同じ時期である青森市大浦貝塚でも確認されている（福田2004）。

④製塩土器の推定口径は、約22cm～27cm（弘大調査）・約14～30cm（村調査）・約40～50cm（県埋文調査）と違いがあるが、約40cm～50cmという口径は製塩土器としては大き過ぎるであろう。

以上の検討から、各調査区出土の製塩土器は相違する点はなくなり、村調査区のものも県埋文調査区のものも弘大調査区の製塩土器と同じ特徴をもつことが分かった。

#### 〔今津遺跡は製塩遺跡である〕

縄文時代の製塩土器を出土する遺跡の性格はいろいろあろうが、①塩を生産した遺跡（製塩遺構や製塩作業に従事した集落跡など）と②塩を消費した遺跡に大別することができる。製塩土器を生産した遺跡もあるが、これは製塩作業に従事した集落跡に含めることが可能であろう。生産遺跡は、基本的には海に隣接し、近くに製塩作業に適した浜辺があることが必要である。消費遺跡は、海から離れた遺跡で、そこで発見される製塩土器は、塩の容器として運ばれたか、あるいは塩がこびりついた破片が塩と一緒に運びこまれたものであろう。

今津遺跡は、海に隣接した丘陵台地に立地する集落跡で、比較的に数多くの製塩土器が出土しており、塩の生産遺跡に分類される。台地の下の海辺に製塩遺構があったと推定されるが、埋め立てや住宅建設などで地形が変化しており、現状では遺構の発見は困難である。丘陵上では、これまでに幾つかの遺物密集ブロックが検出されている。含まれる土器からみて、このブロックは、同じ時期のものもあれば、若干年代差があるものもあるが、そのすべてから製塩土器が発見されているので、各ブロックが形成される間はずっと製塩活動がおこなわれていたと考えることができる。また、同時期の複数のブロックも存在するので、それぞれのブロックを捨て場とする集落構成員（世帯共同体）が、共同して製塩活動に参加したことも窺うことが出来る。

## 第2節 青森県内の縄文時代の製塩土器とその出土遺跡

青森県内で発見されている縄文時代の製塩土器を出土した遺跡は、各種の論文・報告書・分布調査などから集成すると、17遺跡ある。このなかには、資料が図版や写真の形で公開されていないため、内容が不明なもの、資料を検討すると製塩土器とは考えにくいものも含まれている。資料が公開されていても判断に迷うものもある。確実なものは、津軽半島東海岸の2遺跡（今津遺跡・石崎沢遺跡）、陸奥湾奥部沿岸の4遺跡（大浦貝塚・横峰遺跡・檜木遺跡・向田8遺跡）、八戸地方の4遺跡（八幡遺跡・風張1遺跡・滝端遺跡・寺下遺跡）であろう。

#### 〔津軽半島東海岸〕

陸奥湾に面して製塩土器を出す遺跡は、今津遺跡と石崎沢遺跡の2カ所であるが、五月女范遺跡など製塩土器が出土したとされる遺跡についても検討を試みた。

（石崎沢遺跡）石崎沢遺跡は今津遺跡の北7.3kmにある。2004年の秋、弘前大学人文学部日本考古学ゼミナール（以下、弘大考古ゼミとする）の分布調査で、狭い範囲（約20～30m）から、大洞C2式土器とともに製塩土器27点を採集した。小波状口縁で無文のものが多く、その特徴は今津遺跡のものと共通する。低地との比高は約2～4m、現海岸までの距離は約100mなので、生産遺跡であろう。縄文時代の製塩遺跡としては、最も北に位置することになる。

（五月女范遺跡）津軽半島の日本海側の砂丘に立地する五月女范遺跡出土の製塩土器は問題がある。報告書では、大洞C2式と大洞C2-A式土器にともなって、製塩土器が検出されているとある（新谷

1983)。写真（21点あり）の説明文によると、小波状口縁・平口縁があり、外面は無文のものが多いが、縄文を施文したものもある。無文のものには輪積み痕がみられるものがある。一見すると、製塩土器で良さそうであるが、器形や器面の調整などにまとまりがなさそうである。そこで、実際の資料にあたり観察してみると、殆どのものに剥離痕（煎熬痕）がないこと、口縁上端付近が厚みをもつものが多いこと、断面が比較的厚めであること、やや黒ずんだ赤褐色を呈するものが多く、強い熱を受けた痕跡がないこと、縄文施文の土器が含まれていること、浅鉢と思われるものがあること、深鉢でもいろいろな形が見られることなどが分かった。以上のことから、五月女菰遺跡の報告書で製塩土器とされている一群の土器は、一般的な製塩土器の範疇から外れるものであると考えられる。したがって、製塩土器が「灰層に伴って出土しており、地床炉により小規模な土器製塩が行われていた」（加藤1984）との説も否定せざるをえないことになる。

（観音林遺跡）内陸部の観音林遺跡でも晩期中葉の土器に伴い、製塩土器と思われる破片が3点ほど出土している（新谷1975・1984～1992）ので、資料にあたり再吟味してみた。3点とも、煎熬工程に使用された痕跡はない。小波状口縁で、外面は無文の破片で、器壁が厚く、製塩土器ではなさそうである。他の2片は小波状口縁と平口縁のもので、ともに条痕文が施文されている。器壁が薄く、製塩土器に似る点もあるが、焼成の具合・色調などが、今津遺跡の製塩土器とは異なっている。断定は難しいが、製塩土器ではないと考えておきたい。

#### 〔陸奥湾奥の沿岸部〕

陸奥湾奥の沿岸部で、製塩土器を出す遺跡は4遺跡（大浦貝塚・横峰遺跡・檜木遺跡・向田(Ⅷ)遺跡）である。

（大浦貝塚）鼻線崎の西側にある標高1.5～2mの低い海岸段丘に立地する。遺跡の目の前がすぐ陸奥湾の汀である。青森県で最初に製塩土器が確認された記念碑的な遺跡で、縄文時代晩期のものと平安時代のものがある。晩期の製塩土器は、大洞C2式～大洞A式に伴うもので、煎熬に使用され、強い熱を受けた痕跡を持つものが多い。まだ製塩炉跡が発見されていないが、付近にあったことは間違いなからう。製塩土器は、すべて小破片で、全体の形や高さ・口径などについては不明であるが、次のような特色をもち、今津遺跡のものと内容がほぼ一致する。

- ①すべて平底の深鉢である。底径は5～6cmのものが多い。
- ②小波状口縁で、無文のものが圧倒的に多いが、条痕文も少数ある。
- ③平口縁で無文のものはごく僅かである。
- ④条痕文は、一般的な土器の条痕文と比べると、条痕の幅は一定でなく、浅く細い線のものが多い。

（横峰遺跡）夏泊半島突端部の海岸段丘上に立地する。標高は10～20mで、遺跡のすぐ目の前が陸奥湾である。製塩土器は、ごく僅かしか知られていないが、大浦貝塚のものと同じ特徴をもつものと考えられる。

（檜木遺跡）松の木川北部にある標高約30mの平坦な河岸段丘上に立地する。現海岸までの距離は約1.5kmである。発掘概報（横浜町教委1983）によると、晩期前半の大洞B式～大洞C1式土器が多数出土したという。整理作業中、工藤竹久氏から「製塩土器が含まれている」ことを指摘されたと、編集後記にあるが、本文では製塩土器についてはまったく取り上げていない。町教育委員会で保管する製塩土器の一部を資料調査させていただいたところ、およそ100点ほどの破片があった。

檜木遺跡出土の製塩土器は、煎熬工程で使用された痕跡をもち、器表面が剥離したもの、色調が赤く変化したものが多い。口縁部破片では、平口縁が圧倒的に多く、小波状口縁はなさそうである。外面も無文のものばかりで、条痕文は見当たらなかった。底部は平底で、径4.0～7.0cmのものである。

檜ノ木遺跡の製塩土器が、ほとんど平口縁であるということは、今津遺跡や大浦貝塚では見られない

特色である。なお立地から考えて消費遺跡であったと思われる。

（向田(8)遺跡A区）向田(8)遺跡A区は、標高約15mの比較的狭い河岸段丘上に立地し、現海岸から約1.1km離れている。報告書は、縄文時代晩期の土器の中から、「製塩土器と思われるもの」を選びだし、口縁部破片5点を取り上げている。すべて平口縁で、外面は無文で、輪積み痕が観察される。うち2点は、熱を受け、器表面が剥落している部分がある。すべて平口縁であることを考えると、今津遺跡や大浦貝塚のものより、檜木遺跡の製塩土器に近いものと思われる。晩期のいつに属するかは説明されていないが、檜木遺跡の製塩土器に似ている特徴を持つことから、この製塩土器も晩期前半に属するものと考えてよいであろう。立地や製塩土器の量が少ないことから消費遺跡である可能性が高い。

#### 〔八戸地方の製塩土器を出す遺跡〕

八戸地方の4遺跡（八幡遺跡・風張(1)遺跡・滝端遺跡・寺下遺跡）は、いずれも海岸部に近いものはなく、やや内陸部に入り込む遺跡が多い。

（寺下遺跡）道仏川の上流、階上岳から延びる標高140～170mの丘陵台地に立地し、現海岸からの直線距離は約4.5kmである。2004年の階上町教育委員会の発掘調査で、大洞C1式の貝層から比較的多くの製塩土器が出土した。これらは煎熬工程で使用された痕跡をもつものが多い。現在、整理中であるが、担当者（森 淳氏）のご教示によると、寺下遺跡の製塩土器は、平口縁のものと緩やかな波状口縁があり、外面は無文で、輪積み痕をもつものが多いという。底部は比較的小型で、指で押したように窪んでいる。

製塩土器の量が比較的多いとはいえ、海から遠い丘陵上の遺跡なので、やはり消費遺跡であろう。しかし、製塩土器が貝層の中から発見されることを考えると、寺下遺跡は、海岸で魚介を採集したり、塩を生産したりする海のムラと頻繁に行き来する山のムラであったと思われる。

（滝端遺跡）標高約150mの丘陵の緩やかな斜面に立地する縄文後・晩期の大きな遺跡で、現海岸までの距離は約10kmである。発見された製塩土器は1個で、径150～160cmほどの土坑の底面から大洞BC式の土器と一緒に出土した。製塩土器は、ほぼ完全な形のもので、器高31.5cm、口径25.5cm、底径3.5cmである。口縁はほぼ平坦で、外面は無文で、輪積み痕が残る。底部は比較的小さくやや窪んでいる。その形態・作りとも、寺下遺跡の製塩土器によく似ている。煎熬工程に用いられた痕跡はない。青森県内では、全体の形の分かる唯一の製塩土器である。土坑の性格は不明だが、滝端遺跡は、立地からみて塩の消費遺跡である。

（八幡遺跡）馬淵川に臨む標高6～16mの低位段丘面上に立地する。現海岸からの距離は約10kmである。報告書（八戸市教委1988）によると、縄文時代晩期前葉の土器を中心とした捨て場（後期から晩期中葉の土器もある）から製塩土器の破片が約120点出土したという。

製塩土器は、無文のものと縄文をもつものがある。その割合は報告書には記されていない。無文のものは、緩い波状の口縁と平口縁のものがあり、輪積み痕が見えるものが多い。胎土も他の土器群に比べ砂粒が粗雑である。また二次加熱により変色している。写真を見ると器面が激しく剥離しているものが多い。縄文をもつ製塩土器の破片は、二次加熱により赤褐色に変色しているという。製塩土器は、専ら土器製塩のために製作され、特殊化されたものと定義されているので、煎熬痕と考えられる痕跡のある縄文をもつ土器は、一般的な製塩土器の範疇から外し、製塩作業用に転用されたものと考えた方がよいと思われる。

（風張(1)遺跡）新井田川の右岸にある標高21～30mの河岸段丘上に立地し、海岸からの直線距離は約8.3kmに位置する縄文時代後期の大きな集落跡である。『遺跡が語る八戸の歴史』（八戸市教委1990）に、風張(1)遺跡出土の縄文後期末の製塩土器として、体部破片3点、底部を含む体部下半部の大型破片1点が掲載されているが、報告書で製塩土器についてふれたものはない。写真では、体部外面は無文で、輪積み痕がはっきりと見える。体部下半部は強い熱を受けた感じである。底部は平底で、大きさは普通の深

鉢と変わりなさそうである。後期末とすれば東北地方で最も古い製塩土器となるので、正式な報告書が期待される。

#### 〔青森県の製塩土器およびその出土地のまとめ〕

最後に、青森県の製塩土器とその出土遺跡の特徴、遺跡の性格、年代（時期）について、地域ごとに特色あるいは傾向というものが見えるようなので、纏めてみよう。

#### 〔陸奥湾沿岸〕

陸奥湾沿岸で縄文時代に製塩活動を行っていた確実な遺跡は、津軽半島東海岸の今津遺跡・石崎沢遺跡、陸奥湾奥の沿岸部の大浦貝塚の3遺跡である。これに横峰遺跡を加えてもよさそうである。ここで使用された製塩土器は、今津遺跡や大浦遺跡のものに代表されるように、口縁が小波状となり、外面が無文のものが多いが、条痕文をもつものもある。平口縁のものは少ない。すべて平底である。という特色をもつ。年代も晩期の大洞C2式～大洞A式に限定される。これらの遺跡で生産された塩の消費遺跡は不明である。

陸奥湾奥部の東寄りの地域に所在する檜木遺跡・向田(Ⅷ)遺跡は、製塩土器の量や海岸からの距離を考えると、塩の消費遺跡であつたろう。製塩土器の特色は、平口縁で、外面は無文で、輪積み痕がみえることで、今津遺跡や大浦貝塚のものとは若干異なった特色をもつ。両遺跡とも晩期前半の土器に伴った可能性が高いと思われる。この時期の塩の生産遺跡は陸奥湾では不明である。

#### 〔八戸地方の製塩土器を出す遺跡〕

寺下遺跡の製塩土器は、平口縁あるいは緩やかな波状口縁で、底面が窪んだ小型の底部をもつのが特色で、滝端遺跡や八幡遺跡のものもこの仲間に属するものと考えてよいであろう。これは、陸奥湾の今津遺跡・大浦遺跡のものとも、また檜ノ木遺跡・向田(Ⅷ)遺跡のものとも違う特色である。年代は滝端遺跡では大洞BC式、寺下遺跡では大洞C1式となる。同じような特徴をもつ製塩土器は、岩手県久慈市大芦Ⅰ遺跡や岩手県種市町タケノコ遺跡でも見られ、その時期は大洞BC式～大洞C1式土器である可能性が高いという。おそらく晩期前半ころ、八戸地方から岩手県北部の太平洋岸に、寺下遺跡に代表させるような特色をもつ製塩土器が分布していたものと思われる。しかし、これらの遺跡は、すべて海から遠く離れた消費遺跡であり、これらの遺跡に塩を供給した製塩遺跡を見つけることが重要である。

風張(Ⅰ)遺跡の後期末の製塩土器は、東北地方で最も古い製塩土器のひとつであるが、正式な報告書が未刊なので詳細は不明である。

#### 〔総括〕

青森県の縄文時代の製塩土器はまだ資料も少なく、不明な点も多いが、ここで総括して、問題点なども考えて見たい。

縄文時代の製塩土器は、風張(Ⅰ)遺跡の後期末のものを除くと、すべて晩期に属する。分布は、陸奥湾沿岸と八戸地方の太平洋沿岸に集中し、日本海沿岸に見られない。製塩土器は、その特徴から陸奥湾沿岸に分布する〔今津・大浦グループ〕と〔檜木・向田(Ⅷ)グループ〕、八戸地方に分布する〔寺下・滝端グループ〕に大別され、それに詳細不明ながら〔風張(Ⅰ)グループ〕が加わる。なお、〔今津・大浦グループ〕は塩を生産した遺跡であるが、他の3グループは塩の消費遺跡である。

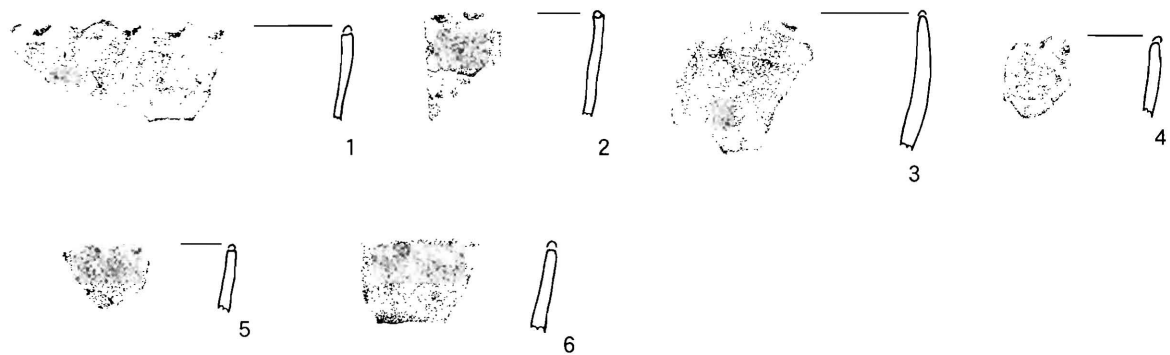
所属時期は、後期末の〔風張(Ⅰ)グループ〕が最古で、次いで晩期前半の〔檜木・向田(Ⅷ)グループ〕と〔寺下・滝端グループ〕、最後は晩期中～後葉の〔今津・大浦グループ〕となる。

したがって、大胆に言えば、青森県では、八戸地方で後期末から製塩土器を用いた製塩活動が始まり、晩

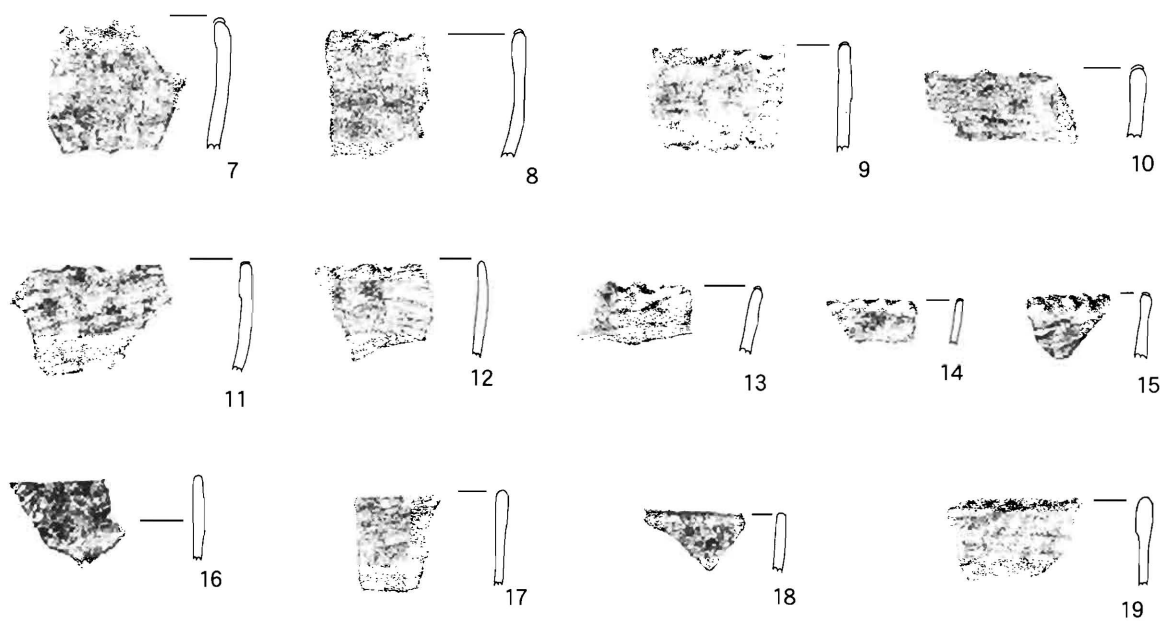
期前半には八戸地方の広い範囲と陸奥湾の一部に拡大し、晩期中・後葉になると八戸地方では衰退し、逆に陸奥湾のみで盛んに行われるという図式が描かれる。しかし、大洞A式に確実に伴う製塩土器は発見されていないので、青森県の製塩活動は、仙台湾よりも早く終焉するものとみられる。

また、〔今津・大浦グループ〕で生産した塩を送り込んだ遺跡や、〔檜木・向田(8)グループ〕・〔寺下・滝端グループ〕・〔風張(1)グループ〕で消費した塩を生産した遺跡などはまだ知られていない。塩の流通

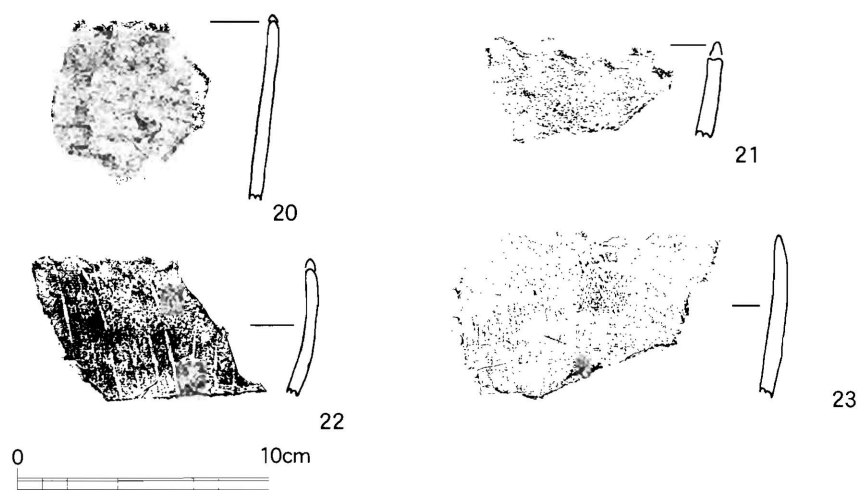
縄文時代の製塩土器出土遺跡			
	遺跡名	市町村名	主な文献。製塩土器の年代。その他
1	今津	平舘村	橘・工藤1974。青森県埋文1986。大洞C2～A式期。生産遺跡。本文参照
2	石崎沢	平舘村	2004年の弘大考古ゼミの分布調査で、大洞C2式土器とともに製塩土器22片を表面採集。生産遺跡。
3	大泊	今別町	2004年の弘大考古ゼミの分布調査で、晩期の土器と共に、輪積痕のある無文の土器を1点採集。製塩土器か。
4	五月女菰	市浦村	新谷・川村1983。加藤1984。大洞C2～A式期。製塩土器・製塩遺跡と報告されているが、製塩土器と見るのは疑問。
5	観音林	五所川原市	新谷1975・1984～1992。製塩土器と思われる破片が数点あるが、断定できない。
6	大浦貝塚	青森市	北林1972、青森市教委2001、福田2004。大洞C2～A式期。生産遺跡。
7	横峰貝塚	平内町	福田1985。晩期の土器と共に製塩土器2片を表面採集。生産遺跡
8	小湊	平内町	青森県埋文1990。北林2003は槻ノ木遺跡とする。説明がなく内容不明
9	檜木	横浜町	概報（横浜町教委1983）には掲載されていないが、製塩土器が出土。その一部を調査させていただいた。消費遺跡か。
10	向田(8)	野辺地町	川村・田中2004。晩期の製塩土器が5片ある。消費遺跡か。
11	八森	むつ市	橘1974。晩期前半の製塩遺跡とあるのみで、詳細不明。
12	角違	むつ市	橘1984。小波状口縁で無文らしき拓本が1点あるが、詳細不明。
13	八幡	八戸市櫛引	八戸市教委1988年。晩期の捨て場から製塩土器が120点出土。その中に縄文の付くものがあるが、生活用の土器の転用であろう。消費遺跡。
14	風張(1)	八戸市	八戸市教委1990に、後期末の製塩土器として体部破片3、底部大型破片1の写真がある。後期末とすれば青森県で最古の製塩土器となる。
15	松舘	八戸市	鈴木1981に「晩期の尖底土器」とあるが、図面・写真なく内容不明。
16	滝端	階上町	階上町教委2000。土坑から晩期初頭の土器片とともに完形の製塩土器が1個出土。消費遺跡。
17	寺下	階上町	階上町教委が2004年度に調査。大洞C1式の貝層から製塩土器が比較的多数出土。消費遺跡。



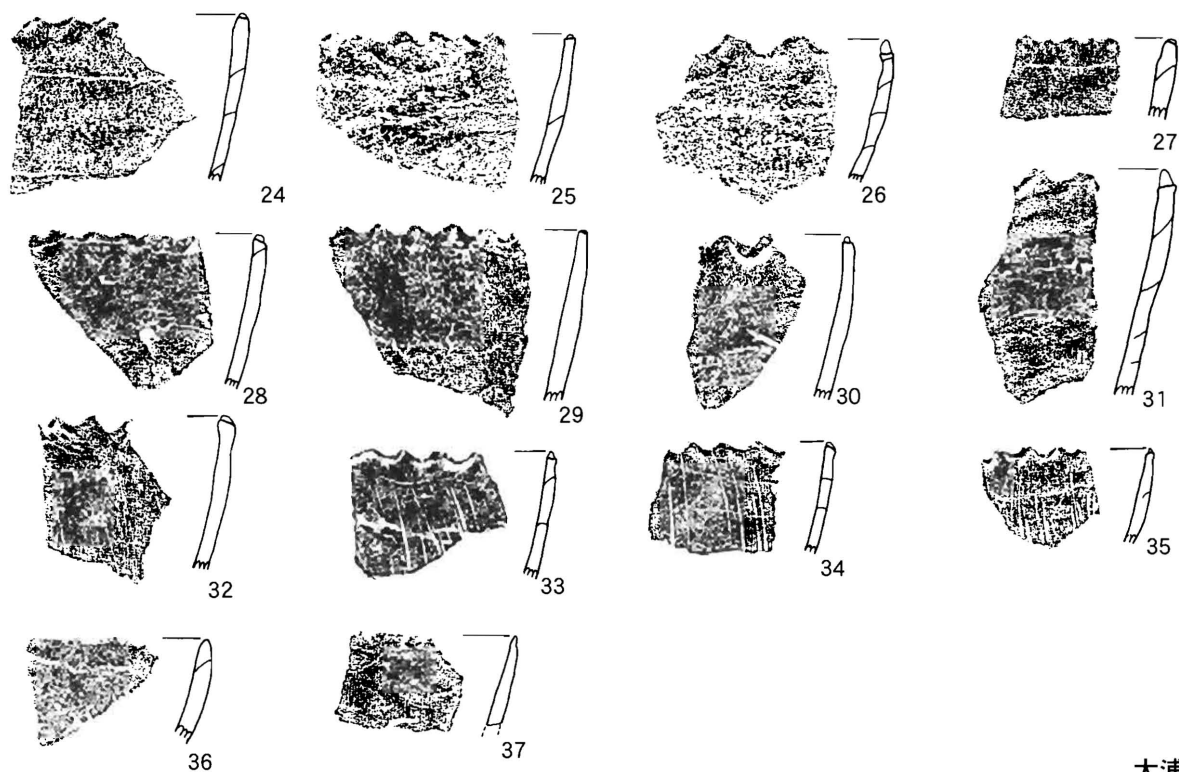
石崎沢遺跡



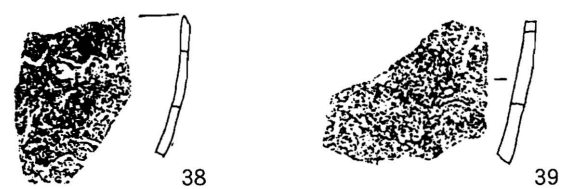
五月女芭遺跡



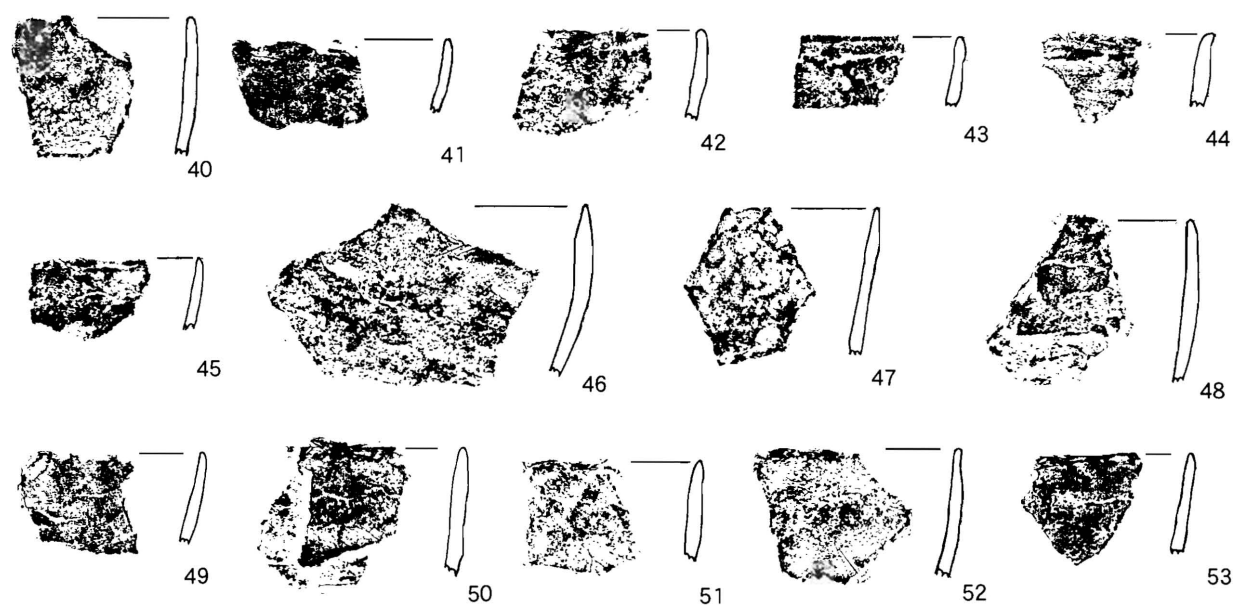
観音林遺跡



大浦遺跡

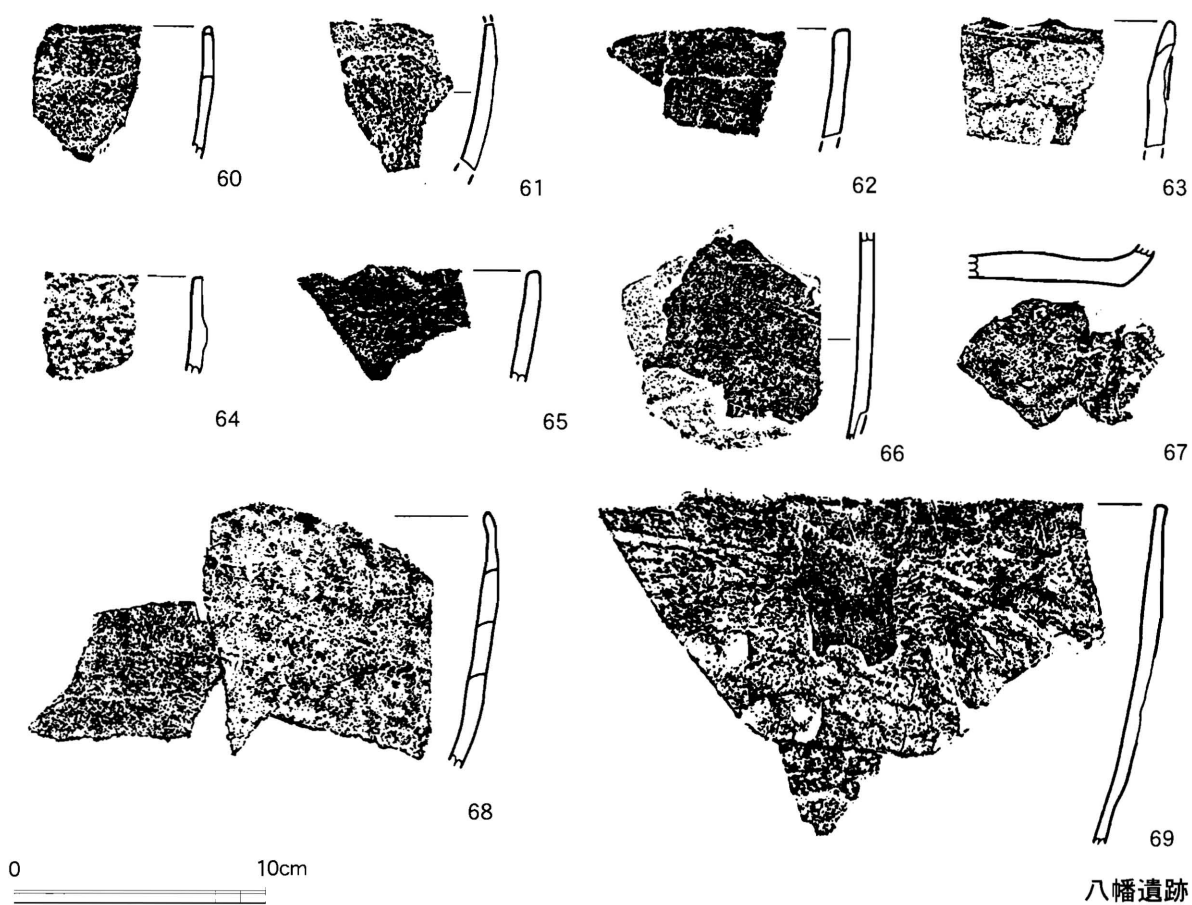
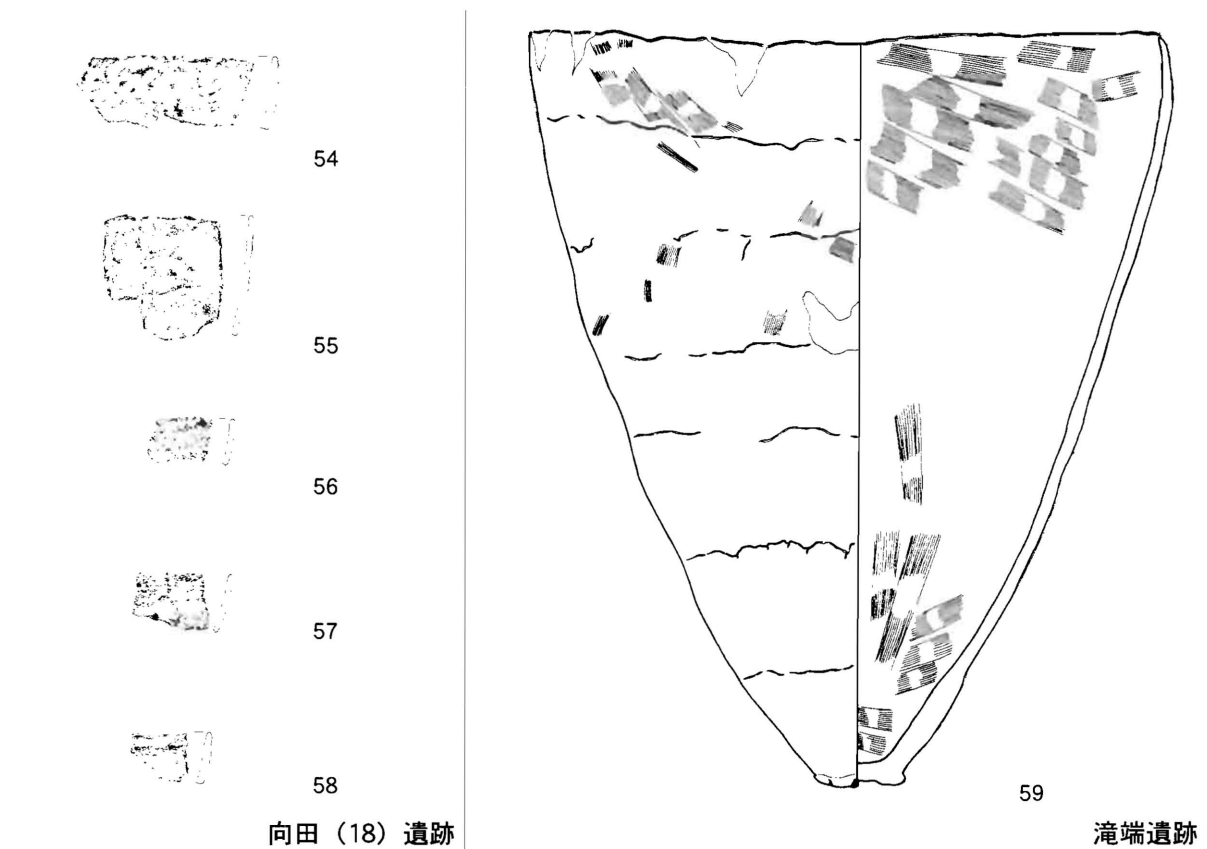


横峰貝塚



榎木遺跡





図版98



70



71

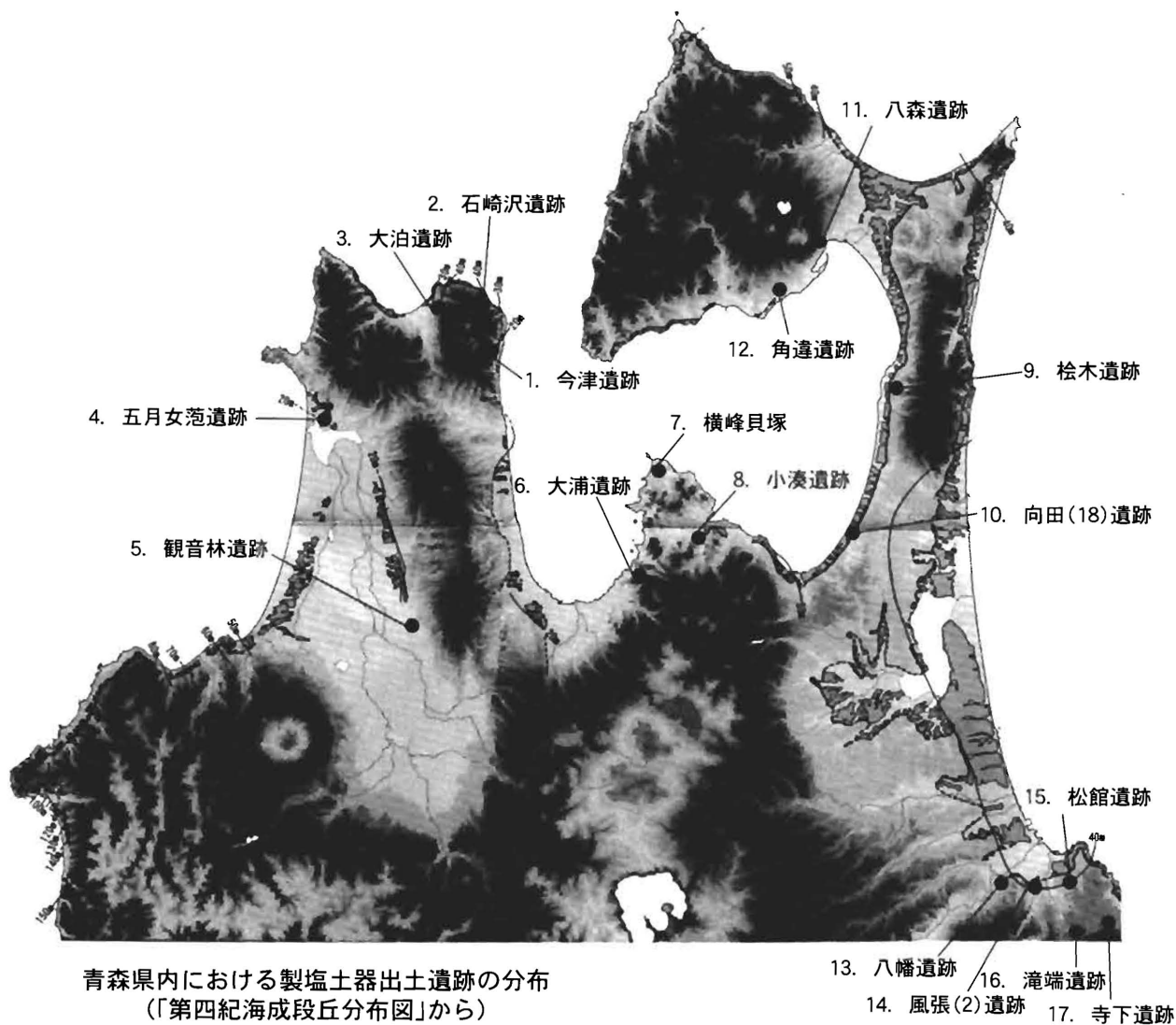


72



73

風張(2)遺跡(「遺跡が語る八戸の遺跡」から)



青森県内における製塩土器出土遺跡の分布  
(「第四紀海成段丘分布図」から)

図版99

## 論考Ⅱ 青森県の縄文時代晩期の遺跡数

藤沼・山口・澤田

平成16年11月に行われた『是川縄文シンポジウム2004年』において、工藤竹久は「八戸地方の縄文時代の遺跡数を時代ごとに調べてみると、縄文時代後期が最も多く、それが縄文晩期に激減する。これは、八戸地方だけでなく広く青森県内全体にわたってみられる現象である」と述べている（是川縄文シンポジウム実行委員会2004）。平成4年刊行の『青森県遺跡地図』をもとにした小山修三・及川昭文の集計（小山・及川1996）によると、縄文時代の総遺跡数4367カ所のうち、草創期が5遺跡、早期が227遺跡、前期が677遺跡、中期が620遺跡、後期が1518遺跡、晩期が725遺跡、弥生時代の総遺跡数184カ所であり、工藤の意見と同じ結果となっている。しかし、後期に比べ激減したとはいえ、晩期の遺跡数は草創期から中期までの各時期の遺跡数よりは多いので、決して少ない数とはいえないであろう。また、弥生時代になると遺跡数は更に減少し、晩期の遺跡数の25%まで落ち込んでしまうのである。

そこで晩期の遺跡数の実態を知るために、平成10年刊行の『青森県遺跡地図』を用いて、県内の郡および市町村単位の縄文後期と晩期の遺跡数を集計し、とくに地域における晩期の遺跡数の変動などについて考えてみた（表1）。なお、表にある括弧内の晩期の遺跡数は、『青森県遺跡地図』のほかに、報告書などで情報の追加をおこなったもので、以下では括弧内の数字を使用している。

作成した表によると、後期の遺跡数は1543カ所、晩期の遺跡数は826カ所である。まさに工藤の指摘するように、晩期の遺跡数は後期の約半分近くまで激減しているが、その原因を述べることは難しい。ここでは晩期の遺跡数だけを問題にしよう。

県内の晩期の遺跡数は、郡単位でみると、旧三戸郡が322遺跡、旧上北郡が92遺跡、旧南津軽郡が92遺跡、旧中津軽郡が87遺跡、旧東津軽郡が78遺跡、旧西津軽郡が62遺跡、旧下北郡が51遺跡、旧北津軽郡が42遺跡であり（図9参照）、旧三戸郡が突出していることが分かる。また地形的に県内を大きく眺めると、遺跡は山岳部に少なく、馬淵川・新井田川水系や岩木川水系などの河川流域、むつ小川原湖周辺部、陸奥湾沿岸などに多い傾向がある。一つの町の中でも遺跡が平均して分布している訳ではない。たとえば鯹ヶ沢町は比較的晩期の遺跡の多い町で26遺跡あるが、海岸部や岩木川流域に集中し、白神山地では殆ど発見されていない。山地で発見される遺跡が少ないのは、実際に遺跡が少ないだけでなく、地表面を観察することのできる畑地などが少ないことも理由であろう。ちなみに、平舘村今津遺跡の属する旧東津軽郡の78遺跡は、その半分以上が陸奥湾の奥部沿岸に位置する青森市と平内町に集中するようである。

市町村単位で晩期の遺跡数の多いところを上げると、南郷村の171遺跡、弘前市の73遺跡、八戸市の44遺跡、平賀町の38遺跡、階上町の34遺跡、青森市の32遺跡の順となり、突出する南郷村をはじめとする旧三戸郡に属する八戸市や階上町などに多いのが注目される。その理由は馬淵川・新井田川流域が遺跡の分布密度が著しいためであろう。しかし、弘前市や八戸市よりもはるかに遺跡数の多い南郷村の171遺跡の突出ぶりは気になるところで、一度詳しく調べて見たいと思う。また、八戸市や弘前市、青森市に遺跡数が集中するのは、都市部には調査に携わる研究者が多く、開発に伴う行政調査が頻繁に行われ、他と比べ分布調査が行き届いているためであろう。

後期の遺跡数に比べ、晩期の遺跡数は半減したとはいえ、それが直ちに人口の激減や文化の衰退につながる訳でないと思われる。東北地方晩期の文化は、亀ヶ岡文化と称せられ、北海道渡島半島から東北地方一円を文化圏として隆盛したことでよく知られている。その特色は土偶や石刀、土版・岩版などの祭祀的な遺物、精巧な土器や漆器などの工芸的な遺物に彩られていることである。その影響を受けた

土器は、亀ヶ岡文化圏をはるかに越えて、北は北海道北部まで、南は近畿地方・四国地方・九州地方まで達している。亀ヶ岡文化はしたたかな「文化力」（小林1999）を持っていたのである。こうしたことを遺跡数と関連させて、何かを読み取ることは本当に難しい。ある意味では、現状で把握できる遺跡数というもの、見かけの数字であることを実感せざるをえない。しかし、亀ヶ岡文化の動態を考える上で、遺跡数の増減を無視することができないのも事実であろう。今回は青森県だけしか取り上げることが出来なかったが、参考のため宮城県の後期遺跡数も集計しておいた（表2）。これからは北海道渡島半島から東北地方一円にかけての亀ヶ岡文化圏における遺跡数を集計し、いろいろなことを考えてみたいと思う。

なお、今津遺跡の周辺地域を分布調査した時の経験であるが、青森県遺跡台帳に基づいて遺跡をさがしても、山林や藪地のため、遺跡であると確認できないところが多かった。また遺跡台帳に大縮尺の地図が添付されていないため、遺跡に辿り着くことが出来なかったこともある。また今津(1)・今津(2)・今津(3)遺跡のように、地形的にみて纏まりのある台地に複数の遺跡があるものは、一つの遺跡としてとらえた方が便利であると思う。研究者によって遺跡のとらえ方は微妙に違うが、より明確な遺跡数の確立のためにも、共通認識は必要であろう。

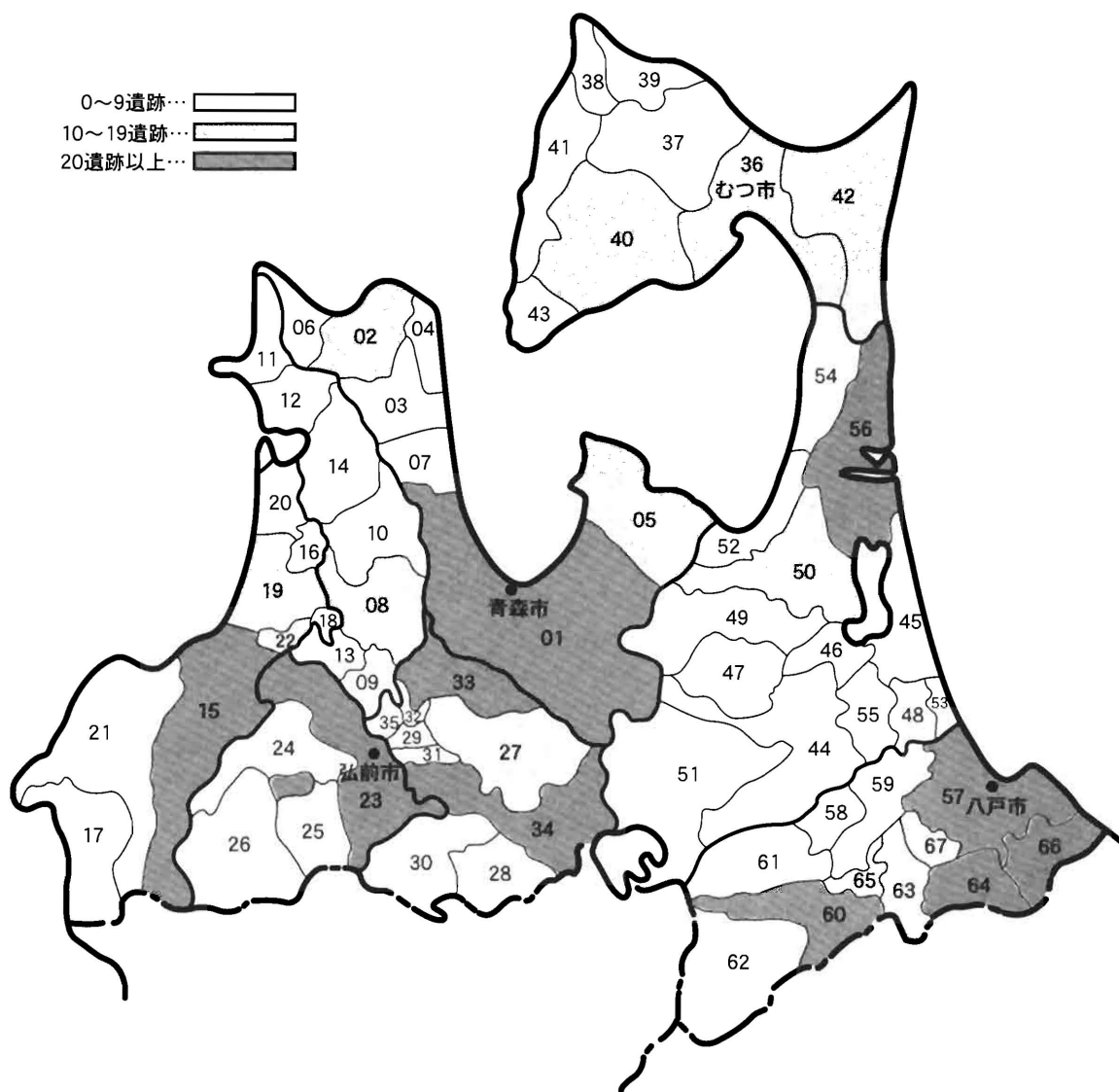


図9 青森県における縄文時代晩期の遺跡数  
(01～67の番号は（表1）の市町村番号と対応）

表 1

青森県縄文時代後期・晩期の遺跡数（青森県遺跡地図平成10年版より）										
※表中（ ）内の数字は報告書等から追加した後の遺跡数。										
市町村名	後期	晩期	市町村名	後期	晩期	市町村名	後期	晩期		
旧東津軽郡	140	66(78)	旧中津軽郡	136	85(87)	44	十和田市	15	7(8)	
01 青森市	92	24(32)	23 弘前市	102	71(73)	45	三沢市	29	8(8)	
02 今別町	17	13(16)	24 岩木町	11	4(4)	46	上北町	12	1(2)	
03 蟹田町	6	3(3)	25 相馬村	18	8(8)	47	七戸町	19	7(7)	
04 平館村	0	8(9)	26 西目屋村	5	2(2)	48	下田町	3	1(1)	
05 平内町	11	10(10)	旧南津軽郡	188	70(92)	49	天間林村	14	6(6)	
06 三厩村	6	6(6)	27 黒石市	70	8(12)	50	東北町	196	14(15)	
07 蓬田村	8	2(2)	28 碓ヶ関村	3	1(5)	51	十和田湖町	4	0(0)	
旧北津軽郡	38	33(42)	29 田舎館村	2	1(1)	52	野辺地町	72	7(8)	
08 五所川原市	8	10(19)	30 大鰐町	19	3(4)	53	百石町	1	3(3)	
09 板柳町	12	4(4)	31 尾上町	4	2(4)	54	横浜町	4	6(6)	
10 金木町	10	5(5)	32 常盤村	0	0(0)	55	六戸町	1	1(1)	
11 小泊村	2	9(9)	33 浪岡町	19	14(25)	56	六ヶ所村	75	10(27)	
12 市浦村	2	2(2)	34 平賀町	70	38(38)	旧三戸郡		348	300(322)	
13 鶴田町	3	1(1)	35 藤崎町	1	3(3)	57	八戸市	128	35(44)	
14 中里町	1	2(2)	旧下北郡	122	44(51)	58	倉石市	13	1(3)	
旧西津軽郡	126	60(62)	36 むつ市	45	11(11)	59	五戸町	21	2(3)	
15 鱒ヶ沢町	70	24(26)	37 大畑町	7	3(3)	60	三戸町	10	22(23)	
16 稲垣村	0	0(0)	38 大間町	3	44(51)	61	新郷村	5	4(4)	
17 岩崎村	4	1(1)	39 風間浦村	6	11(11)	62	田子町	5	5(5)	
18 柏 村	0	0(0)	40 川内町	13	3(3)	63	名川町	34	13(13)	
19 木造町	29	11(11)	41 佐井村	6	4(6)	64	南郷村	75	167(171)	
20 車力村	6	0(0)	42 東通村	27	4(4)	65	南部町	6	11(11)	
21 深浦町	9	7(7)	43 脇野沢村	15	7(10)	66	階上町	32	32(34)	
22 森田村	8	17(17)	旧上北郡	445	2(2)	67	福地村	19	8(11)	
合 計								1543	729(826)	

表 2

宮城県縄文時代晩期の遺跡数（宮城県遺跡地図平成10年版より）														
1	仙台市	17	13	亘理町	3	28	色麻町	4	43	瀬峰町	0	58	歌津町	3
	旧秋保町	8	14	山元町	2	29	松山町	1	44	鶯沢町	2	59	本吉町	3
	旧宮城町	8	15	塩釜市	4	30	三本木町	2	45	金成町	1	60	市津川町	1
	旧泉市	3	16	多賀城市	2	31	鹿島台町	1	46	志波姫町	3	61	津山町	3
2	角田市	12	17	松島町	11	32	岩出山町	53	47	花山村	17	62	石巻市	6
3	丸森町	26	18	七ヶ浜町	12	33	鳴子町	18	48	迫町	13	63	牡鹿町	3
4	白石市	21	19	利府町	1	34	小牛田町	1	49	登米町	0	64	女川町	10
5	蔵王町	22	20	大郷町	1	35	涌谷町	8	50	東和町	2	65	河北町	3
6	七ヶ宿町	15	21	大衡町	5	36	田尻町	7	51	中田町	2	66	矢本町	1
7	大河原町	2	22	大和町	11	37	南郷町	0	52	豊里町	0	67	雄勝町	4
8	川崎町	13	23	富谷町	10	38	築館町	6	53	米山町	6	68	河南町	3
9	柴田町	10	24	古川市	17	39	若柳町	9	54	石越町	4	69	桃生町	3
10	村田町	4	25	中新田町	1	40	栗駒町	2	55	南方町	2	70	鳴瀬町	12
11	名取市	2	26	小野田町	15	41	高清水町	1	56	気仙沼市	15	71	北上町	3
12	岩沼市	2	27	宮崎町	25	42	一迫町	29	57	唐桑町	4	合計	556	

## 主な参考文献

- 1897年、佐藤伝蔵「共同備忘録(7)」『東京人類学会雑誌』12-138。
- 1928年、杉山寿栄男『日本原始工芸』。
- 1930年、山内清男「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』1-3。
- 1932年、喜田貞吉・杉山寿栄男『日本石器時代植物性遺物図録』、斎藤報恩会。
- 1939年、山内清男『日本遠古の文化』。
- 1959年、清水潤三「青森県東津軽郡上山崎遺跡」『日本考古学年報』8、日本考古学協会。
- 1959年、清水潤三「青森県東津軽郡宇鉄遺跡」『日本考古学年報』8、日本考古学協会。
- 1959年、清水潤三編『亀ヶ岡遺蹟』。
- 1960年、芹沢長介『石器時代の日本』、築地書館。
- 1962年、清水潤三ほか「宇鉄遺蹟」『三厩村誌』、三厩村。
- 1965年、吉崎昌一「縄文文化の発展と地域性－北海道－」『日本の考古学』Ⅱ。
- 1967年、江坂輝弥・渡辺 誠・高山 純「大間町ドウマンチャ貝塚」『下北－自然・文化・社会』、平凡社。
- 1967年、金子浩昌「下北半島における縄文時代の狩猟活動」『下北－自然・文化・社会』、平凡社。
- 1968年、村越 潔ほか編『岩木山』、岩木山刊行会。
- 1972年、保坂三郎編『是川遺跡出土遺物報告書』、八戸市教育委員会。
- 1972年、北林八洲晴「青森県陸奥湾沿岸の製塩土器（予察）」『考古学研究』18-4。
- 1973年、須藤 隆「土器組成論－東北地方における初期稲作農耕社会成立過程究明のための基礎的研究」『考古学研究』19-4。
- 1973年、藤村東男「晩期縄文式土器の器形組成」『萌木』12。
- 1974年、橘 善光・工藤竹久「青森県東津軽郡今津遺跡調査概報」『平館村史』、平館村。
- 1974年、肴倉弥八編『平館村史』、平館村。
- 1974年、野村 崇編『札刈遺蹟』、木古内町教育委員会。
- 1974年、青森県教育委員会『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書14。
- 1975・1984～1992年、新谷雄蔵『観音林遺跡－第一～十次発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第6～15集。
- 1976年、野村 崇ほか編『札刈』北海道開拓記念館。
- 1978年、近藤義郎編『日本塩業大系 資料編考古』、日本塩業研究会。
- 1979年、吉崎昌一ほか編『聖山』北海道大学教養部人類学研究室。
- 1979年、芹沢長介編『峠下聖山遺蹟』東北大学文学部考古学研究会。
- 1979年、杉山 武『松元遺跡発掘遺蹟報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書46。
- 1980年、藤村東男「東北地方に於ける晩期縄文式土器の器形組成」『史学』第50巻記念号。
- 1981年、鈴木克彦「青森県における亀ヶ岡文化研究の現状と課題」『考古風土記』6。
- 1981年、藤沼邦彦「縄文晩期の土器－東北地方－」『縄文土器大成』4、講談社。
- 1981年、佐川正敏「続『聖山遺蹟』Ⅰ－土器の諸問題－」『北海道考古学』17。
- 1981年、林 謙作「縄文晩期の土器－北海道－」『縄文土器大成』4、講談社。
- 1981年、飯島義雄「仮称、連繫入組文と横位連続工字文について」『考古風土記』6。
- 1981年、高橋龍三郎「亀ヶ岡式土器の研究－青森県南津軽郡浪岡町細野遺跡の土器について」『北奥古代文化』12。
- 1983年、新谷雄蔵・川村真一『五月女范遺蹟』、市浦村教育委員会。

- 1983年、三厩村教育委員会編『宇鉄Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
- 1983年、上磯町教育委員会編『添山遺跡発掘調査報告書』
- 1983年、横浜町教育委員会『檜木遺跡発掘調査報告書』
- 1983年、近藤義郎『土器製塩の研究』、青木書店。
- 1983年、藤村東男「縄文土器組成論」『縄文文化の研究』5。
- 1984年、十和田市教育委員会『明戸遺跡発掘調査報告書』
- 1984年、山形県教育委員会『作野遺跡発掘調査報告書』
- 1984年、岩手県教育委員会『安堵屋敷遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書74。
- 1984年、青森県立郷土館『亀ヶ岡石器時代遺跡』。
- 1984年、橘 善光「中島全二蒐集遺物集成（二）」うそり21。
- 1984年、加藤 孝「本州北端の初期製塩遺跡」東北学院大学論集14集。
- 1984年、野村 崇「北海道の亀ヶ岡文化」『北海道の研究』1。
- 1985年、福田友之「平内町横峰貝塚発見の遺物ー陸奥湾沿岸の縄文時代晩期製塩土器に関するメモー」遺址2。
- 1985年、青森市教育委員会編『長森遺跡発掘調査報告書』
- 1985年、佐藤広史「型式の空間分布から見た土器型式ー東北地方大洞C2期を中心にしてー」『赤い本』2。
- 1985年、青森県埋蔵文化財調査センター編『尻高(2)・(3)・(4)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第89集。
- 1985年、古屋敷則雄「青森県平館村今津遺跡出土の石製品」『遺址』5。
- 1985年、一町田 工「尻高(5)遺跡・郷沢遺跡の製塩土器」『青森県考古学』2。
- 1985年、野村 崇『北海道縄文時代終末期の研究』、みやま書房。
- 1986年、岡田康博ほか編『今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第95集、青森県教育委員会。
- 1986年、岡田康博「今津遺跡に見る亀ヶ岡式土器」『考古学ジャーナル』261。
- 1986年、新谷 武・岡田康博「青森県平館村出土の鬲状三足土器」『考古学雑誌』71-2。
- 1987年、宇部則保ほか編『是川中居遺跡ー長田沢地区』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第2集。
- 1988年、八戸市教育委員会編『八幡遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書26。
- 1988年、福田友之「本州北辺の鯨類出土遺跡ー津軽海峡南岸域における先史鯨類利用ー」『青森県史研究』2号、青森県。
- 1989年、藤沼邦彦「亀ヶ岡式土器の文様の描き方ー雲形文を中心にー」『考古学論叢Ⅱ』。
- 1989年、飯島義雄「体部文様からみた聖山式土器」『考古学論叢Ⅱ』
- 1989年、藤沼邦彦「亀ヶ岡式土器様式」『縄文土器大観』4、小学館。
- 1990年、八戸市教育委員会『遺跡が語る八戸の歴史』八戸市文化財シリーズ31。
- 1990年、宮城県教育委員会編『摺萩遺跡』宮城県文化財調査報告書132。
- 1990年、青森県埋蔵文化財調査センター編『北の誇り・亀ヶ岡文化』図説ふるさと青森の歴史シリーズ③、青森県教育委員会。
- 1991年、八戸市教育委員会『風張(1)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集。
- 1991年、鈴木道之助『図録 石器入門事典〈縄文〉』、柏書房。
- 1992年、山本質素「津軽半島の漁村の生活と民俗」『国立歴史民俗博物館研究報告』43。

- 1992年、板柳町教育委員会『土井Ⅰ号遺跡』。
- 1993年、高橋龍三郎「大洞C2式土器細分のための諸課題」『先史考古学研究』4。
- 1993年、東北歴史資料館『里浜貝塚Ⅱ』東北歴史資料館資料集7。
- 1993年、青森県立郷土館編『漆の美』。
- 1994年、北林八洲晴「青森県」『日本土器製塩研究』、青木書店。
- 1994年、近藤義郎『日本土器製塩研究』、青木書店。
- 1995年、葛西 勳編『宇鉄遺跡発掘調査報告書』、三厩村教育委員会。
- 1995年、高田和徳・中村明央『山井遺跡』一戸町文化財調査報告書36集。
- 1995年、須藤 隆編『縄文時代晩期貝塚の研究2 中沢目貝塚Ⅱ』、東北大学文学部考古学研究会。
- 1995年、笹森一郎・斉藤 岳『千刈(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書174集。
- 1995年、青森県教育委員会編『羽黒平(3)遺跡発掘(試掘)調査報告書』浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第5集。
- 1995年、鈴木克彦「亀ヶ岡式土器の器形・器形組成から見た地域性」『北海道考古学』31。
- 1996年、葛西 勳編『宇鉄遺跡発掘調査報告書』、青森県三厩村教育委員会。
- 1996年、泉 拓良編『縄文土器出現』歴史発掘②、講談社。
- 1996年、小山修三・及川昭文「青森県遺跡データベース」『シンポジウム 考古学とコンピュータする』。
- 1997年、藤沼邦彦『縄文の土偶』歴史発掘③、講談社。
- 1997年、福田正宏「亀ヶ岡式土器における入組文のゆくえ」『物質文化』65。
- 1998年、宮城県教育委員会編『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書176。
- 1998年、北海道開拓記念館編『うるし文化―漆器が語る北海道の歴史』。
- 1998年、青森県教育委員会編『青森県遺跡地図』。
- 1998年、福田正宏「北海道と東北地方北部における聖山遺跡以降の土器編年」『シンポジウム「聖山以後の渡島半島」資料集』
- 1998年、シンポジウム「聖山以後の渡島半島」実行委員会編『シンポジウム「聖山以後の渡島半島」資料集』
- 1998年、須藤 隆『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究―縄文から弥生へ―』、纂修堂。
- 1999年、青森県立郷土館『至高の縄文祭祀芸術―注口土器と土偶―』。
- 1999年、青森県教育委員会『十腰内(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書261。
- 1999年、小林達雄『縄文人の文化力』、新書館。
- 1999年、児玉大成・伊東 信編『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』青森市埋蔵文化財調査報告書45。
- 1999年、君島武史「東北地方の製塩土器―三陸北部を中心に」北上市埋蔵文化財センター紀要1。
- 1999年、小林正史「煮炊き用土器の作り分けと使い分け」『食の復原』帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告書2。
- 2000年、福田正宏「北部亀ヶ岡式土器としての聖山式土器」『古代』108。
- 2000年、階上町教育委員会『滝端遺跡発掘調査報告書』。
- 2000年、秋田県教育委員会『戸平川遺跡』秋田県文化財調査報告書294。
- 2001年、国立歴史民俗博物館編『落合計策縄文時代遺物コレクション』国立歴史民俗博物館資料図録1。
- 2001年、青森市教育委員会「大浦遺跡」『市内遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書59集。
- 2001年、階上町教育委員会『野場(1)遺跡発掘調査報告書』。



- 2001年、金子昭彦『遮光器土偶と縄文社会』ものが語る歴史シリーズ④、同成社。
- 2001年、橘 善光・奈良正義編『二枚橋(2)遺跡発掘調査報告書』大畑町文化財報告書第12集。
- 2001年、工藤竹久ほか編『八戸市内遺跡発掘調査報告書15 是川遺跡1』八戸市埋蔵文化財調査報告書91。
- 2001年、青森県史編さん自然部会編『青森県史 自然編 地学』、青森県。
- 2002年、児玉大成「縄文時代におけるベンガラ生産の一樣相―宇鉄遺跡出土赤鉄鋼の考古学的分析」『青森県考古学会30周年記念論集』。
- 2002年、宇部則保・小久保拓也編『是川中居遺跡 長田沢地区』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書2、八戸遺跡調査会。
- 2002年、工藤竹久「縄文後期・晩期の煮炊き用小型土器」『海と考古学とロマン』。
- 2003年、北林八洲晴『断章 青森の製塩跡考』。
- 2003年、福田正宏「北海道における亀ヶ岡式土器と在地系土器の系統」『海と考古学』5。
- 2003年、青森県史編さん自然部会編『青森県史 自然編 生物』、青森県。
- 2003年、山形県埋蔵文化財センター『砂子田遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書113。
- 2004年、児玉大成・相馬俊也「宇鉄遺跡に於ける縄文晩期中葉～末葉の土器」『研究紀要』7、青森大学考古学研究所。
- 2004年、藤沼邦彦・蔦川貴祥・小向 良・向出博之『亀ヶ岡文化遺物実測図集』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告1。
- 2004年、是川縄文シンポジウム実行委員会編『是川縄文シンポジウム2004』八戸市教育委員会、東奥日報社。
- 2004年、田中寿明『向田(18)遺跡』野辺地町文化財調査報告書14。
- 2004年、福田友之・永島 豊・藤原弘明「研究ノート 青森県大浦貝塚出土の遺物について」『市史研究あおもり』第7号、青森市。
- 2004年、新潟県教育委員会編『青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書133。

## 編集後記

今回、『亀ヶ岡文化遺物実測集』に次いで『青森県東津軽郡平館村今津遺跡発掘調査報告書』を刊行できたことを嬉しく思う。出土品の洗浄・接合・復元の作業、個体識別・分類、実測図作成・写真撮影、文様の展開図作成とその分析など基礎的な作業だけでも大変であった。作業・分析の中心となってくれたのは学生である。本当に有り難う。

復元できた今津遺跡の出土品は、「弘前大学祭」の際に、考古学実習室で3年（平成14～16年）連続して展示公開し、延べ1,500人の学生・教員・市民に見ていただいた。今津遺跡の遺物は埋蔵文化財の保護思想の普及活動にも大いに役立ってくれたのである。

この『報告書』は内容的に不十分なところも多々あるが、基礎的な部分はすべて分析・報告できたつもりである。今後の亀ヶ岡文化研究に役立つことを期したい。

今津遺跡の土地所有者である福井治郎氏は、発掘現場によく訪ねてきて、いろいろと海のこと・漁のことなどを話してくれた。学生や私たちと話をするのが楽しみだったようである。しかし、報告書の完成を待たずに急逝された。この報告書を福井治郎さんの御霊前に捧げるとともに、ご冥福をお祈りしたい。

(藤沼邦彦・関根達人)

今津遺跡の報告書抄録					
書名	あおりけんたいらだてむらいまづいせきはつつちょうさほうこくしょ 青森県平館村今津遺跡発掘調査報告書				
副書名					
巻次					
シリーズ名	弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告				
シリーズ番号	2				
編集者	藤沼邦彦・関根達人・蔦川貴祥・向出博之・小向良・深見嶺・横山寛剛・秋山真吾				
編集機関	弘前大学人文学部日本考古学研究室				
所在地	〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地, TEL0172-39-3273				
発行年月日	2005. 3. 31				
所収遺跡名	あおりけんひがしつがるぐんたいらだてむらおおあざいまづあざさいのかみ 青森県東津軽郡平館村大字今津字才の神				
コード	市町村 02-305 遺跡番号 130-01				
	北緯 14°09'15" 東経 140°38'04"				
調査期間	2002年8月22日～2002年9月1日				
調査面積	45m <sup>2</sup>				
調査原因	学術調査				
所収遺跡名	種別	時代	遺構	遺物	特記事項
今津遺跡	集落跡	縄文時代	捨て場 1ヶ所	大洞C2式土器・製塩土器、土偶、有孔土版（土器片利用）、石鏃・石匙・磨製石斧・石皿・磨石・凹石、小玉・有孔軽石製品、アスファルト塊・赤色顔料の原材料（第二酸化鉄）	遺物は全て大洞C2式土器およびそれに伴うもの



今津遺跡周辺の航空写真（今津バイパス道路を造る前の状況）



1 今津遺跡遠景（平館海峡より）



2 今津遺跡から見た下北半島（脇野沢村周辺）





1 オノ神川河口



2 遺跡近景（南から）



1 発掘調査地点（調査前）南から



2 遺跡廃棄ブロック検出状況





1 B 2 区東壁



2 B 2 区北壁





1 A 2区焼土遺構検出状況（調査区西壁）



2 B 2・3区風倒木穴検出状況（調査区東壁）





1 遺物廃棄ブロック（北から）



2 土器出土状況



3 土器出土状況



4 製塩土器出土状況



5 土偶出土状況



1 石鏃・土器などの出土状況



2 石鏃・土器などの出土状況



3 土器出土状況



4 小型石斧出土状況



5 石皿・磨石・土器出土状況



6 石皿・磨石出土状況



7 玉出土状況



8 土器出土状況





1 土器出土状況



2 遺物出土状況



3 磨石・土器出土状況



4 皿形土器出土状況



5 遺物出土状況



6 土器出土状況



7 台付土器出土状況



8 壺形土器出土状況



1 最終調査面・第Ⅴ層上面（南東から）





平館村石崎沢遺跡遺物採集地点



平館村石崎沢の表面採集による遺物



今別町大泊遺跡の遺物散布地点



今別町大泊遺跡の表面採集による遺物





平館村山居遺跡遺物採集地点



平館村山居遺跡の表面採集による遺物





赤鉄鉱の露出状況（今別町赤根沢）



蟹田町アスファルト 滲出地





1 (图版 1-1)



2 (图版 1-2)



3 (图版 1-3)



4 (图版 1-4)



5 (图版 1-5)



6 (图版 1-6)



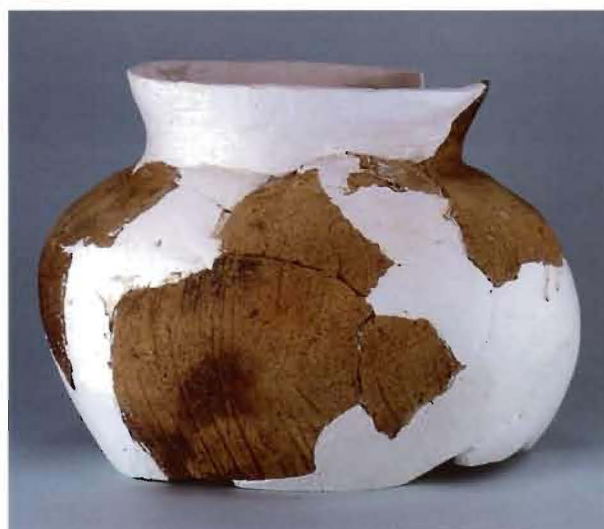
1 (图版 2-7)



2 (图版 2-8)



3 (图版 2-9)



4 (图版 2-10)



1 (图版 2 - 10)



2 (图版 3 - 12)



3 (图版 3 - 13)



4 (图版 3 - 14)



5 (图版 3 - 15)



6 (图版 3 - 16)





1 (图版 4-17)



2 (图版 4-18)



3 (图版 4-19)



4 (图版 4-22)



5 (图版 4-20)



6 (图版 4-21)



1 (图版 4 - 23)



2 (图版 5 - 24)



3 (图版 5 - 25)



4 (图版 5 - 26)



5 (图版 5 - 27)



6 (图版 5 - 28)



7 (图版 5 - 29)



8 (图版 5 - 30)



1 (图版 5-31)



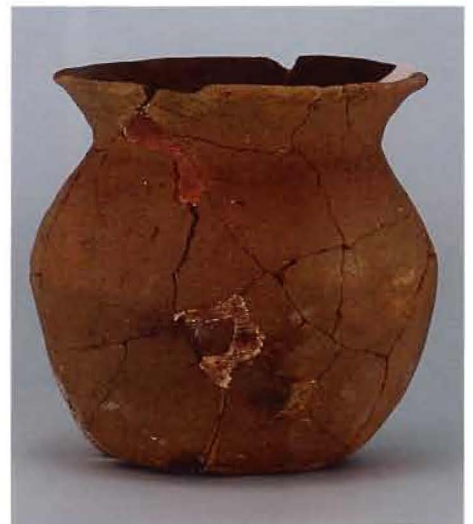
2 (图版 5-32)



3 (图版 6-33)



4 (图版 6-34)



5 (图版 6-35)



6 (图版 6-36)



7 (图版 6-37)



8 (图版 6-38)





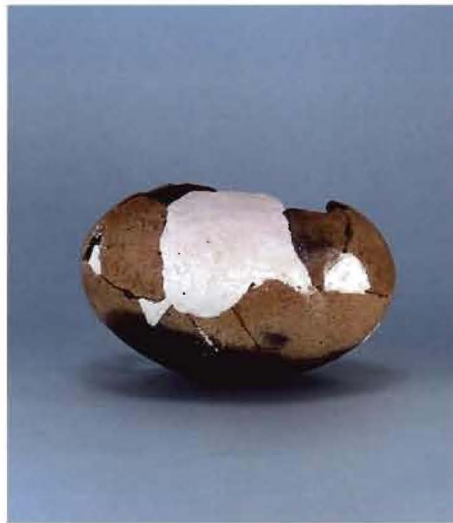
1 (图版 7 - 39)



2 (图版 7 - 40)



3 (图版 7 - 41)



4 (图版 7 - 42)



5 (图版 7 - 43)



6 (图版 7 - 44)



7 (图版 7 - 45)



8 (图版 7 - 46)



1 (图版 7 - 47)



2 - a (图版 8 - 48)



2 - b (图版 8 - 48)



2 - c (图版 8 - 48)





1 (図版 9 - 49~53)



2 (図版 9 - 54~57)



3 (図版 9 - 58~61)



4 (図版 9 - 62~67)



5 (図版 9 - 68、図版10-69~70)



6 (図版10-71~74)



1 (図版10-75~77)



2 (図版10-78~82)



3 (図版10-83~85)



4 (図版10-86~91)



5 (図版10-92、図版11-93~97)



6 (図版11-98~102)



1 (図版11-103~106)



2 (図版11-107)



3 (図版11-108)



4 (図版11-109~110)



5 (図版12-111~114)



6 (図版12-115~118)



7 (図版12-119~124)



8 (図版12-125~130)





1 (图版13-134)



2 (图版14-135)



3 (图版15-136)



4 (图版15-137)



5 (图版16-138)



6 (图版16-141)



7 (图版16-142)



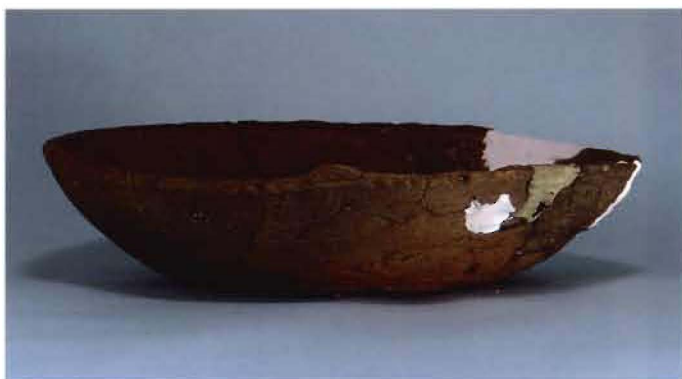
8 (图版17-146)



1 (图版18-147)



2 (图版18-148)



3 (图版19-149)



4 (图版19-150)



5 (图版20-151)



6 (图版20-152)



7 (图版21-153)



8 (图版21-154)



1 (图版22-155)



2 (图版22-156)



3 (图版23-157)



4 (图版23-159)



5 (图版24-166)



6 (图版25-167)



7 (图版26-182)



8 (图版13-131~133)





1 (図版16-139・140、143~145)



2 (図版23-158・160・161)



3 (図版23-162~164)



4 (図版23-165)



5 (図版25-168~171)



6 (図版25-172、173)



7 (図版26-174)



8 (図版26-178)



9 (図版26-175)



10 (図版26-176・177)



11 (図版26-179~181)

下の2個は同一個体



1 (図版28-190)



2 (図版28-191)



3 (図版28-192)



4 (図版28-193)



5 (図版28-194)



6 (図版28-195)



7 (図版28-196)



8 (図版28-197)





1 (図版28-198)



2 (図版28-199)



3 (図版28-200)



4 (図版28-201)



5 (図版29-202)



6 (図版29-203)



7 (図版29-204)



8 (図版29-205)



1 (図版29-206)



2 (図版29-207)



3 (図版29-209)



4 (図版30-217)



5 (図版31-218)



6 (図版31-219)



7 (図版31-220)



8 (図版32-222)



1 (図版33-224)



2 (図版33-225)



3 (図版33-226)



4 (図版33-227)



5 (図版34-239)



6 (図版34-242)



7 (図版34-243)



8 (図版34-244)





1 (図版27-183~187)



2 (図版30-210~216)



3 (図版28-188・189)



4 (図版29-208)



5 (図版32-221)



6 (図版33-223)



7 (図版33-228)



8 (図版33-229~234)



9 (図版33-235~237、図版34-238、240~241)



b (図版18-147)



c (図版16-138)



d (図版15-136)



e (図版19-149)



f (図版22-155)



g 1 (図版13-134)



g 2 (図版22-156)



h (図版18-148)



i 1 (図版23-159)



i 2 (図版25-172)



i 3 (図版14-135)



j (図版25-167)



k (図版16-141)



l (図版26-174)



m (図版13-132)





1. 内部底面の際が有段のもの（図版21-153）



4. 底部の周辺に隆帯が巡るもの（図版21-154）



2. 内部底面の際に沈線が巡るもの（図版14-135）



5. 内部の周辺に沈線が巡るもの（図版21-153）



3. 内部底面の際に沈線（刺突を伴う）が巡るもの（図版21-153）



6. 底部の中央が窪んでいるもの（図版22-155）





1 (図版35-250)



2 (図版35-251)



3 (図版35-252)



4 (図版36-258)



5 (図版36-259)



6 (図版36-260)



1 (図版36-261)



2 (図版36-262)



3 (図版36-265)



4 (図版36-264)



5 (図版36-263)



6 (図版37-266)



1 (図版37-267)



2 (図版37-271)



3 (図版37-272)



4 (図版37-273)



5 (図版37-274)



6 (図版38-279)





1 (図版38-280)



2 (図版38-281)



3 (図版38-282)



4 (図版38-283)



5 (図版38-284)



6 (図版38-285)



1 (図版38-286)



2 (図版39-287)



3 (図版39-292)



4 (図版39-293)



5 (図版39-294)



6 (図版39-295)



1 (図版39-296)



2 (図版39-297)



3 (図版39-298)



4 (図版39-299)



5 (図版40-300)



6 (図版40-301)





1 (図版40-302)



2 (図版40-303)



3 (図版40-304)



4 (図版40-305)



5 (図版40-306)



6 (図版40-307)



1 (図版41-308)



2 (図版41-309)



3 (図版41-310)



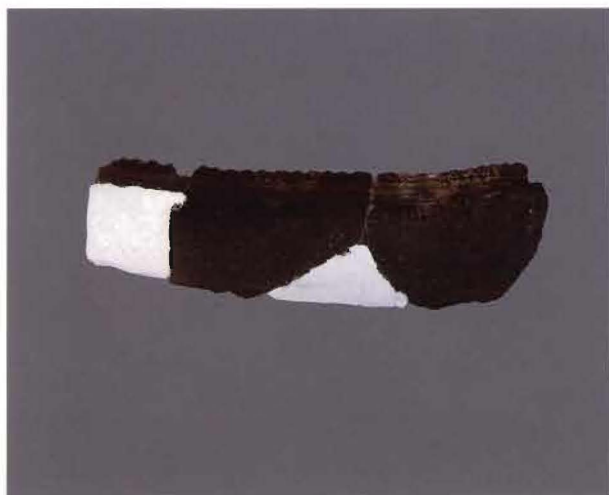
4 (図版41-312)



5 (図版41-311)



6 (図版41-313)



1 (図版41-314)



2 (図版42-315)



3 (図版42-316)



4 (図版42-317)



5 (図版42-318)



6 (図版42-319)





1 (図版43-337)



2 (図版44-344)



3 (図版44-345)



4 (図版44-346)



5 (図版44-347)



6 (図版44-348)



1 (図版44-349)



2 (図版44-350)



3 (図版44-351)



4 (図版45-352)



5 (図版45-354)



1 (図版45-353)



2 (図版45-355)



3 (図版46-356)



4 (図版46-361)





1 (図版47-362)



2 (図版47-364)



3 (図版47-363)



4 (図版47-365)



5 (図版47-366)



1 (図版48-372)



2 (図版49-403)



3 (図版49-404)



4 (図版49-405)



5 (図版50-406)



6 (図版50-407)



1 (図版50-408)



2 (図版50-409)



3 (図版50-410)



4 (図版50-411)



5 (図版50-412)



6 (図版50-413)





1 (図版51-414)



2 (図版51-415)



3 (図版51-416)



4 (図版51-419)



5 (図版51-417)



6 (図版51-418)



1 (図版51-420)



2 (図版52-421)



3 (図版52-422)



4 (図版52-424)



5 (図版52-425)



6 (図版52-423)



7 (図版52-426)



8 (図版52-427)



9 (図版52-428)



10 (図版52-429)



11 (図版52-430)



1 (図版35-245)



2 (図版35-246~248)



3 (図版35-249)



4 (図版35-253、254)



5 (図版35-255~257)



6 (図版37-268~270)





1 (図版37-276・275)



2 (図版37-277・278)



3 (図版39-287~290)



4 (図版42-321・320)



5 (図版42-322~324)



6 (図版42-327・326・325)



1 (図版42-328)



2 (図版43-329~332)



3 (図版43-334・333)



4 (図版43-335・336)



5 (図版43-338)



6 (図版43-339~341)



1 (図版43-342・343)



2 (図版46-357・358)



3 (図版46-359・360)



4 (図版48-367)



5 (図版48-368・369)



6 (図版48-370・371)





1 (図版48-373)



2 (図版48-374~377)



3 (図版48-378~381)



4 (図版48-382~385)



5 (図版48-386)



6 (図版49-387~390)



1 (図版49-391~394)



2 (図版49-395)



3 (図版49-396、399~401)



4 (図版49-397・398)



5 (図版49-402)



鉢口唇文様 b (図版44-347)



鉢口唇文様 c (図版45-353)



鉢口唇文様 d (図版39-298)



鉢口唇文様 e (図版46-356)



鉢口唇文様 f (図版44-349)



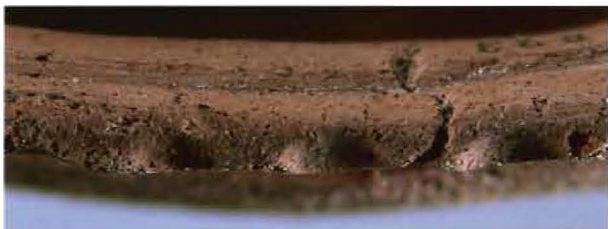
鉢口唇文様 g (図版46-361)



鉢口唇文様 h (図版35-256)



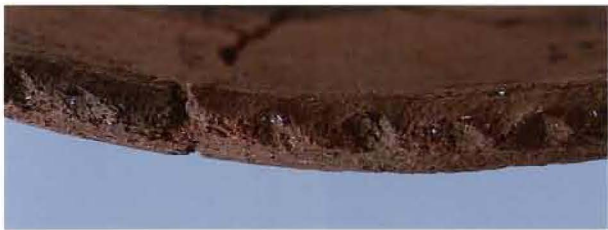
鉢口唇文様 i (図版48-374)



深鉢口唇文様 b (図版63-478)



深鉢口唇文様 c (図版54-440)



深鉢口唇文様 d (図版60-462)



深鉢口唇文様 e (図版62-470)



深鉢口唇文様 f (図版54-438)





1 (図版53-431)



2 (図版53-434)



3 (図版53-435)



4 (図版53-436)



5 (図版55-445)



1 (图版54-437)



2 (图版55-444)





1 (図版56-446)



2 (図版55-450)



3 (図版57-451)



4 (図版58-453)



5 (図版58-457)



1 (図版57-452)



2 (図版59-458)





1 (図版59-459)



2 (図版60-461)



3 (図版60-462)



4 (図版61-466)



1 (図版61-467)



2 (図版62-470)



3 (図版62-471)



4 (図版62-472)



5 (図版62-477)





1 (図版63-478)



2 (図版63-479)



1 (図版64-484)



2 (図版65-488)



1 (図版53-432)



2 (図版53-433)



3 (図版54-438・439)



4 (図版54-440)



5 (図版54-441)



6 (図版54-442)





1 (図版54-443)



2 (図版56-448・449)



3 (図版58-454)



4 (図版58-455・456)



5 (図版60-460)



6 (図版60-463、図版61-464)



1 (図版61-465)



2 (図版61-468)



3 (図版61-469)



4 (図版62-473・474)



5 (図版62-475)



6 (図版62-476)





1 (図版63-480・481)



2 (図版64-482)



3 (図版65-487)



4 (図版64-483)



5 (図版65-485・486)



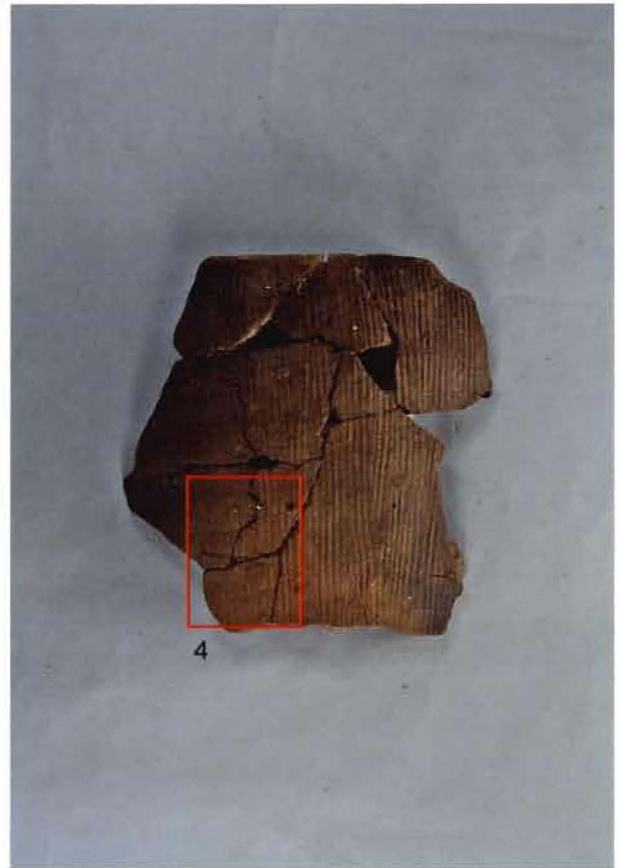
6 (図版66-489・490)



7 (図版66-491・492・493)



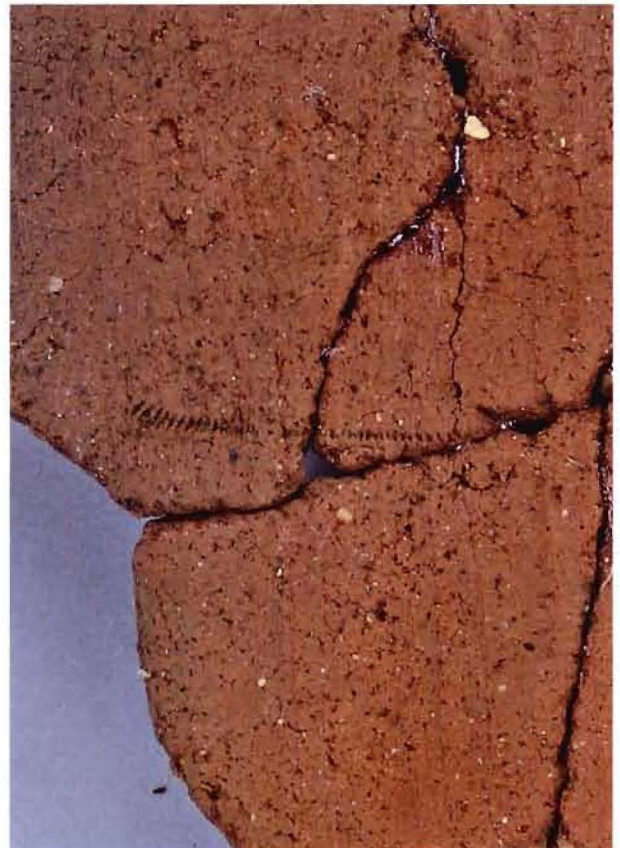
1 貝殻条痕文とサルボウ属の鉸歯圧痕



2 貝殻条痕文とサルボウ属の鉸歯圧痕  
※ 1 と 2 は同一個体に属する



3 鉸歯圧痕の拡大（1の拡大）



4 鉸歯圧痕の拡大（2の拡大）





1 (図版67-494~499)



2 (図版67-500~502)



3 (図版67-503~508)



4 (図版67-509・510)



5 (図版68-511)



1 (図版68-512)



2 (図版68-513)



3 (図版69-514)



1 (図版69-515)



2 (図版69-516)





1 (図版70-517)



2 (図版70-520)



3 (図版70-518・519)



4 (図版70-521・522)



1 (図版70-523・524)



2 (図版70-529・530)



3 (図版70-527・528)



4 (図版70-525・526)



5 (図版70-531~533)



1 (図版71-534)



2 (図版71-535~538)



3 (図版71-539~542)





1 (図版72-543)



2 (図版72-544~546)



3 (図版72-550・551)



4 (図版72-547~549)



5 (図版72-552・553)



1 (図版72-554・555)



2 (図版72-556・557)



3 (図版74-558・559・560・561・562)



4 漆入り土器 (図版56-447)



5 (447の漆部分の拡大図)





1 正面 (図版83-1)



2 1の背面 (図版83-1)



3 1の右側面 (図版83-1)



4 1の左側面 (図版83-1)



5 (図版83-2)



6 5の右側面 (図版83-2)



7 5の背面 (図版83-2)



1 (図版83-3)



2 (図版83-4)



3 (図版83-5・6・7)



4 (図版83-8・9・10)



5 3の裏面 (図版83-5・6・7)



6 4の裏面 (図版83-8・9・10)



7 (図版83-5)

拡大



8 (図版83-10)

拡大



1 (図版85-17)



2 (図版85-17)

底部



3 (図版85-17)

底面

1～3は同一個体に  
属する





1 (图版84— 1 · 2 · 3 · 4 · 5)



2 (图版84— 6 · 7 · 8)



3 (图版84— 9)



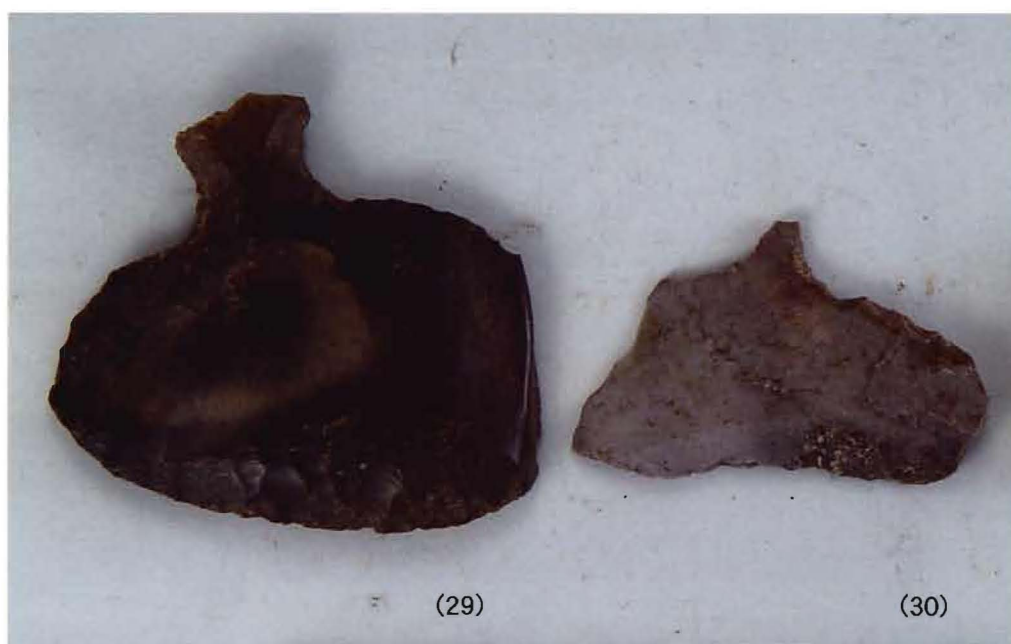
4 (图版84— 11 · 12、图版85— 13 · 14 · 15 · 16)

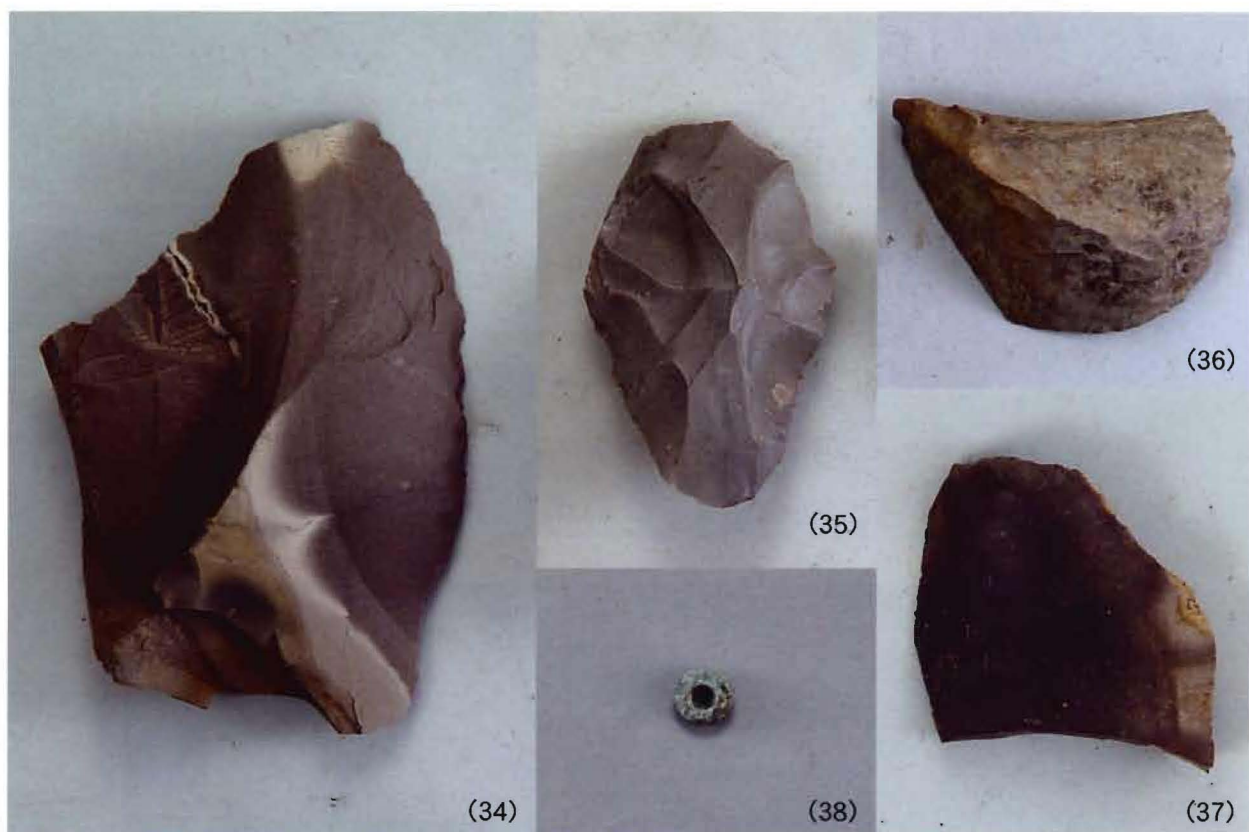


5 (图版84— 10)













弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 2

**青森県東津軽郡平舘村  
今津遺跡発掘調査報告書**

—津軽半島東沿岸部における亀ヶ岡文化の遺跡—

2005年3月31日発行

編集 藤沼邦彦・関根達人・薦川貴祥・向出博之・  
小向良・深見嶺・横山寛剛・秋山真吾

発行 弘前大学人文学部日本考古学研究室  
〒036-8560 青森県弘前市文京町1  
電話 0172-39-3273

印刷 小野印刷